

熊本大学

五高記念館館報

第3号

〔平成25年度～平成28年度〕



五高と戦争

2013年11月16日（土）～18日（月）
会場：熊本大学五高記念館（熊本県キャンパス）
入場無料

五高記念館
Memorial Museum of
Kobe High School
Kobe City Museum
Kobe City Museum
Kobe City Museum

中野孝次
Takashi Nakano
Kobe City Museum

五高と戦争
五高と戦争
五高と戦争
五高と戦争

明治期熊本の近代建築

明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築

明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築
明治期熊本の近代建築

秋の夕暮れコンサート

2013年11月6日（金曜日）18:00-19:00
会場：熊本大学工学部研究資料館（黒髪キャンパス）
入場無料

program
・ヴァイオリンとピアノの二重奏
・ヴァイオリンとピアノの二重奏
・ヴァイオリンとピアノの二重奏
・ヴァイオリンとピアノの二重奏

ヴァイオリンとピアノの二重奏
ヴァイオリンとピアノの二重奏
ヴァイオリンとピアノの二重奏
ヴァイオリンとピアノの二重奏

Art Exhibition of Professors

アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー

アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー
アートするプロフェッサー

大宰府へつながる官道

大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道

大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道
大宰府へつながる官道

ちょっと昔のくらし探検

ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検

ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検
ちょっと昔のくらし探検

富重写真所

富重写真所
富重写真所
富重写真所
富重写真所

富重写真所
富重写真所
富重写真所
富重写真所

熊本の漱石 熊本のHearn

熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn

熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn
熊本の漱石 熊本のHearn

JAZZ CONCERT

JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT

JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT
JAZZ CONCERT

旧制第五高等学校

旧制第五高等学校
旧制第五高等学校
旧制第五高等学校
旧制第五高等学校

旧制第五高等学校
旧制第五高等学校
旧制第五高等学校
旧制第五高等学校

第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員

第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員

第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員
第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員

熊本の近代化

熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化

熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化

学びの秋深まる

学びの秋深まる
学びの秋深まる
学びの秋深まる
学びの秋深まる

学びの秋深まる
学びの秋深まる
学びの秋深まる
学びの秋深まる

熊本の近代化

熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化

熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化
熊本の近代化



刊行にあたって

館長 伊東龍一

平成28年4月14日、16日に起こった熊本地震は五高記念館にも多大な被害をもたらしました。五高記念館の入っている五高本館が、同じ五高の建物である化学実験場、表門や熊本高等工業学校の機械実験場も含めて大きく損傷致しました。幸い内部の展示品や収蔵品等はスタッフが中心となって安全な保管場所への移動が完了しています。

私が館長となってからの2年間は、熊本地震のために取り組む課題を当初の予定から大きく変更することになりましたが、できることをしっかりやろうと考えております。大きくは次の四点です。

第一に、五高記念館・化学実験場、表門（赤門）、工学部研究資料館といった国指定重要文化財の災害復旧及び補強工事を、建築史および文化財建造物の保存学の専門家である立場から、文化財としての真正性（オーセンティシティ）を保持しながら、安全性を確保し、かつ十分な活用できるように熊本大学の象徴である建物群の保存に力を尽くしたいと考えます。

第二に、五高記念館には多くの教育関係資料、文化関係資料の蓄積があり、資料の収集も積極的に行ってまいりましたが、現在は建物が地震で被災したためにそれらの資料を学内各所に分散して保管しています。五高記念館等の建造物の修理工事が完了し、再び開館する日まで、それらの資料の価値を損ねることなく定期的に点検し確実に保管してゆきたいと考えます。

第三に、第一級の建造物、本物の諸資料を活用しながらの展覧会や催しを積極的に行い、上記の活動や調査・研究の成果を分かり易く公表し、地域社会に貢献したいと考えます。とくに建造物については、今後工事が本格化しますので、広く一般に工事現場の公開・説明会を実施し、東日本大震災以後、改良が重ねられてきつとも未だに検討が継続している煉瓦造の文化財建造物の修理方法や保存・活用方法について、講演会やシンポジウムを開催したいと考えています。

第四には、五高記念館の建物の修理工事が終わるまでに、改めてこの記念館に相応しい展示計画を策定して、工事終了後には速やかにリニューアルオープンできるよう、かつ一層充実した展示内容になるよう準備したいと考えます。

以上の四点は、熊本大学が最先端の科学技術をもって社会貢献をする大学であるとともに、教育や文化においても、過去はもちろん今後も大いに貢献してゆく大学であることを社会にアピールする任務でもあります。

この五高記念館館報の発行もすべき重要な事柄の一つで、その最初の仕事となりました。

目次

刊行にあたって

博物館活動

I 事業概要

- 1 展観事業
特別展・企画展等 ————— 6
- 2 教育普及事業
[1] 講演会・文化講座・コンサート等 ——— 15
[2] 出版等 ————— 24
[3] 生涯学習 ————— 26
[4] 友の会活動
[5] その他 ————— 28
- 3 資金獲得による実施事業
[1] 文化庁補助事業 文化遺産を活かした
観光振興・地域活性化事業 ————— 29
[2] 外国語ガイド講座 ————— 30
[3] 『五高と漱石』出版
[4] ホームページ英語版の改訂
[5] 旧第五高等学校校本館及び
同化学実験場展示整備基本計画
- 4 調査研究事業
[1] 収蔵資料、第五高等学校に関する
調査研究 ————— 33
[2] 科学研究費採択状況
[3] 外部資金受託状況 ————— 34
[4] 他機関の研究プロジェクトへの参画
[5] 研究活動

II 利用状況

- 1 入館者の動向 ————— 40
- 2 資料調査、貸出 ————— 42
- 3 新聞・印刷物・放送一覧 ————— 44

III 収蔵資料

- 1 寄贈資料 ————— 50
- 2 購入資料 ————— 54

IV 熊本地震

- 1 被災状況と今後の災害復旧及び補強工事 — 56
- 2 地震対応 ————— 59

V 運営

- 1 五高記念館沿革 ————— 60
- 2 施設概要 ————— 61
- 3 常設展示 ————— 63
- 4 機構 ————— 69
- 5 教職員
- 6 五高記念館等運営委員会
- 7 教職員等の変遷 ————— 70
- 8 五高記念館等運営委員会記録 ————— 73
- 9 熊本大学五高記念館等規則 ————— 76

VI 学芸養成課程 ————— 78

研究

漱石の家 熊本への二つの住い ————— 80
伊東龍一 五高記念館館長

統計資料で博物館を考える ————— 85
岩崎竹彦 五高記念館准教授

第五高等学校瓦斯製造所について ————— 94
磯田桂史 五高記念館客員教授

Lafcadio Hearn and Astronomy ————— 100
by Alan Rosen
ラフカディオ・ハーンと天文学
アラン・ローゼン 五高記念館客員教授

第五高等学校の修学旅行(明治期)
ー夏目金之助を中心にー ————— 110
村田由美 五高記念館客員准教授

第五高等学校のプール ————— 118
藤本秀子 五高記念館研究員

「新体制」への第五高等学校習学寮の対応について 124
薄田千穂 五高記念館研究員

展覧会記録 特別企画展
「五高と戦争ー戦時体制下の五高生たちー」 ——— 132
薄田千穂 五高記念館研究員

博物館活動



I 事業概要

1 展観事業

特別展・企画展等

平成25年度 (2013.4～2014.3)

① 拠点B特別展

「麦島 勝の見た昭和 海と川の暮らし」

〔開催趣旨〕

八代市在住の麦島 勝は昭和20年代から現在まで、八代地域を中心に人々の暮らしぶりを写真に収めてきた。その中には、八代地域や天草地域、球磨川水系といった熊本県下の漁業や水辺を代表する地域の暮らしを記録したものが数多くある。それらの地域や河川流域を記録した写真の中から、人々の暮らしや水辺に関するインフラの整備に焦点をあて写真展を開催した。

なお、本展覧会は拠点形成研究B「閉鎖性沿岸域における環境と防災、豊かな社会環境創生のための先端科学研究・教育の拠点形成」及び文部科学省特別研究「生物多様性のある八代海沿岸海域の俯瞰型再生研究プロジェクト」研究の一環として開催した。

〔主な出品資料〕 写真74点(麦島 勝撮影)

熊本県内地図・新聞記事・古絵はがき等11点

〔主催〕 五高記念館 熊本県松橋収蔵庫 天草市立本渡歴史民俗資料館

〔共催〕 五高記念館友の会 拠点形成研究B「閉鎖性沿岸海域における環境と防災、豊かな社会環境創生のための先端科学研究・教育の拠点形成」研究チーム 文部科学省特別経費「生物多様性のある八代海沿岸海域環境の俯瞰型再生研究プロジェクト」研究チーム

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2013年6月6日(木)～9月1日(日)

〔開催日数〕 73日間

〔期間中入館者数〕 2,709人

〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)



② 企画展「大城組の小さな巨匠たち」

「しあわせを撮る子ども達 写真展」

「熊本大学附属特別支援学校華道クラブ作品展」

〔開催趣旨〕

「大城組の小さな巨匠たち」は、福岡と熊本市内の特別支援学校・特別支援学級に在籍する子ども達と、その保護者を中心に構成された団体である。

主に絵画や詩や書などの作品制作や展覧会の開催を通して、支援の必要な子ども達の社会参加の場の拡大と社会へ正しい啓発のメッセージを伝えることを目的として、特別支援学級の大城由紀子教諭の働きかけの元に2009(平成21)年から活動している。今回は、子どもたちが制作した絵画や詩や書等の作品と、子どもたちが撮りためた写真、熊本大学附属特別支援学校華道クラブの生け花を展示した。

〔主な出品作品〕 絵画・書・写真・生け花

〔主催〕 五高記念館友の会 熊本保健科学大学保健科学部

リハビリテーション学科 佐々木千穂研究室

〔共催〕 五高記念館

〔協力〕 熊本大学附属特別支援学校華道クラブ

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2013年9月12日(木)～10月27日(日)

・熊本大学附属特別支援学校華道クラブ作品展

9月18日(水)～9月20日(金)

10月2日(水)～10月4日(金)

10月16日(水)～10月18日(金)

〔開催日数〕 39日

〔期間中入館者数〕 1,426人

〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)



③ 企画展「アートするプロフェッサー」

〔開催趣旨〕

熊本大学には、研究の傍ら趣味として絵画、陶芸、写真、木工などに親しみ、レベルの高い作品を制作している教員が数多くいる。本学教職員によるアート作品発表の場所を提供するとともに、地域社会と大学や、職員同士あるいは学生たちとの交流を促進することを目的とした。

さらに、重要文化財に指定されている五高記念館で数多くの美術作品に親しんでもらうことで、社会に開かれた大学として地域社会の文化の向上に寄与することを目的として開催した。

〔主な出品作品〕 絵画・彫刻・写真・漆芸・陶芸・CG等46点

〔主催〕 五高記念館

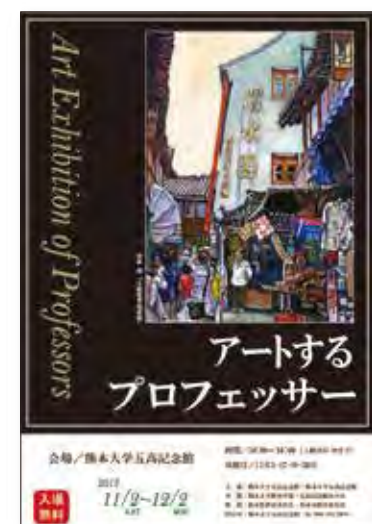
〔共催〕 五高記念館友の会 熊本大学教育学部

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2013年11月2日(土)～12月2日(月)

〔開催日数〕 27日間

〔期間中入館者数〕 1,875人



〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)
市原富代(五高記念館事務補佐員)

④ 企画展示「第五高等学校の学徒出陣」

〔開催趣旨〕

1943(昭和18)年文系生徒・学生の「学徒出陣」から70年を迎えるのを機に企画展示として開催した。五高からは終戦まで約230人が学業途中で軍隊に入隊した。壮行会の答辞や戦時の写真、勤労働員の記録などの資料を展示して、戦時期に五高で何があったかを伝え、戦争について考える機会を持ってもらうことを目的とした。

〔主な出品資料〕 軍事郵便・手紙・写真等約30点

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館第五展示室

〔開催期間〕 2013年12月1日(日)～2014年1月31日(金)

〔開催日数〕 37日間

〔期間中入館者数〕 978人

〔展覧会担当〕 薄田千穂(五高記念館特定事業研究員)



学徒出陣「答辞」

⑤ 熊本大学公開講座 陶芸教室「作陶展」

〔開催趣旨〕

熊本大学公開講座の陶芸教室は、一般市民を対象にもの作りを通じた生涯学習として開催している講座であり人気も高く受講生も多い。

陶芸教室では約半年かけて陶芸の基礎から学び作品を作り出している。多くの来館者に見てもらいたいということで五高記念館での開催となった。

〔主な出品作品〕 特別支援学校教員による公開講座「陶芸」コース受講者制作の陶芸作品約50点

〔主催〕 熊本大学政策創造研究センター 熊本大学附属特別支援学校

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館小展示室

〔開催期間〕 2013年12月4日(水)～12月13日(金)

〔開催日数〕 9日間

〔期間中入館者数〕 410人

〔展覧会担当〕 芳武敏雄(熊本大学教育学部附属特別支援学校)



⑥ 「ちょっと昔の暮らし探検」

〔開催趣旨〕

熊本県松橋収蔵庫主催の平成25年度熊本県松橋収蔵庫企画展「ちょっと昔の暮らし探検」を、五高記念館と熊本県松橋収蔵庫の連携事業として開催した。

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長の下、機械化、電化、プラスチックなどの化学製品の普及により日本人の暮らしは激変した。このように短期間で日々の暮らしが変化するという事は、これまで日本人が

経験したことがないものである。

今回の展示では水道、電化製品、ガス製品が普及する以前の暮らしの道具、機械化が進む以前の農機具、漁具などを中心に約200点の昔の道具を展示した。

なお、この展覧会の展示は学芸員養成課程「博物館実習Ⅱ」の受講生が担当した。

〔主な出品資料〕 台所用具・照明器具・暖房機器・洗濯・裁縫用具・農機具・漁具等

〔主催〕 五高記念館 熊本県文化企画課松橋収蔵庫

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2013年12月20日(金)～2014年2月17日(月)

〔開催日数〕 35日間

〔期間中入館者数〕 563人

〔展覧会担当〕 岩崎竹彦(五高記念館准教授・学芸員養成課程担当)

國本信夫(熊本県文化企画課主幹)

迫田久美子(熊本県松橋収蔵庫学芸員)



⑦ プレ写真展「富重写真所と熊本の近代化」

〔開催趣旨〕

写真展「富重写真所と熊本の近代化」に先立ち、県内外から多くの観光客が訪れる熊本市の観光施設桜の馬場城彩苑多目的交流室を会場とし、展覧会出品資料から抽出した写真や建築模型等を展示するプレイベントを企画した。

この写真展は文化庁の平成25年度文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)の一環である。

〔主な出品資料〕 写真・建物模型・写真機材・写真原板・地図・年表等

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔協力〕 熊本市 熊本学園大学付属産業経営研究所 富重写真所
桜の馬場城彩苑

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2014年2月2日(日)～2月11日(火)

〔開催日数〕 10日間

〔期間中入館者数〕 446人

〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)



⑧ 拠点B特別展

「人間と自然の共生を考える 熊本大学の沿岸域研究」

〔開催趣旨〕

熊本大学が工学・理学・社会学等にわたる学際的学術研究の展開と実証実験を行って、生物多様性のある八代海環境の俯瞰型再生の研究に

取り組んでいる「生物多様性のある八代海沿岸海域環境の俯瞰型再生研究プロジェクト」の成果を展示することを目的とした。

本展覧会は拠点形成研究B「閉鎖性沿岸域における環境と防災、豊かな社会環境創生のための先端科学研究・教育の拠点形成」及び文部科学省特別研究「生物多様性のある八代海沿岸海域の俯瞰型再生研究プロジェクト」研究の一環として開催した。

〔主な出品資料〕 パネル

〔主催〕 熊本高等専門学校八代キャンパス建築社会デザイン工学科
国立水俣病総合研究センター 天草市立本渡歴史民俗資料館

〔共催〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館小展示室

〔開催期間〕 2014年2月8日(土)～3月25日(火)

〔開催日数〕 38日間

〔期間中入館者数〕 1,915人

〔展覧会担当〕 岩崎竹彦(五高記念館准教授)

⑨ 写真展「富重写真所と熊本の近代化」

〔開催趣旨〕

古写真は、今や近代以降の社会や歴史を見る際の重要な資料となっているが、熊本市には1866(慶応2)年の開業から150年余、現役の写真館としてはおそらく世界で最も古い富重写真所があり、撮影者や撮影状況が明確な古写真や原板(版)が数多く保存されている。

これらの古写真を活用した展覧会を、富重写真所の初代写真師富重利平によって撮影された「旧第五高等学校本館」(現熊本大学五高記念館)において開催することで、この貴重な資料と近代都市熊本を広くアピールすることを目的とした。

この写真展は文化庁の平成25年度文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)くまもとの文化遺産を活かした地域活性化事業の一環で開催した。

〔主な出品資料〕 写真・建物模型・写真機材・写真原板・地図・年表等

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔協力〕 熊本市 熊本学園大学附属産業経営研究所 富重写真所
桜の馬場城彩苑

〔後援〕 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2014年2月27日(木)～3月31日(月)

〔開催日数〕 31日間

〔期間中入館者数〕 2,199人

〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)

〔シンポジウム〕

「富重写真所 温故創新 歴史価値の継承と未来価値の創造」

詳細は、2、教育普及事業に記載(pp.16)



① 熊本大学埋蔵文化財調査センター特別展 「大宰府につながる官道～黒髪キャンパス」

〔開催趣旨〕

熊本大学が位置する黒髪地区を通るとみられる古代の官道について解説した展覧会である。

併せて平成25年度の発掘調査の成果の一部を速報公開として展示した。学内の遺跡について理解を深めてもらうことを目的とし、会期中に「展示ガイド 15分でわかる肥後官道のツボ!」を3回、「ガイドツアー 肥後官道 30分の現地小旅行!」を2回実施した。

〔主な出品資料〕 遺物・写真パネル・地図等

〔主催〕 熊本大学埋蔵文化財調査センター

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2014年8月6(水)～10月20日(月)

〔開催日数〕 62日間

〔期間中入館者数〕 2,944人

〔展覧会担当〕 松田光太郎(熊本大学埋蔵文化財調査センター)



② 企画展「アートするプロフェッサー」

〔開催趣旨〕

本学教職員によるアート作品発表の場所を提供するとともに、地域社会と大学や、職員同士あるいは学生たちとの交流を促進することを目的として開催している美術展である。

さらに、重要文化財である五高記念館で数多くの美術作品に親しんでもらうことで、社会に開かれた大学として地域社会の文化の向上に寄与することを目的として開催した。

〔主な出品作品〕 絵画・彫刻・写真・漆芸・陶芸・CG等61点

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会 熊本大学教育学部

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2014年11月1日(土)～12月1日(月)

〔開催日数〕 27日間

〔期間中入館者数〕 2,567人

〔展覧会担当〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)
市原富代(五高記念館事務補佐員)



③ 熊本大学公開講座 陶芸教室「作陶展」

〔開催趣旨〕

一般市民を対象として開講している熊本大学公開講座の一つ「陶芸教室」の受講生による作品展。

「陶芸教室」はもの作りを通した生涯学習として開講している講座であり、人気も高く受講生も多い。約半年かけて陶芸の基礎から学び作品を作り出している。

〔主な出品作品〕 特別支援学校教員による公開講座「陶芸」コース受講者制作の陶芸作品約50点

〔主催〕 熊本大学政策創造研究センター 熊本大学附属特別支援学校

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館小展示室

〔開催期間〕 2014年12月3日(水)～12月12日(金)

〔開催日数〕 9日間

〔期間中入館者数〕 171人

〔展覧会担当〕 芳武敏雄(熊本大学教育学部附属特別支援学校)



④ 「ちょっと昔のくらし探検」

〔開催趣旨〕

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長で劇的に変化した日本人の暮らしに焦点をあてた展覧会である。学芸員養成課程「博物館実習Ⅱ」の受講生が担当し、水道、電化製品、ガス製品が普及する以前の暮らしの道具、機械化が進む以前の農機具、漁具などを中心に約200点の昔の道具を展示した。また今回は、音や声、文字や画像を「伝える」道具の移り変わりについての展示も行った。

五高記念館と熊本県松橋収蔵庫の連携事業。

〔主な出品資料〕 農機具・漁具等約200点

〔主催〕 五高記念館 熊本県文化企画課松橋収蔵庫

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2014年12月20日(土)～2015年2月23日(月)

〔開催日数〕 41日間

〔期間中入館者数〕 1,094人

〔展覧会担当〕 岩崎竹彦(五高記念館准教授・学芸員養成課程担当)
國本信夫(熊本県文化企画課主幹)
迫田久美子(熊本県松橋収蔵庫学芸員)



⑤ 熊本大学教育学部美術科卒業・修了制作展

〔開催趣旨〕

熊本大学教育学部美術科の卒業生と修了生による美術展である。五高記念館で開催することにより、展示機会と見学者数を増やし、五高記念館企画展示室の有効活用を図ることができると共に社会貢献の機会として開催した。

〔主な出品作品〕 絵画・彫刻・論文及び関連作品等約30点

〔主催〕 熊本大学教育学部美術科

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2015年2月28日(土)～3月9日(月)

〔開催日数〕 9日間

〔期間中入館者数〕 314人

〔展覧会担当〕 熊本大学教育学部美術科

平成27年度(2015.4～2016.3)

① 戦後70年特別企画展

「五高と戦争 戦時体制下の五高生たち」

〔開催趣旨〕

1931(昭和6)年の満州事変から15年におよぶ戦争は、旧制高等学校にも大きな影響をおよぼした。それは長髪や行事の制限、修業年限の短縮、学徒出陣、学徒動員など、教育のみならず生活全般におよんだ。第二次世界大戦終結から70年を機に、戦時期の五高について特別企画展を開催した。

〔主な出品資料〕 写真 史料 解説パネル等約80点

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔後援〕 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2015年8月6日(木)～12月21日(月)

〔開催日数〕 116日間

〔期間中入館者数〕 8,039人

〔展覧会担当〕 薄田千穂(五高記念館特定事業研究員)



② 88会彫刻展

〔実施概要〕

熊本大学教育学部美術科の彫塑専攻の卒業生を中心とした「彫塑グループ88」は1988年に発足した、大学の教授や高校、中学校等の美術教師等で構成されているグループである。

今回、五高記念館でレベルの高い数多くの作品に親しんでもらうとともに、本学の美術教育について知ってもらうことを目的に開催した。

〔主な出品作品〕 彫刻等約30点

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2015年10月7日(水)～11月9日(月)

〔開催日数〕 30日間

〔期間中入館者数〕 3,461人

〔展覧会担当〕 緒方信行(熊本大学教育学部教授)



③ 熊本大学公開講座 陶芸教室 「作陶展」

〔主な出品作品〕 特別支援学校教員による公開講座「陶芸」コース受講者
製作の陶芸作品約50点

〔主催〕 熊本大学政策創造研究センター 熊本大学附属特別支援学校

〔協力〕 五高記念館

〔会場〕 五高記念館小展示室

〔開催期間〕 2015年12月5日(土)～12月18日(金)

〔開催日数〕 12日間

〔期間中入館者数〕 565人

〔展覧会担当〕 芳武敏雄(熊本大学教育学部附属特別支援学校)



④ 「ちょっと昔のくらし探検」

〔開催趣旨〕

熊本県博物館ネットワークセンター主催の熊本県博物館ネットワークセンター収蔵品展「ちょっと昔のくらし探検」を、五高記念館と熊本県の連携事業として開催した。

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長の下、機械化、電化、プラスチックなどの化学製品の普及により、日本人の暮らしは激変した。このように短期間で日々の暮らしが変化するという事は、これまで日本人が経験したことがないものである。

今回の展示では水道、電化製品、ガス製品が普及する以前の暮らしの道具、機械化が進む以前の農機具、漁具などを中心に約200点の昔の道具を展示した。なお、この展覧会の展示は学芸員養成課程「博物館実習Ⅱ」の受講生が担当した。

〔主な出品資料〕 台所用具・照明器具・暖房機器・洗濯・裁縫用具・
農機具・漁具等

〔主催〕 五高記念館 熊本県博物館ネットワークセンター

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館企画展示室

〔開催期間〕 2016年1月6日(水)～2月29日(月)

〔開催日数〕 41日間

〔期間中入館者数〕 1,435人

〔展覧会担当〕 岩崎竹彦(五高記念館准教授・学芸員養成課程担当)
國本信夫(熊本県文化企画課主幹)
迫田久美子(熊本県松橋収蔵庫学芸員)



平成28年度 (2016.4～2017.3)

平成28年熊本地震による被災のため、特別展・企画展等の開催はなし。

(市原富代)

2 教育普及事業

[1] 講演会・文化講座・コンサート等

平成25年度 (2013.4～2014.3)

① 入学式館内見学ツアー

〔開催趣旨〕

毎年、熊本大学の入学式には多くの新入学生の保護者が訪れる。五高記念館では五高につながる熊本大学の歴史や恵まれた教育環境をアピールするため、保護者向けの館内見学ツアーを実施した。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館常設展示室

〔日時〕 2013年4月4日(木) 13:00～16:00

〔参加者数〕 90人



② 熊本大学ホームカミングデー茶会

〔主催〕 熊本大学 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔協力〕 熊本大学茶道部

〔会場〕 五高記念館

〔日時〕 2013年11月3日(日) 11:00～16:00

〔参加者数〕 88人

③ 五高記念館文化講座

「明治期熊本の近代建築」

〔開催趣旨〕

一般市民を対象に、熊本大学や五高記念館を身近に感じてもらいたいという趣旨で企画した講座であり、楽しみながら学ぶことができるテーマを選定した。

五高記念館客員教授を講師に、五高記念館(旧第五高等中学校本館重要文化財)をはじめ、明治期の近代都市熊本を彩った建築物について学ぶ4回シリーズの講座とした。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館講義室

〔開催期間〕 2013年11月9日(土)～12月21日(土)

〔講師〕 磯田桂史(五高記念館客員教授)

〔内容〕 第1回「近代建築の黎明」



第2回「本格的近代建築の登場」

第3回「本格的近代建築の定着」

第4回「近代建築の産業界への浸透」

〔参加者数〕 26人

④ 工学部赤レンガ資料館 秋の夕暮れコンサート

〔開催趣旨〕

熊本大学工学部研究資料館は「熊本大学工学部(旧熊本高等工業学校)旧機械実験工場」として重要文化財指定を受けている。(附指定:工作機械一式)

普段は公開していないが、優れた音響効果を期待できることから平成19年度からコンサート会場としても活用している。今回は初の試みとして、来場者に本格的なジャズを楽しんでもらうためにプロのジャズミュージシャンによるコンサートを企画した。

コンサートに先立って館内に設置されている工作機械群(動態保存)を実際に稼働させ、建物と併せて貴重な歴史遺産を多くの人々に知ってもらう機会を設けた。

〔主催〕 五高記念館 熊本大学工学部研究資料館

〔共催〕 五高記念館友の会 熊本大学工学部技術部

〔会場〕 熊本大学工学部研究資料館

〔日時〕 2013年11月15日(金) 18:00 ~ 19:00

〔演奏〕 ジャズピアノ 園田智子

ギター 平村英寿

〔曲目〕 「Autumn Leaves」「Stablemates」

「All the Things You Are」「Road Warrior's Blues」

「Darn That Dream」「Girl from Ipanema」

「Waltz for Ruth」

〔参加者数〕 123人



⑤ シンポジウム

「富重写真所 温故創新 歴史価値の継承と未来価値の創造」

〔開催趣旨〕

初代・富重利平によって1866(慶応2)年に熊本市中央区新町に開業された富重写真所は、現在まで四代・147年にわたってその歴史を守ってきている。

原板・オリジナルプリント・機材・スタジオなど現存する資料のほとんどが写真史の分野において最大級の価値を有しているという、世界的水準での文化財と言うべき富重写真所の存在意義を広く知ってもらい、未来へと活かしたいという趣旨でシンポジウムを企画した。

また、この事業は平成25年度文化庁文化芸術振興費補助事業(文化遺産を活かした地域活性化事業)の一環として開催した。

〔主催〕 五高記念館 熊本学園大学付属産業経営研究所

〔共催〕 五高記念館友の会



〔後援〕 熊本県 熊本市 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会
熊本経済同友会 NHK熊本放送局 熊本日日新聞
熊本ルネッサンス県民運動本部 肥後考古学会
熊本まちなみトラスト

〔会場〕 熊本学園大学高橋守雄記念ホール

〔日時〕 2013年11月16日(土) 14:00～16:30

〔パネリスト・コーディネーター〕

○パネリスト

金子隆一(東京都写真美術館 専門調査員)

坂本 純(熊本市観光文化交流局 局長)

桜井 武(熊本市現代美術館 館長)

高橋則英(日本大学藝術学部写真学科教授)

富士川一裕(熊本まちなみトラスト事務局長)

○コーディネーター

工藤栄一郎(熊本学園大学商学部教授)

〔参加者数〕 100人



⑥ 五高記念館外国語ガイド講座

〔開催趣旨〕

平成23年度、24年度に実施した文化庁補助事業「地域文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 留学生ボランティアガイド育成事業」を継続して実施する事業である。

留学生と語学力を活かそうとする本学学生を対象に、多言語(英語・中国語・韓国語)による五高記念館等のボランティアガイド養成講座を実施した。

本講座の目的は、五高記念館等の多言語ガイドを育成し、海外からの来賓や来学者への対応を強化すること、参加した学生のスキルアップを図ると共に自校の歴史を知ってもらうことである。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館及び大学構内

〔開催期間〕 2013年11月30日(土)～2014年3月26日(水)

〔講師〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)

〔内容〕 講座1「五高の歴史」

講座2「五高建築」

講座3「五高の教授たち」

講座4「五高の卒業生」

講座5「ガイドの実践体験」

五高記念館外国語ガイド付見学会

・中国語ガイドコース 2014年3月1日(土)・26日(水)

・英語ガイドコース 2014年3月2日(日)

・韓国語ガイドコース 2014年3月15日(土)

〔参加者数〕 42人



① 入学式館内見学ツアー

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館常設展示室

〔日時〕 2014年4月4日(金) 13:00～16:00

〔参加者数〕 172人

② 工学部赤レンガ資料館 さわやかコンサート

〔開催趣旨〕

熊本大学工学部研究資料館は「熊本大学工学部(旧熊本高等工業学校)旧機械実験工場」として国の重要文化財指定を受けている。赤煉瓦造りの広い空間をもつ建物は優れた音響効果を期待できることから、コンサート会場としても適している。

今回のコンサートは熊本大学教育学部の音楽科の教師、学生などが出演し、本学の音楽教育の成果発表や社会貢献の場とすることを目的として開催した。また、コンサートの導入部では館内に設置されている工作機械群(動態保存)を実際に稼働させ仕組みや動きに関する解説を行った。

〔主催〕 熊本大学工学部研究資料館 五高記念館

〔共催〕 熊本大学工学部技術部 五高記念館

〔協力〕 熊本大学教育学部音楽科

〔会場〕 熊本大学工学部研究資料館

〔日時〕 2014年6月6日(金) 18:00～19:00

〔演奏〕 ヴァイオリン／ピオラ 吉永誠吾(元熊本大学教育学部教授)

ピアノ 島 優子

チェロ 脇田真仁

〔曲目〕 「愛のあいさつ」「組曲『動物の謝肉祭』から白鳥」「エレジー」

「シャコンヌ」「無窮動」「アヴェ・マリア」「結婚行進曲」

「セレナード」「ハンガリー舞曲第5番」

〔参加者数〕 86人



③ 五高紹介映像完成発表会

〔開催趣旨〕

平成25年度に東京五高会五高懇談会の協力を得て、五高精神を来館者に伝える映像の制作を行った。また、文化庁の補助事業「地域文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 時代に即応した情報発信システム・ガイドシステム構築事業」として、平成23年度から、日本語・英語・中国語・韓国語の4ヶ国語で五高の歴史・人物等について解説するコンテンツの制作と、各展示室への案内用タッチパネルの設置を進めてきた。

五高紹介映像とタッチパネルの完成にあたり、一般公開に先立ち試写会・体験会を開催した。

〔主催〕 五高記念館



- 〔共催〕 五高記念館友の会
 〔協力〕 東京五高会五高懇談会
 〔会場〕 五高記念館講義室
 〔日時〕 2014年6月8日(日) 10:00～11:00
 〔内容〕 ○五高紹介映像
 『旧制第五高等学校―近代日本を支えた学舎』の試写会
 ○タッチパネル式案内システム(4カ国語対応)の体験会
 〔参加者数〕 30人



④ 工学部赤レンガ資料館 秋の夕暮れ JAZZ コンサート

〔開催趣旨〕

重要文化財である熊本大学工学部研究資料館と、館内に設置されている工作機械群(動態保存)をより多くの方々に知ってもらおうと共に、コンサート会場として活用し音楽を楽しんでもらうことによって、社会に開かれた大学として地域社会の文化の向上に寄与することを目的として開催した。

プロのジャズミュージシャンによる JAZZ コンサートを企画した。

- 〔主催〕 熊本大学工学部研究資料館 五高記念館
 〔共催〕 熊本大学工学部技術部 五高記念館友の会
 〔会場〕 熊本大学工学部研究資料館
 〔日時〕 2014年10月24日(金) 18:00～19:00
 〔演奏〕 ジャズピアノ 園田智子
 ベース 明日正就
 ドラム 梁井海洋
 〔曲目〕 「Autumn Leaves」「Waltz For Ruth」「The Island」
 「I should Care」「Misty」「Autumn Nocturne」その他
 〔参加者数〕 94人



⑤ 熊本大学ホームカミングデー茶会

- 〔主催〕 熊本大学 五高記念館
 〔共催〕 五高記念館友の会
 〔協力〕 熊本大学茶道部
 〔会場〕 五高記念館
 〔日時〕 2014年11月1日(土) 11:00～16:00
 〔参加者数〕 120人

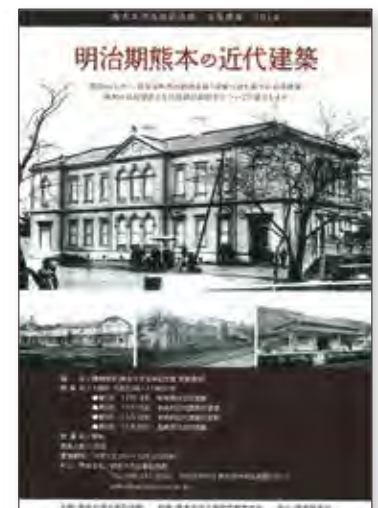
⑥ 五高記念館文化講座2014

「明治期熊本の近代建築」「熊本の漱石 熊本のハーン」

〔開催趣旨〕

前年度に引き続き、市民を対象にした五高記念館客員教授、客員准教授による文化講座を開催した。

前回の熊本の近代建築について学ぶ講座に加えて、第五高等学校で教鞭を執った夏目漱石とラフカディオ・ハーンの教師としての姿や活動、生活について学んでもらう講座の三本立てとした。



- 〔主催〕 五高記念館
 〔共催〕 五高記念館友の会
 〔会場〕 五高記念館講義室 情報プラザ
 〔開催期間〕 2014年11月8日(土)～12月20日(土)
 〔講師〕 磯田桂史(五高記念館客員教授)
 村田由美(五高記念館客員准教授)
 アラン・ローゼン(五高記念館客員教授)
 〔内容〕 ○「明治期熊本の近代建築」磯田桂史
 第1回 黎明期の近代建築
 第2回 本格的近代建築の登場
 第3回 本格的近代建築の展開
 第4回 産業界の近代建築
 ○「熊本の漱石」村田由美
 第1回 五高教師漱石
 第2回 熊本での日常
 ○「熊本のHearn」アラン・ローゼン
 第1回 ハーン熊本へ
 第2回 ハーン熊本から
 〔参加者数〕 89人



⑦ 五高記念館外国語ガイド講座

〔開催趣旨〕

平成23～25年度文化庁補助事業として進めてきた「留学生ボランティアガイド育成事業」の成果を活用し、留学生と語学力を活かそうとする熊本大学の学生を対象にした、五高記念館等の多言語(英語・中国語・韓国語)によるガイド養成講座。平成26年度中期目標達成経費による事業として実施した。

本講座は、五高記念館等の多言語ガイドを育成し、海外からの来賓や来学者への対応を強化すること、参加した本学学生のスキルアップを図ると共に自校の歴史を知ってもらうことを目的としている。今回は受講対象者を県内の大学・高専にも広げ、五高記念館等の内容を学習してもらい、協力が可能な学生には案内ボランティアガイドとして活動してもらうことを目指し実施した。

- 〔主催〕 五高記念館
 〔共催〕 五高記念館友の会
 〔会場〕 五高記念館及び大学構内
 〔開催期間〕 2014年11月15日(土)～2015年3月29日(日)
 〔講師〕 藤本秀子(五高記念館特定事業研究員)
 〔内容〕 講座1「五高の歴史」講義及び館内見学
 講座2「五高建築」講義及び学内文化財建造物の見学
 講座3「五高の教授たち」講義及び学内文学碑等の見学
 講座4「五高の卒業生」講義と大学周辺の施設見学
 講座5「ガイドの実践体験」



五高記念館外国語ガイド付見学会

- ・ 中国語ガイドコース 2015年3月28日(土)
- ・ 英語ガイドコース 2015年3月29日(日)

〔参加者数〕 62人

平成27年度 (2015.4～2016.3)

① 入学式館内見学ツアー

- 〔主催〕 五高記念館
〔共催〕 五高記念館友の会
〔会場〕 五高記念館常設展示室
〔日時〕 2015年4月4日(土) 13:00～16:00
〔参加者数〕 172人



② 熊本大学ホームカミングデー茶会

- 〔主催〕 熊本大学 五高記念館
〔共催〕 五高記念館友の会
〔協力〕 熊本大学茶道部
〔会場〕 五高記念館
〔日時〕 2015年10月31日(土) 11:00～16:00
〔参加者数〕 70人



③ 秋の夕暮れコンサート

〔開催趣旨〕

国指定の重要文化財である熊本大学工学部研究資料館と館内に設置されている工作機械群(動態保存)をより多くの方々に知ってもらおうと共に、熊本大学教育学部の音楽科の教師、学生などが出演するコンサートを開催することで、本学の音楽教育の成果発表や社会貢献の場とすることを目的とした。

- 〔主催〕 熊本大学工学部研究資料館 五高記念館
〔共催〕 熊本大学工学部技術部 五高記念館友の会
〔協力〕 熊本大学教育学部音楽科
〔会場〕 熊本大学工学部研究資料館
〔日時〕 2015年11月6日(金) 18:00～19:00
〔演奏〕 ヴァイオリン/ビオラ 吉永誠吾
ピアノ 島 優子
チェロ 脇田真仁
〔曲目〕 「ヴァイオリンソナタ ニ長調から第1、第2楽章」
「組曲『動物の謝肉祭』から白鳥」「エレジー」「ユーモレスク」
「メロディ」「無窮動」「ピアノ三重奏曲ニ短調から第1楽章」
〔参加者数〕 78人



④ 五高記念館文化講座2015

〔開催趣旨〕

五高記念館が進めてきた調査研究の成果を踏まえ、五高記念館が所蔵する資料等の物的資源と人的資源を活用し広く社会に貢献するための文化講座で、平成25年度より開催している。

特に、2016年、2017年が五高教授「夏目金之助（漱石）」の記念年にあたるため、3講座の内2講座を漱石関連の内容とした。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館講義室

〔開催期間〕 2015年10月3日（土）～12月12日（土）

〔講師〕 村田由美（五高記念館客員准教授）

伊藤重剛（五高記念館長）

磯田桂史（五高記念館客員教授）

アラン・ローゼン（五高記念館客員教授）

〔内容〕 ○「漱石と『草枕』作品『草枕』を読み解く」村田由美

第1回 漱石と『草枕』-漱石と熊本、『草枕』執筆の背景など

第2回 「非人情」と画工の使命 第1章から第6章まで

第3回 志保田那美の悲劇 第7章から最終章まで

○「漱石が見た明治の熊本 町並みと建築」

伊藤重剛 第1回 甲斐青萍による熊本町並図屏風三部作

第2回 軍事都市熊本と文教都市熊本

磯田桂史 第3回 池田駅から五高へ

第4回 黒髪界限、南千反畑界限、藪の内界限

○「ラフカディオ・ハーンの熊本」アラン・ローゼン

第1回 熊本までの足跡 生い立ちと経歴

第2回 熊本での暮らしと作品

〔参加者数〕 123人



⑤ 五高記念館外国語ガイド講座

〔開催趣旨〕

平成26年度に引き続き、平成27年度中期目標達成経費による事業として実施した。

本年度より一般市民を受講生として受け入れることや、学習サポーターを学外の社会人とすることで、学生達のより広範な人的交流が生まれ、五高記念館としても多言語ガイドを確保し来館者サービスの向上と入館者増加に繋げることを目的とした。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館及び大学構内

〔開催期間〕 2015年11月7日（土）～2016年1月23日（土）

〔講師〕 藤本秀子（当館特定事業研究員）

〔内容〕 講座1「五高の歴史」講義及び館内見学



講座2「五高建築」講義及び学内文化財建造物の見学
講座3「五高の教授たち」講義及び学内文学碑等の見学
講座4「五高の卒業生」講義と大学周辺の施設見学
講座5「ガイドの実践体験」

五高記念館外国語ガイド付見学会

2016年1月23日(土)

・中国語ガイドコース ・英語ガイドコース ・韓国語ガイドコース

〔参加者数〕 33人



⑥〔追加講座〕五高記念館文化講座2015

〔開催趣旨〕

平成25年度より五高記念館長、客員教授、客員准教授による五高記念館文化講座を実施しているが、年々受講希望者が増加し、要望に応えきれない状態であった。本年度秋に開催した文化講座についても、定員数を越える受講希望があったことから追加講座を企画した。

〔主催〕 五高記念館

〔共催〕 五高記念館友の会

〔会場〕 五高記念館講義室

〔開催期間〕 2016年2月1日(月)～2月29日(月)

〔講師〕〔内容〕 ④五高記念館文化講座2015 に同じ

〔参加者数〕 123人



平成28年度 (2016.4～2017.3)

平成28年熊本地震による被災のため、講演会・文化講座・コンサート等の開催はなし。

(市原富代)

[2] 出版等

平成25年度 (2013.4～2014.3)

① 『熊本大学五高記念館館報 第2号』 〈平成21年度～24年度〉

〔仕様〕 A4版 116頁
〔発行〕 五高記念館
〔発行日〕 2014年3月28日
〔編集〕 薄田千穂

② 五高記念館展示解説パンフレット

展示解説の補助パンフレット。企画展、博物館活動トピックス、卒業生紹介等を掲載した。

〔仕様〕 A4版 1頁
〔発行〕 五高記念館
〔発行日〕 No.1 2013年6月6日
No.2 2013年9月12日
No.3 2013年11月2日
No.4 2013年12月1日
No.5 2014年2月27日
〔編集〕 宮田恭子

③ シンポジウム「富重写真所 温故知新 歴史価値の継承と未来価値の創造」報告書

〔仕様〕 A4版 30頁
〔発行〕 五高記念館
〔発行日〕 2014年1月31日

④ 写真展「富重写真所と熊本の近代化」 パンフレット

〔仕様〕 A5版 22頁
〔発行〕 五高記念館
〔発行日〕 2014年2月27日
〔編集・執筆〕 藤本秀子 薄田千穂
市原富代 宮田恭子

平成26年度 (2014.4～2015.3)

① 映像「旧制第五高等学校 近代日本を支えた学び舎」

五高卒業生の団体である「東京五高会 五高懇談会」より、五高精神を今に伝える内容の五高紹介映像を制作する目的で寄付を受け、制作した。脚本、編集に代表の水田宗昭氏の協力を受けた。

〔制作〕 五高記念館
〔協力〕 東京五高会 五高懇談会
〔公開〕 2014年6月8日
〔放映時間〕 12分
〔脚本〕 薄田千穂

② 五高記念館展示解説パンフレット

展示解説の補助パンフレット。企画展、博物館活動トピックス、卒業生紹介等を掲載した。

〔仕様〕 A4版 1頁
〔発行〕 五高記念館
〔発行日〕 No.6 2014年4月13日
No.7 2014年10月30日
〔編集〕 宮田恭子



①『五高と漱石』

2016・2017年は、夏目漱石生誕150年、没後100年、来熊120年にあたる。漱石記念年実施のため学長裁量経費を取得し、五高教師夏目漱石にスポットを当てた冊子を制作した。

〔仕様〕 B5版変形 フルカラー 35頁

〔発行日〕 2016年3月25日

〔編集〕 五高記念館

〔発行〕 熊本大学

〔監修・執筆〕 村田由美

〔執筆〕 藤本秀子

〔英訳・監修〕 アラン・ローゼン

〔英訳〕 村上稔子

②『第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員』

熊本大学五高記念館叢書 第2集

〔仕様〕 A4版 114頁

〔発行〕 五高記念館

〔発行日〕 2016年3月28日

〔編集・執筆〕 薄田千穂

③ 五高記念館ホームページリニューアル

週日公開、事務室開設から10年にあたり、新資料、研究成果を盛り込んだリニューアルを行った。

〔制作〕 五高記念館

〔公開〕 2016年3月

④ 五高記念館展示解説パンフレット

展示解説の補助パンフレット。企画展、博物館活動トピックス、卒業生紹介等を掲載した。

〔仕様〕 A4版 1頁

〔発行〕 五高記念館

〔発行日〕 No.8 2015年4月13日

No.9 2015年8月6日

No.10 2016年1月8日

〔編集〕 市原富代

(薄田千穂)



五高記念館ホームページ



五高記念館展示解説パンフレット



[3] 生涯学習

本学が整備を進めている大学博物館構想において、五高記念館がその中核的組織となり、生涯学習振興において期待される役割を果たすことを目的として市民研究員制度を設置している。

市民研究員は当館が実施する諸活動に参画し、また自主的に課題を見つけ、当館スタッフとともに課題解決に向けた活動を実施する。こうした活動を通して市民研究員は自らの学習成果を発表し、その評価を受けることで社会的通用性の確立が可能となろう。さらに他の博物館と連携することで、地域社会におけるワンストップサービス及び生涯学習プラットフォームの構築を模索するものである。

2011(平成23)年度から2016(平成28)年度まで1名(東孝治)が市民研究員となり、五高記念館内において、調査・研究活動を実施した。

(岩崎竹彦)

[4] 友の会活動

平成25年度(2013.4～2014.3)

■代表世話人 小野友道

■世話人 平山謙二郎 岩岡中正 今江正知
西川盛雄 東孝治 久野啓介
北野隆 田口宏昭 伊藤重剛
岩崎竹彦 和田正隆 緒方誠一郎
藤本秀子

■監事 西川盛雄 東孝治

■事務局長 藤本秀子

① 平成25年度総会

開催日 2013年5月18日(土)

講演 「講義ノートに見るラフカディオ・ハーンの英語教育」

講師 西川盛雄(五高記念館友の会監事 熊本大学名誉教授)

②(共催)企画展

「麦島勝の見た昭和 海と川の暮らし」

開催期間 2013年6月6日(木)～9月1日(日)

③(共催)オープンキャンパス

「合格祈願五高くじ」実施

開催日 2013年8月10日(土)

④(主催)企画展

「“大城組”の小さな巨人たち 2013」

開催期間 2013年9月12日(木)～10月27日(日)

⑤(共催)定期企画展

「アートするプロフェッサー」

開催期間 2013年11月2日(土)～12月2日(月)

⑥(共催)熊本大学ホームカミングデー茶会

開催日 2013年11月3日(日)

⑦(共催)五高記念館文化講座

「明治期熊本の近代建築」(全4回)

開催期間 2013年11月9日(土)～12月21日(土)

⑧(協力)ラフカディオ・ハーン顕彰事業

『ハーンとギリシャ』

開催日 2013年11月10日(日)

⑨(共催)工学部赤レンガ資料館

秋の夕暮れコンサート

開催日 2013年11月15日(金)

⑩(共催)シンポジウム

「富重写真所 温故創新 歴史価値の継承と未来価値の創造」

開催日 2013年11月16日(土)

⑪(共催)企画展

「ちょっと昔のくらし探検」

開催期間 2013年12月20日(金)～
2014年2月17日(月)

⑫(共催)プレ写真展

「富重写真所と熊本の近代化」

開催期間 2014年2月2日(日)～2月11日(火)

⑬(共催)写真展

「富重写真所と熊本の近代化」

開催期間 2014年2月27日(木)～3月31日(月)

⑭ 会報

『赤煉瓦通信』第9号発行

編集・発行 熊本大学五高記念館友の会

発行日 2014年3月1日

○ その他の事業

・クリアファイル制作(寮歌 五高七高野球戦)

平成26年度 (2014.4～2015.3)

- 代表世話人 小野友道
■世話人 平山謙二郎 岩岡中正
今江正知(～12月11日) 西川盛雄
東 孝治 久野啓介 北野 隆
伊藤重剛 岩崎竹彦 和田正隆
緒方誠一郎 藤本秀子 村田由美
■監事 西川盛雄 東 孝治
■事務局長 藤本秀子

- ① 平成26年度総会
開催日 2014年6月8日(日)
五高紹介映像完成発表会「旧制第五高等学校
近代日本を支えた学舎(まなびや)」
- ② (共催) オープンキャンパス五高クイズラリー
開催日 2014年8月7日(金)
- ③ (共催) 熊本市文化振興課・熊本アイルランド協会他6団体共催による市民講座(全4回)
開催期間 2014年7月26日(土)～10月11日(土)
- ④ (共催) 熊本大学ホームカミングデー茶会
開催日 2014年11月1日(土)
- ⑤ (共催) 定期企画展
「アートするプロフェッサー」
開催期間 2014年11月1日(土)～12月1日(月)
- ⑥ (共催) 五高記念館文化講座
「熊本の漱石 熊本のハーン」(全4回)
開催期間 2014年11月8日(土)～12月13日(土)
- ⑦ (共催) 五高記念館文化講座
「明治期熊本の近代建築」(全4回)
開催期間 2014年11月8日(土)～12月20日(土)
- ⑧ 会報
『赤煉瓦通信』第10号発行
編集・発行 熊本大学五高記念館友の会
発行日 2014年12月1日
- ⑨ (共催) 企画展
「ちょっと昔のくらし探検」
開催期間 2014年12月20日(土)～
2015年2月23日(月)
- その他の事業
・PR用うちわ制作と配布(端艇部 島原遠漕)

平成27年度 (2015.4～2016.3)

- 代表世話人 小野友道
■世話人 平山謙二郎 岩岡中正 西川盛雄
東 孝治 久野啓介 北野 隆
伊藤重剛 岩崎竹彦 和田正隆
緒方誠一郎 藤本秀子 村田由美
■監事 西川盛雄 東 孝治
■事務局長 藤本秀子

- ① (共催) 熊本市文化振興課・熊本アイルランド協会他6団体共催による市民講座(全4回)
開催期間 2015年5月23日(土)～10月24日(土)
- ② 平成27年度総会
開催日 2015年5月30日(土)
講演 「甲斐青萍が描いた熊本の明治町並み絵図」
講師 伊藤重剛
(五高記念館世話人 五高記念館長)
- ③ (共催) 戦後70年特別企画展
「五高と戦争 戦時体制下の五高生たち」
開催期間 2015年8月6日(木)～12月21日(月)
- ④ (共催) 五高記念館文化講座
「漱石と『草枕』作品『草枕』を読み解く」(全3回)
開催期間 2015年10月3日(土)～10月17日(土)
- ⑤ (共催) 熊本大学ホームカミングデー茶会
開催日 2015年10月31日(土)
- ⑥ (共催) 五高記念館文化講座
「漱石が見た明治の熊本 町並みと建築」(全4回)
開催期間 2015年11月7日(土)～11月28日(土)
- ⑦ (共催) 五高記念館外国語ガイド講座
開催期間 2015年11月7日(土)～
2016年1月23日(土)
- ⑧ 会報
『赤煉瓦通信』第11号発行
編集・発行 熊本大学五高記念館友の会
発行日 2015年12月1日
- ⑨ (共催) 五高記念館文化講座
「ラフカディオ・ハーンの熊本」(全2回)
開催期間 2015年12月5日(土)～12月12日(土)
- ⑩ (共催) 企画展
「ちょっと昔のくらし探検」
開催期間 2016年1月6日(水)～2月29日(月)

○その他の事業

・クリアファイル制作

(五高七高野球戦 武夫原頭 五高記念館)

平成28年度 (2016.4～2017.3)

■代表世話人 小野友道

■世話人 平山謙二郎 岩岡中正 西川盛雄
東 孝治 久野啓介 北野 隆
伊藤重剛 岩崎竹彦 和田正隆
緒方誠一郎 藤本秀子 村田由美

■監事 西川盛雄 東 孝治

■事務局長 藤本秀子

①(共催) 漱石記念年全国オープニング講演会

「五高と漱石」 ※熊本地震のため中止

② 平成28年度総会

※熊本地震のため中止

③ 会報

『赤煉瓦通信』第12号発行

編集・発行 熊本大学五高記念館友の会

発行日 2017年12月1日

(市原富代)

[5] その他

本学は、社会教育法(昭和24年6月10日法律第207号、最終改正:平成23年12月14日法律第122号)第9条の5の規定及び社会教育主事講習等規程(昭和26年6月21日文部省令第12号、最終改正:平成21年4月30日文部科学省令第20号)に基づき社会教育主事講習を実施している(主催:文部科学省、国立大学法人熊本大学、熊本県教育委員会、大分県教育委員会、宮崎県教育委員会、鹿児島県教育委員会)。

2009(平成21)年度からは社会主事講習における省令科目「社会教育特講」(3単位)のうち「文化財の保護―国指定重要文化財『五高記念館』で学ぶ―」(3時間)を当館講義室において実施し、当館専任教員(岩崎竹彦)が担当している。国指定重要文化財建造物である当館内での受講は、生きた文化財保護行政を学ぶ格好の場であろう。

年度別受講者数

年度	実施日	科目	受講者数
平成25年度	8月5日	文化財の保護	40名
平成26年度	8月4日	文化財の保護	34名
平成27年度	8月3日	文化財の保護	31名
平成28年度	熊本地震のため中止		

(岩崎竹彦)



第9号



第10号



第11号



第12号

3 資金獲得による実施事業

[1] 文化庁補助事業

文化遺産を活かした観光振興・ 地域活性化事業

平成25年度文化芸術振興費補助金

文化遺産を活かした 地域活性化事業

くまもとの文化遺産を活かした
地域活性化事業

① 近代熊本写真資料の企画展示及び関連啓発事業

【平成24・25年度】

補助金額 平成25年度 4,123,000円

実施期間 平成25年6月17日～平成26年3月31日

1866(慶応2)年に開業し、熊本市で営業を続ける、国内最古(世界でも最古と考えられる)の写真館「冨重写真所」の古写真を通して近代都市熊本の姿を伝える展覧会「冨重写真所と熊本の近代化」を開催した。

地域と共働した美術館・ 歴史博物館創造活動支援事業

くまもとの文化遺産を活かした
観光振興・地域活性化支援事業

地域のグローバル化拠点としての 美術館・歴史博物館

② 留学生有償ボランティアガイド育成事業

【平成23・24・25年度】

補助金額 平成25年度 540,520円

実施期間 平成25年7月1日～平成26年度3月31日

留学生によるボランティアガイドの育成を目的に、五高記念館を中心に熊本大学内の文化資源を案内できるよう平成23、24年度にガイド用テキストを制作し平成25年度は養成講座及びガイドツアーを実施した。

③ 時代に即応した情報発信システム、ガイドシステム の構築事業【平成23・24・25年度】

補助金額 平成25年度 3,688,680円

実施期間 平成25年7月1日～平成26年3月31日

来館者に質の高い展示解説を提供するため、タッチパネル式解説装置の導入と掲載するコンテンツの制作を行った。



新たな機能を創造する 美術館・歴史博物館

④ 熊本県博物館ネットワーク構築事業

【平成23・24・25年度】

補助金額 平成25年度 2,481,720円

実施期間 平成25年7月1日～平成26年3月31日

学芸員同士の交流やネットワークにより、博物館の連携を促進するため収蔵品データベースの構築やホームページの制作を行い、熊本県による同システムの運用に繋いだ。

(藤本秀子)

[2] 外国語ガイド講座

平成23～25年度文化庁補助事業として進めてきた「留学生ボランティアガイド育成事業」の成果を活用し、留学生と語学力を活かそうとする熊本大学の学生を対象にした、五高記念館等の多言語(英語・中国語・韓国語)によるガイド養成講座。2014・2015(平成26・27)年度中期目標達成経費による事業として実施した。

(開催期間)

2014年11月15日(土)～2015年3月29日(日)

2015年11月7日(土)～2016年1月23日(土)

詳しくは、教育普及事業(pp.20、22)

[3] 『五高と漱石』出版

2016・2017年は、夏目漱石生誕150年、没後100年、来熊120年にあたる。漱石記念年実施のため学長裁量経費を取得し、五高教師夏目漱石にスポットを当てた冊子を制作した。

(編集・発行) 熊本大学五高記念館

(発行日) 2016年3月25日

詳しくは、教育普及事業(pp.25)

[4] ホームページ英語版の改訂

グローバル化推進のための基盤整備事業の一環として、外国語版Webページ改修経費支援が実施された。これにより、五高記念館ホームページの改訂を行った。

(公開) 2017年3月31日

(薄田千穂)

[5] 旧第五高等中学校本館及び同化学実験場展示整備基本計画

1. 目的

旧第五高等中学校本館は、1993(平成5年)10月に旧第五高等中学校及び同第五高等学校の関係資料を

展示する資料館として開館した。その後、2006(平成18)年12月に学内共同教育研究施設に位置付けられ、五高記念館施設を旧第五高等学校本館及び同化学実験場とした。本館は2009(平成21)年7月に「熊本大学五高記念館」として博物館法第29条に基づく博物館に相当する施設の指定を受けた。本館は適宜展示更新や空調機設置等を行い整備に努めてきたが、化学実験場は未整備であった。化学実験場にはドラフトチャンパーなど貴重な設備が残っており、本館と一体化した博物館施設として公開活用するため、2015(平成27)年度に「旧第五高等中学校本館及び同化学実験場展示整備基本計画」を策定した。

なお、本館・化学実験場は2016(平成28)年度に耐震補強及び屋根等の修理工事が予定されていたことから、空調・照明・電気・インターネット回線等、収蔵資料の保存と公開に係る環境整備を保存修理工事の事業計画に反映させられるように努めた。

2. 概要

基本理念は「五高の教育とその精神を後世に伝え、熊本大学のスピリッツを再発見するミュージアム」とし、旧第五高等中学校及び同第五高等学校に係る学術資料総合研究センターとしての「調査研究」機能を根幹に据え、「伝える(資料の収集保管・情報発信)」「観せる・魅せる(展示・魅力向上)」「創造する(学習支援・地域活性化)」をキーワードに整備計画を策定した。現在積極活用を行っていない化学実験場は、主に理科系資料を中心とした展示室や学生のための談話室、あるいは多目的ホール等を整備し、本館との一体活用を図るプランを策定した。

なお、本館及び化学実験場は重要文化財建造物であることから、文化財としての価値を損なうことのない整備計画を第一義とし、併せて防災・防犯及びバリアフリー対策についても検討した。

次頁以降に五高記念館に求められる機能とその対応、動線・ゾーニング検討案、展示室のイメージ図を掲載した。

(岩崎竹彦)

4 調査研究事業

[1] 収蔵資料、第五高等学校に関する調査研究

(1) 五高記念館等の収蔵資料に関する調査

五高記念館は、第五高等学校関係資料、同窓会関係資料あわせて約8500点を収蔵している。

収蔵資料の目録については、2001(平成13)年7月に調査カードを作成し、2006(平成18)年に調査カードのデジタルデータ化を行い、検索システムを構築した。2015(平成27)年度には、熊本県博物館ネットワークのホームページ上で、目録を公開している。

資料のデータ化については、2011(平成23)年度～2013(平成25)年度に、第五高等学校関係資料の資料表紙、「第五高等学校一覧」「熊本高等工業一覧」「職員履歴」を行った。

なお、「職員進退」「五高同窓会報」「規則類」の目次のデータ化を行った。引き続き収蔵資料のデータ化作業を進めている。

2016(平成28)年の熊本地震被災により、館内の資料は避難を余儀なくされた。改修工事、耐震工事を行うため、館内の資料は学内施設5か所に分散して保存している。資料移動に伴って、同窓会関係資料を再整理し、『五高五十年史』、『習学寮史』編纂の際の掲載写真や資料、原稿などを目録に加えた。

なお、資料収集を継続的に行っており、2013(平成25)年から2016(平成28)年の間に320点の資料寄贈を受けた。また、五高時代のアルバム、出版物等、資料の購入も行っている。

工学部研究資料館については、2016(平成28)年の熊本地震により被災し、改修工事、耐震補強工事を行うことになっている。館内の資料は学内施設3ヶ所に分散、保存している。目録に関しては、2010(平成22)年度に収蔵資料調査を完了していたが、その後も機械類、工友寮資料、寄贈資料の持込があり、まとまった追加調査を行っていなかった。資料移動の際に、資料整理、目録整備を行った。また、2017(平成29)年の熊本大学工学部120周年記念事業として、熊本大学工学部研究資料館図録『熊本高等工業学校』を制作し

た。発行は熊本大学工学部、熊本大学工業会である。

2013(平成25)年は学徒出陣から70年になることから、企画展を行った。それに伴い、五高職員が戦地から学校に宛てた軍事郵便の書起し等を行った。

2016(平成28)年、2017(平成29)年は、夏目漱石生誕150年、没後100年、来熊120年、を迎えることから、2015(平成27)年度に『五高と漱石』刊行した。それに伴う五高記念館資料の調査により、藤本秀子研究員が、教授夏目金之助が作成した試験問題を発見した。

(2) 第五高等学校に関する調査研究

2009(平成21)年に「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」を行い、聞き取り調査、座談会等を企画し、戦時の五高についての調査・研究活動を行ってきた。2015(平成27)年は、勤労働員についての調査を行い、聞き取り調査の課程で、第五高等学校の学校工場で使用されたと思われる部品、生徒が動員先から実家に当てた手紙などが提供された。以上をまとめ、五高記念館叢書第二集『第五高等学校における勤労奉仕・勤労働員』を刊行した。また、戦後70年を機に、これまでの研究成果にもとづいた特別企画展「五高と戦争」を開催した。

(薄田千穂)

[2] 科学研究費採択状況

伊藤重剛(館長25～27年度)

- ① 平成26-27年度研究成果公開促進費
「Architectural Study of the Messene Temple at Ancient Messene」の翻訳・出版
平成26年度(翻訳) 180万円
平成27年度(出版) 290万円
- ② 平成27年度科学研究費基盤研究(B)
研究代表者：伊藤重剛

「フィガリアの実測調査に基づいたギリシア古代城壁
と都市の立地に関する研究」

直接経費420万円 間接経費126万円

伊東龍一（館長28年度）

平成28年度科学研究費基盤研究(B)

研究代表者：伊東龍一

研究分担者：斎藤英俊・吉田純一・後藤久太郎

「近世指図の作図技法・描法の展開に関する研究Ⅴ
一建地割編年指標の再検討一」

課題番号16H04485

直接経費740万円 間接経費220万円

薄田千穂（研究員）

平成27年度奨励研究

「第五高等学校における勤労動員の実態について」

課題番号15H00079

直接経費50万円

[3] 外部資金受託状況

伊藤重剛（館長25～27年度）

① 平成26年度学長裁量経費

研究代表者：伊藤重剛

「ミャンマー国イラワジ州水郷地帯のサステナブルな
地域マスタープランづくりに関するイラワジ州政府
及びヤンゴン工科大学との共同研究・教育拠点
形成のための予備調査」

150万円

② 平成27年度COC事業

「地域志向教育研究経費」

研究代表者：伊藤重剛

「古地図、古写真を用いたビジュアルな都市史教育に
よる愛郷心とコミュニティ意識の醸成に関する研究」

274,584円

伊東龍一（館長28年度）

平成28年度公益財団法人松井角平記念財団研究
助成金（熊本地震特別枠）

研究代表者：伊東龍一

「熊本地震における被災文化財調査を補足する役割を
担う近世建築に関する再調査・研究」

80万円

[4] 他機関の研究プロジェクトへの参画

アラン・ローゼン（客員教授）

Cengage Learning ELT

ハーンの手紙集成出版委員会

アラン ローゼン、スティーブ 松村、平川祐弘、
関田かおる、川西 進

[5] 研究活動

（著書、論文、学会発表、講演会など）

伊藤重剛（館長25～27年度）

平成25年度（2013年度）

- ① 伊藤重剛「ネクロポリス」の項担当 土生田純之編
『墓の考古学』吉川弘文館 2013年5月30日 520頁
- ② 伊藤重剛「西洋古代の建築家」の項担当 岩波書店
辞典出版部編『世界人名大事典』岩波書店 2013年
12月12日 3610頁
- ③ 岩田千穂、伊藤重剛「地中海古代都市の研究（141）
ギリシア古代都市メッセネにおける座席部材の比較
研究」日本建築学会九州支部研究報告 第53号3
2014年3月 557-560頁
- ④ 末次周、伊藤重剛「地中海古代都市の研究（142）
アギア・サマリナ教会の建築に関する研究」日本
建築学会九州支部研究報告 第53号3 2014年3月
561-564頁
- ⑤ 伊藤重剛、大塚和樹「専売局熊本煙草製造所に
関する研究」日本建築学会九州支部研究報告

第53号3 2014年3月 513-516頁

- ⑥ 岩田 千穂、伊藤 重剛「ギリシア古代都市メッセネにおける劇場のローマ時代客席部の現状報告と復元試案」日本建築学会計画系論文集 697号 2014年3月 827-833頁

平成26年度(2014年度)

地中海学会賞受賞 2014年6月14日

- ① 講演「三角西港の歴史的価値」(「世界遺産シンポジウム in 三池」2015年2月1日 熊本県宇城市)
- ② 講演「三角西港に見る明治のロマンと技術」(放送大学熊本学習センター事業 2014年11月30日 熊本県宇城市)
- ③ 本間里見、叶俊、伊藤重剛、梶愛梨、内山忠、位寄和久「ミャンマーにおける地方中核都市の開発マスタープランに関する研究(その1)ーエーヤワディー管区パテイン市における都市構造と開発の状況ー」日本建築学会九州支部研究報告 第54号3 2015年3月 229-232頁
- ④ 梶愛梨、本間里見、伊藤重剛、内山忠、尾池大祐、位寄和久「ミャンマーにおける地方中核都市の開発マスタープランに関する研究(その2)ーエーヤワディー管区パテイン市における仏教建築と都市の関係性に関する研究ー」日本建築学会九州支部研究報告 第54号3 2015年3月 233-236頁
- ⑤ 大來美咲、伊藤重剛「九州学院旧本館の建築に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告 第54号3 2015年3月 541-544頁
- ⑥ 久弘光太、伊藤重剛「熊本市役所旧市庁舎本館に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告 第54号3 2015年3月 545-548頁
- ⑦ 石橋雅子、伊藤重剛「旧熊本貯金支局の建築に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告 第54号3 2015年3月 549-552頁

平成27年度(2015年度)

- ① 久弘光太、伊藤重剛「熊本通信局庁舎の建築に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 625-628頁
- ② 末次周、伊藤重剛「地中海古代都市の研究(143)ギリシア・アルカディア地方の都市城壁の石積み調査報告2015」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 669-672頁

- ③ 別所匠、伊藤重剛、本間里見「ミャンマー・パテイン市のイギリス統治時代の建築に関する調査2015(1)記録保管庫」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 693-696頁
- ④ 伊藤重剛、別所匠、本間里見「ミャンマー・パテイン市のイギリス統治時代の建築に関する調査2015(2)管区政府行政庁舎」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 697-700頁
- ⑤ 尾池大祐、本間里見、伊藤重剛、内山忠、梶愛梨、位寄和久「ミャンマーにおける地方中核都市の開発マスタープランに関する研究(その3)ーエーヤワディー管区パテイン市における河川沿いの開発状況の把握」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 453-456頁
- ⑥ 金子博昭、本間里見、伊藤重剛、山下祐介、内山忠、Theingi Shwe、位寄和久「ミャンマー大規模洪水(2015年)におけるエーヤワディー管区の被害状況および政府の対応」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 501-504頁
- ⑦ 山下祐介、本間里見、伊藤重剛、金子博昭、Theingi Shwe、内山忠、位寄和久「ミャンマー・デルタ地域におけるサイクロンシェルターの配置計画の提案」日本建築学会九州支部研究報告 第55号3 2016年3月 497-500頁
- ⑧ SHWE Theingi, HOMMA Riken, IKI Kazuhisa, ITO Juko, The Potential of “CASBEE for Cities” for Delivering Sustainable Development in Developing Country: in the Case of Pathein City, 日本建築学会九州支部研究報告 第55号2 2016年3月 309-312頁
- ⑨ 監修 世界遺産「アテネのアクロポリス」TBS 2016年2月21日放送
- ⑩ 「漱石が見た明治の熊本 町並みと建築」熊本大学五高記念館文化講座2015(第1回「甲斐青萍による熊本町並図屏風三部作」2015年11月7日・2016年2月1日、第2回「軍事都市熊本と文教都市熊本」2015年11月14日・2016年2月8日)

伊東龍一(館長28年度)

〔著者〕

熊本地震被災文化財調査建造物復旧支援事業(文化財ドクター派遣)報告書被災文化財復旧支援委員会(日本建築士連合会・日本建築家協会・日本建築学会・日本土木学会)(伊東龍一担当「Ⅱ一次調査 1)熊本県の被災地域における被害状況」)全体の概要」および「まとめ」)

〔学会発表〕

通山裕治、伊東龍一「崎津天主堂(熊本県天草市河浦町)崎津」の設計・建設の経緯に関する研究」日本建築学会大会学術講演梗概集 2016年8月25日

〔資料〕

「建築時評 熊本地震後の熊本城と多くの文化財建造物」Web版「建築討論」日本建築学会2016年9月

〔講演会〕

- ① 基調講演「青井阿蘇神社が国宝指定を受けるまで」(羽咋市教育委員会シンポジウム「妙成寺の美力と不思議」2017年2月18日 コスモアイル羽咋小ホール ロトンダ)
- ② 基調講演「金沢城二ノ丸御殿 復元と課題」(「石川県に世界遺産を」推進会議主催「見えてきた金沢城御殿」2016年12月17日 金沢商工会議所会館)
- ③ コーディネーター 熊本県文化財保護大会パネルディスカッション「熊本地震『被災文化財の復旧に向けて』～美しい熊本の宝を次世代に伝えるために～」熊本県教育委員会・熊本県文化財保護協会 2016年11月18日 熊本県庁地下大会議室
- ④ 報告「被害第一次調査報告 第一次調査を終えて」(熊本地震被災文化財建造物復旧支援委員会・日本建築学会九州支部熊本支所・同支部歴史意匠委員会・公益社団法人熊本建築士会主催「熊本・文化財ドクター第一次調査報告会」熊本大学工学部百周年記念館 2016年9月22日)
- ⑤ 報告「歴史的建造物の被害と今後の課題」(「2016熊本地震・文化財ドクター派遣事業 中間報告会」工学院大学 アーバンテックホール 2016年7月22日)
- ⑥ パネラー 主催文化庁・大分県・(公財)大分県芸術文化スポーツ財団 フォーラム「自然といろ」(2017年2月12日 大分県立美術館アトリウム)

〔テレビ出演〕

「柴又帝釈天堂 法華経説話彫刻」美の巨人たち テレビ東京 2016年10月8日

岩崎竹彦(准教授)

平成25年度(2013年度)

〔書評〕

- ① 「麦島勝・前山光則著『昭和の貌——あの頃を撮る——』、『紫明』第33号、P102、紫明の会)丹波古陶館・能楽資料館友の会)、2013年10月
- ② 「井口貢著『くらしの中の文化・芸術・観光——カフェでくつろぎ、まちつむぎ』、『紫明』第34号、P102、紫明の会(丹波古陶館・能楽資料館友の会)、2014年3月

〔学術記事〕

- ① 岩崎竹彦:「追悼 池田萬助氏」、『近畿民具』第33・34輯、pp.5-6、近畿民具学会、2013年4月

〔学会活動〕

- ① 日韓次世代学術フォーラム国際学術大会(分科8: 諮問教授、大会発表審査委員、『次世代人文社会研究』論文審査委員)
- ② 近畿民具学会常任幹事

〔社会活動〕

- ① 熊本市立熊本博物館協議会委員
- ② 御船町恐竜博物館展示検討委員会委員
- ③ 天草市牛深地区祭り・祭礼行事調査指導者
- ④ 熊本大学社会教育主事講習講師(「文化財の保護」を担当)

平成26年度(2014年度)

〔学術記事〕

岩崎竹彦:「節分の伝統行事と食文化」、『中外日報』2015年1月30日付、pp.8-9

〔学会活動〕

- ① 日韓次世代学術フォーラム国際学術大会(分科8: 諮問教授、大会発表審査委員、『次世代人文社会研究』論文審査委員)

- ② 地方史研究協議会委員
- ③ 近畿民具学会常任幹事

〔社会活動〕

- ① 熊本市立熊本博物館協議会委員
- ② 御船町恐竜博物館展示検討委員会委員
- ③ 天草市牛深地区祭り・祭礼行事調査指導者
- ④ 熊本大学社会教育主事講習講師(「文化財の保護」を担当)

平成27年度(2015年度)

〔著書〕

- ① 岩崎竹彦他：『観光学事始め——『脱観光的』観光のススメ』、担当部分「柳田國男とその学問を識るために」pp.203-225、「故きを温ね、新しきを知るために——回想法と時空を超えた観光論・博物館教育」pp.226-249、法律文化社、2015年8月

〔論文〕

- ① 岩崎竹彦：「川上太白を新宮水野家領政史上へ位置付ける試み」、『野村美術館研究紀要』第25号、pp.1-19、公益財団法人野村文華財団、2016年3月

〔出講〕

- ① 国立大学法人広島大学文学部兼任講師（「人文学概説」を担当）

〔学会活動〕

- ① 日韓次世代学術フォーラム国際学術大会（分科8：諮問教授、大会発表審査委員、『次世代人文社会研究』論文審査委員）
- ② 地方史研究協議会委員
- ③ 近畿民具学会常任幹事

〔社会活動〕

- ① 熊本市立熊本博物館協議会委員（副会長）
- ② 熊本大学社会教育主事講習講師（「文化財の保護」を担当）

平成28年度(2017年度)

〔著書〕

- ① 岩崎竹彦他：『大学的熊本ガイド——こだわりの歩き方——』、担当部分「熊本の誇り五高『赤煉瓦』」pp.47-67、昭和堂、2017年3月

〔書評〕

- ① 岩崎竹彦：「藤田嗣治 妻とみへの手紙 1913-1916 上巻」、『紫明』第39号、P102、紫明の会（丹波古陶館・能楽資料館友の会）、2016年9月
- ② 岩崎竹彦：「藤田嗣治 妻とみへの手紙 1913-1916（上・下巻）」、『熊本日日新聞』2016年9月25日付
- ③ 岩崎竹彦：「谷晃著『中国・韓国 やきものと茶文化をめぐる旅』」、『紫明』第40号、P102、紫明の会（丹波古陶館・能楽資料館友の会）、2017年3月

〔学術記事〕

- ① 岩崎竹彦：「節分の巻ずし余話」、『大阪春秋』第45巻第1号、pp.10-11、新風書房、2016年3月

〔学会活動〕

- ① 日韓次世代学術フォーラム国際学術大会（分科8：諮問教授、大会発表審査委員、『次世代人文社会研究』論文審査委員）
- ② 地方史研究協議会委員
- ③ 近畿民具学会常任幹事

〔社会活動〕

- ① 熊本市立熊本博物館協議会委員（副会長）

磯田桂史（客員教授）

〔著者〕

- ① 「熊本の近代化遺産」（上）（下）（共著） 熊本産業遺産研究会&熊本まちなみトラスト編（株）弦書房 2013年12月、2014年1月
- ② 「九州・熊本の産業遺産と水俣」（共著）熊本学園大学・水俣学ブックレットNo.14 熊本日日新聞社 2016年3月
- ③ 「熊本近代と富重利平のまなざし」（共著）調査研究報告第103号 熊本学園大学付属産業経営研究所 2016年3月

〔講演〕

- ① 「近現代建築の工法」（公社）熊本県建築士会へリテージマネージャー養成講習会 2013年8月17日
- ② 「明治期熊本の近代建築」全4回 五高記念館文化講座 2013年11月9日～12月21日
- ③ 「近現代建築の工法」（公社）熊本県建築士会へリテージマネージャー養成講習会 2014年8月16日
- ④ 「富重利平が撮ったもの」熊本学園大学付属産業経営研究所2014年度第1回研究報告会 リサーチ・セミナー「熊本の近代と富重利平のまなざし」場所：熊本学園大学 2014年9月27日
- ⑤ 「明治期熊本の近代建築」全4回 五高記念館文化講座 2014年11月8日～12月20日
- ⑥ 「ジェーンズ邸の魅力」主催：ジェーンズの会 共催：熊本市 場所：城彩苑ホール 2015年4月18日
- ⑦ 「近現代建築の工法」（公社）熊本県建築士会へリテージマネージャー養成講習会 2015年8月22日
- ⑧ 「三角線と網田駅舎」網田焼の里秋まつり 主催：宇土市 場所：宇土市網田焼の里資料館 2015年10月10日
- ⑨ 「水俣の産業遺産 旧日本窒素肥料（株）工場建物の意義」熊本学園大学水俣病研究センター 2015

年度第12期公開講座 場所；水俣市公民館ホール
2015年10月27日

- ⑩「木造駅舎の見学会」講師 主催：肥薩線を未来へつなぐ協議会 場所：肥薩線白石駅・大畑駅
2015年11月15日
- ⑪「漱石が見た明治の熊本 町並みと建築」全2回 五高記念館文化講座 2015年11月21・28日、追加講座2016年2月15・29日
- ⑫「ジェーンズ邸の魅力と歴史的価値」主催：ジェーンズの会 場所：熊本市民会館ホール 2016年8月28日
- ⑬「肥薩線・吉都線にみる木造駅舎の特徴」「木造駅舎でまちおこし」主催：えびの市 場所：えびの市国際交流センター 2017年2月17日

アラン ローゼン (客員教授)

〔執筆〕

- ① Rosen, A. "Closing Remarks," in Proceedings: International Symposium on 'The Open Mind of Lafcadio Hearn: His Spirit from the West to the East' in Lefkada, Greece. 62-63. Tokyo (2014年12月)
<http://hearn2014.yakumokai.org/wpcontent/uploads/2015/03/hearn2014proceedings.pdf>

- ②「ハーンの音楽と音学」熊本八雲会「石仏」第二十四号 2017年 15-16頁

〔英訳・英語監修〕

- ①「五高記念館展示解説 英語版」英語監修 五高くまもとの文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 留学生有償ボランティアガイド育成事業における研修資料 2013年
 - ②「五高記念館パンフレット 英語版」英語監修
 - ③『漱石生誕150年・没後100年・来熊120年記念 五高の漱石』五高記念館 英語監修 2015年
 - ④「五高記念館 Web ページ 英語版」英語訳 2016年
- 〔講演等〕

- ① "The Open Mind of Lafcadio Hearn: His Spirit from the West to the East," 国際シンポジウム, レフカダ, ギリシャ、司会 2014年7月5～6日
- ②「ラフカディオ・ハーンは誰？」熊本大学図書館学術研究推進室特別講演 2014年10月21日

- ③「ラフカディオ・ハーンと健康法」第84回ハーン作品の読書会 熊本小泉八雲旧居 2014年10月26日
- ④「ハーン・丸山学・木下順二を結ぶもの」第56回 熊本県芸術文化祭参加事業 ラフカディオ・ハーン没後110年、丸山学生誕110年、木下順二生誕100年、シンポジウム司会 2014年11月22日
- ⑤「熊本の漱石 熊本のHearn」全2回 五高記念館文化講座 2014年12月6・13日
- ⑥「ラフカディオ・ハーンの熊本」全2回 五高記念館文化講座 2015年12月5・12日、追加講座2016年2月10・17日
- ⑦「ハーンと地震」熊本八雲協会講演 2017年4月16日

村田由美 (客員准教授)

〔著書・論文〕

- ①『漱石生誕150年・没後100年・来熊120年記念 五高の漱石』五高記念館 (共著) 2015年3月
- ②『西日本女性文学案内』西日本女性文学研究会 (共著) 2016年2月
- ③「来熊120年 没後100年 夏目漱石」『花美術館』2016年10月 (共著)
- ④「熊本の漱石—漱石が第五高等学校で行った人事」(「崇城大学紀要40巻」2015年3月)
- ⑤「『漱石全集』未収録『アーサー・ヘルプスの論文』について」『KUMAMOTO』2016年6月
- ⑥「漱石が翻訳した『アーサー・ヘルプスの論文』—『漱石全集』未収録資料」(「崇城大学紀要第42巻」2017年3月)
- ⑦〈新資料〉「漱石が作った五高の入試問題」『学燈』2017年3月

〔新聞等〕

- ①「漱石とくまもと」くまもと市政だより 2015年6月～2017年4月まで21回連載
- ②「漱石がいた熊本」(1)～(53) 西日本新聞 2016年1月6日～2017年3月22日

〔講演〕

- ①「熊本の漱石 熊本のHearn」全2回 五高記念館文化講座 2014年11月8・22日
- ②「漱石と『草枕』—作品『草枕』を読み解く」全3回 五高記念館文化講座 2015年10月3・10・17日、追加講座2016年2月3・4・5日

- ③「五高と漱石—漱石が熊本を嫌いになったわけ—」
鎌倉漱石の会 2016年12月4日

藤本秀子(研究員)

〔原稿執筆〕

- ①「熊大通信」熊本大学発行 裏表紙『知の至宝』
第62号 2016年AUTUMN 扁額 北越潜行之詩
第63号 2016年WINTER 生徒募集木札
- ②「NOW web マガジン 熊大なう。」2015年3月31日
ナンバースクールの偉功を感じて。「熊本大学五高
記念館」
- ③熊本日日新聞 夕刊「一筆」全12回 2016年4月
7・14・21・28日、5月12・19・26日、6月2・9・
16・23・30日
- ④「来熊120年没後100年 夏目漱石」『花美術館』
2016年10月(共著)
- ⑤「赤煉瓦通信」五高記念館友の会発行 第9号
2014年3月1日「写真とともに時空を越えてみよう
…富重写真所展のこと」第10号 2014年12月1日
「書籍紹介 熊本の近代化遺産 上・下」第11号
2015年12月1日「五高記念館常設展示リニューアル
について」第12号 2016年12月1日「五高と
漱石」の刊行について」

〔出版物〕

- ①「写真展 富重写真所と熊本の近代化」2014(平成
24)年2月27日 企画・構成・執筆
- ②「五高と漱石 漱石生誕一五〇年・没後一〇〇年・
来熊一二〇年記念」2016年3月25日 企画・構成・
執筆

〔展覧会〕

- ①「麦島勝の観た昭和 海と川の暮らし」2013年6月
6日～9月1日 展示企画・構成・解説執筆
- ②「大城組の小さな巨匠たち」2013年9月12日～10
月27日 展示構成
- ③「アートするプロフェッサー」2013年11月2日～12
月2日 展示構成
- ④「富重写真所と熊本の近代化」(プレ企画展 城彩
苑会場)2014年2月2日～2月11日 展示企画・
構成・解説執筆
- ⑤「富重写真所と熊本の近代化」(本展 五高記念館
会場)2014年2月27日～3月31日 展示企画・構
成・解説執筆

- ⑥「アートするプロフェッサー 2014」2014年11月1日
～12月1日 展示構成

- ⑦「五高と戦争」2015年8月6日～12月21日 それ
ぞれの戦争 構成・執筆

〔講座等〕

- ①五高記念館ガイド講座2014(英語・中国語・韓国
語)2014年10月25日～2015年3月29日 講座9
日間+ガイド実践研修2日間
- ②新規採用職員研修 講義「第五高等学校及び熊本
大学の前身校について」2013年4月3日、2014
年4月7日、2015年4月8日

薄田千穂(研究員)

- ①企画展「第五高等学校の学徒出陣」2013年12月
1日～1月31日 展示企画、展示解説、キャプション
- ②「第五高等学校」「熊本工業専門学校」『熊本大学
60年史』通史編pp.3-19,80-92 2014年3月3日
- ③「大正・昭和の『龍南会雑誌』『龍南』と雑誌部委
員一懸賞と検閲」熊本大学五高記念館『熊本大
学五高記念館館報第2号』pp101-116 2014年3
月28日
- ④映像「第五高等学校 近代日本を支えた学び舎」
2014年6月8日公開 シナリオ、構成
- ⑤企画展「五高と戦争」2017年8月6日～12月21
日 展示企画、展示解説、キャプション
- ⑥『第五高等学校における勤労奉仕・勤労働員』五
高記念館叢書第二集 A4版114頁 2016年3月
28日 構成、編集、執筆
- ⑦「国民精神総動員運動下の旧制高等学校寄宿寮」
熊本近代史研究会『近代熊本』No.38 2016年3月
31日



II

利用状況

1

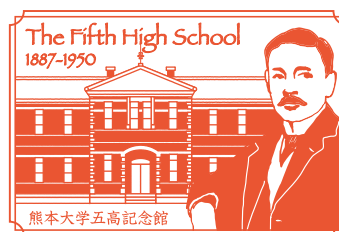
入館者の動向

平成25年度 (2013.4～2014.3)

月	開館日数	学内	県内	県外	合計	1日平均	備考
2013年4月	30	992	227	349	1,568	52.3	
5月	27	154	108	386	648	24.0	
6月	26	770	80	307	1,157	44.5	麦島勝の見た昭和 海と川の暮らし 6/6～9/1
7月	26	154	128	266	548	21.1	
8月	24	81	235	741	1,057	44.0	
9月	25	93	152	220	465	18.6	大城組の小さな巨匠たち 9/12～10/27
10月	25	201	278	659	1,138	45.5	
11月	26	564	753	523	1,840	70.8	アートするプロフェッサー 11/2～12/2
12月	19	348	111	198	657	34.6	第五高等学校の学徒出陣 12/1～1/31 作陶展 12/4～12/13 ちょっと昔のくらし探検 12/20～2/17
2014年1月	18	151	79	91	321	17.8	
2月	21	96	208	160	464	22.1	プレ写真展 富重写真所と熊本の近代化 2/2～2/11 熊本大学の沿岸域研究 2/8～3/25 富重写真所と熊本の近代化 2/27～3/31
3月	29	219	1,463	813	2,495	86.0	
合計	296	3,823	3,822	4,713	12,358	41.8	



来館者10万人達成 (2013年5月22日)



来館記念スタンプ

平成26年度 (2014.4～2015.3)

月	開館日数	学内	県内	県外	合計	1日平均	備考
2014年4月	30	1,174	121	419	1,714	57.1	
5月	28	549	164	335	1,048	37.4	
6月	26	990	223	554	1,767	68.0	
7月	25	163	77	259	499	20.0	
8月	23	101	269	813	1,183	51.4	大宰府につながる官道8/6～10/20
9月	26	119	164	485	768	29.5	
10月	26	488	283	816	1,587	61.0	
11月	26	770	883	891	2,544	97.8	アートするプロフェッサー 11/1～12/1
12月	19	263	86	125	474	24.9	作陶展12/3～12/12 ちょっと昔のくらし探検12/20～2/23
2015年1月	19	228	149	63	440	23.2	
2月	21	152	234	245	631	30.0	熊本大学教育学部美術科卒業修了制作展2/28～3/9
3月	29	240	252	456	948	32.7	
合計	298	5,237	2,905	5,461	13,603	45.6	

平成27年度 (2015.4～2016.3)

月	開館日数	学内	県内	県外	合計	1日平均	備考
2015年4月	30	1,557	213	383	2,153	71.8	
5月	28	233	294	549	1,076	38.4	
6月	25	938	192	248	1,378	55.1	
7月	27	109	254	404	767	28.4	
8月	22	113	385	695	1,193	54.2	五高と戦争8/6～12/21
9月	26	236	481	525	1,242	47.8	
10月	27	498	593	1,088	2,179	80.7	88会彫刻展10/7～11/9
11月	27	548	1,232	893	2,673	99.0	
12月	18	266	481	106	853	47.4	作陶展12/5～12/18
2016年1月	20	239	199	169	607	30.4	ちょっと昔のくらし探検1/6～2/29
2月	21	103	500	225	828	39.4	
3月	29	192	215	448	855	29.5	
合計	300	5,032	5,039	5,733	15,804	52.7	

平成28年度 (2016.4～2017.3)

月	開館日数	学内	県内	県外	合計	1日平均	備考
2016年4月	14	426	132	196	754	53.9	平成28年熊本地震の被害により、 4月15日から臨時休館。
合計	14	426	132	196	754	53.9	

(市原富代)

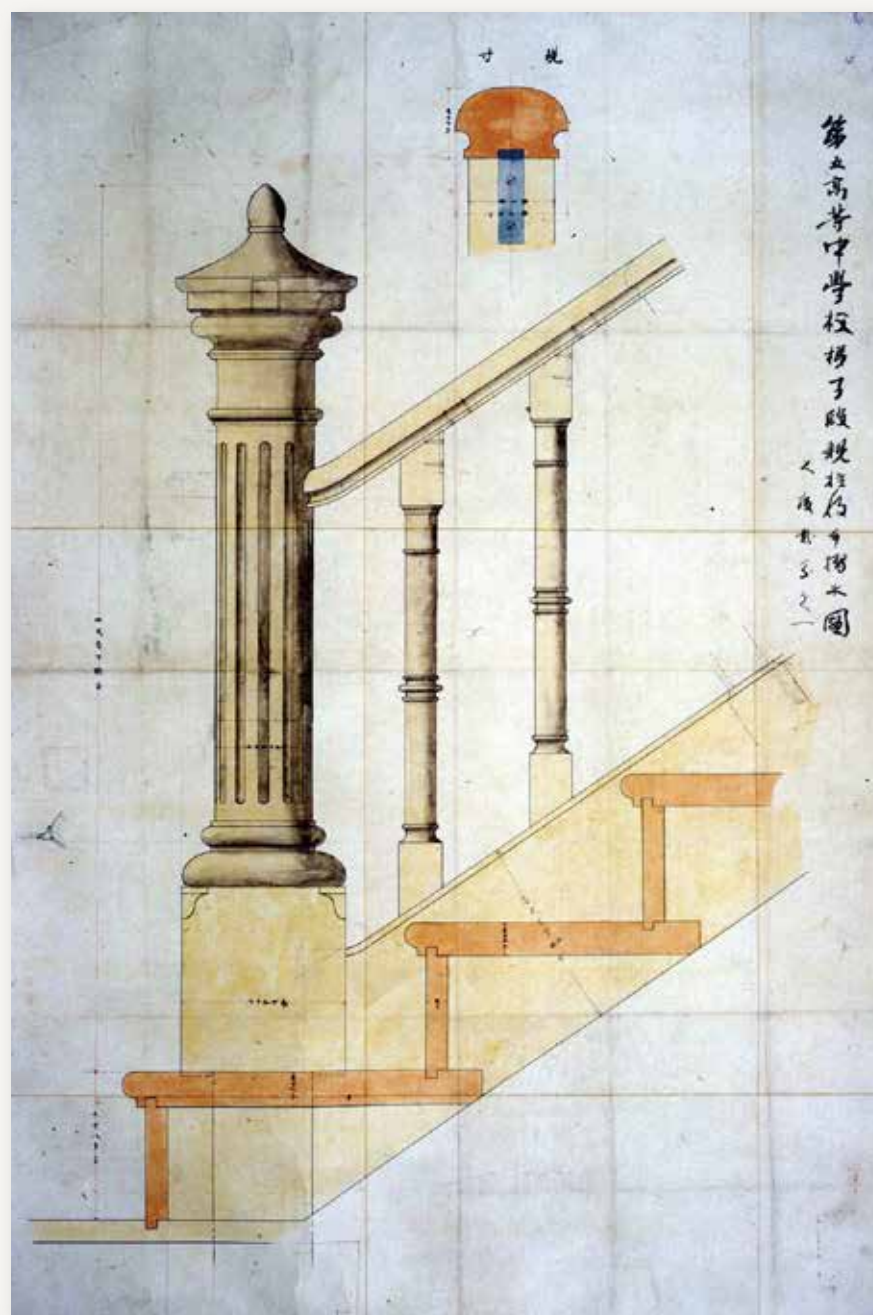
2 資料調査、貸出

学外からの資料調査（親族調査は除く）

調査年月日	内容・資料名	点数	申請者
2013年 4月	熊本医科大学一覧	10	研究者
2013年 9月 3日	教職員関係資料	2	研究者
2013年 9月 6日	昭和6年天皇行幸関係資料	1	研究者
2013年10月 9日	生徒関係資料	4	研究者
2013年10月22日	教職員関係資料	11	研究者
2014年10月24日	葉草園関係資料	1	熊本大学60年史編纂室
2014年 2月14日	秋月胤永関係資料	17	若松城天守閣郷土博物館
2014年 6月 6日	京都帝国大学一覧	2	研究者
2014年 7月 9日	第五高等学校校設計図	7	研究者
2014年 7月30日	熊本市中心市街地絵地図	1	学生
2014年 9月17日	教職員関係資料	2	研究者
2014年10月22日	夏目漱石関係資料	2	熊本県立図書館
2014年10月23日	教職員関係資料	1	研究者
2014年11月17日	教職員関係資料	1	研究者
2014年12月24日	帽章関係資料	2	研究者
2015年 2月16日	夏目漱石関係資料	8	研究者
2015年 2月27日	応援団写真	18	国立民族学博物館
2015年 3月 3日	高等教育制度関係資料	45	研究者
2015年 3月 6日	重光葵関係資料	24	大分県立先哲史料館
2015年 3月13日	熊本市絵葉書	12	研究者
2015年 4月23日	重光葵関係資料	25	大分県立先哲史料館
2015年 5月29日	第六高等学校一覧	1	研究者
2015年 6月28日	夏目漱石関係資料	1	研究者
2015年 7月 3日	教職員関係資料	14	研究者
2015年 9月25日	熊本市街地図	1	研究者
2015年10月 9日	高等学校長会議関係資料	4	研究者
2015年10月19日	学校運営史料	5	研究者
2015年12月22日	教職員関係資料	2	研究者
2016年 3月23日	旧制高等学校入学試験関係資料	20	研究者
2016年 7月 5日	教職員関係資料	3	研究者
2016年11月29日	第五高等学校一覧	3	研究者

資料貸出（原本貸出のみ）

調査年月日	内容・資料名	点数	申請者
2013年7月11日	金沢出身五高関係者関係資料・写真	7	金沢ふるさと偉人館
2015年7月17日	重光葵関係資料	4	大分県立先哲史料館
2015年7月24日	夏目漱石祝辞他	4	新宿区立新宿歴史博物館
2016年6月23日	桜井房記関係資料	1	東京理科大学近代科学資料館
2016年9月14日	レンガ・理科実験道具・食器等	15	熊本大学埋蔵文化財調査センター
2016年9月26日	夏目漱石祝辞他	3	熊本県立図書館 くまもと文学・歴史館



「第五高等学校 梯子段親柱及手摺之図」

3 新聞・印刷物・放送一覧

新聞

平成25年度 (2013.4～2014.3)

	掲載年月日	掲載記事	掲載誌
1	2013年 5月23日	五高記念館来館10万人 一般公開20年	熊本日日新聞
2	2013年 5月27日	熊大五高記念館10万人 開館20年、漱石らの資料展示	熊本日日新聞
3	2013年 6月14日	「麦島勝が見た昭和 海と川の暮らし」開催	西日本新聞
4	2013年 6月18日	「麦島勝が見た昭和 海と山の暮らし」開催	熊本日日新聞
5	2013年 7月	五高記念館所蔵『肥後村々雨乞行列彩色図』 紹介記事	リビング新聞
6	2013年 9月20日	障害のある子どもたちの作品展 熊本大学五高記念館「大城組の小さな巨匠達」	熊本日日新聞
7	2013年11月10日	「熊本大学工学部赤レンガ資料館秋の夕暮れコンサート」開催	熊本日日新聞
8	2013年11月11日	企画展「アートするプロフェッサー」開催	熊本日日新聞
9	2013年11月12日	ハーンとギリシャ関係学ぶ ひ孫の小泉凡さん熊本大で講演	熊本日日新聞
10	2013年11月19日	富重写真所 意義探る 熊本学園大でシンポジウム	熊本日日新聞
11	2013年11月24日	書籍紹介『熊本の近代化遺産(上)』第五高等学校校本館他	熊本日日新聞
12	2013年12月 6日	企画展示「第五高等学校の学徒出陣」	西日本新聞
13	2013年12月10日	五高記念館 戦争の記憶伝える企画展示「第五高等学校の学徒出陣」	毎日新聞
14	2013年12月12日	伝えたい私の戦争 熊本大記念館で企画展「第五高等学校の学徒出陣」	熊本日日新聞
15	2014年 1月26日	八代海再生でシンポ 県と熊本大、研究成果を報告「八代海再生プロジェクト」	熊本日日新聞
16	2014年 2月 6日	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	熊本日日新聞
17	2014年 2月28日	五高記念館で写真展「富重写真所と熊本の近代化」	熊本日日新聞

平成26年度 (2014.4～2015.3)

	掲載年月日	掲載記事	掲載誌
1	2014年 4月13日	『化学遺産』に新たに6件 第五高等学校化学実験場	読売新聞
2	2014年 6月 8日	十字街～「工学部研究資料館さわやかコンサート」	熊本日日新聞
3	2014年 6月11日	五高の歴史 音や映像で 熊本大がタッチパネル設置	熊本日日新聞
4	2014年 6月29日	県の博物館ネットワーク計画 岩崎竹彦・熊本大准教授に聞く	熊本日日新聞
5	2014年 8月 8日	『図書館教育ニュース』夏目漱石と俳句	少年写真新聞社
6	2014年10月 1日	漱石読むモン 熊本県×朝日新聞『三四郎』	朝日新聞
7	2014年10月 2日	熊本の漱石追いかけて ゆかりの地を劇作家・山崎哲さんが歩く	朝日新聞
8	2014年10月 5日	「大宰府へつながる官道 黒髪キャンパス通った駅路」	熊本日日新聞
9	2014年10月11日	くまモン『三四郎』ゆかりの五高訪問	朝日新聞
10	2014年10月13日	熊本大学五高記念館文化講座2014「熊本の漱石 熊本のHearn」 「明治期熊本の近代建築」受講生募集広告	熊本日日新聞
11	2014年10月31日	熊本大学五高記念館文化講座2014「熊本の漱石 熊本のHearn」 「明治期熊本の近代建築」開催	熊本日日新聞
12	2014年11月 3日	文化財に囲まれジャズの調べ 学生・OBらのピアノトリオ	熊本日日新聞
13	2014年11月18日	熊本の漱石売り出せ! 多彩な事業計画 かぎ握る民間の知恵	熊本日日新聞
14	2014年11月26日	漱石を訪ねる 熱心な英語教師の姿浮かぶ 福岡・佐賀・熊本	朝日新聞
15	2014年12月 6日	漱石を訪ねる 熱心な英語教師の姿浮かぶ 福岡・佐賀・熊本	朝日新聞
16	2015年 1月 6日	“SOSEKI”世界へ発信 五高記念館留学生がガイドに意欲	読売新聞
17	2015年 1月27日	大正期の『漱石全集』五高記念館で活用を 宇城市の柏原さん寄贈	熊本日日新聞
18	2015年 2月18日	漱石読むモン 熊本県×朝日新聞『三四郎』『草枕』連載など企画続々	朝日新聞
19	2015年 3月13日	私のお薦め! 熊本文学スポット 五高記念館 熊本保健科学大学長 小野友道さん	熊本日日新聞

平成27年度 (2015.4～2016.3)

	掲載年月日	掲載記事	掲載誌
1	2015年 5月12日	漢詩学んで漱石に迫る 23日から五高記念館で元熊大教授が指導	熊本日日新聞
2	2015年 5月24日	五高記念館勉強会スタート 漱石理解へ漢詩学ぶ	熊本日日新聞
3	2015年 8月 5日	あすナビ「五高と戦争 戦時体制下の五高生たち」	熊本日日新聞
4	2015年 8月 5日	企画展「戦時体制下の五高生たち」 熊大記念館で学生らの手紙や写真など100点	毎日新聞
5	2015年 8月 7日	戦時下の学徒の姿伝える 熊本大五高記念館 史料や写真100点展示	熊本日日新聞
6	2015年 8月14日	「五高と戦争 戦時体制下の五高生たち」	西日本新聞
7	2015年 8月18日	大学生活に戦争じわり 戦時下の五高 熊大で特別展	朝日新聞
8	2015年 8月21日	くまもと戦後70年 旧制五高 縛られた自由	西日本新聞
9	2015年 8月21日	五高記念館で特別展	西日本新聞
10	2015年 9月15日	熊本は漱石ゆかりの地である	日刊スポーツ新聞
11	2015年 9月22日	特報『自主自由』の校風に影 第五高等学校 戦時体制下で…	熊本日日新聞
12	2015年 9月24日	芥川賞作家・又吉さん来熊「漱石と熊本」関わりに驚き	熊本日日新聞
13	2015年 9月24日	漱石・ハーン学ぶ連続講座来月から 熊本大五高記念館	熊本日日新聞
14	2015年 9月27日	漱石を探して来熊120年 幻の旧居 光琳寺にカギ	朝日新聞
15	2015年 9月29日	熊本で学びませんか 県外留学生へ大学アピール	熊本日日新聞
16	2015年 9月30日	漱石の世界 俳句に夢中になった熊本	朝日新聞
17	2015年10月 4日	五高記念館 連続文化講座が開講 文豪の“素顔”を紹介	熊本日日新聞
18	2015年10月 4日	県内62館の逸品240点 博物館連携 PR企画展	熊本日日新聞
19	2015年10月19日	「外国語ガイド養成講座」参加者を募集 熊本大五高記念館	熊本日日新聞
20	2015年12月 9日	熊本大五高記念館ガイド講座が人気 外国語で魅力伝えよう	熊本日日新聞
21	2016年 1月～	連載「漱石がいた熊本」	西日本新聞
22	2016年3月27日	十字街 漱石記念年2016・2017「漱石教室で漢詩を読む会」	熊本日日新聞

平成28年度 (2016.4～2017.3)

	掲載年月日	掲載記事	掲載誌
1	2016年 4月～	熊本地震による文化財被害関連記事11件	新聞各紙
2	2016年 4月 2日	『一筆』始まります 原稿執筆者紹介記事	熊本日日新聞
3	2016年 4月～6月	『一筆』全12回 五高記念館 藤本秀子	熊本日日新聞
4	2016年 4月 8日	教員時代の漱石知って 熊大五高記念館が冊子発行	読売新聞
5	2016年 4月13日	熊本偉人伝 来熊120年 夏目漱石	西日本新聞
6	2016年 5月8日～	漱石とその時代	熊本日日新聞
7	2016年 6月 6日	デスク日記「持ちこたえた漱石旧居」	熊本日日新聞
8	2016年 6月 6日	金之助「五高」への愛 明治を照らすエリート文化	熊本日日新聞
9	2016年 7月12日	漱石の面影訪ねて 没後100年ゆかりの地巡り	読売新聞
10	2016年 7月14日	漱石記念年2016・2017 東京で『坊ちゃん』展 科学との関連紹介	熊本日日新聞
11	2016年 8月26日	短信 第5回熊本洋学校勉強会 五高記念館客員教授磯田桂史さんが講演	熊本日日新聞
12	2016年10月 6日	漱石と熊本 今日開幕 熊本市内で内覧会 書簡など468点 熊本大学五高記念館などが協力	熊本日日新聞
13	2016年10月 8日	産業遺産のあり方 地域活性化を語る 熊大五高記念館の磯田桂史客員教授などが講演	朝日新聞
14	2016年10月 9日	1993(平成5)年 旧制五高本館が「五高記念館」として一般公開	熊本日日新聞
15	2016年10月31日	漱石先生 授業に情熱 教科書用に英作家作品出版させる	朝日新聞
16	2016年11月 3日	近代建造物 実態探る 熊本大 発掘赤れんが速報展	熊本日日新聞
17	2016年12月19日	漱石『我輩は猫である』没後100年 漱石を思い語る	朝日新聞
18	2016年12月19日	先進熱心『夏目先生』リスニング問題 画期的	朝日新聞
19	2016年12月21日	熊本大で発見 1900年の五高入試 リスニング 自筆の英文	熊本日日新聞
20	2017年 2月16日	熊大が恵楓園で学芸員養成実習 収蔵品など手入れ	読売新聞
21	2017年 2月17日	恵楓園で博物館実習 熊大生 五高記念館被災受け	熊本日日新聞
22	2017年 2月25日	漱石作成か 英語入試問題 実用力重視リスニングも	読売新聞
23	2017年 3月27日	英詩 教育に復活させよう「漱石教室で読む会」最終回	熊本日日新聞

印刷物

平成25年度～28年度 (2013.4～2017.3)

※『 』は資料名

	発行年月日	内容	雑誌・書籍名	発行所／著者
1	2013年 6月30日	「麦島勝の見た昭和 海と山の暮らし」	くまもと経済	地域経済センター
2	2013年 9月20日	蟻田功氏写真	感染症とたたかった 科学者たち	岩崎書店／ 岡田晴恵
3	2013年 9月28日	くまもと文学散歩／五高記念館紹介	くまもと本	樫出版社
4	2013年 9月30日	「大城組の小さな巨匠達」	くまもと経済	地域経済センター
5	2013年10月12日	ラフカディオ・ハーンレリーフ写真	するーかる	クレスコ
6	2013年11月	『ドラフトチャンバー図面』、写真：化学実験場外観・ 化学実験場階段教室・ドラフトチャンバー	学習院南1号館 -歴史的校舎の再生	学習院大学史料館
7	2013年12月 5日	『棟札』『第五高等学校と表門』、写真：五高 記念館外観・化学実験場外観・表門	熊本の近代化遺産【上】	弦書房
8	2014年 1月	熊本から日本へ 知の人材を輩出した五高	徒然	肥後銀行
9	2014年 1月	火と水と森の国 熊本と阿蘇をめぐる／ 五高記念館紹介	クロネコだより	クロネコヤマト
10	2014年 1月14日	城下町探訪 熊本城下 旧制五高本館	週刊 日本の城	デアゴスティーニ・ジャパン
11	2014年 2月25日	『第五高等学校略図』『習学寮写真』	新肥後学講座	熊本日日新聞社
12	2014年 3月13日	地方国公立大学の實力／五高記念館外観写真	週刊朝日	朝日新聞出版
13	2014年 3月29日	『子飼橋写真』（五高アルバム）	欄干の外を歩く	熊日サービス開発 ／中村青史
14	2014年 4月	写真：五高記念館・ラフカディオ・ハーンレリーフ	小泉八雲紹介冊子	熊本市立熊本博物館
15	2014年 4月	近代化産業遺産／五高記念館紹介	くまもと二十四節気 写真集	熊本国際観光コン ベンション協会
16	2014年 4月 1日	五高記念館紹介	熊本コンベンションガイド マップ・熊本市ガイドマップ・ 熊本市修学旅行のさるき 方・観光ガイドブック	熊本国際観光コン ベンション協会
17	2014年 4月15日	旅に出たら本屋に行くのが大好き！ 熊本ー五高 記念館の教室で漱石先生の授業を追体験	ケトル	太田出版
18	2014年 4月25日	明治の熊本探訪 五高記念館	商工ひのくに	熊本商工会議所
19	2014年 5月18日	五高と細川家の足跡を巡る／五高記念館紹介	熊本歴史探訪ウォーキング	エース出版
20	2014年 5月31日	名だたる偉人を送り出した“赤”／五高記念館紹介	ESPRESSO	地域経済センター
21	2014年 7月	城下町くまもと散策／五高記念館紹介	くまもと市制だより	熊本市広報課
22	2014年 9月	五高記念館紹介	くまもと経済	地域経済センター
23	2015年 3月	夏目漱石と熊本探訪／五高記念館紹介	チラシ	朝日旅行
24	2015年 3月	五高記念館外観写真	チラシ	英詩の会
25	2015年 3月31日	五高記念館復原教室写真	旅と文学 -私の文学散歩-	徳島県教育印刷／ 鳥羽俊明
26	2015年 3月31日	『開校10周年記念式 夏目漱石祝辞』	書写書道教育研究	創想社／神野雄二
27	2015年 4月	化学実験場写真	六稜科学第57最終号	六稜科学同友会
28	2015年 4月 1日	野次と喝采／五高アルバム写真4点	月刊みんぱく	国立民族学博物館
29	2015年 5月～	漱石とくまもと 全23回	くまもと市制だより	熊本市広報課
30	2015年 5月29日	五高アルバム写真17点	さらば我友 叫ばずや	論創社／小山紘
31	2015年 9月23日	五高と夏目漱石／五高記念館紹介	熊本市PRパンフレット・ ポスター・動画	熊本市
32	2015年 9月24日	五高記念館紹介	中央区マガジンまちのわ	熊本市中央区役所 総務企画課

	発行年月日	内容	雑誌・書籍名	発行所／著者
33	2015年 9月24日	五高記念館外観写真	どこでも生涯学習 ポスター・チラシ	放送大学熊本学習 センター
34	2015年12月1日	五高記念館外観写真	会報	熊本大学教育学部 同窓会
35	2015年12月20日	九州テクテクまち歩き／五高記念館紹介	Leak	データホルダー
36	2015年12月29日	応援の人類学の挑戦／『五高ボートレースの 応援団』(五高アルバム)	民博通信151号	国立民俗学博物館
37	2016年 1月	五高記念館紹介	ようこそ!jeeばーず caféへ	ようこそ!jeeばーず caféへ編集部
38	2016年 3月	漱石の熊本ものがたり／五高記念館紹介	観光パンフレット	熊本市観光文化 交流局
39	2016年 3月	熊本の漱石マップ／五高記念館紹介	観光マップ	熊本市文化振興課
40	2016年 3月	くまもと観光コンベンションニュース／ 五高記念館紹介	広報誌	熊本国際観光コン ベンション協会
41	2016年 3月25日	五高と漱石／五高記念館紹介	くまもとの漱石 リニューアル版	熊本市文化振興課
42	2016年 3月25日	熊本、夏目漱石を歩く／五高記念館紹介	partner	三菱UFJニコス 株式会社
43	2016年 4月	五高記念館紹介	ぶらたびくまもと	熊本県文化企画・ 世界遺産推進課
44	2016年 4月 6日	五高記念館紹介	漱石の足跡	熊本国際観光コン ベンション協会
45	2016年 5月	五高記念館で漱石の自筆入試問題が発見される	国立大学	国立大学協会
46	2016年秋	知の至宝／扁額『北越潜行の詩』	熊大通信	熊本大学
47	2016年10月 1日	特集 来熊120年、没後100年 夏目漱石	花美術館	株式会社花美術館
48	2016年11月16日	嘉納治五郎扁額『順道制勝行不害人』	嘉納治五郎 ーその生涯と精神ー	イデア・インスティ チュート
49	2016年11月16日	五高記念館外観写真	第35回日本森田療法 学会開催案内チラシ	日本森田療法学会 大会事務局
50	2016年11月19日	熊本地震による文化財被害 五高記念館	佐賀県青春寮歌祭 パンフレット	佐賀県青春寮歌祭
51	2016年冬	知の至宝／『生徒募集木札』	熊大通信	熊本大学
52	2017年 3月31日	五高記念館外観写真	レトロ・モダン学校の たてもの	廣済堂出版／ 伊藤隆之

放送

平成25年度～28年度 (2013.4～2017.3)

※『 』は資料名

	放送年月日	内容	番組名	放送局名
1	2013年 4月	『開校10周年記念式 夏目漱石祝辞』 『夏目漱石出題試験問題』・太鼓	夕方いちばんニュース	熊本放送
2	2013年 6月	小泉八雲／五高記念館及び周辺紹介	心に刻む風景	日本テレビ
3	2013年 6月	「麦島勝の見た昭和 海と川の暮らし」	デイリーニュース	JCNくまもと
4	2013年 8月27日	英語で俳句を学ぶ／五高記念館紹介	デイリーニュース	JCNくまもと
5	2013年 9月	「大城組の小さな巨匠達」	デイリーニュース	JCNくまもと
6	2013年11月	「アートするプロフェッサー」	デイリーニュース	JCNくまもと
7	2013年12月 3日	『職員進退』『復命書』『校中雑件』『試験問題』 ／五高記念館紹介	にほん風景物語 草枕	BS朝日
8	2013年12月4日	「第五高等学校の学徒出陣」	テレビタミン	くまもと県民テレビ
9	2013年12月6日	「第五高等学校の学徒出陣」	夕方いちばん	熊本放送
10	2014年 1月	五高記念館外観	新春BIG 討論会	テレビ熊本
11	2014年 1月 4日	『職員進退』『復命書』『校中雑件』『試験問題』 ／五高記念館紹介	にほん風景物語 草枕	熊本朝日放送
12	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	おでかけ情報	NHK熊本放送局
13	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	明日の動き	NHK熊本放送局
14	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	今日の動き	NHK熊本放送局
15	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	ニュース熊本版	NHK熊本放送局
16	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	ニュース九州版	NHK福岡放送局
17	2014年 2月	写真展「富重写真所と熊本の近代化」	ミニ特番	NHK熊本放送局
18	2014年 4月 1日	五高記念館紹介	ひご・散歩	JCNくまもと
19	2014年 5月	映像が伝える戦前の熊本	クマロク!	NHK熊本放送局
20	2015年 5月	旧第五高等学校本館・化学実験場・表門	建物遺産～重要文化財 を訪ねて～	BS朝日
21	2014年 6月 1日	五高記念館紹介	ひご・散歩	JCNくまもと
22	2014年 8月16日	生命の旅～学徒出陣・五高生が友に託した歌～	現場発!	くまもと県民テレビ
23	2014年11月 3日	熊本大学五高記念館文化講座2014「熊本の漱石 熊本のHearn」明治期熊本の近代建築」開講	クマロク!	NHK熊本放送局
24	2014年12月 1日	ヒューマンラボ 熊大ラジオ公開授業・ 知的冒険の旅	FMKモーニング グローリー	エフエム・クマモト
25	2014年12月 5日	夏目漱石～文豪とマドンナ 出発の地～熊本	とことん歴史紀行 2時間スペシャル	日本BS放送
26	2015年 1月17日	わかる 楽しい ためになる 熊大チャンネル	熊本大学テレビ放送 公開講座	熊本朝日放送
27	2015年 2月11日	佐藤栄作と友人たち	昭和偉人伝SP	BS朝日
28	2015年 4月28日	有益対談	TKU みんなのニュース	テレビ熊本
29	2015年 7月15日	「漱石先生と妻と猫 愛の絆の物語」	歴史秘話ヒストリア	NHK大阪放送局
30	2015年 8月	五高記念館外観	知恵泉	NHK-Eテレ
31	2015年 8月～ 12月	「五高と戦争 戦時体制下の五高生たち」	ニュース	NHK熊本放送局・ テレビ熊本・熊本 放送・くまもと県民 テレビ・熊本朝日放 送・JCNくまもと
32	2015年 8月 4日	五高記念館外観	開運なんでも鑑定団	テレビ東京
33	2015年 9月30日	夏目漱石関連	くまパワニュース	熊本朝日放送

	放送年月日	内容	番組名	放送局名
34	2015年 9月30日	プロジェクト“SOSEKI”／『開校10周年記念式 夏目漱石祝辞』『英国留学辞令』『英語試験問題』 『五高辞任、東京帝大へ』	はっ県！くまモンラボ	熊本放送
35	2015年10月 4日	世界遺産を訪ねて 九州縦断／ 五高記念館紹介	フジ全国百線鉄道の旅 2時間SP	BSフジ
36	2015年12月 5日	夏目漱石 創作の原点～熊本を往く～／ 五高記念館紹介	ふるさと紀行	ジャパンニュース ネットワーク
37	2016年 4月13日	夏目漱石記念年関連	テレビタミ	くまもと県民テレビ
38	2016年 7月26日	『夏目漱石肖像写真』『開校10周年記念式 夏目漱石祝辞』・五高記念館外観	DHCシアター 書痴の楽園	フジクリエイティブ コーポレーション
39	2016年 9月24日	五高関連資料・五高記念館外観	土曜ドラマ 夏目漱石の妻	NHK
40	2016年11月13日	『修学旅行命令書』『龍南会雑誌』・五高記念館外観	夏目漱石の修学旅行	天草テレビ
41	2016年12月 3日	『英語試験問題』『入学試験問題』『佐賀福岡 尋常中学校参観報告書』『申報書』『開校10周年 記念式 夏目漱石祝辞』・五高記念館外観	漱石が見つめた20世紀 ～没後100年姜尚中が ゆく～	NHK-E テレ
42	2016年12月 9日	『英語試験問題』『入学試験問題・佐賀福岡尋 常中学校参観報告書』『申報書』『開校10周年 記念式 夏目漱石祝辞』・五高記念館外観	ザ・プレミアム漱石 100年・アジアへの旅	NHK BS

その他

平成25年度～28年度（2013.4～2017.3）

	制作年月日	内容	媒体	制作社名
1	2013年 8月	五高記念館紹介	るるぶ観光データベース	JTBパブリッシング
2	2013年10月	「ボランティアガイド講座」受講生募集記事	公式Facebook	大学コンソーシアム 熊本
3	2014年 6月	五高記念館紹介	カーナビ・携帯端末・ PC用地図ソフト	ゼンリン
4	2014年 7月19日	熊本城のこわ～い話 小泉八雲 ラフカディオ・ ハーンレリーフ写真／五高記念館紹介	パネル展示	桜の馬場 城彩苑湧々座
5	2014年 8月	五高記念館紹介	るるぶ観光データベース	JTBパブリッシング
6	2014年10月	「ボランティアガイド講座」受講生募集記事	公式Facebook	大学コンソーシアム 熊本
7	2015年 1月 1日	文豪に魅せられて／五高記念館紹介	電子書籍	読売新聞熊本県版
8	2015年 3月	夏目漱石と熊本探訪／五高記念館紹介	Web・ホームページ	朝日新聞 朝日旅行
9	2015年 4月 1日	平成27年度 新編新しい社会／ 『旧制第五高等学校本館』	小学校社会デジタル 教材	東京書籍
10	2015年 5月	五高記念館・化学実験場・表門	肥後の里山ギャラリー デジタルミュージアム	肥後銀行
11	2015年 7月18日	熊本城のこわ～い話 小泉八雲 ラフカディオ・ ハーンレリーフ写真／五高記念館紹介	パネル展示	桜の馬場 城彩苑湧々座
12	2015年 8月	五高記念館紹介	るるぶ観光データベース	JTBパブリッシング
13	2015年11月21日～	わが輩は熊本人漱石である 第1話～5話	ネット配信	熊本県
14	2016年 2月～	五高記念館紹介	Web	全国歴史民俗系 博物館協議会
15	2016年 4月～	漱石の関連施設としての五高記念館・ 武夫原・漱石像	熊本の近代化遺産 画像アーカイブ	熊本市観光文化 交流局文化振興課
16	2017年 3月20日	熊本の漱石先生を知ろう！／五高記念館紹介	ワークショップ	九州電力

（市原富代）



III

収蔵資料

1

寄贈資料

番号	資料名称	差出・作成・著・発行	自西暦	点数	旧蔵者・寄贈者
1	寮歌集	第五高等学校習学寮	1943(昭和18)年	1	青木正二
2	五高時代教科書		1944(昭和19)年～ 1948(昭和23)年	8	青木正二
3	ラグビー部写真			22	立花芳郎
4	五高同窓会関係資料・書籍		1987(昭和62)年	6	立花芳郎
5	『漱石の四年三ヵ月』		1997(平成9)年	1	立花芳郎
6	書 寮歌			30	栗林清子
7	五高十八年会 東京大会 写真		2001(平成13)年	1	栗林清子
8	感謝状		1997(平成9)年	1	栗林清子
9	マント			1	福田晴男
10	五高同窓会関係資料・書籍		1959(昭和34)年～	6	富田美樹子
11	写真 アルバムより抜粋		1945(昭和20)年	12	藤川芳郎
12	熊本五高会月例会五五五回 巻頭言	福井孝一	2014(平成26)年	1	福井孝一
13	草枕(峠の茶屋)の後藤是山書 拓本	後藤是山		1	平山謙二郎
14	五高関係書籍			4	平山謙二郎
15	白川継紹履歴書写	白川継紹	1945(昭和20)年	1	白川壽麿
16	岩崎重三関係資料		1907(明治40)年～	1	松本ユリコ
17	『回想の寺田寅彦』	小林 勇	1956(昭和31)年	1	松本ユリコ
18	五高教科書、試験問題	稲葉教授		6	緒方秀逸
19	クラウド展ポスター		1995(平成7)年	1	緒方秀逸
20	法被、帽子			2	緒方秀逸
21	アルバム Tue recht und scheue niemand!	昭和12年理乙	1937(昭和12)年	1	西川敦子
22	アルバム		1937・1940(昭和 10・12)年	2	前田洋子
23	写真 スナップ写真帳		1937(昭和12)年	109	前田洋子
24	卒業証書	第五高等学校	1940(昭和15)年	1	前田洋子
25	アルバム LIII AI 5th HS	昭和15年文甲3卒業	1936(昭和11)年	1	加藤秀弘
26	五高時代の教科書		1942(昭和17)年～ 1947(昭和22)年	4	長谷川信一
27	五高同窓会関係書籍	五高同窓会ほか		4	長谷川信一
28	帝国大学工科大学卒業証書	帝国大学総長浜尾新			不破章雄
29	アルバム SHUGAKURYU ALBUM		1925(大正14)年	1	古賀靖子
30	渡鹿会8ミリ 五高創立90周年	渡鹿会	1977(昭和52)年	1	田代照子
31	アルバム 高く聳ゆる	習学寮アルバム委員	1933(昭和8)年	1	岳中耐夫

番号	資料名称	差出・作成・著・発行	自西暦	点数	旧蔵者・寄贈者
32	龍南青春忘れうべき 五高入学五十周年記念文集	練実会	1983(昭和58)年	1	岳中耐夫
33	集合写真		1936(昭和11)年	1	岳中耐夫
34	五高関係書籍		1983(昭和58)年	4	岳中耐夫
35	寮歌集		1955(昭和30)年	1	松島重明
36	メダル 端艇部関係		1934(昭和9)年	2	平林あゆ子
37	メダル 習学寮・龍南会		1935・1937(昭和10・12)年	2	平林あゆ子
38	五高時代の教科書		1942(昭和17)年	10	大淵敏生
39	絵葉書			4	藤本秀子
40	『熊本の近代化遺産【上】《熊本市・県史》』	熊本産業遺産研究会・ 熊本まちなみトラスト	2013(平成25)年	1	藤本秀子
41	『漱石の四年三ヵ月 くまもとの青春』	'96くまもと漱石博推進 100人委員会	1997(平成9)年	1	藤本秀子
42	『富山県〔立山博物館〕2007年度 特別企画展 実体視「黒部」 溪を拓いた もう一つのまなざし…岩永信雄の世界』	富山県〔立山博物館〕	2007(平成19)年	1	藤本秀子
43	絵葉書 恵利武葉書	恵利武	1907(明治40)年	1	竹下恭爾
44	五高九龍会	五高九龍会	1995(平成7)年	1	竹下恭爾
45	佐賀県農業用水堤防工事の記念写真	昭和19年入学文甲・乙、 理甲2組	1944(昭和19)年	1	竹下恭爾
46	バスケット インターハイ全国3位の記念写真	バスケット部	1947(昭和22)年	1	竹下恭爾
47	学校工場で使用された部品		1945(昭和20)年	2	竹下恭爾
48	五高時代の机		1944(昭和19)年	1	竹下恭爾
49	五高時代の本棚		1944(昭和19)年	1	竹下恭爾
50	五高時代使用書籍		1942(昭和17)年～ 1948(昭和23)年	10	竹下恭爾
51	九龍会 旗			1	竹下恭爾
52	杉並のヒロシマ ナガサキ	杉並光友会	1997(平成9)年	1	井上惣左衛門
53	飛龍模型			1	井上惣左衛門
54	剣道部印鑑袋、印	龍剣会		5	井上惣左衛門
55	写真 田代友禧関係			11	田代照子
56	五高倶楽部開設満七周年を省みて	犬塚勲	1980(昭和55)年	1	田代照子
57	帽子・マント	緒方道彦		2	小山 紘
58	満州建設勤労奉仕記念章	緒方道彦		1	小山 紘
59	色紙 ロバート・クラウド	ロバート・クラウド		1	小山 紘
60	同窓会法被	五高同窓会		2	小山 紘
61	『さらば我友叫ばずやー旧制高校史発掘』	小山紘	2015(平成27)年	1	小山 紘
62	『わが失われし日本 五高最後の米国人教師』	ロバート・クラウド	1996(平成8)年	1	小山 紘
63	扁額「終始一誠意」	佐藤栄作		1	舩田誠二
64	卒業論文 環象と近松	田中辰二		1	田中千勇子
65	文献上に表はれたる「神」の概念及び 其の語の発展分布状態に就て	田中辰二		1	田中千勇子
66	寮生誓詞	添野信 揮毫	1941(昭和16)年	1	田中千勇子
67	告別の辞	田中辰二	1928(昭和3)年	1	田中千勇子
68	掛軸 「摘まれまいと咲いた筈だに 曼珠沙華 鳴風」	田中辰二		1	田中千勇子
69	写真 田中辰二			28	田中千勇子
70	田中辰二宛手紙、葉書		1902(明治35)年～	34	田中千勇子

番号	資料名称	差出・作成・著・発行	自西暦	点数	旧蔵者・寄贈者
71	書、短冊	田中辰二		35	田中千勇子
72	田中辰二卒業証書、叙勲証書		1915(大正4)年	27	田中千勇子
73	学校関係資料		1921(大正10)年	10	田中千勇子
74	のれん、風呂敷、手拭			8	田中千勇子
75	宗教関係資料			24	田中千勇子
76	犬養孝関係書籍、資料			10	田中千勇子
77	文学研究			33	田中千勇子
78	五高同窓会関係			34	田中千勇子
79	書籍			16	田中千勇子
80	五高教師関係書籍	竹内照夫		4	泉 宗一
81	卒業証	第五高等学校長 本島一郎	1944(昭和19)年	1	泉 宗一
82	写真アルバム	泉宗一	1942(昭和17)年	1	泉 宗一
83	卒業証書	第五高等学校	1907(明治40)年	1	上田雅由
84	徽章贈与証書	龍南会長 松浦寅三郎	1907(明治40)年	1	上田雅由
85	集合写真		1906(明治39)年	3	上田雅由
86	『惑星 創刊号』	昭和20年入学理科 甲類4組	1946(昭和21)年	1	東苑忠俊
87	図学演習問題		1938(昭和13)年	6	東苑忠俊
88	アルバム			1	佐藤雅夫
89	龍泳会のぼり			1	佐藤雅夫
90	写真			10	佐藤雅夫
91	五高同窓会ゆかた生地			1	赤星隆子
92	色紙	柊村(東勝俊)	2001(平成13)年	2	長野吉彰 福井孝一
93	檄	福本和典	2000(平成12)年	1	長野吉彰 福井孝一
94	五高時代の写真		1944(昭和19)年	22	長野吉彰 長野多嘉子
95	五高関係新聞記事	長野吉彰		2	長野吉彰 長野多嘉子
96	出陣寄書	長野吉彰	1945(昭和20)年	1	長野吉彰 長野多嘉子
97	『大学中庸』	宇野哲人	1941(昭和16)年	1	長野吉彰 長野多嘉子
98	花陵会挨拶状・絵葉書		1932(昭和7)年	3	長野吉彰 長野多嘉子
99	五高時代使用鉢巻 必勝		1943(昭和18)年	1	長野吉彰 長野多嘉子
100	『さらば我友叫ばずや』		2015(平成27)年	2	長野吉彰 長野多嘉子
101	卒業証書	第五高等学校	1922(大正11)年	1	甲斐正三
102	アルバム			2	甲斐正三
103	写真			8	甲斐正三
104	五高同窓会関係資料、学士会関係資料			78	徳澄雅和
105	アルバム	清田時計店写真部	1930(昭和5)年	1	吉村陸太郎
106	絵葉書 龍南の今昔 開校五十年記念会		1937(昭和12)年	5	東田恵子
107	同窓会関係資料		1967(昭和42)年	3	吉澤絵里子

番号	資料名称	差出・作成・著・発行	自西暦	点数	旧蔵者・寄贈者
108	アルバム 雲興龍拳		1934(昭和9)年	1	東田恵子
109	古書籍、雑誌			153	花岡ひろみ
110	卒業証書 予科	第五高等学校	1892(明治25)年	1	柏木正弘
111	卒業証書 本科	第五高等学校	1894(明治27)年	1	柏木正弘
112	掛軸 有故潜行北越帰途所得	秋月胤永	1894(明治27)年	1	柏木正弘
113	授業ノート	柏木正文	1890(明治23)年～	11	柏木正弘
114	柏木正文関係資料		1899(明治32)年	77	柏木正弘
115	藤本玄一関係資料			5	有吉英一
116	河原畑正行関係資料			1 式	河原畑廣
117	五高同窓会関係資料			1 式	河原畑廣
118	五高卒業生関係書籍			59	河原畑廣
119	五高関係アルバム		1915(大正4)年～	3	五高同窓会
120	戦前学校アルバム		1911(明治44)年～	3	五高同窓会
121	集合写真 五高ほか、戦前			5	五高同窓会
122	東光	龍南報国団養正班 興亜班	1944(昭和19)年	1	五高同窓会
123	森本治吉書簡	森本治吉	1910(明治43)年	1	五高同窓会
124	第五高等学校生徒学資概算書		1929(昭和4)年	1	五高同窓会
125	寮歌集		1934(昭和9)年	1	五高同窓会
126	東京写真帖(東京勸業博覧会案内入)	日本葉書会	1907(明治40)年	1	五高同窓会
127	龍南会雑誌・龍南	龍南会	1892(明治25)年～ 1940(昭和15)年	12	五高同窓会
128	五高生の日記		1921(大正10)年	20	五高同窓会
129	KOTTO	LAFCADIO HEARN	1927(昭和2)年	1	五高同窓会
130	京都大学一覧		1943(昭和18)年	1	五高同窓会
131	東京大学一覧		1943(昭和18)年	1	五高同窓会
132	東京銀座要路煉瓦石造真図	応需曜斎国輝 筆	明治	3	五高同窓会
133	東京名所 京橋区銀座通尾張町煉瓦造之真図	応需広重 画	明治	3	五高同窓会
134	東京高輪鉄道蒸気車走行之全図	一曜斎国輝 画	明治	3	五高同窓会
135	JAPAN AN+INTERPRETATION	LAFCADIO HEARN (ラフカディオ・ハーン)	1904(明治37)年	1	五高同窓会
136	OUT OF THE EAST	LAFCADIO HEARN (ラフカディオ・ハーン)	1896(明治29)年	1	五高同窓会
137	A JAPANESE MISCELLANY	LAFCADIO HEARN (ラフカディオ・ハーン)	1901(明治34)年	1	五高同窓会
138	絵葉書 (熊本百景) 第五高等学校(其八) 他	熊本		2	五高同窓会
139	『健軍三菱物語ー熊本は東へ・・・』	岡野允俊	1989(昭和64)年	1	五高同窓会
140	『少年たちの戦争』	徳永徹	2016(平成28)年	1	五高同窓会
141	『自決ー森近衛師団長斬殺事件ー』	飯尾憲士	1982(昭和57)年	1	緒方誠一郎
142	『秋月悌次郎ー老日本の面影ー決定版』	松本健一	2013(平成25)年	1	水田宗昭
143	『子規と現代』	岩岡中正	2013(平成25)年	1	岩岡中正
144	『ラフカディオ・ハーンの英語教育』	監修 富山大学付属図書館ヘルン文庫／平川祐弘	2013(平成25)年	1	西川盛雄
145	『ラフカディオ・ハーンの英語教育』	監修 富山大学付属図書館ヘルン文庫／平川祐弘	2013(平成25)年	1	弦書房
146	『ラフカディオ・ハーン 富士の山』	訳者 村松眞一	2013(平成25)年	1	村松眞一
147	『窮死した歌人の肖像ー宗不早の生涯ー』	中村青史	2013(平成25)年	1	中村青史
148	『凜ー近代日本の女魁・高場乱』	永畑道子	1997(平成9)年	1	中村青史

番号	資料名称	差出・作成・著・発行	自西暦	点数	旧蔵者・寄贈者
149	『雙蝶－透谷の自殺』	永畑道子	1994(平成6)年	1	中村青史
150	『三井家の女たち－殊法と鈍翁』	永畑道子	1999(平成11)年	1	中村青史
151	『恋の華 白蓮事件』	永畑道子	2008(平成20)年	1	中村青史
152	『欄干の外を歩く』	中村 青史	2015(平成27)年	1	中村青史
153	『ヘクトー 夏目漱石と暮らした最後の犬』	横山俊之	2014(平成26)年	1	横山俊之
154	『ラフカディオ・ハーンの英語クラス』	平山祐弘	2014(平成26)年	1	小野静男
155	『英詩のこころ』	福田昇八	2014(平成26)年	1	福田昇八
156	『北森嘉蔵伝 その生涯と思想』	丸山久美子	2016(平成28)年	1	丸山久美子
157	『ラフカディオ・ハーンの魅力』	西川盛雄	2016(平成28)年	1	西川盛雄
158	『気骨－ある刑事裁判官の足跡』	石松竹雄	2016(平成28)年	1	石松竹雄
159	『唱歌・童歌・寮歌－近代日本の国語研究』	若井勲夫	2017(平成29)年	1	若井勲夫
160	『満州国の最期を背負った男・星子敏雄』	荒牧邦三	2016(平成28)年	1	荒牧邦三

2 購入資料

番号	資料名	年代	差出・作成・著・発行	点数
1	第五高等学校開校五十年記念会決算報告	1940(昭和15)年	第五高等学校開校五十年記念会	1冊
2	『龍南会雑誌』『龍南』			37冊
3	『会報 臨時号』 故溝渕校長校葬記念	1935(昭和10)年	三高同窓会	1冊
4	古写真			20枚
5	アルバム	1941(昭和16)年	五高	1冊
6	アルバム	1937(昭和12)年	五高	1冊
7	(陸軍特別大演習写真帳)	1931(昭和6)年		1冊
8	熊本市街図	1911(明治44)年	長崎次郎	1枚
9	最新熊本市街地図	1915(大正4)年	都田伍 (熊本市船場町下1丁目47番地)	1枚
10	最近実測熊本市街地図	1923(大正12)年	書画堂 濱田辰次郎 (熊本市西通町21番地)	1枚
11	実測番地入り早わかり熊本市街地図	1930(昭和5)年	土橋兼良 (熊本市黒髪町824番地)	1枚
12	最新熊本市街地図	1936(昭和11)年	駈々堂旅行案内(大阪)	1枚
13	大日本職業別明細図第631号 熊本県熊本市	1940(昭和15)年	東京交通社西村善汎	1枚
14	写真 江津湖夕照		富重写真所	1枚
15	写真 江津湖漁舟		富重写真所	1枚
16	「潮南」 1	1938(昭和13)年	第五高等学校文1甲2	1冊
17	「文教の府熊本を語る」	1932(昭和7)年	高森良人口述	1冊
18	熊本市街図	1904(明治37)年	長崎次郎	1枚
19	最近実測熊本市街地図	1924(大正13)年	書画堂 濱田辰次郎	1枚
20	熊本地図	1931(昭和6)年	熊本勸業館	1枚
21	熊本市街全図	1935(昭和10)年	熊本勸業館	1枚
22	『電話番号簿 熊本通信局管内』	1932(昭和7)年	宏運閣出版部	1冊
23	『熊本医科大学回顧』	1954(昭和29)年	熊本大学熊本医科大学	1冊
24	アルバム Recollections 熊本高等工業学校	1938(昭和13)年	熊本県	1冊

番号	資料名	年代	差出・作成・著・発行	点数
25	アサヒスポーツ 第4巻第16号	1926(大正15)年	東京朝日新聞社 大阪朝日新聞社	1冊
26	『解雙独和小辞典』	1936(昭和11)年	片山正雄	1冊
27	ALBUM アルバム	1930(昭和5)年	五高習学寮	1冊
28	Zur Brinnerung アルバム	1933(昭和8)年		1冊
29	学士試験合格者氏名	1937(昭和12)年		1枚
30	アルバム		五高	2冊
31	アルバム SHUGAKURYO ALBUM	大正カ	五高習学寮	1冊
32	アルバム 卒業記念帖 熊本県第一師範学校	1927(昭和2)年	熊本県第一師範学校	1冊
33	アルバム 師範学校	1930(昭和5)年	師範学校	1冊
34	アルバム 卒業記念写真帖 熊本県第一師範学校	1931(昭和6)年	熊本県第一師範学校	1冊
35	アルバム 熊本県立熊本中学校	1937(昭和12)年	熊本県立熊本中学校	1冊
36	『熊本大学習学寮史』	1955(昭和30)年	熊本大学習学寮	1冊
37	熊本県師範学校卒業廿週年	1924(大正13)年	熊本県師範学校	1冊
38	『郷友雑誌 肥後』 2巻9号	1922(大正11)年	肥後郷友雑誌発行所	48冊
39	『会報 肥後山林会』 28号	1932(昭和7)年	肥後山林会	1冊
40	辞令 隈本繁吉	1898(明治31)年	文部省 内閣総理大臣 宮内省 北海道庁	17枚
41	辞令 隈本繁吉	1908(明治41)年	大韓帝国	3枚
42	履歴事項 隈本繁吉	1917(大正6)	隈本繁吉	1冊
43	葉書	1920(大正9)年	武藤虎太	9枚
44	封書	1919(大正8)年	武藤虎太	1通
45	「鉄道緩和曲線」	1905(明治38)年	第五高等学校工学部	1冊
46	『古賀雄三兄追悼集』	1953(昭和28)年	古賀義太郎	1冊
47	『加納五郎君遺稿集』	1929(昭和4)年	古賀義太郎	1冊
48	「息吹」	1947(昭和22)年	五高文科1年3組	1冊
49	『上田整次先生の思出』	1956(昭和31)年	上田整次先生記念会	1冊
50	『思郷記』	1941(昭和16)年	高田保馬	1冊
51	『田澤義鋪』	1954(昭和29)年	田澤義鋪記念会	2冊
52	「熊本高等工業学校規則」	1911(明治44)年	熊本高等工業学校	1枚
53	「史蹟名勝案内記」	1935(昭和10)年	熊本高等工業学校庶務課	1冊
54	「熊本高等工業学校一覧」	1915(大正4)年～	熊本高等工業学校	6冊
55	絵葉書			71枚

(薄田千穂)



IV

熊本地震

1

五高本館をはじめとする熊本大学の重要文化財建造物4棟の被災状況と今後の災害復旧及び補強工事

第五高等学校本館（以後、五高本館）、同化学実験場、同表門、熊本高等学校機械実験場の4棟の建造物は、熊本大学の保有する国指定重要文化財である。五高本館は五高記念館として平成5年以降公開されてきたが、熊本地震で他の3棟の重要文化財建造物とともに被災した。幸い内部の収蔵品は無事取り出され、学内の安全な保管場所に分散して保管されているが、建造物の本格的な修理はこれからである。ここでは、学内の4棟の建造物の被災状況と工事の計画について報告しておきたい。

〔1〕被災状況

五高本館

最も目立つ被害は煙突であった。屋根の上に突き出す煙突が折れ、地上に落下したり、屋根に突き刺さ

るなどの被害が出た。煙突は建物内部から屋根上に伸びているが、屋根面と接する部分で損傷し折れた。阪神淡路大震災や東日本大震災でも煉瓦造建造物の煙突が折れ、折れた煙突が屋根を突き破って建物を壊す被害が出ていた。神戸の西洋館群での被害が良く知られている。まったく同じことがここで起きたのである。

煙突の損傷は予想される範囲にあった。しかし、そこから先は予想外であった。考えてみれば当然であるが、煙突の損傷箇所から雨水が入った。その後煙突が折れた場所はシートで覆われ、その後すべての煙突が屋根から降ろされて、煙突の有った部分が金属板で覆われることになった。そこで雨漏りは止まったが、それまでに漏った水で2階内部の壁面を中心にカビが発生した。そのために展示ケースなども水を被り再使用が不可能になった。

損傷は煙突に留まらなかった。壁や廊下のアーチに亀裂が入った。東西に長い建物で中央玄関部分

五高本館



本来左右対称で右側にも見えるはずの煙突は落下した



落下した煙突。しかし十分復元は可能



左：壁の亀裂
右：アーチから崩落した漆喰が散乱する廊下

および東西端が膨らんだ左右対称の平面であるから、左右の細くなった部分に被害が集中した。それも1階よりも2階の被害が大きい。結局この部分の南北の外壁が外に向かってやや傾いたようで、北側の外壁はこれと直交する南北方向の部屋境の壁との間に亀裂が入った。壁は煉瓦の構造体の上に漆喰塗で仕上げられているが、亀裂部分では周辺の漆喰が落下し、煉瓦と煉瓦の目地が開き、一部では煉瓦そのものが割れてしまった。また、南側の廊下上部のアーチもおそらく南側の壁の上部が一度開いたようで、亀裂が生じた。アーチも煉瓦の上に漆喰を塗っていたので、漆喰が落ち、煉瓦の一部は脱落している。漆喰の塗厚は40mm程度はあって厚い。熊本市古町のPSオランジェリー（元・第一銀行熊本支店 西村好時設計 大正8年 1919年竣工）では天井の漆喰が落下したが、厚く重たい漆喰片は下にあった木製テーブルに突き刺さっていた。つくづく昼間の地震でなくて幸いであつたと思われた。これに対して、五高本館の屋根を支持する木造の小屋組には、折れた煙突が屋根面を壊しただけでほとんど損傷がない。窓ガラスも割れなかった。

また、地震は図面ではわからなかった建物の構造を明らかにした。建物の躯体は煉瓦が積まれただけであろうと思われていた、しかし、2階の廊下から入る教室への出入り口上部には、落ちた漆喰の下から上面がアーチ状に加工された木製の楣が発見された。地震は実に困った災害であるが、建物のことを知るための絶好の調査の機会でもある。

化学実験場

煙突の損傷は五高本館と同様である。それ以外の

損傷は南側にある2階分の高さをもつ階段教室の壁面に集中し、多くの亀裂をつくった。壁の下は崩落した漆喰が散乱した。北へ伸びる平屋部分も窓台の高さで壁面に細い亀裂（ヘア・クラック）がみられた。これが煉瓦の躯体にまで入っているのか、表面の漆喰壁だけのものかは不明である。今後の調査が俟たれる。

表門

地震後もほとんど損傷がないように見えた。門柱に載る笠石が若干動いたともいわれるが、そういわれて改めて見てもほとんどわからない程度である。竣工当時に作成された表門の図面には門柱の中心に鉄筋が描かれており実際に鉄筋の存在する可能性が指摘されていた。地震前の構造診断でも鉄筋の有無は明らかにできなかったが、今回の地震で倒壊しなかった事実がいよいよ鉄筋の存在を強くうかがわせることとなった。現在すでに修理工事が進められ、笠石が外された際に、ネジを切った鉄筋の上部が発見された。表門の設計図の製図時期はいずれも明治23年である。熊本地震後に明治22年に熊本で大きな地震があったことが注目され始めたが、表門の鉄筋はこの明治22年の地震の被害の大きさを間近に見た設計者が急遽追加した可能性も考えられてきた。

工学部研究資料館（熊本高等工業学校機械実験工場）

東西に棟を通す切妻造・棧瓦葺の建物であるが、東西の妻壁と南北の壁との接続部の上部に大きな亀裂が入った。とくに東側の亀裂は大きく、現在は内部から屋根裏を見上げても空が見えるような状況ではないが、地震後の建物内部の東妻壁下の床には屋根瓦が

五高本館



漆喰の落ちたアーチ



出入口上部から顔を出した木製の楣



折れた煙突が突き刺さった屋根裏

散乱していた。おそらく妻壁は一度大きく上部が開き、屋根との間に出来た隙間から屋根瓦が落下したものと考えられた。一度大きく開いて、また閉じたというのが現状であろう。東壁には上部に大きな丸窓があるので、その周辺から放射状に延びる亀裂もみられる。西妻壁はその内側に後補の小部屋が2層で設けられていたこともあり東壁ほどの損傷はない。南北両壁については、上部にアーチをもつ大きな窓が配されるがこの窓台の高さで水平方向に亀裂が入っていて最大20mm程のズレがみられる。壁や柱が切れて動いたのである。内部の漆喰壁の損傷箇所は多く、屋根を支える木造トラスの小屋組も、接合部の仕口がはずれたり、部材の割れが生じ、それも時間の経過とともに大きくなった。

〔2〕災害復旧及び補強工事と今後の予定

五高本館をはじめとする熊本大学の4棟の重要文化財の工事は、すでにスタートを切っている。工事は災害復旧工事として位置づけられ、地震前の姿に復旧することを原則としている。

五高の3棟に先立って、熊本高等工業学校機械実験工場には鉄骨で家形のフレームを組んで壁を支える工事が行われた。これは隣に建っていて被災によって建て替えが決まった工学部一号館の解体作業の振動でこの重要文化財の損傷を一層進行させることを避けるための処置であった。このフレームは、本工事における素屋根として利用される。

今後、五高記念館においても同様のフレームが設けられる予定である。

その後行われる補強工事の概要は、いずれも煉瓦造であるから共通する部分が多く次の通りである。煉瓦

の目地にナイロンの一種であるアラミド繊維を入れて補強し、煉瓦の壁や柱の上から一定の間隔で穴をあけてステンレスの棒を挿入して煉瓦との隙間にグラウトモルタルを注入し一体化する。その上で煉瓦の壁を建物の内側から鉄骨で支持するという方法を採用。建物の外側から鉄骨で支持する方法もありえた。しかし、熊本大学の表門以外の建物についても外観に鉄骨が見える方法はキャンパスの景観上好ましくないということで内側から支持することになった。しかし、内部に鉄骨を建てる際にはそれを建てるためのコンクリートの基礎を作る必要があり、そのために建物の床部分の一部を最小限ではあるが取り壊す必要がある。苦渋の決断ではあった。また、内部に大型の工作機械を設置する機械実験工場では、一定間隔で鉄骨柱を立てるために一部の工作機械の設置場所を若干移動する必要も出てくる。内部に立つ鉄骨の柱にどのような色の塗装を施すかもこれから決定しなくてはならない。色の選択をうまく行えば鉄骨はほとんど目立たなくなるが、建物は文化財であるから、鉄骨が後補であることを明示する色の選択が必要になる。

五高本館、化学実験場、機械実験工場の工事は平成33年度いっぱいかかる予定である。表門については、早くもこの3月に竣工する見込みであるという。五高記念館については文化財としての工事が終了後できるだけ早く開館できるように新たな展示計画を検討してゆく予定である。重要文化財建造物としての価値を十分に伝えることができ、収蔵する資料を展示・保管するのに十分な環境であり、かつ展示資料の価値がいっそう一層の輝いてみえる計画は可能であると考えている。

(伊東龍一)

化学実験場



折れたものの辛うじて屋根に残った煙突

機械実験工場



鉄骨のフレームが組まれ安全性が確保された

2 地震対応

平成28年(2016年)熊本地震 事務室の動き

実施日	内容
2016年 4月15日～	被災のため臨時休館
4月15日	事務室、社会連携課へ避難
4月20日～	展示資料・備品等避難(附属図書館等へ一時預託)
4月25日	社会連携課内での業務開始
5月16日～	資料移動計画の作成、事務室移転準備(事務室・資料保管室の確保等)
5月20日	工学部資料館2階展示資料避難
5月25日	資料保存箱制作者との打合せ
6月	事務室・資料移動用資材発注、環境整備工事
6月 9日	輸送業者との打合せ・発注
6月21日	仮事務室へ事務所移転
7月	資料保存箱作成のため資料採寸、1次発注
8月	資料移動用資材発注
8月23日	輸送業者との打合せ・発注
8月25日	資料保存箱1次納品
8月・～2017年3月	館内資料等整理 資料箱詰め作業 館内備品学内への譲渡分選定 廃棄物選定
8月・2017年2月	廃棄物処理業者との打合せ
9月・2017年1・2月	館内備品を学内へ譲渡
10月27日～28日	資料輸送 第1回
11月28日	資料保存箱制作者との打合せ
12月～2017年1月	大型資料輸送業者との打合せ
12月	資料保存箱2次発注
2017年 1月11日	輸送業者との打合せ・発注
1月23日	工学部資料館1階文書資料箱詰め
2月	化学実験場整理
2月16日	工学部資料館資料室整理
2月21日	資料保存箱2次納品
2月22日～ 3月9日	廃棄物搬出作業
3月 6日	資料輸送 第2回
3月 6日～ 9日	輸送業者による大型資料梱包
3月14日～15日	資料輸送(大型資料)第3回

資料保管状況

場 所	内 容
収蔵場所 A	アルバム・写真等／ストレージボックス144箱 第五高等学校関係資料／中性紙保存箱90箱 文書箱25箱
収蔵場所 B	第五高等学校関係資料／文書箱120箱 掛軸9点 図面1ケース 書籍96箱 印刷物130箱 衣服類10着 資材20箱
収蔵場所 C	扁額等／保存箱70箱 第五高等学校関係資料・寄贈資料等／文書箱160箱
収蔵場所 D	絵画・掛け軸／保存箱50箱 同窓会資料／文書箱65箱 書籍／ダンボール14箱
収蔵場所 E	校章・机・椅子・柵・理科実験道具・銃架・太鼓・ピアノ等の大型資料類 128点
収蔵場所 F	生徒用机椅子(展示資料)53台 五高記念館部材24点
熊本大学附属図書館	第五高等学校敷地模型1台

(薄田千穂 市原富代)



V

運営

1

五高記念館沿革

	年月日	事項
1887	明治20年	第五高等中学校開校
1889	明治22年	本館、化学実験場、表門竣工
1894	明治27年 9月11日	第五高等学校と改称
1950	昭和25年 3月25日	第五高等学校課程終了式を行う（本館は法文学部の管理の下、教室本館として講義・研究棟として利用継続）
1964	昭和39年 3月10日	五高本館、熊本県指定文化財となる。
1967	昭和42年10月	資料館委員会準備委員会第1回開催
1969	昭和44年 8月19日	旧第五高等中学校本館、化学実験場及び表門が国の重要文化財に指定される
1969	昭和44年11月25日	熊本大学総合研究資料館設置準備委員会規則制定（平成4年廃止）
1987	昭和62年10月10日	五高100周年記念式典 同窓会による設備の寄贈、本館で展示
1991	平成 3年	ジェーンズとハーン記念祭で公開
1992	平成 4年 9月24日	熊本大学資料館に関する検討委員会規則制定（平成13年4月1日廃止）
1993	平成 5年 1月21日	熊本大学資料館検討委員会専門委員会で 建物名称を五高記念館とすることを決定
1993	平成 5年 6月24日	熊本大学五高記念館等規則制定（熊本大学五高記念館管理運営委員会設置、平成16年3月31日法人化により廃止）
1993	平成 5年10月9～11日	五高記念館一般公開（熊本県文化協会） 五高記念館所蔵資料展開催
1998	平成10年 3月	熊本大学資料館に関する検討委員会『熊本大学資料館に関する検討委員会報告』をまとめる
1999	平成11年	熊本大学五高記念館管理運営委員会『熊本大学ユニバースティ・ミュージアム』をまとめる
2000	平成12年 3月	五高記念館案内パンフレット制作
2000	平成12年 4月 1日	熊本大学五高記念館一般公開実施要項実施 熊本大学による公開はじまる
2000	平成12年11月3～19日	ラフカディオ・ハーン生誕150年祭「ハーン公開特別展」開催
2001	平成13年 3月 6日	五高記念館資料整理に関する懇談会
2001	平成13年 4月 1日	熊本大学資料館に関する検討委員会規則（平成4年9月24日制定）廃止
2001	平成13年 9月15日	五高記念館友の会創立総会
2004	平成16年 4月 1日	国立大学法人化により、熊本大学五高記念館等規則制定（平成18年12月1日廃止）
2005	平成17年	プロジェクト研究レポート「地域資源としての五高記念館の活用整備研究」をまとめる
2005	平成17年12月28日	五高記念館資料調査委員会
2006	平成18年 3月	「熊本大学ユニバースティ・ミュージアム構想 第1期五カ年計画」による整備事業に着手
2006	平成18年 4月 1日	週日公開開始
2006	平成18年12月 1日	熊本大学五高記念館等規則施行 学内共同教育研究施設となる
2007	平成19年 4月	五高記念館を拠点とした学芸員養成課程が稼動

	年月日	事 項
2007	平成19年10月10日	五高120周年記念行事
2010	平成22年12月9日	博物館相当施設に指定
2011	平成23年	「くまもとの文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」採択（～25年度）
2011	平成23年	「重要文化財建造物等公開活用事業」採択（～24年度）
2012	平成24年 4月 1日	「熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム構想 第2期五カ年計画」による整備事業に着手
2013	平成25年 5月22日	来館者が10万人を超える
2015	平成27年 2月29日	五高記念館本館及び同化学実験場展示整備計画策定
2016	平成28年 4月15日	熊本地震により長期休館

（薄田千穂）

2 施設概要

種別	歴史博物館
所在地	熊本県熊本市黒髪2丁目40番1号
規模	地上2階
面積	建築面積 921.6㎡ 延床面積 1,806㎡
構造	煉瓦造、2階建、棧瓦葺、背面木造裏玄関付
建築年代	明治22年（1889）
建築設計	山口半六、久留正道

動線計画

熊本大学五高記念館は、2階及び1階西側部分に常設展示スペース、1階に教育普及スペース及び管理スペース並びに研究スペースを設けている。

日常動線は1階正面玄関を導入口とし、中央階段を上がって西側部分に誘導し、第1展示室から第4展示室、西側階段を下りて第5・第6展示室及び復原教室へと導く流れを取り入れている。そして、日常動線の最後に休憩室・図書室・情報プラザといった教育普及スペースを設けることで利用者の自己学習の便を図っている。

企画展示室（第1企画展示室～第4企画展示室）は、2階東側部分に集中させることで常設展とは別の流れを作り、企画・特別展に関係した講演会等の際には特別展を鑑賞した後、東側階段を利用して1階の講義室に導くことで日常動線と交錯しないよう配慮している。企画展示室が稼動していないときは、2階ホール東側にパーティションスタンドを設置して東側部分を閉鎖している。

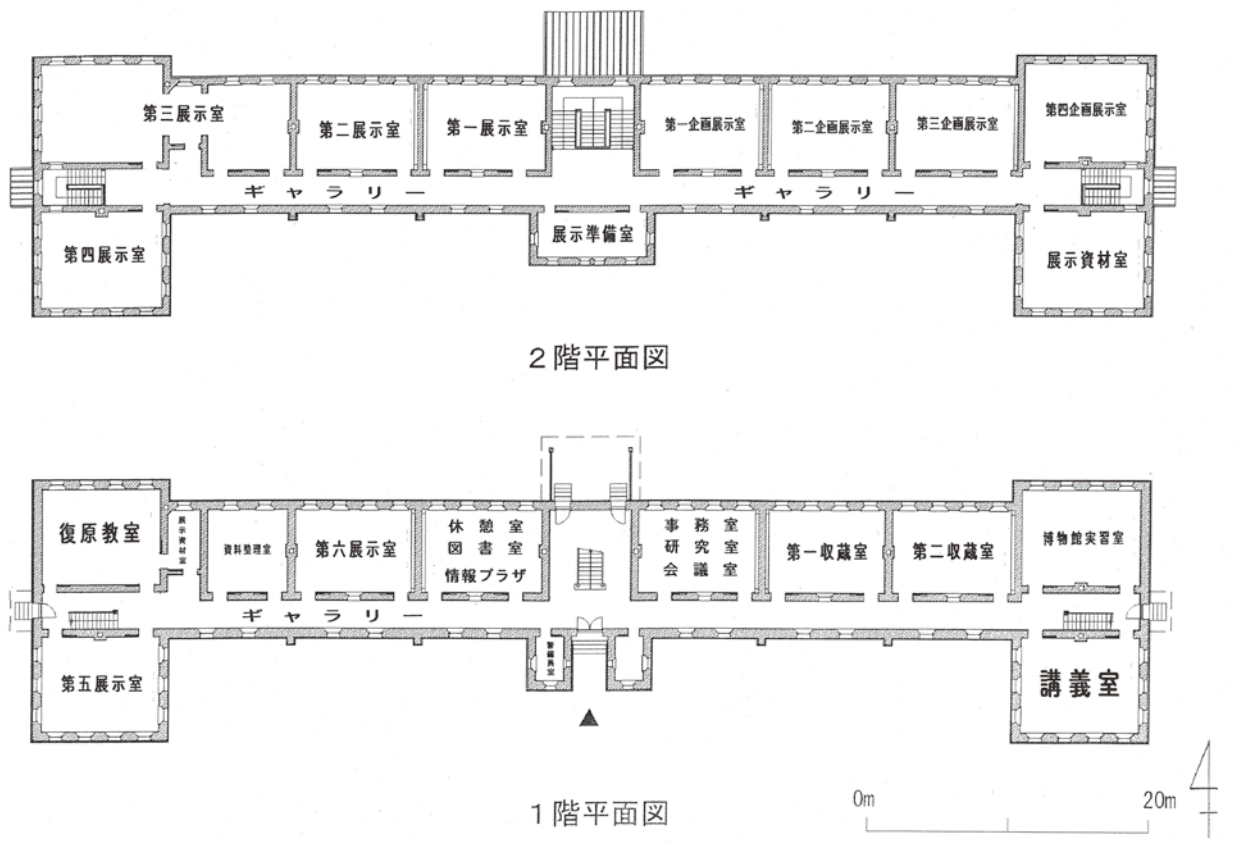
講義室は本学の通常講義にも使用され、博物館実習室は学芸員課程の講義で使用することから、1階管理スペースの奥に配置することで日常動線から切り離している。

利用者の動線パターンは廊下接続タイプであり、動線計画は可能なかぎり交差を減らし、機能的な流れとなるよう設定している。

建物用途別表

室 名		階 層	面 積	室 名	階 層	面 積
常設展示室	第 1 展示室	2 階	66㎡	ギャラリー	2 階	237㎡
	第 2 展示室	2 階	66㎡	ギャラリー	1 階	230㎡
	第 3 展示室	2 階	118㎡	展示準備室	2 階	20㎡
	第 4 展示室	2 階	66㎡	展示資材室	2 階	66㎡
	第 5 展示室	1 階	66㎡	展示資材室	1 階	12㎡
	第 6 展示室	1 階	66㎡	休憩室・図書室・情報プラザ	1 階	66㎡
	復原教室	1 階	66㎡	講義室	1 階	66㎡
	小計 514㎡			博物館実習室	1 階	66㎡
企画展示室	第 1 企画展示室	2 階	66㎡	事務室・研究室・会議室	1 階	66㎡
	第 2 企画展示室	2 階	66㎡	資料整理室	1 階	40㎡
	第 3 企画展示室	2 階	66㎡	第 1 収蔵室	1 階	66㎡
	第 4 企画展示室	2 階	66㎡	第 2 収蔵室	1 階	66㎡
	小計 264㎡			その他	27㎡	
合計 1,806㎡						

熊本大学五高記念館各階平面図



(岩崎竹彦)

第1展示室

【五高開校と歴代校長】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	横一行書「瑞邦」	1面	絹本墨書	有栖川宮熾仁	1891(明治24)年
2	横一行書「済美」	1面	絹本墨書	小松宮彰仁	1897(明治30)年
3	校長肖像画	3枚	絵画		
4	校長写真(複製)	11枚	写真		
5	嘉納校長送別記念写真(複製)	1枚	写真		1893(明治26)年
6	生徒募集木札	2枚	木材	第五高等学校	1889(明治22)年6月、 1894(明治27)年5月
7	第1回開校記念式関係書類	1式	一紙	第五高等学校	1890(明治23)年10月10日
8	寄付関係書類(複製)	1枚	綴	熊本県	1887(明治20)年10月6日
9	寄付金感謝状	1枚	一紙	第五高等学校	1891(明治24)年5月13日
10	宣誓簿	1冊	綴	第五高等学校	1901(明治34)年～ 1905(明治38)年
11	第41回開校記念式 学校長式辞	1枚	一紙	武藤虎太	1931(昭和6)年10月10日
12	第45回開校記念式 学校長式辞	1枚	一紙	十時弥	1935(昭和10)年10月10日
13	徽章に関する文部省宛の申請書類(複製)	2枚	綴	第五高等学校	1887(明治20)年9月7日
14	徽章鋳型	1個	金属	第五高等学校	
15	第五高等学校卒業証書	1枚	一紙	第五高等学校	1892(明治25)年7月10日
16	帽子	1個	布	五高同窓会	
17	第五高等中学校之印、第五高等学校之印	3個	木材、石材	第五高等学校	
18	校章レリーフ	1個	石膏	第五高等学校	
19	開校50周年記念式典(複製)	1枚	写真		1937(昭和12)年10月10日
20	年表、五高小史	1枚	パネル	五高同窓会	
21	第五高等学校沿革略	1枚	パネル	五高同窓会	

第2展示室

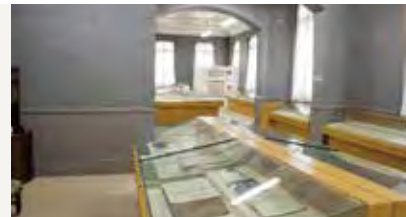
【五高の敷地と建物】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	横一行書 「入神致用」	1面	絹本墨書	勝海舟	1891(明治24)年頃
2	書 「順道制勝行不害人」	1面	絹本墨書	嘉納治五郎	1892(明治25)年
3	横一行書 「寛猛相濟」	1面	絹本墨書	閑院宮載仁	
4	横一行書 「仰光館」	1面	絹本墨書	武藤虎太	1932(昭和7)年8月
5	第五高等学校復元模型	1台			1987(昭和62)年
6	第五高等学校校図面(複製)	9枚	一紙	山口半六、久留正道	1887(明治20)年
7	第五高等学校全図(複製)	1枚	一紙	富田治禧、渡辺仁、 滝川長雄、天草狭裔	1909(明治42)年
8	竣工当時建物写真(複製)	2枚	写真	富重利平	1889(明治20)年頃
9	建物写真	5枚	写真		
10	赤レンガ	1個	レンガ		
11	第五高等学校新築落成報告	1枚	一紙	久留正道	1890(明治23)年10月10日

第3展示室

【五高の教師】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	秋月胤永 年譜	1枚	パネル		
2	秋月胤永教授 肖像画	1枚	絵画		
3	第3回卒業記念写真(複製)	1枚	写真	第五高等学校	1894(明治27)年
4	書 「北越潜行之詩」	1面	紙本墨書	秋月胤永	1898(明治31)年
5	書簡 五高職員生徒宛	1通	一紙	秋月胤永	1895(明治28)年7月16日
6	試験問題(複製)	1枚	綴	秋月胤永	1892(明治25)年6月
7	命名由来記	1幅	掛軸	秋月胤永	1892(明治25)年
8	寄せ書き	1幅	掛軸	小島伊佐美、白壁傑 次郎、池田一幸他	
9	夏目漱石 年譜	1枚	パネル		
10	夏目金之助 赴任関係資料(複製)	1式	綴	第五高等学校	1896(明治29)年
11	夏目金之助 学校活動資料(複製)	1式	綴	第五高等学校	1896(明治29)年～ 1900(明治33)年
12	佐賀福岡尋常中学校参観報告書(複製)	1式	綴	夏目金之助	1897(明治30)年
13	試験問題(複製)	1枚	一紙	夏目金之助	1898(明治31)年
14	第七回開校記念式祝辞(複写)	1枚	一紙	夏目金之助	1897(明治30)年10月10日
15	第七回開校記念式祝辞		合成音声		
16	夏目金之助 英国留学関係資料(複製)	1式	綴	第五高等学校	1900(明治33)年
17	俳句	1式		夏目金之助	
18	ラフカディオ・ハーン 年譜	1枚	パネル		
19	ラフカディオ・ハーン 雇用契約書(複製)	1枚	綴	第五高等学校	1891(明治24)年
20	ラフカディオ・ハーン 旅行免状付与証明書(複製)	1枚	一紙	第五高等学校	1891(明治24)年12月24日

番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
21	試験問題(複製)	1式	一紙	ラフカディオ・ハーン	1893(明治26)年
22	シンシナティ・コマーシャル紙	3枚	一紙	ラフカディオ・ハーン	1875年
23	『イ・ジグランブス』	1冊	書籍	ラフカディオ・ハーン	1874年
24	シンシナティ市街地図	1枚	一紙		1886年
25	ニューオーリンズの地図	1枚	一紙		1878年
26	ハロルド・ウァラー、 ゾフィー・ビュットナー 写真	1枚	写真		1913(大正2)年
27	松浦校長への謝辞 『龍南会雑誌』153号	1枚	冊子	ビュットナー、ウァラー	1914(大正3)年3月10日
28	「五高ドイツ人教師回顧」(ヘルマンヘッセとヴィルヘルム・グンデルト)『全国五高会会報』30号	1枚	冊子	鹿子木敏範	1982(昭和57)年
29	ウィリアム・ポーター 写真	1枚	写真		1924(大正13)年
30	『徒然草』	1冊	書籍	ウィリアム・ポーター訳	1914(大正3)年
31	『百人一首』	1冊	書籍	ウィリアム・ポーター訳	1909(明治42)年
32	ジェームズ・マーター 写真	2枚	写真		1936(昭和11)年頃
33	原稿「The Stone Buddha of Tatsutayama」	1冊	冊子	ジェームズ・マーター	1932(昭和7)年
34	『龍南の五高生』	1冊	書籍	ジェームズ・マーター	1930(昭和5)年
35	「五高時代の思い出」『全国五高会会報』25号	1冊	冊子	フリードリヒ・グライル	1981(昭和56)年6月
36	ロバート・クラウダー 写真	3枚	写真		1939(昭和14)年、 1995(平成7)年
37	京都スケッチ(複写)	2枚	一紙	ロバート・クラウダー	
38	『わが失われし日本』	1冊	書籍	ロバート・クラウダー	1996(平成8)年
39	ロバート・クラウダーに関する新聞記事	3枚	一紙		1994(平成6)年12月8日
40	手紙	1枚	一紙	ロバート・クラウダー	1994(平成6)年
41	ゲオルグ・ドル 写真	3枚	写真		1930(昭和5)年
42	外国人教師一覧	1枚	パネル		2012(平成24)年
43	山形元治 写真	1枚	写真		1929(昭和4)年
44	第七回開校記念式祝辞	1枚	一紙	山形元治	1897(明治30)年
45	山形元治愛用の英語辞書	1冊	書籍		1910(明治43)年
46	講義ノート	5冊	冊子	山形元治	1893(明治26)年
47	小島伊佐美 写真	1枚	写真		1930(昭和5)年
48	『Lehrbuch des Deutschen』 改訂独逸語教本	1冊	書籍	小島伊佐美	1938(昭和13)年
49	厨川辰夫 写真	1枚	写真		1906(明治39)年
50	『近代の恋愛観』	1冊	書籍	厨川白村	1924(大正13)年
51	浅井東一 写真	2枚	写真		1924(大正13)年
52	論文草稿「立田山のヤエクチナシ」の発見	2冊	冊子	浅井東一	1923(大正12)年
53	植物スケッチ	1枚	一紙	浅井東一	1932(昭和7)年
54	植物教室実習記録	1冊	冊子	浅井東一	1933(昭和8)年
55	観察器具(カメラ用三脚、比例尺)	2基			
56	田丸卓郎 写真	1枚	写真		1899(明治32)年
57	『弾性体理論・弾性振動及び音響学』	1冊	書籍	田丸卓郎	1930(昭和5)年
58	白壁傑次郎 写真	1枚	写真		1924(大正13)年
59	試験問題	1枚	一紙	白壁傑次郎	1938(昭和13)年
60	「五高に於けるヘルン先生」『龍南』200号	1枚	冊子	白壁傑次郎	1926(大正15)年
61	『中学理科示教』	1冊	書籍	白壁傑次郎	1899(明治32)年
62	八波則吉 写真	1枚	写真		1921(大正10)年
63	第7回開校記念式祝辞	1枚	一紙	八波則吉	1897(明治30)年
64	色紙	1枚	色紙	八波則吉	1937(昭和12)年
65	「五高の思い出」原稿(写)	6枚	冊子	八波則吉	1937(昭和12)年

番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
66	田中辰二 写真	1枚	写真		1937(昭和12)年
67	田中辰二 授業風景写真と川柳(写)	2枚	写真	田中辰二	1939(昭和14)年頃
68	田中辰二 似顔絵(写)	1枚	一紙		
69	高橋仁助 写真	1枚	写真		1926(大正15)年
70	試験問題	1枚	一紙	高橋仁助	1940(昭和15)年
71	近藤清次郎 写真	1枚	写真		1926(大正15)年
72	試験問題	2枚	一紙	近藤清次郎	1937(昭和12)年、 1938(昭和13)年
73	渡辺格司 写真	1枚	写真		1941(昭和16)年
74	菅野寅夫 写真	1枚	写真		1940(昭和15)年
75	「菅野先生とアインシュタイン博士」 『全国五高会会報』50号	1冊	冊子		1987(昭和62)年9月
76	竹原東一 写真	1枚	写真		1935(昭和10)年
77	『丘の路』	1冊	書籍	竹原東一	1993(平成5)年
78	山崎兎茂吉 契約等書類	1式	一紙	第五高等学校	1890(明治23)年、1895(明治28)年、1897(明治30)年
79	山崎兎茂吉 出張命令	1枚	一紙	第五高等学校	1894(明治27)年
80	五高教職員 集合写真(複製)	8枚	写真		1916(大正5)年、1929(昭和4)年、1937(昭和12)年、1942(昭和17)年、1945(昭和20)年
81	担当箱	1架	木材		
82	会議用の椅子	1脚	木材、布		
83	隅棚	1架	木材		

第4展示室 【五高の卒業生】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	五高卒業生と学科課程の変遷	1枚	パネル		2013(平成25)年
2	学校系統図	1枚	パネル		2013(平成25)年
3	五高卒業生紹介	1枚	パネル		2013(平成25)年
4	五高時代と首相時代の池田勇人 コラージュ	1枚	写真		
5	首相時代の池田勇人 写真	2枚	写真		1961(昭和36)年、 1964(昭和39)年
6	五高時代の池田勇人	1枚	写真		
7	五高時代の佐藤栄作	1枚	写真		
8	大学紛争直後の東京大学を視察する 佐藤栄作	1枚	写真		1964(昭和39)年
9	ノーベル平和賞を受ける佐藤栄作	1枚	写真		1974(昭和49)年12月10日
10	寺田寅彦卒業記念写真	1枚	写真		1899(明治32)年
11	『触媒』	1冊	書籍	寺田寅彦	1935(昭和10)年
12	「自動車産業の国際化」 『全国五高会会報』45号	1枚	冊子	山本健一	1986(昭和61)年6月
13	西村龍介 写真・小西六社誌(写)	2枚	写真	小西六社	1934(昭和9)年
14	『次郎物語』	1冊	書籍	下村湖人	1987(昭和62)年
15	新風土 「次郎物語」	1冊	冊子	下村湖人	1948(昭和23)年

番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
16	「短歌」『会報』2号	1枚	冊子	下村湖人	1931(昭和6)年
17	下村湖人 写真	1枚	写真		1906(明治39)年
18	生徒課日誌(写)	1枚	冊子	第五高等学校	1907(明治40)年9月17日
19	『萩原朔太郎詩集』	1冊	書籍	萩原朔太郎	1970(昭和45)年
20	随筆「池田勇人-敗戦と復興の現代史」	1冊	書籍	林房雄	1968(昭和43)年5月25日
21	林房雄 色紙	1枚	色紙	林房雄	1987(昭和62)年
22	『万葉の歌人』	1冊	書籍	犬養孝	1985(昭和60)年
23	「八雲先生と五高」『会報』8号	1冊	冊子	木下順二	1935(昭和10)年
24	『夕鶴』	1冊	書籍	木下順二	1984(昭和59)年
25	「春」『龍南』230号	1冊	冊子	梅崎春生	1935(昭和10)年
26	中野孝次 年賀状(写)	1枚	葉書	中野孝次	1982(昭和57)年
27	『ハラスのいた日々』	1冊	書籍	中野孝次	1987(昭和62)年
28	『華の乱』	1冊	書籍	永畑道子	1988(平成10)年
29	大川周明 写真	1枚	写真		1907(明治40)年
30	『古蘭』	1冊	書籍	大川周明訳	1950(昭和25)年
31	大川周明 『全国五高会会報』50号	1冊	冊子		1987(昭和62)年9月
32	『空想より化学へ』	1冊	書籍	大内兵衛訳	1946(昭和21)年
33	『論語』	1冊	書籍	宇野哲人訳	1929(昭和4)年
34	『大学・中庸』	1冊	書籍	宇野哲人訳	1930(昭和5)年
35	牛原虚彦 写真	2枚	写真		1926(大正15)年、 1942(昭和17)年
36	『虚彦映画譜50年』	1冊	書籍	牛原虚彦	1934(昭和9)年
37	李 源京 『全国五高会会報』35号	1冊	冊子	多々見恭資	1983(昭和58)年
38	『怒りの河』	1冊	冊子	李 佳炯	1995(平成7)年
39	女子生徒の合格を報じる記事	1枚	一紙	熊本日日新聞	1948(昭和23)年3月23日

第5展示室 【五高の教育】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	掛木札 生徒心得	1枚	木材	第五高等学校	
2	掛木札 図書閲覧細則	1枚	木材	第五高等学校	1906(明治39)年
3	図書カード整理箱	1架	木材	第五高等学校	
4	図書閲覧室 写真(複製)	1枚	写真		1927(昭和2)年
5	入学試験問題(複製)	2枚	一紙		1887(明治20)年、 1900(明治33)年
6	総合共通選抜制 入学試験問題	4枚	一紙		1904(明治37)年
7	入学通知	1式	葉書	第五高等学校	1936(昭和11)年
8	教科書	7冊	書籍		
9	理科実験道具	1式			
10	龍南学徒報国団規則(複製)	1冊	冊子	第五高等学校	1940(昭和15)年
11	龍南学徒報国団の組織編成図(複製)	1枚	冊子	第五高等学校	1941(昭和16)年
12	徴集者名簿(複製)	1冊	冊子	第五高等学校	1943(昭和18)年
13	出陣学徒壮行会での送辞・答辞(複製)	2枚	一紙	森 俊世、棧 熊獅	1943(昭和18)年10月13日
14	出陣学徒壮行会 写真(複製)	1枚	写真		1943(昭和18)年10月13日
15	学徒出陣時に詠んだ短歌(複製)	1枚	一紙		1943(昭和18)年10月

番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
16	表彰状 学徒動員	3枚	一紙	第五高等学校	1945(昭和20)年
17	徴兵検査旅行証(複製)	1枚	一紙		1944(昭和19)年5月26日
18	終戦の日の寮務日誌(複製)	1枚	冊子		1945(昭和20)年8月15日
19	森興彦 出陣の記録	1式	木材、金属		
20	銃架	1台			
21	戦時写真(複製)	3枚			

第6展示室 【五高生の生活】



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	制作年代
1	提灯	2個	木、紙		
2	大太鼓	1張		池田勇人寄贈	1964(昭和39)年10月
3	小太鼓	1張		東京五高会寄贈	
4	恵利武 写真(複製)	1枚	写真		
5	『寮歌集』	1冊	冊子	五高同窓会	1934(昭和9)年
6	寮歌(MD試聴)	1枚		五高同窓会	
7	寮生誓詞(写)	1枚	写真	第五高等学校習学寮	1940(昭和15)年
10	「習学寮報」創刊号(写)	1枚	冊子	第五高等学校習学寮	1937(昭和12)年
11	外出又は外泊に関する指令簿	1冊	冊子	第五高等学校習学寮	1911(明治44)年
12	第五高等学校習学寮炊事部日計表	1枚	冊子	第五高等学校習学寮	10月15日
13	習学寮食器 木箱(壬寅8/17)付き	3個	陶器	第五高等学校習学寮	
14	習学寮木札	1個	木材	第五高等学校習学寮	
15	第五高等学校習学寮之印	1個	木材	第五高等学校習学寮	
16	習学寮名入りバックル	1個	金属	第五高等学校習学寮	
17	習学寮鉄製・陶器火鉢	2個	鉄、陶器	第五高等学校習学寮	
18	写真 寮生活、学校生活	1式	写真		
19	五高生逍遥地図	1枚	パネル		
20	部誌、同人誌	1式	冊子		
21	大太鼓	1張		福岡五高会寄贈	

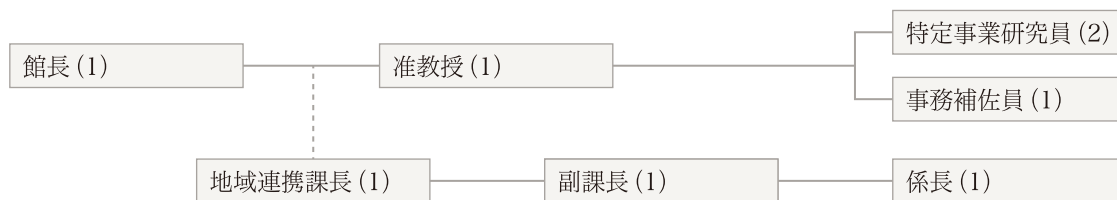
復原教室



番号	資料名称	員数	材質・形態等	作成者・発行者	年代
1	黒板	1台	木材		
2	教卓	1台	木材		
3	机・椅子	36個	木材		

(薄田千穂)

4 機構



(2018年3月現在)

5 教職員

館長 (併任)	伊東龍一	(2016年4月1日～)
准教授 (専任)	岩崎竹彦	(2007年1月1日～)
客員教授	磯田桂史	(2012年9月1日～)
客員教授	アラン・ローゼン	(2014年4月1日～)
客員准教授	村田由美	(2015年9月1日～)
特定事業研究員 (非常勤)	藤本秀子	(2006年4月1日～)
特定事業研究員 (非常勤)	薄田千穂	(2017年5月1日～)
事務補佐員 (非常勤)	市原富代	(2013年10月1日～)
社会連携課 課長	吉本昭彦	(2013年12月2日～)
社会連携課 副課長	田代久美子	(2016年4月1日～)
社会連携課 係長	小野亮一	(2016年4月1日～)

(2018年3月現在)

6 五高記念館等運営委員会

(2018年3月現在)

部局名	職名	氏名	任期	備考
五高記念館	館長	伊東龍一	役職指定	1号委員 (館長) 委員長
五高記念館	准教授	岩崎竹彦	役職指定	2号委員 (専任教員)
附属図書館	館長	高宮正之	役職指定	3号委員 (図書館長)
文学部	准教授	安高啓明	2016.4.1 ～ 2018.3.31	4号委員 (文選出)
教育学部	准教授	跡上史郎	2016.4.1 ～ 2018.3.31	4号委員 (教育選出)
法学部	教授	外川健一	2016.4.1 ～ 2018.3.31	4号委員 (法選出)
大学院社会文化科学研究科	教授	山下裕作	2016.4.1 ～ 2018.3.31	5号委員 (社文選出)
大学院法曹養成研究科	教授	橋本 真	2016.4.1 ～ 2018.3.31	5号委員 (法曹選出)
大学院生命科学研究部 (医学系)	教授	片渕秀隆	2016.4.1 ～ 2018.3.31	6号委員 (医学系選出)
大学院生命科学研究部 (薬学系)	准教授	松永浩文	2016.4.1 ～ 2018.3.31	6号委員 (薬学系選出) 8号委員 (兼務教員)
大学院先端科学研究部 (理学系)	教授	西野 宏	2016.4.1 ～ 2018.3.31	7号委員 (理学系選出)
大学院先端科学研究部 (工学系)	准教授	桂 英昭	2016.4.1 ～ 2018.3.31	7号委員 (工学系選出)
マーケティング推進部 社会連携課	課長	吉本昭彦	職指定	9号委員

(順不同)

7 教職員等の変遷

[1] 館長

第1代館長	魚津郁夫 (文学部教授)	1993年8月1日～1996年3月31日
第2代館長	江藤 孝 (法学部教授)	1996年4月1日～1999年3月31日
第3代館長	岩岡中正 (法学部教授)	1999年4月1日～2003年4月30日
第4代館長	北野 隆 (大学院自然科学研究科教授)	2003年5月1日～2006年3月31日
第5代館長	伊藤重剛 (大学院自然科学研究科教授)	2006年4月1日～2016年3月31日
第6代館長	伊東龍一 (先端科学研究部教授)	2016年4月1日～

[2] 教職員 (五高記念館内)

准教授	岩崎竹彦	2007年 1月1日～
特定事業研究員	藤本秀子	2006年 4月1日～
特定事業研究員	薄田千穂	2006年11月1日～2016年10月31日 2017年 5月1日～
事務補佐員	東 孝治	1999年 4月1日～2011年 3月31日
事務補佐員	薄田千穂	2006年 5月1日～2006年10月31日
事務補佐員	竹森良子	2006年 7月4日～2007年 3月31日
事務補佐員	洲崎五十鈴	2007年 4月1日～2008年 3月31日
事務補佐員	市原富代	2008年4月1日～2013年3月31日 2013年10月1日～
事務補佐員	興梶順美	2009年11月1日～2011年3月31日
事務補佐員	草野 航	2011年8月22日～2012年3月31日
事務補佐員	松村 侑	2011年9月1日～2012年3月31日
事務補佐員	山田高司	2011年9月12日～2013年3月31日
事務補佐員	小多信幸	2011年9月12日～2014年3月31日
事務補佐員	田中希和	2011年10月3日～2014年3月31日
事務補佐員	村口森恵	2011年10月5日～2013年3月31日
事務補佐員	野山倫太郎	2011年10月17日～2012年3月31日
事務補佐員	宮田恭子	2011年11月7日～2015年3月31日
事務補佐員	戸島由加里	2013年7月17日～2014年3月31日
事務補佐員	佐藤理恵	2013年8月1日～2014年3月31日
客員教授	磯田桂史	2012年9月1日～
客員教授	アラン・ローゼン	2014年4月1日～
客員准教授	村田由美	2014年4月1日～
市民研究員	東 孝治	2011年4月1日～2017年3月31日

[3] 五高記念館等運営委員会

第7期 (2012年4月1日～2014年3月31日)

部局名	職名	氏名	任期	備考
五高記念館	館長	伊藤重剛	役職指定	1号委員(館長)委員長
五高記念館	准教授	岩崎竹彦	役職指定	2号委員(専任教員)
附属図書館	館長	森正人	役職指定 2012.4.1～2013.3.31	3号委員(図書館長)
		大熊 薫	役職指定 2013.4.1～2014.3.31	
文学部	教授	牧野厚史	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(文選出)
教育学部	准教授	春田直紀	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(教育選出)
法学部	教授	大澤博明	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(法選出)
大学院自然科学研究科(理学系)	准教授	磯部博志	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(理、自然選出)
大学院生命科学研究部(医学系)	教授	山本哲郎	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(医、医教選出) 兼務教員
大学院自然科学研究科(工学系)	教授	伊東龍一	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(工、自然選出)
大学院社会文化科学研究科	教授	山下裕作	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(社文選出)
大学院法曹養成研究科	教授	山本悦夫	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(法曹選出)
	准教授	徳永達哉	2012.4.1～2014.3.31	
大学院生命科学研究部(薬学系)	准教授	松永浩文	2012.4.1～2014.3.31	4号委員(薬教選出) 兼務教員
マーケティング推進部 地域連携ユニット	部長	今田幸二郎	役職指定 2012.4.1～12.26	5号委員
	ユニット長	永田正次	役職指定 2012.12.27～2013.9.30	
		吉本昭彦	役職指定 2013.12.2～2014.3.31	
運営基盤管理部総務担当	部長	山下 登	役職指定 2012.4.1～12.26	6号委員
運営基盤管理部財務担当	部長	松原省三	役職指定 2012.4.1～12.26	7号委員
政策創造研究教育センター	教授	上野真也	2012.4.1～2014.3.31	8号委員 2012.4.1～12.26
				6号委員 2012.12.27～2014.3.31
大学院自然科学研究科(工学系)	准教授	星野裕司	2012.4.1～2014.3.31	兼務教員
埋蔵文化財調査センター	准教授	松田光太郎	2012.4.1～2014.3.31	兼務教員

(順不同)

第8期 (2014年4月1日～2016年3月31日)

部局名	職名	氏名	任期	備考
五高記念館	館長	伊藤重剛	役職指定	1号委員(館長) 委員長
五高記念館	准教授	岩崎竹彦	役職指定	2号委員(専任教員)
附属図書館	館長	大熊 薫	役職指定 2014.4.1～2015.3.31	3号委員(図書館長)
		山尾敏孝	役職指定 2015.4.1～2016.3.31	
文学部	准教授	パウアー・トビアス	2014.4.1～2016.3.31	4号委員(文選出)
教育学部	教授	春田直紀	2014.4.1～2016.3.31	4号委員(教育選出)
法学部	教授	木村俊夫	2014.4.1～2016.3.31	4号委員(法選出)
大学院自然科学研究科(理学系)	准教授	杉崎文亮	2014.4.1～2016.3.31	7号委員(理学系選出)
大学院生命科学研究部(医学系)	教授	興梠博次	2014.4.1～2016.3.31	6号委員(医学系選出) 8号委員(兼務教員)
大学院自然科学研究科(工学系)	教授	伊東龍一	2014.4.1～2016.3.31	7号委員(工学系選出) 8号委員(兼務教員)
大学院社会文化科学研究科	教授	山下裕作	2014.4.1～2016.3.31	5号委員(社文選出)
大学院法曹養成研究科	教授	橋本 眞	2014.4.1～2016.3.31	5号委員(法曹選出)
大学院生命科学研究部(薬学系)	准教授	松永浩文	2014.4.1～2016.3.31	6号委員(薬学系選出) 8号委員(兼務教員)
マーケティング推進部 地域連携ユニット	ユニット長	吉本昭彦	職指定	9号委員
政策創造研究教育センター	教授	上野眞也	2014.4.1～2016.3.31	10号委員
埋蔵文化財調査センター	准教授	松田光太郎	2014.4.1～2016.3.31	8号委員(兼務教員)

(順不同)

第9期 (2016年4月1日～2018年3月31日)

部局名	職名	氏名	任期	備考
五高記念館	館長	伊東龍一	役職指定	1号委員(館長) 委員長
五高記念館	准教授	岩崎竹彦	役職指定	2号委員(専任教員)
附属図書館	館長	山尾敏孝	役職指定 2016.4.1～2017.3.31	3号委員(図書館長)
		高宮正之	役職指定 2017.4.1～2018.3.31	
文学部	准教授	安高啓明	2016.4.1～2018.3.31	4号委員(文選出)
教育学部	准教授	跡上史郎	2016.4.1～2018.3.31	4号委員(教育選出)
法学部	教授	外川健一	2016.4.1～2018.3.31	4号委員(法選出)
大学院社会文化科学研究科	教授	山下裕作	2016.4.1～2018.3.31	5号委員(社文選出)
大学院法曹養成研究科	教授	橋本 眞	2016.4.1～2018.3.31	5号委員(法曹選出)
大学院生命科学研究部(医学系)	教授	片渕秀隆	2016.4.1～2018.3.31	6号委員(医学系選出)
大学院生命科学研究部(薬学系)	准教授	松永浩文	2016.4.1～2018.3.31	6号委員(薬学系選出) 8号委員(兼務教員)
大学院先端科学研究部(理学系)	教授	西野 宏	2016.4.1～2018.3.31	7号委員(理学系選出)
大学院先端科学研究部(工学系)	准教授	桂 英昭	2016.4.1～2018.3.31	7号委員(工学系選出)
マーケティング推進部 社会連携課	課長	吉本昭彦	職指定	9号委員

(順不同)

8 五高記念館等運営委員会記録

平成25年度 (2013.4～2014.3)

■第1回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2013年6月14日(金) 13時30分～15時
- 2 場所 五高記念館1階 講義室
- 3 議事 (1) 平成24年度事業報告について
(2) 平成24年度決算(収支報告)について
(3) 平成25年度事業計画について
(4) 平成25年度予算執行計画について
(5) ユニバーシティ・ミュージアム構想への取組について
(6) 館長候補者の選考方法について

4 報告 兼業について

【資料】

- 資料1 五高記念館等運営委員会名簿
- 資料2 平成24年度五高記念館事業報告
- 資料3 平成25年度五高記念館事業計画(案)
- 資料4 平成24年度五高記念館収支報告(案)
- 資料5 平成25年度五高記念館予算執行計画(案)
- 資料6-1 平成25年度学長裁量経費採択状況
- 資料6-2 ミュージアム構想(第2期5カ年計画)
- 資料7 兼業状況
- 資料8 五高記念館等規則

■第2回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2013年6月28日(金)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 五高記念館長候補者選考方法の制定について

【資料】

- 熊本大学五高記念館長候補者選考方法について(案)

■第3回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2013年12月25日(水)
13時30分～14時45分
- 2 場所 五高記念館1階 講義室
- 3 議事 (1) ユニバーシティ・ミュージアム構想第2期5カ年計画に伴う学長裁量経費の要求について
(2) 客員教授等の受入について
(3) 館長候補者の推薦について
- 4 報告 (1) ユニバーシティ・ミュージアム構想ロゴマークについて
(2) 留学生ボランティアガイドについて

- (3) 展示用映像の制作について
- (4) 耐震診断について

【資料】

- 資料1 五高記念館等運営委員会名簿
- 資料2-① 平成26年度学長裁量経費要求書
- 資料2-② 第2期ユニバーシティ・ミュージアム構想5カ年計画
- 資料3 教員資格審査票
- 資料4 五高記念館等規則

■第4回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2014年1月31日(金)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 黒髪北キャンパス省エネルギー等対策委員会規則の制定について

【資料】

- 黒髪北キャンパス省エネルギー等対策委員会規則(案)

■第5回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2014年3月6日(木)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 市民研究員の受入れについて

【資料】

- 資料1 五高記念館市民研究員申込書
- 資料2 五高記念館等規則

平成26年度 (2014.4～2015.3)

■第1回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2014年5月22日(木) 16時～17時10分
- 2 場所 五高記念館1階 講義室
- 3 議事 (1) 平成25年度事業報告について
(2) 平成25年度決算(収支報告)について
(3) 平成26年度事業計画について
(4) 平成26年度予算執行計画について
(5) ユニバーシティ・ミュージアム構想に係る学長裁量経費の配分について
(6) 組織評価の実施について
(7) 外部評価委員会について
- 4 報告 (1) 兼業について
(2) 客員教授について

【資料】

- 資料1 五高記念館等運営委員会名簿

資料2 平成25年度五高記念館事業報告
 資料3 平成26年度五高記念館事業計画(案)
 資料4 平成25年度五高記念館収支報告(案)
 資料5 平成26年度五高記念館予算執行計画(案)
 資料6-1 平成26年度学長裁量経費配分通知
 資料6-2 経費配分(案)
 資料6-3 ミュージアム構想(第2期5カ年計画)
 資料7 組織評価の実施について
 資料8 兼業状況
 資料9 五高記念館等規則

■第2回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2014年6月16日(月)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 五高記念館等規則の一部改正及び「組織についての申し合わせ」の制定について

【資料】

資料1 五高記念館等規則の改正に係る新旧対照表
 資料2 五高記念館等運営委員会の組織についての申し合わせ
 資料3 五高記念館等規則

■第3回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2014年9月22日(月)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 組織評価自己評価書について

【資料】

五高記念館組織評価自己評価書

■第4回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2015年1月26日(金)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 「熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム構想」関連事業に係る平成27年度学長裁量経費の要求について

【資料】

資料1 第2期ユニバーシティ・ミュージアム構想5カ年計画
 資料2 平成27年度学長裁量経費要求書

■第5回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2015年3月2日(月)
- 2 場所 書面会議
- 3 議事 学校教育法等の一部改正に伴う学内規則等の改正について

【資料】

資料1 熊本大学五高記念館等規則の一部改正(案)

新旧対照表

資料2 五高記念館等規則
 資料3 熊本大学五高記念館教員の再任審査等に関する内規の一部改正(案)新旧対照表
 資料4 熊本大学五高記念館教員の再任審査等に関する内規
 資料5 学校教育法等の一部改正に伴う学内規則等の改正等手続について

平成27年度(2015.4～2016.3)

■第1回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2015年6月5日(金)
13時05分～14時15分
- 2 場所 本部棟1階 大会議室
- 3 議事 (1) 平成26年度事業報告について
(2) 平成26年度収支について
(3) 平成27年度事業計画について
(4) 平成27年度予算執行計画について
(5) 客員教員の名称付与について
- 4 報告 (1) ユニバーシティ・ミュージアム構想の進捗状況について
(2) 兼業について
(3) 薬園パーク事業について

【資料】

五高記念館等運営委員会名簿
 資料1 平成26年度五高記念館事業報告
 資料2 平成26年度五高記念館収支報告(案)
 資料3-1 平成27年度五高記念館事業計画(案)
 資料3-2 平成27年度学長裁量経費要求書
(五高記念館本館及び同化学実験場展示整備計画事業)
 資料4 平成27年度五高記念館予算執行計画(案)
 資料5 第2期ユニバーシティ・ミュージアム構想5カ年計画
 資料6 兼業状況
 参考資料 五高記念館等規則
 教員資格審査票(会議後回収)

■第2回五高記念館等運営委員会次第

- 1 日時 2015年12月15日(火)
14時30分～15時35分
- 2 場所 本部棟1階 大会議室
- 3 議事 (1) 五高記念館長候補者推薦要項の制定について
(2) 次期五高記念館長について

- 4 報告 (1) 入館者数について
(2) 耐震補強工事計画について

【資料】

五高記念館等運営委員会名簿
資料1-1 五高記念館候補者推薦要項(案)
資料1-2 五高記念館長候補適任者推薦書(案)
資料2 五高記念館長推薦スケジュール(案)
資料3 (参考) 五高記念館長候補者選考方法について
資料4 (参考) 熊本大学部局長等候補者選考規則
資料5 (参考) 五高記念館等規則

■第3回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2016年1月12日(火)
2 場所 メール会議
3 議事 (1) 次期五高記念館長候補者に対する投票について
(2) 五高記念館等規則の一部改正について

【資料】

資料1 五高記念館長候補適任者推薦書
資料2 五高記念館長候補者推薦要項
資料3 五高記念館等規則の一部改正(案)
新旧対照表
資料4 先端科学研究部設置計画書(案)

■第4回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2016年1月25日(火)
2 場所 メール会議
3 議事 次期五高記念館長候補者を1名とすることについて

■第5回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2016年3月8日(火)
2 場所 メール会議
3 議事 五高記念館市民研究員の受入について

【資料】

資料1 五高記念館市民研究員申込書
資料2 五高記念館市民研究員要項

平成28年度(2016.4～2017.3)

■第1回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2016年8月8日(金) 16時10分～17時
2 場所 本部棟1階 大会議室
3 議事 (1) 平成27年度事業報告について
(2) 平成27年度収支について

- (3) 平成28年度事業計画について
(4) 平成28年度予算執行計画について

- 4 報告 (1) ユニバーシティ・ミュージアム構想の進捗状況について
(2) 兼業について
(3) 外部資金の獲得状況について
(4) 五高記念館一般公開の概要と年間入館者数

【資料】

五高記念館等運営委員会名簿
資料1 平成27年度五高記念館事業報告
資料2 平成27年度五高記念館収支報告(案)
資料3 平成28年度五高記念館事業計画(案)
資料4 平成28年度五高記念館予算執行計画(案)
資料5-1 第2期ユニバーシティ・ミュージアム構想5カ年計画
資料5-2 平成28年度学長裁量経費要求書
(五高記念館本館及び同化学実験場展示整備計画事業)
資料6 兼業状況
資料7 外部資金獲得状況について
参考資料 五高記念館等規則
五高記念館一般公開の概要と年間入館者数
「五高と漱石」

■第2回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2017年2月28日(火)
2 場所 メール会議
3 議事 五高記念館等運営委員会規則の改正について

【資料】

資料1 新組織設置に伴う五高記念館等運営委員会規則の改正について
資料2 人文社会科学部研究部の組織及び管理運営体制(案)

■第3回五高記念館等運営委員会

- 1 日時 2017年3月27日(月)
2 場所 メール会議
3 議事 教員の併任について

【資料】

教員の併任について(依頼)

(薄田千穂)

熊本大学五高記念館等規則

(平成18年10月26日規則第253号)

改正 平成19年 3月30日規則第179号

平成20年 9月25日規則第239号

平成22年 9月30日規則第247号

平成24年12月27日規則第138号

平成26年 6月23日規則第 83号

平成27年 3月11日規則第 96号

平成28年 1月18日規則第 5号

平成28年 2月19日規則第 17号

平成29年 3月31日規則第177号

(趣旨)

第1条 この規則は、熊本大学学則(平成16年4月1日制定)第9条第2項の規定に基づき、熊本大学五高記念館(以下「五高記念館」という。)に関し必要な事項を定め、併せて熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム構想を視野に入れた熊本大学(以下「本学」という。)の貴重な学術研究資料及び建築物(以下「資料」という。)の活用に関し必要な事項を定める。

[熊本大学学則第9条第2項]

(設置目的)

第2条 五高記念館は、本学及び旧制第五高等学校、旧制第五高等学校その他本学の沿革にある学校の発足以来の資料の充実を図るとともに、質の高い学芸員教育を行い、もって、本学の教育研究に貢献し、地域文化の発展・向上に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 五高記念館は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 旧制第五高等学校の本館及び化学実験場(以下「五高記念館施設」という。)の資料を収集、整理及び保管し、並びに展示・公開すること。
- (2) 五高記念館施設の資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
- (3) 五高記念館施設の資料に関する講演会、講習会、研究会等の実施に関すること。
- (4) 学芸員教育に関すること。
- (5) 工学部研究資料館その他学部等の資料館に係る第1号から第3号までの業務に関する学部等に対する支援
- (6) その他五高記念館の業務に関し必要な事項

(組織)

第4条 五高記念館に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 館長
- (2) 専任教員
- (3) 兼務教員
- (4) その他必要な職員

(館長)

第5条 館長の選考及び任命は、本学専任の教授のうちから、第8条に定める委員会の推薦を受けて、学長が行う。

[第7条]

- 2 館長は、五高記念館の業務を掌理する。
- 3 館長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 館長に欠員が生じた場合の補欠の館長の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(兼務教員)

第6条 兼務教員は、本学の教員のうちから、館長の推薦を受けて、学長が任命する。

- 2 館長は、前項の推薦を行うに当たっては、兼務教員として推薦しようとする者の所属する部局の長の同意を得るものとする。
- 3 兼務教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 兼務教員に欠員が生じた場合の補欠の兼務教員の任期は、前任者の残任期間とする。

(業務協力者)

第7条 五高記念館は、次に掲げる業務協力者を受け入れることができる。

- (1) ミュージアム・フェロー
- (2) 市民研究員

- 2 業務協力者に関し必要な事項は、別に定める。

(委員会の設置)

第8条 五高記念館及び学部等の資料館(以下「五高記念館等」という。)の管理運営に関し必要な事項を審議するため、熊本大学五高記念館等運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(委員会の組織)

第9条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 館長
- (2) 五高記念館の専任教員
- (3) 附属図書館長
- (4) 教育学部から選出された教授又は准教授 1人

- (5) 大学院各研究部から選出された教授又は准教授 各2人
 - (6) 兼務教員
 - (7) マーケティング推進部社会連携課長
 - (8) その他委員長が必要と認めた者 若干人
- 2 前項第4号及び第5号までの委員は、兼務教員がこれを兼ねることができる。ただし、当該教員が所属する部局等から選出された委員に限る。
- 3 前項第4号、第5号及び第8号の委員は、学長が委嘱する。
- 4 第1項第4号、第5号及び第8号委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 5 第1項第4号、第5号及び第8号の委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第10条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 五高記念館の管理運営に関すること。
- (2) 五高記念館の業務に関すること。
- (3) 館長の推薦に関すること。
- (4) 熊本大学ユニバーシティ・ミュージアム構想の具体化に関すること。
- (5) その他五高記念館等に関し必要な事項

(委員長)

第11条 委員会に、委員長を置き、館長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第12条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決することができない。

- 2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第13条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を委員会に出席させて意見を聴くことができる。

(事務)

第14条 五高記念館及び委員会の事務は、マーケティング推進部社会連携課が処理する。

(雑則)

第15条 この規則に定めるもののほか、五高記念館の管理運営に関し必要な事項は、館長が別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成18年12月1日から施行する。

- 2 熊本大学五高記念館等規則(平成16年4月1日制定)は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される館長は、第5条第1項の規定にかかわらず、この規則施行の際現に熊本大学五高記念館長である者をもって充てるものとし、その任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される兼務教員の任期は、第6条第3項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に委嘱される第8条第1項第4号の委員は、この規則施行の際現に附則第2項による廃止前の熊本大学五高記念館等規則第8条第1項第3号の委員である者をもって充てるものとし、その任期は、第8条第3項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。

附 則(平成19年3月30日規則第179号)

この規則は、平成19年4月1日から施行する。

附 則(平成20年9月25日規則第239号)

この規則は、平成20年10月1日から施行する。

附 則(平成22年9月30日規則第247号)

この規則は、平成22年10月1日から施行する。

附 則(平成24年12月27日規則第138号)

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則(平成26年6月23日規則第83号)

この規則は、平成26年6月23日から施行する。

附 則(平成27年3月11日規則第96号)

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則(平成28年1月18日規則第5号)

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則(平成28年2月19日規則第17号)

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則(平成29年3月31日規則第177号)

この規則は、平成29年4月1日から施行する。



VI 学芸養成課程

本学の学芸員養成課程は、平成24年度以降入学生を対象としたカリキュラムにおいて、博物館実習(3単位)をⅠ・Ⅱ・Ⅲに分け、Ⅰを見学実習、Ⅱを学内実務実習、Ⅲを館園実習としている(単位数はいずれも1単位)。

Ⅰの見学実習では、様々な博物館(設置者別・法的区分別・館種別)の運営実態を学ぶことを目的とし、本学五高記念館及び工学部研究資料館を含め、熊本県内の博物館を14館程度見学している。とくにバックヤードの見学を通して施設及び設備の理解を深め、空調・照明・燻蒸設備等、資料の展示・収蔵に係る施設整備のあり方を学習すると共に、展示手法やボランティアスタッフの活用等、学芸員養成課程を履修する上で必要な全般的知識の理解を図っている。見学に際し、五高記念館専任教員が引率指導を行っている。

Ⅱの学内実務実習は、博物館相当施設の指定を受けている五高記念館内で行い、可能なかぎり博物館の学芸活動に即した形で実施している。指導は五高記念館専任教員が行っている。

内容は受講人数の関係で変わることはあるが、おおむね以下の内容を基本としている。

- ① 博物館における資料調査
- ② 資料の取扱い及び梱包
- ③ 調査研究活動
- ④ 教育普及事業
- ⑤ 展示活動

展示活動は熊本県博物館ネットワークセンターの協力を得て、学生たちが実際に展示する「ちょっと昔のくらし探検」展を五高記念館企画展示室で開催している。展示指導は、熊本県博物館ネットワークセンター学芸員及び五高記念館専任教員が担当している。

平成25年度から27年度までの会期及び期間中入館者数は以下の通りである。

平成25年度

平成26年度

平成27年度

Ⅲの館園実習は、学外の博物館施設での受講を前提としているが、五高記念館でも専任教員及び研究員が指導し、受講可能な体制を整えている。

(岩崎竹彦)

研究

漱石の家 熊本の二つの住い

伊東龍一 五高記念館 館長

一 はじめに

江戸には士農工商合わせて百万を超える人々がいたといわれる。しかし、一戸建てを生涯の夢とする多くの現代人とは異なり、大多数の人が借家に住んでいた。借家であればなおさら、転居もし易いであろう。住み心地が悪ければ、あるいは気分転換のために、そうでなければ借金から逃れるために転居する。

葛飾北斎がそうだった。江戸が東京となってからの古今亭志ん生も同様である。1867(慶応3)年江戸牛込馬場下横町(現・新宿区喜久井町)生まれの夏目漱石は、ものごころつく前から里子に出され、養子になり、再び引き取られたから、そのたびに家移ったことになる。大学卒業後も、松山、熊本、ロンドン、東京に住み、東京でもよく知られている千駄木の通称「猫の家」、西片町の家、西早稲田の漱石山房と移り住んでいる。

西方町の家を出るときに貸家を探し回ったメモも残されている。とにかくたくさん住宅を見ている。

漱石の小説には、建築が効果的に用いられている。登場人物の住まいが重要な役割を果たす。それは、すでに多くの先人が指摘するように、漱石は最初から文学一筋の人ではなく、建築を志していたことがあったほど、建築に関心を持っていたことと関係すると思われる。とにかく彼の残した作品における住まいの描写には整合性があり、描写は一定の形や間取りに収斂してゆくように思われる。明治時代や大正時代の日本に設定された住まいのなかを、登場人物は歩き回り、昼寝をしたり、番茶を飲み、晩食を食い、顔を洗う。間取りと各部屋の使い方もよくわかる。一方、この現実

の世界においては、古い建物としての住宅は残されていても、各部屋の使い方ではなかなか記録されていることはないのである。住まいのパリエーションは、漱石が実際に様々な住まいの経験に裏打ちされているに違いない。単純に時系列でながめてみると、様々な住まいに住んだ後、東京へ戻って、千駄木の「猫の家」で「吾輩は猫である」を、「漱石山房」で「三四郎」や「門」・「こころ」を書いているからである。単純すぎるだろうか。

ここでは漱石の文学上の問題を取り扱うつもりはない。彼の住んだ住宅のうち、あまり触れられていない熊本の2つの住いについて、とくにその間取りに注目して見直してみる。いずれにも近年急速に進められてきた近代住宅史の成果を少しばかり参照して考察を加えたい。

漱石が住んだ家やその小説に登場する家を分析した



【大江の家】外観西面

先行研究は少なくない。代表的なものをあげるならば、若山滋『漱石まちをゆく 建築家になろうとした作家』彰國社2002年があり、石崎等・中山繁信『建築の絵本 夏目漱石博物館 その生涯と作品の舞台』彰國社1985年、小幡陽次郎・横島誠次『名作文学にみる「家」』朝日新聞社1992年、前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房1982年などがある。その中で、住まいの間取りを一定の整合性をもって復元できるものに次の四つがある。①『吾輩は猫である』の苦沙弥先生の家(吾輩の家)、②『三四郎』の広田先生の家、③『門』の宗助夫婦の家、④『こころ』の先生の下宿先の家である。復元平面図案などがすでに作成されていて、それらについて著者は若干の異論がある。しかし、それは別稿で論じることとし、今回は、漱石が住んだ熊本の家について若干の考察を加えることとする。

二 漱石の住んだ熊本の家

『吾輩は猫である』の家は、今は明治村に移築され、保存されている漱石の千駄木にあった旧居をモデルにしていると言われる。彼の作品中の住宅は、どれも一定の姿に収斂するもので、すでに知られているように漱石の建築への関心の高さは間違いのないものである。彼の住んできた住宅は彼や彼の文学を理解するときに重要であるように思う。私がそれを分析するつもりはないが、彼の住んだ住宅がどういったものであったのか、

ここで言うのは、建築に詳しく、おそらくは当時の新しい住宅の姿をよく知った日本人がどのような住宅を選んだのかの具体例を示すことである。

漱石は熊本で6度も転居している。漱石の住居はいずれも借家である。それは熊本に長居をする気がなかったからかもしれないが、やむをえない理由以外に、気に入らないという理由での転居もあった。

そのなかで、内坪井の住宅は、少なくとも鏡子夫人の一番のお気に入りであった。また、大江の家は、畑に囲まれた田園風景の広がるところだったようで、住宅の建物そのものについてはなにも鏡子夫人は述べていないが、周辺環境が住宅にとって重要な要件ではあった。ここでは、大江、そして内坪井の二つの住宅に焦点を当てる。

① 大江の家

漱石は、1896年4月13日最初菅虎雄の家に寄寓し、5月9日には光琳寺あたりの敗屋と呼んだ家に移った。この2軒を除いて、熊本で漱石が住んだ家としては第三番目の家である。第一番目が結婚式を挙げて鏡子夫人と女中で住んだ光琳寺町の家、第二番目が合羽町の家で、この大江の家はそれに続くものである。

最初の家は、「藩の家老か誰かのお婆さんのいた家とかで、ちょっと風変わりな家でした。・・・元は玄関のつつきが十畳、次が六畳、茶の間が長四畳、湯殿、板蔵があって、それから離れが六畳と二畳と、こういう間取りでした。」(夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の



【大江の家】外観東南面



【大江の家】座敷

思い出』1929年、ここでは文春文庫版を用いた)しかし「小粋にできているのはいいですが、すぐ前が墓場である上に、ここで妾が不義をしておしてお手打ちになったとやらで、なんとなく不気味な家でした」(同『漱石の思い出』)ということで、合羽町の家に移すが、「まだ建って間もない家でしたが、がさつ普請でした。がそれでもこのほうがまだいい」というので引っ越したらしい。その後の家が大江の家である。「落合東郭さん(漢詩人、現侍従)のお宅」(同『漱石の思い出』)で「落合さんが東京に勤めていられて、自然家があいているのでおかりしたのでした。」(同)ここはたいそう景色のいいところで、家の前は一面に畑、その先が見渡す限り桑畑が続いて、森の都と言われる熊本郊外の秋の景色はまた格別でした。」(同)と夫人は言っている。

漱石が大江の家にいたのは、1897(明治30)年9月から翌31年3月までである。この住まいは、現在、水前寺公園近くに移築・保存されている。

現在の間取りを示すと次の通りである(下図参照)。棟をほぼ東西に向けた入母屋造・桧瓦葺・平屋の建物である。西側中央に玄関を開く、住宅の南側には、西から板床付きの六畳、六畳、床のある八畳の三室を並べる。玄関に続く住宅の中の列には、南北から使える三畳大の押入、四畳を配する。そして北側には、大きな土間をもつ台所と六畳である。南側の三室には縁が取りつき西端には便所が付く。縁の東端は北へ折れて床脇まで伸びる。

東南の畳床をもつ八畳が座敷である。夫人の居場

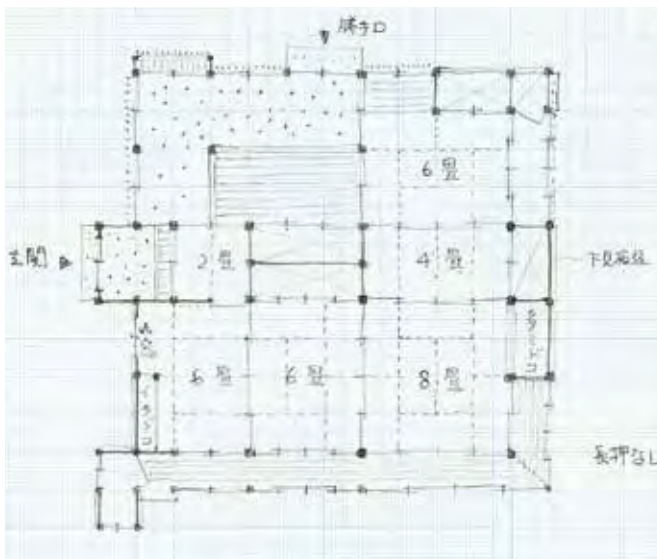
所である茶の間は北の台所の隣の六畳であろうか。座敷にも内法長押がない住まいである。

しかし、平面的には、6尺3寸×3尺1寸5分の京間畳を八畳ならば8枚、六畳ならば6枚並べ、その外側に柱を立てるという考え方で家全体の設計を考える畳割の住宅である。すでに松山で畳割の住宅の体験をしているはずであるが、東京では六尺心々制(柱の中心から柱の中心までを6尺で設計する方法)の住宅が普通だから漱石はずいぶん広々と感じたであろう。後年住むことになった千駄木の「猫の家」も六尺心々制の家である。

敷居上から鴨居下までの内法高は、5尺7寸(約1730mm)で、これは江戸時代以来変わらない一般的な寸法である。

② 内坪井の家

大江の家は、1898(明治31)年「三月、家主の落合東郭さんが東京からお帰りになって、熊本でおつとめになるということで、お家をお渡ししなければならなくなりました。そこで井川淵というところに小さい家を見つけまして、一時凌ぎにそこへ移りました」(同『漱石の思い出』)ということで引っ越さざるをえなくなる。しかし、ここにあるように、この井川淵の家は一時凌ぎであった。そこで同年7月に狩野亨吉の居た家が開いたのでそこへ移る。内坪井の家である。「秋狩野さんのおられた家があいたので、さっそく内坪井町の家に移りました。この家は熊本にいた間、私どもが住んだ



【大江の家】現状平面図



【内坪井の家】正面

家でいちばんいい家で、いまみてもなかなかつばなものです。なんでも五、六百坪も屋敷の地面があったと思いますが、桑畑があったり、庭も相当に広がったりしました。」(同) ここにあるように、夫人は熊本で一番いい家だったという。おそらく漱石も同じ気持であっただろう。1898(明治31)年7月から1900(明治33)年4月に北千反畑の家に転居するまで最も長くいたのがこの家であった。

棧瓦葺、平屋の家である(次頁の図参照)。東側に玄関を開き、その南側一列に東側から床・違棚のある一〇畳の座敷、床のある八畳、七畳と並ぶ。ただし、東側の座敷の南東には離れのように洋室の応接室が付く。北側には東に玄関に続く六畳、次に南北に二室の六畳が並ぶ。またこのうち北側の六畳の北側の位置には台所が附属する。

ここで注意しなければならないのは、この住宅の建設年代は、確かに漱石が住んだ住宅に違いないので、1898年以前であるが、洋室部分は1915(大正4)年の増築が明らかで、漱石のいた頃には無かったということである。現在の状況を見ても、東南の破風を半分だけ潰すようにして洋室が取り付いており、当初から計画して造ったのであれば生じるはずのない不自然さが目立つ。復原すると洋室はない。また南西隅に便所と共に突出する七畳間もなかったと思われる。これが復原される住宅の姿である。

洋室が玄関脇につく住宅は、1898(明治31)年に「和洋折衷の住家」として、「建築雑誌」で北田久一に

よって紹介されている。最も先進的な住宅として学会で紹介されたのがこのときであるから、漱石が住むようになった同年頃の熊本になくて当たり前である。

その上で間取りを分析しなくてはいけない。東南の隅は座敷であろう。内法長押が玄関の上がりの四畳半とそれに続く六畳、東南の一〇畳の座敷、西隣の八畳にある。その点でも大江の家より正統的な部屋の造りである。夫人や子供の部屋は台所に続く二つの六畳あたりであろう。

それでは、この住宅に新しい面は何もなかったのであろうか。そうではない。内法高に注目すると、この住宅は6尺(1818mm)もある。大江の住宅が5尺7寸であったから、3寸(約91mm)も高い。江戸時代以前の普通の住宅にはまず無かった寸法である。

佐賀県の近代の住宅の内法高を調べたことがある(『佐賀県近代和風建築調査報告書』佐賀県教育委員会 1996年参照)。明治以降も江戸時代以来の5尺7寸を採用することが多かったが、明治時代になると5尺8寸の例が現われ、1904(明治37)年になって建設された、極めて大規模な炭鉱王・高取伊好邸の大広間が6尺を採用していた。その後福岡では炭鉱王の住宅、すなわち麻生本家(明治42年)や伊藤伝右衛門邸(明治45年)も6尺を使う。しかし、いずれも大豪邸である。そして明治40年代の建設である。それ以降も6尺はほとんどみられない。したがって、地域は異なるが、内坪井の住居は内法高において極めて先進的である。一見すると伝統的な和風住宅に見えるが、そうでは



【内坪井の家】南面



【内坪井の家】座敷

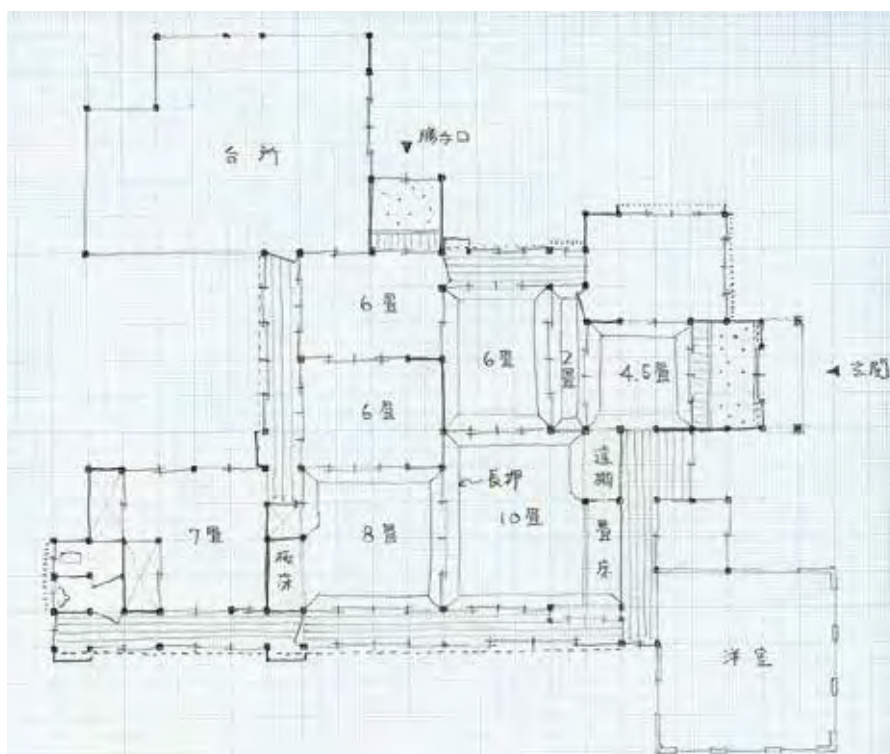
ない。内法高が高くなることについては、帽子を被る習慣ができ、それによって帽子が鴨居にあたらないように設計した例や、和室の中にイスやテーブルが置かれるようになり、イスに座ったときの目の位置が、畳に座ったときよりも高くなることに伴う変化として説明されることがある。理由は未だ十分に明らかにできないが、漱石以前には陸軍の関係者が住んでいたという。新しいものをいち早く取り入れる軍隊が住宅を変えた可能性は高い。この住宅に新しい傾向がはっきりと表れている。

三 おわりに

漱石は、幼少時から様々な住宅の中で育ち、松山でロンドンで東京で多くの借家に住む体験をしている。熊本でも六つの住宅体験をしており、それは東京では体験できなかった広々とした畳割の住宅の経験であり、

内坪井の内法高の高い、その後の東京でも体験しなかった新しい住宅体験であった。作品の中の住宅は、高校教師、中学教師、役人といった主人の住宅で、松山中学や第五高等学校の教員を務めた漱石自身の想像が可能な生活であり、生活が営まれる住宅であった。『門』の宗助のような役人はその点では妥当しないが、バリエーションとして対応可能な範囲であったように思われ、作品中に現れる具体的な住宅の姿は建築に関心があつた漱石だからこそ整合性をもつものとなったのであろうが、数多くの実際の住宅経験がそれを可能にしたのではないか。

本来は、現存している漱石の第六旧居も取り上げるべきである。これは二階建てで、漱石はその二階が気に入っていたという。今後漱石の小説の家とともに分析を加え、まとめた成果としたい。



【内坪井の家】現状平面図

統計資料で博物館を考える

岩崎竹彦 五高記念館准教授

1 はじめに

ここでは、文部科学省が実施している社会教育調査（博物館調査・博物館類似施設調査）において報告された各種統計資料をもとにわが国の博物館の特色を考察する。

社会教育調査は社会教育に関する基本的事項を明らかにすること、および生涯学習・社会教育の実態を把握し、社会教育行政上の基礎資料を得ることを目的に行っている。社会教育調査における「博物館調査」は博物館法に規定する登録博物館及び博物館に相当する施設を対象とし、「博物館類似施設調査」は博物館と同種の事業を行い、博物館に相当する施設と同等以上の規模の施設を対象とする。博物館類似施設は昭和62年度（1987）から調査対象となった。

表1のように社会教育調査は昭和30年度調査を第1回目とし、これまで19回実施している。当初は実施間隔が5年、3年、あるいは4年のときもあり一定していなかったが、昭和50年度以降は3年間隔で定着した。調査項目は社会の実情に応じ、項目の追加・削除を適宜行っており、それらについては統計資料として継続

的な推移が把握できるよう工夫されている。なお、直近の調査では調査全体に係る変更点が見られるものの、本稿は平成20年度調査までのデータを扱っているで、当時の調査のあり方にしたがっている。

2 博物館及び博物館類似施設数の推移

昭和43年（1968）の明治百年記念を契機として都道府県立博物館の設置が進められた。つづいて急速なインフラストラクチャー整備や宅地開発にともない埋蔵文化財や高度経済成長期以前の生活道具類を収蔵・管理する施設が必要とされ、昭和50年代から平成にいたるまで市町村立博物館の開館ラッシュが見られた。この時期は「博物館林立時代」と呼ばれることがあり、わが国が「博物館大国」と称される礎を築いたといえよう。

朝日新聞が「文化変調」と題した特集記事を組んだのは平成22年（2010）4月のことであつた。同紙は「日本博物館協会が先月末発表した08年度末の調査によると、日本の博物館の実働数は4041館で、公立は3分の2を占める。07年度に比べ21館減少し、戦後一貫して増えてきたとされる博物館が、同調査上で初めて減った」と報じた（朝日新聞、2010年4月18日付）。実働館数の減少は、熊本県天草市立新和歴史民俗資料館の「入り口はシャッターが下りたまま、連絡先を書いた張り紙すらない。知らない人なら、閉館したと思って仕方がない。実際、昨年度の入館者はゼロだった」という記事をもって象徴的に示された（前掲朝日新聞）。こうした事実上閉館状態に置かれている博物

【表1】社会教育調査実施年度

1	昭和30年度	8	昭和56年度	15	平成14年度
2	昭和35年度	9	昭和59年度	16	平成17年度
3	昭和38年度	10	昭和62年度	17	平成20年度
4	昭和43年度	11	平成 2年度	18	平成23年度
5	昭和46年度	12	平成 5年度	19	平成27年度
6	昭和50年度	13	平成 8年度		
7	昭和53年度	14	平成11年度		

館の数が新設館数を上回り、実働館の減少へと転じたのである。「博物館林立時代」の初期からおよそ30年後のことであった。

まずはこの30年間の動きを社会教育調査の統計資料を用いて見ていくことにしよう。

表2は昭和53年度(1978)調査から平成20年度(2008)調査までの博物館及び博物館類似施設数の推移をまとめたものである。

(1) 登録博物館及び博物相当施設数の推移

登録博物館は昭和53年度に292館だったのが、平成20年度は907館に増えていた。30年間で615館の増加であり、割合にして3.1倍、年平均20.5館ずつ増えたことになる。

博物館相当施設は昭和53年度に201館、平成20年度は341館だから、30年間で140館、割合にして1.7倍、年平均4.7館ずつの増加であった。

昭和53年度の登録博物館と博物館相当施設の合計は493館、そのうち登録博物館の占める割合は59%、相当施設は41%だから、両者に顕著な差は見られな

い。ところが平成20年度のそれは73%と27%であり、大きな開きが生じていた。

現行法において博物館に相当する施設は第29条に規定されているが、公布時は附則において、法に基づく学芸員資格取得のために設けられていた。昭和30年(1955)の法改正で第29条に規定され、広義の意味で法的な博物館と位置づけられた。ただし名称は同じでも附則におけるそれとは法的に異なるものであった。第29条に規定されてからは、教育委員会の所管に属さない博物館を法的に位置づける上で一定の役割を果たしたが、すべての面において曖昧のままに置かれてきたと言わざるを得ない。そうしたことと、法的博物館に占める相当施設の割合が減少してきたことなどから、第29条の規定を廃し、登録博物館に一本化する動きが平成20年の法改正時に見られたものの、いまだ実現には至っていない。

つぎに内訳を見ていくと、国立館に大きな変動は見られない。都道府県立館は67館から156館となり、30年間で89館、割合にして2.3倍、年平均3館ずつの増加であった。

【表2】博物館及び博物館類似施設数の推移

年度	登録	相当	内訳				計	類似	内訳				合計
			国	都道府県	市町村	私立			国	都道府県	市町村	私立	
昭和53	292	201	28	67	155	243	493	—	—	—	—	—	—
56	355	223	28	79	190	281	578	—	—	—	—	—	—
	+63	+22	±0	+12	+35	+38	+85						
59	446	230	27	94	230	325	676	—	—	—	—	—	—
	+91	+7	-1	+15	+40	+44	+98						
62	513	224	28	100	254	355	737	1,574	7	96	1,059	412	2,311
	+67	-6	+1	+6	+24	+30	+61						
平成2	562	237	28	104	283	384	799	2,280	31	232	1,460	557	3,079
	+49	+13	±0	+4	+29	+29	+62	+706	+24	+136	+401	+145	+768
5	619	242	28	109	314	410	861	2,843	41	158	1,935	709	3,704
	+57	+5	±0	+5	+31	+26	+62	+563	+10	-74	+475	+152	+625
8	715	270	29	123	395	438	985	3,522	43	190	2,400	889	4,507
	+97	+28	+1	+14	+81	+28	+124	+679	+2	+32	+465	+180	+803
11	769	276	26	132	417	470	1,045	4,064	128	217	2,756	963	5,109
	+53	+6	-3	+9	+22	+32	+60	+542	+85	+27	+356	+74	+602
14	819	301	31	145	463	481	1,120	4,243	130	257	2,927	929	5,363
	+50	+25	+5	+13	+46	+11	+75	+179	+2	+40	+171	-34	+254
17	865	331	26	152	515	503	1,196	4,418	171	266	3,090	891	5,614
	+46	+30	-5	+7	+52	+22	+76	+175	+41	+9	+163	-38	+251
20	907	341	24	156	548	520	1,248	4,527	182	269	3,198	878	5,775
	+42	+10	-2	+4	+33	+17	+52	+109	+11	+3	+108	-13	+161

国：国+独立行政法人、市町村：市町村+組合、

私立：民法第34条の法人(社団法人及び財団法人)+その他(日本赤十字社、日本放送協会、宗教法人等及び個人等)

市町村立館は155館から548館となり、30年間で393館、割合は3.5倍、年平均13.1館ずつの増加であった。市町村立館は平成5年から8年にかけての増加が顕著に見られた。これは竹下登内閣が実施した「ふるさと創生事業」の影響が大きい。あるいは地方公共団体の「フルセット主義」による文化施策の影響も見逃せないであろう。「フルセット主義」とは、地方公共団体が文化会館・図書館・博物館の文化施設3館をセットにして設立する施策をさす。

私立館は243館から520館となり、30年間で277館、割合は2.1倍、年平均9.2館ずつの増加であった。私立館も着実に数を増していた。

登録博物館と博物館相当施設、すなわち博物館法に則った博物館は30年間で493館から1,248館となり、755館の増加、割合にして2.5倍、年平均25.2館ずつの増加であった。数字を見る限りにおいては順調な増加といつてよい。

(2) 博物館類似施設の増加

表3は昭和62年度(1987)から平成20年度(2008)までの法的区分による博物館数の推移をグラフ化したものである。社会教育調査が博物館類似施設を調査対象に含めた昭和62年度の類似施設数は1,574館であり、法的博物館737館のほぼ2倍に相当した。平成20年度調査では類似施設が4,527館にのぼっており、法的博物館1,248館の4.5倍以上となっていた。『昭和53年度社会教育調査報告書』(文部省、1980年5月)の「調査結果の概要」に「博物館と類似の機能を有する公立及び民法第34条法人又は非営利の法人立の

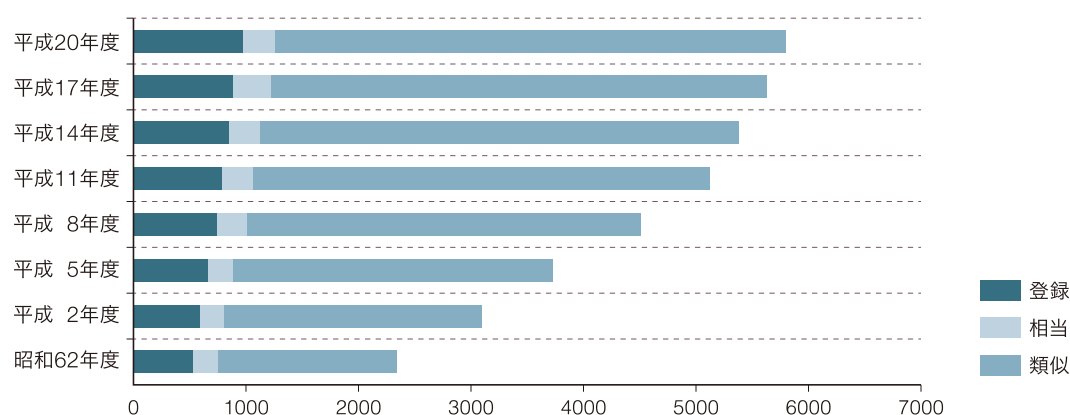
類似施設の数498館」とされており、同年度の法的博物館数493館との違いは見られなかった。ところが9年後は法的博物館と博物館類似施設数に2倍以上の開きが生じており、類似施設を調査対象に含めなければ実態と乖離する状況にあったことが推測できる。

また、昭和62年度から平成20年度までの21年間で博物館(法的博物館+博物館類似施設)は3,464館増えているが、そのうち2,953館は類似施設の増加によるものであり、その割合は85.2%であった。昭和62年度から平成2年度までの3年間においても博物館類似施設は706館増えており、昭和50年代から平成に至るまでの一時期が「博物館林立時代」と称された所以、あるいは「博物館大国」を招来せしめたのは類似施設の増加に負うところが大きかったといえよう。

設置者別に見ると市町村設置の類似施設が高い伸び率を示していた。ただ、博物館の新設は経済事情と関係することから、平成11年度(1999)以降は緩やかな伸び率におさまっている。また、平成14年度調査以降は類似施設における私立博物館数が減少しており、これは登録博物館・博物館相当施設には見られない現象であった。減少の要因は財政事情の悪化であろうが、一概にはいえないものの、法的な位置づけをしておくことである程度は閉館・廃館の歯止めになると考えられる。

以上のことから、わが国の博物館は一貫して増加傾向を示しているが、その多くは博物館法の対象外である社会教育調査でいうところの博物館類似施設に負っていることが理解できよう。

【表3】昭和62年度から平成20年度までの法的区分による博物館数の推移



3 平成20年度における博物館の様相

平成20年度の社会教育調査における博物館数(法的博物館+博物館類似施設)は5,775館であり、法的区分による割合は登録博物館が15.7%、博物館相当施設が5.9%、博物館類似施設が78.4%であった(表4)。増加率もさることながら、博物館類似施設が全体の8割弱にも及ぶということは、数の上ではわが国博物館界の中心的役割を果たしているのは類似施設であると言える。

つぎに5,775館を設置者別にみると、国が3.6%、都道府県が7.4%、市町村が64.9%、私立が24.2%であった。国+都道府県+市町村の博物館、すなわち税金を投入している博物館の割合は75.9%と非常に高い数値を示していた。また、都道府県+市町村の博物館、すなわち公立博物館の割合は72.3%であり、日本の博物館は公立博物館が大多数を占めているということが分かる。公立博物館が多いこと、これは日本の博物館の特色の一つである。

博物館法は公立及び私立博物館の振興を目的の一つとして昭和26年(1951)に成立した。博物館法成立当時は公立博物館の数が少なく、また戦後の混乱期は私立博物館が運営に支障をきたしていたこともあって、公立博物館と私立博物館の振興を目的とした博物館法もそれなりに意義はあった。しかし平成20年度調査では、都道府県立博物館425館のうち登録博物館と博物館相当施設は156館(36.7%)、市町村

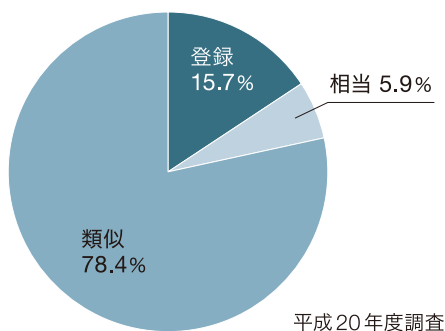
立博物館3,746館のうち登録博物館と博物館相当施設は548館(14.6%)であり、じつに公立博物館4,171館のうち3,467館(83.1%)が博物館法によらない博物館であった。これでは法の存在意義を問われても致し方ない状況と言わざるを得ない。

ちなみに、文部省は博物館法制定後の昭和28年(1953)5月に初めて総合的な博物館の実態調査を行った。それによると博物館総数は201館で、総合博物館23、科学博物館31、歴史博物館38、美術博物館30、野外博物館3、動物園9、植物園13、動植物園3、水族館14、社寺宝物館37となっており、設置者別では国立33館、公立71館、私立97館であった。当時は私立博物館数がもっとも多かったのである。法的区分では、昭和31年(1956)の調査によると登録博物館67館、博物館相当施設149館であった。

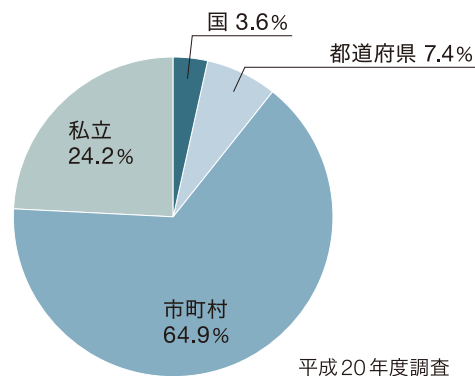
さて、私立博物館1,398館のうち登録博物館と博物館相当施設は520館(37.2%)であり、公立博物館よりも高い数値を示しているが、やはり博物館法によらない私立博物館が多数であることに変わりない。

このように日本の博物館は、博物館法が存在しながらも法律に基づかない博物館が圧倒的多数を占めていることに大きな問題があり、そのことはとりもなおさず登録博物館と博物館相当施設を規定した法そのものが機能していないということにつながるのであった。

【表4】登録・相当・類似の割合



【表5】設置者別の割合



4 種類（館種）別博物館数及び推移

社会教育調査は博物館をつぎの9種類に分けている。

総合博物館：人文科学及び自然科学に関する資料を収集・保管・展示する。

科学博物館：主として自然科学に関する資料を収集・保管・展示する。

歴史博物館：主として歴史及び民俗に関する資料を収集・保管・展示する。

美術博物館：主として美術に関する資料を収集・保管・展示する。

野外博物館：戸外の自然の景観及び家屋等の形態を展示する。

動物園：主として動物を育成して、その生態を展示する。

植物園：主として植物を育成して、その生態を展示する。

動植物園：動物・植物を育成して、その生態を展示する。

水族館：主として魚類を育成して、その生態を展示する。

表6は平成20年度調査における館種別の統計である。

表7・8は同じく平成20年度調査の統計から、館種別の割合を法的区分にしたがって、その割合を示したものである。

平成20年度社会教育調査によると、博物館法に則った博物館（表7）は美術博物館449館（36.0%）と歴史博物館436館（34.9%）の数が多く、全体の70.9%を占めていた。総合博物館は149館（11.9%）、科学博物館は105館（8.4%）と続き、残りは水族館41館（3.3%）、動物園29館（2.3%）、野外博物館18館（1.4%）、植物園11館（0.9%）、動植物園10館（0.8%）であり、水族館以下の割合は全体の8.8%に過ぎない。

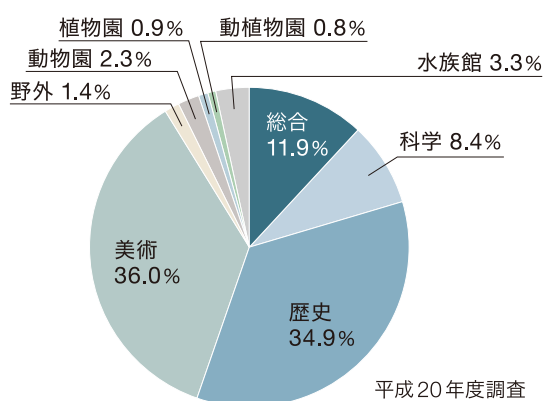
動物園・植物園・水族館は、動物・植物・魚類を育成し、その生態を展示する博物館である。育成には飼料や肥料が必要であり、それに要する費用がかさむこと、さらに広い敷地面積も必要であることなどがこうした数値に影響していると考えられる。

博物館類似施設（表8）では、歴史博物館の数が2,891館（63.9%）と圧倒的に多くなる。こちらも経済的な要因が大きいと考えられる。次いで美術博物館が652館（14.4%）で、この二つを合わせると3,543館となり、その割合は全体の78.3%にもなる。博物館法に則った博物館と同様に、類似施設においても歴史博物

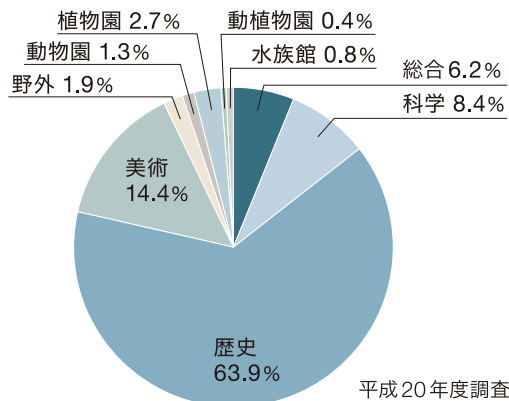
【表6】館種別統計

年度	総合博物館	科学博物館	歴史博物館	美術博物館	野外博物館	動物園	植物園	動植物園	水族館
登録	127	70	315	373	11	1	2	—	8
相当	22	35	121	76	7	28	9	10	33
小計	149	105	436	449	18	29	11	10	41
類似	280	380	2,891	652	88	58	122	19	37
合計	429	485	3,327	1,101	106	87	133	29	78

【表7】館種別割合（登録及び相当）



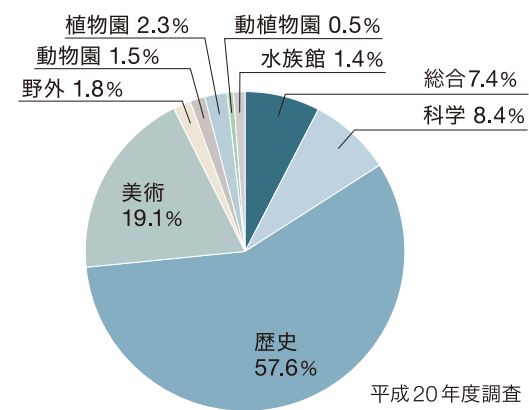
【表8】館種別割合（類似施設）



館と美術博物館の占める割合が相当に高いのであった。以下、科学博物館が380館(8.4%)、総合博物館が280館(6.2%)、植物園が122館(2.7%)、野外博物館が88館(1.9%)、動物園が58館(1.3%)、水族館が37館(0.8%)、動植物園が19館(0.4%)となっている。

社会教育調査の調査対象となっている博物館(登録+相当+類似)すなわち日本の博物館の種類別の館数及び割合は(表9)、歴史博物館が3,327館で57.6%、美術博物館が1,101館で19.1%、科学博物館が485館で8.4%、総合博物館が429館で7.4%、植物園が133館で2.3%、野外博物館が106館で1.8%、動物園が87館で1.5%、水族館が78館で1.4%、動植物園が29館で0.5%となっている。

【表9】館種別割合(登録+相当+類似)



【表10】館種別統計

		総合	科学	歴史	美術	野外	動物	植物	動植物	水族
昭和 62年度	登録+相当	100	83	224	223	8	35	20	8	36
	類似	79	109	1,100	156	11	38	46	9	26
	計	179	192	1,324	379	19	73	66	17	62
平成 2年度	登録+相当	96 (-4)	81 (-2)	258 (+34)	252 (+29)	11 (+3)	35 (±0)	21 (+1)	7 (-1)	38 (+2)
	類似	126 (+47)	180 (+71)	1,459 +359	246 (+90)	17 (+6)	44 (+6)	54 (+8)	13 (+4)	30 (+4)
	計	222 (+43)	261 (+69)	1,717 (+393)	498 (+119)	28 (+9)	79 (+6)	75 (+9)	20 (+3)	68 (+6)
平成 5年度	登録+相当	109 (+13)	89 (+8)	274 (+16)	281 (+29)	9 (-2)	31 (-4)	22 (+1)	9 (+2)	37 (-1)
	類似	129 (+3)	213 (+33)	1,915 (+456)	370 (+124)	29 (+12)	50 (+6)	80 (+26)	21 (+8)	36 (+6)
	計	238 (+16)	302 (+41)	2,189 (+472)	651 (+153)	38 (+10)	81 (+2)	102 (+27)	30 (+10)	73 (+5)
平成 8年度	登録+相当	118 (+9)	100 (+11)	332 (+58)	325 (+44)	11 (+2)	33 (+2)	18 (-4)	9 (±0)	39 (+2)
	類似	177 (+48)	283 (+70)	2,272 (+357)	520 (+150)	48 (+19)	51 (+1)	111 (+31)	19 (-2)	41 (+5)
	計	295 (+57)	383 (+81)	2,604 (+415)	845 (+194)	59 (+21)	84 (+3)	129 (+27)	28 (-2)	80 (+7)
平成 11年度	登録+相当	126 (+8)	105 (+5)	355 (+23)	353 (+28)	13 (+2)	28 (-5)	16 (-2)	10 (+1)	39 (±0)
	類似	219 (+42)	330 (+47)	2,561 (+289)	634 (+114)	71 (+23)	65 (+14)	128 (+17)	17 (-2)	39 (-2)
	計	345 (+50)	435 (+52)	2,916 (+312)	987 (+142)	84 (+25)	93 (+9)	144 (+15)	27 (-1)	78 (-2)
平成 14年度	登録+相当	141 (+15)	102 (-3)	383 (+28)	383 (+30)	11 (-2)	31 (+3)	17 (+1)	10 (±0)	42 (+3)
	類似	225 (+6)	342 (+12)	2,708 (+147)	651 (+17)	85 (+14)	62 (-3)	124 (-4)	13 (-4)	33 (-6)
	計	366 (+21)	444 (+9)	3,091 (+175)	1,034 (+47)	96 (+12)	93 (±0)	141 (-3)	23 (-4)	75 (-3)
平成 17年度	登録+相当	156 (+15)	108 (+6)	405 (+22)	423 (+40)	13 (+2)	32 (+1)	12 (-5)	9 (-1)	38 (-1)
	類似	262 (+37)	366 (+24)	2,795 (+87)	664 (+13)	93 (+8)	63 (+1)	121 (-3)	16 (+3)	38 (+5)
	計	418 (+52)	474 (+30)	3,200 (+109)	1,087 (+53)	106 (+10)	95 (+2)	133 (-5)	25 (+2)	76 (+1)
平成 20年度	登録+相当	149 (-7)	105 (-3)	436 (+31)	449 (+26)	18 (+5)	29 (-3)	11 (-1)	10 (+1)	41 (+3)
	類似	280 (+18)	380 (+14)	2,891 (+96)	652 (-12)	88 (-5)	58 (-5)	122 (+1)	19 (+3)	37 (-1)
	計	429 (+11)	485 (+11)	3,327 (+127)	1,101 (+14)	106 (±0)	87 (-8)	133 (±0)	29 (+4)	78 (+2)

つぎに種類別博物館数の推移を見ていこう。

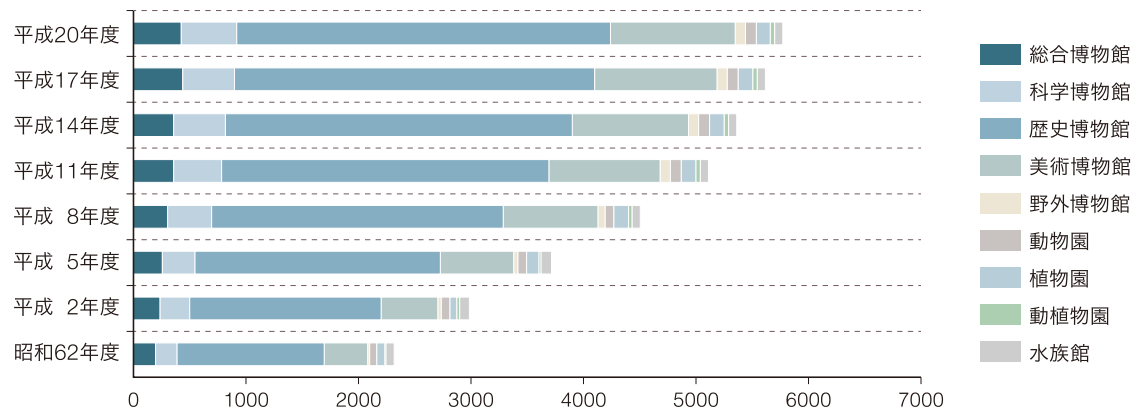
表11は区別が分かりづらいが、左から総合博物館、科学博物館、歴史博物館、美術博物館、野外博物館、動物園、植物園、動植物園、水族館の順に割合を示している。野外博物館以下は館数が少ないので、割合の幅がほとんど出ていないが、要はそれほど少ないということである。

先にも述べたように近年は全体の伸び率が緩やかになっているが、総合博物館、科学博物館、歴史博物館、美術博物館、野外博物館は順調に増加していると言ってよいであろう。植物園も昭和62年当時と比べるとほぼ2倍に増えていることから、順調といえなくもない。中でも歴史博物館はいまだに3桁の増加数を示しており、昭和62年度の博物館数2,311館のうち歴史博物館は1,324館、平成20年度は5,775館のうち歴史博物館は3,327館だから、21年間の増加数3,464館のうち2,003館は歴史博物館に負っていることになる。その割合は57.8%であった。したがって、新設博物館の6割弱は歴史博物館ということになる。

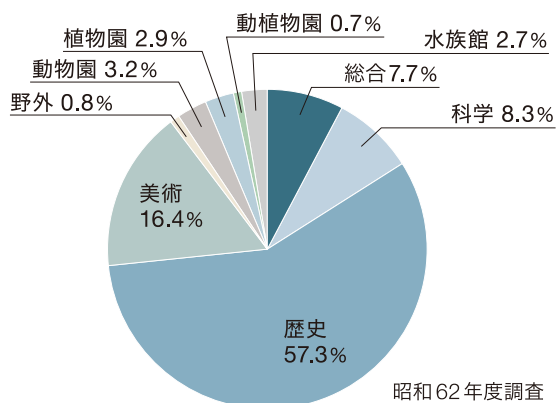
また表12は昭和62年度調査の館種別割合であり、表13は前述の文部省が昭和28年5月に行なった博物館の実態調査を館種別に分析したものである。この二つの表を表9の平成20年度調査と比較してもじつはそれほど大きな変化は認められない(昭和28年調査において歴史博物館は18.9%である、社寺宝物館は歴史博物館もしくは古美術系の美術博物館と捉えられることによる)。したがって、日本の博物館は伝統的に歴史博物館や古美術系の美術博物館が多いということが言えるのであった。

最近では使われなくなったが、「博物館行き」という言葉がある。これは「古くなり、役にたたなくなったもの」を意味する言葉なのだが、その背景には、“博物館と言えば歴史博物館もしくは骨董的な価値をもつ古美術を展示した美術博物館が多い”というわが国の博物館事情が関係していると考えられよう。そして、そのことはまた我々の博物館イメージの形成にも大きく影響していたのである。

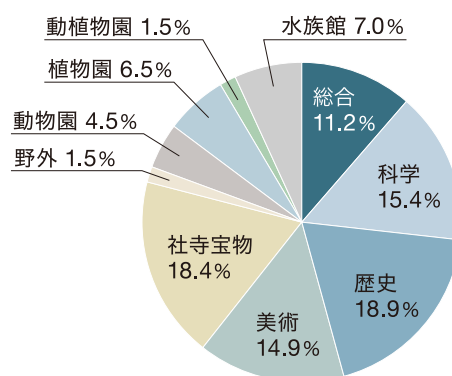
【表11】館種別博物館数の推移



【表12】館種別割合(登録+相当+類似)



【表13】昭和28年調査の館種別割合



5 博物館の入館者数

平成19年度の博物館入館者総数は約2億8千万人であり、これは日本人すべてがおおよそ年間3回は博物館を利用していることになる。ちなみに1館当たりの入館者数は4万9,300人であった。年間の入館者を登録の有無で分けると博物館法に則った博物館、すなわち登録博物館+相当施設は1億2千416万5,000人(44.4%)、類似は1億5千570万6,000人(55.6%)である。顕著な違いは認められないが、1館当たりの入館者数になると、登録+相当が10万100人、類似は3万5,100人であった。これは博物館法に則った博物館のほうが利用者にとって魅力ある博物館活動を行なっているという証左であり、学芸員が配置されているかいないか、そのことがこの1館あたりの入館者数に影響していると考えられよう。

さて、館種別の入館者数を見ると、登録+相当(表15)では美術博物館が最も多くて3,302万9,000人(26.6%)、水族館が2,044万1,000人(16.5%)、歴史博物館が1,996万5,000人(16.1%)、動物園が1,835万9,000人(14.8%)、科学博物館が1,381万6,000人(11.1%)、総合博物館が850万人(6.8%)、動植物園が538万3,000人(4.3%)、野外博物館が289万4,000人(2.3%)、植物園が177万8,000人(1.4%)となっている。

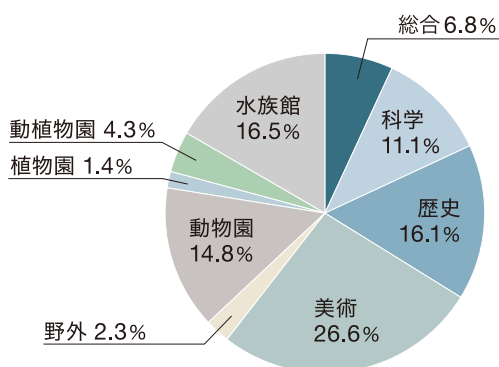
類似(表16)では歴史博物館が5,742万4,000人(38.4%)、美術博物館が2,422万7,000人(16.2%)、科学博物館が2,126万9,000人(14.2%)、動物園が1,510万5,000人(10.1%)、植物園が1,362万2,000人(9.1%)、水族館が924万1,000人(6.2%)、野外博物館が397万9,000人(2.7%)、総合博物館が233万3,000人(1.6%)、動植物園が227万1,000人(1.5%)であった。

【表14】平成19年度入館者数

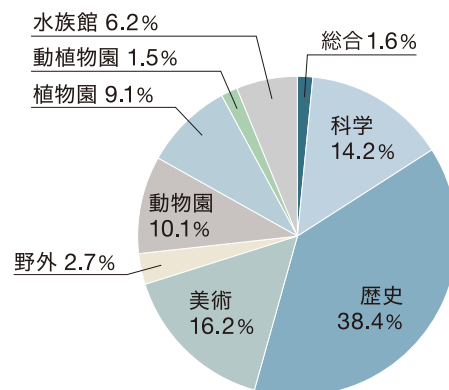
	計	総合	科学	歴史	美術	野外	動物	植物	動植物	水族
平成19年度開館数 (登録+相当)	1,240	149	105	433	444	18	29	11	10	41
入館者総数(千人)	124,165	8,500	13,816	19,965	33,029	2,894	18,359	1,778	5,383	20,441
1館当たり(千人)	100.1	57.0	131.6	46.1	74.4	160.8	633.1	161.6	538.3	498.6
平成19年度開館数 (類似)	4,436	272	375	2,823	644	87	58	121	19	37
入館者総数(千人)	155,706	2,333	21,269	57,424	24,227	3,979	15,105	13,622	2,271	9,241
1館当たり(千人)	35.1	8.6	56.7	20.3	37.6	45.7	260.4	112.6	119.5	249.8
開館数合計	5,676	421	480	3,256	1,088	105	87	132	29	78
入館者合計(千人)	279,871	10,833	35,085	77,389	57,256	6,873	33,464	15,400	7,654	29,682
1館当たり(千人)	49.3	25.7	73.1	23.8	52.6	65.5	384.6	116.7	263.9	380.5

(平成20年度社会教育調査)

【表15】館種別入館者数の割合(登録+相当)



【表16】館種別入館者数の割合(類似)



全体(表17)では、歴史博物館が7,738万9,000人(28.3%)、美術博物館が5,725万6,000人(20.9%)、科学博物館が3,508万5,000人(12.8%)、動物園が3,346万4,000人(12.2%)、水族館が2,968万2,000人(10.8%)、植物園が1,540万人(5.6%)、総合博物館が1,083万3,000人(4.0%)、動植物園が765万4,000人(2.8%)、野外博物館が687万3,000人(2.5%)である。

先の館数の統計データと比較すると、野外博物館・動物園・植物園・動植物園・水族館の館数は極めて少ないけれども、入館者数ではずいぶん健闘していることがお分かりいただろう。そのことは1館当たりの入館者数を見てもっとよく分かる。

1館当たりの入館者数は、登録+相当では全体で10万100人であり、動物園は63万3,100人、動植物園が53万8,300人、水族館が49万8,600人、植物園が16万1,600人、野外博物館が16万800人、科学博物館が13万1,600人であり、つぎからは桁が一つ減って、美術博物館が7万4,400人、総合博物館が5万7,000人、歴史博物館は4万6,100人である。

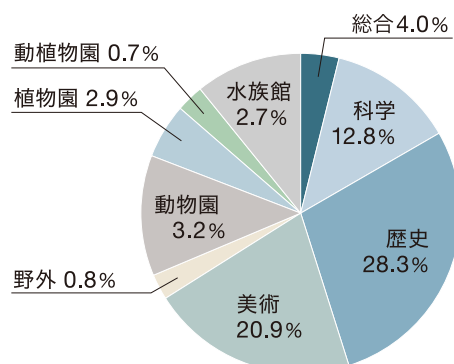
類似の1館当たりの入館者数は全体では3万5,100人であり、登録+相当に比べるとずいぶん少ない数字であった。館種別にみると、動物園が26万400人、水族館が24万9,800人、動植物園が11万9,500人、植物園が11万2,600人と、ここまではそれなりの数字であった。以下、科学博物館が5万6,700人、野外博物館が4万5,700人、美術博物館が3万7,600人、歴史博物館が2万300人、総合博物館に至っては8,600人という状況であった。

最後に登録+相当+類似の1館当たりの入館者数は、全体では4万9,300人であり、館種別ではこれも動物園が抜きんでており38万4,600人、ほとんど変わらず水族館が38万500人と続き、動植物園も26万3,900人、以下植物園の11万6,700人、科学博物館の7万3,100人、野外博物館の6万5,500人、美術博物館の5万2,600人であった。その一方、総合博物館は2万5,700人、歴史博物館は2万3,800人の最下位である。館数で57.6%の圧倒的多数を占める歴史博物館は1館当たりの入館者数がもっとも少なく、博物館といえば「閑古鳥」というイメージもそのことが影響しているのではないかと考えられる。

6 さいごに

本稿は博物館概論の講義において学生に配布しているプリントをもとに再構成したものである。といっても「です・ます調」の文章を「である」調に変えただけのことである。時間の関係で表記の統一にまで手が及ばなかったことをおわびする。

【表17】館種別入館者数の割合(登録+相当+類似)



第五高等学校瓦斯製造所について

磯田桂史 五高記念館客員教授

化学実験場横のれんが造倉庫

熊本大学黒髪北地区にある化学実験場（明治30年代当時化学教室）の東側に、れんが造の小さな建物がある（図1）。これは明治33年に第五高等学校（以下五高という）の瓦斯製造所として建てられた建物である。現在、倉庫として使用されているが、倉庫として建てられたものではない。

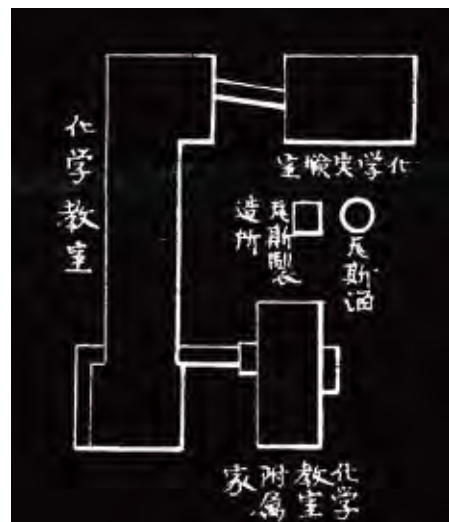
当該建物は長方形の平面、平入、切妻の屋根、南北方向に棟、瓦葺であり、れんがはオランダ積みである。西面に出入口がある。筆者の実測によれば、個々のれんがの寸法は長手約228mm、小口約109mm、厚さ約59mmであり、明治期のれんがの五大形式のうち東京型の寸法と思われる。

れんがの壁厚は長手1枚分（約228mm）、壁の芯々間の寸法は南北約3652mm、東西約2796mmであり、面積は10.21㎡即ちほぼ3坪である。

毎年発行された「第五高等学校一覧」の「自明治卅二年至明治卅三年」の付図には、現在の物置の位置に「瓦斯製造所」という名称で矩形の建物が記されている（図2 なお、五高記念館が所蔵する五高一覧の「自明治三十年至明治卅一年」及び「自明治卅一年至明治卅二年」版には付図がない。）。そして翌年の五高一覧「自明治卅三年至明治卅四年」版になりはじめて、付図だけでなく本文中の本校敷地建物（明治三十三年十月現在調）の項に列挙された建物名称等のところに「瓦斯製造所一棟煉瓦造平家建三坪」と記されている。そこで、れんが造の倉庫が、明治30年代の五高



【図1】黒髪北地区にあるれんが造倉庫



【図2】化学教室周辺の配置図
「第五高等学校一覧」明治32～33年
（国立国会図書館蔵）より

一覧中の配置図及び列挙された施設と位置、形状、構造階数、面積が一致することから、明治30年代に瓦斯製造所として整備された建物であるということが分かる（厳密に言えば、それが建て替えられていないという証明が必要だが）。ただし、五高一覧の「自明治卅六年至明治卅七年」版以降の本文では瓦斯製造機械室に名称が変更になっている。

また、配置図には瓦斯製造所と並んで東側に円形の施設が瓦斯溜として描かれている。一方、明治32年11月24日付け官報には工事請負入札として「第五高等学校理化学教室用「フィルデングブラット」式瓦斯包溜器及水槽工事」が公告されている。先の五高一覧記載の時期とこの入札公告を考えあわせると明治33年に瓦斯製造所が完成したものと考えられる。なおこの官報公告は同月26日の九州日日新聞、九州新聞にも転載されている。

明治30年代における五高の施設整備

この建物が建った明治30年代における五高の施設整備の状況を概観する。

明治30年五高に工学部が設立された。それに伴い五高の敷地内の東側部分に工学部の建物が整備された（図3）（表1）。

明治31年には、二階建ての教室、平家建ての物理学実験室、化学実験室、機械実験工場等が整備され、明治36年には材力試験機械室が整備された。これらの多くは明治39年に設立された熊本高等工業学校に引き継がれ、さらにその一部は、現在の黒髪南地区が熊本高等工業として整備される際、移築された。また明治33年には寄宿舍関係の施設が整備された。

一方、五高の工学部以外の部分である大学予科は、明治20年代前半期の学校スタート時に施設が整備されたことから明治30年代の施設整備は少なく、明治36年博物学教室が動物及び植物学教室と地質及び鉱物学教室になった際、後者の施設が整備されたのが目立つ程度である。先に述べた瓦斯製造所は明治30年代五高大学予科の数少ない整備施設の一つである（表2）。

関係した建築技術者

明治30年代の五高大学予科及び工学部の整備を担当した建築技術者を紹介する。

建築学会発行の月刊誌「建築雑誌」の明治31年10月号の雑報欄に、久留正道が文部技師として担当する主要な工事の紹介があり、その中には第五高等学校工学部がある。明治30年度から2ヶ年で56,200円の予算である。久留正道は山口半六とともに第五高等学校の施設の設計者であり、明治20年、21年、22年、23年の各年、熊本に出張した。明治23年10月10日の第五高等学校落成式では新築落成報告を行っている。山口半六と久留正道は、当時それぞれ年1回熊本に出張したが、熊本の工事現場には、大場景貞等がいた。

明治30年代における五高の施設整備に当っては、文部省会計課建築掛あるいは同省建築課において久留正道がその長となり担当した。明治30年には久留が熊本に出張している。概略の方針を定めたものと思われる。また明治32年にも熊本に出張しているが、これは竣工した建物の検査と思われる。



【図3】第五高等学校敷地図 明治36～37年（「第五高等学校一覧」）

一方、五高の工事現場には同省建築掛、建築課の出張所が置かれていた。これは官報に掲載された工事請負入札公告の文面から分かる。そして熊本には新山平四郎がいたことが次の資料から分かる。

・明治29年12月8日 九州日日新聞
新山枝手の帰京 第五高等学校に於ける蒸留缶据付化学器械室及び博物教室等の工事監督の為め去る六月より出張同校に滞在中なりし文部省技手新山氏は該工事既に竣工したるを以て明日出発帰京の途に就く由・・・

・明治30年8月号 建築雑誌 会員転居欄
准員 新山平四郎 熊本市第五高等学校
・明治32年11月30日調 建築学会会員住所姓名表
准員 新山平四郎 熊本市第五高等学校

新山平四郎の略歴は、宮本雅明「日本の大学キャンパス成立史」、内閣発行の職員録、建築学会の会員名簿等によれば、次のようである。詳しい経歴や出典は別の機会に紹介したい。

明治02年 茨城県に生まれる。
明治22年 造家学会入会
明治23年 工手学校第二回卒業

【表1】明治30年代における五高大学予科の施設整備一覧

(各年の「第五高等学校一覧」(五高一覧)により作成。M30～M31以外は、期間中新たに整備されたもの、名称が変更になったものに限る)

五高一覧年度 (時点)	M30～M31	M31～M32	M32～M33 (M32.11現在)	M33～M34 (M33.10現在)
施設名称 構造 階数 面積	普通教室	○	○	○
	物理学教室1棟煉瓦1、120.689坪	○	○	○
	底W1、6.962坪	○	○	○
	博物学教室1棟W1、90坪	○	○	○
	銃器庫及書庫1棟土蔵2、45坪	○	○	○
			渡廊下4.85坪	○
	寄宿舎2棟W2、630坪	○	○	○
	玄関W1、4坪	○	○	○
	寄宿舎附属食堂1棟W1、120坪	○	○、144坪	○
			寄宿舎附属湯呑所 1棟W1、3坪	○
	湯沸所2棟(1棟煉瓦1,1棟W1) 6.25坪	○	湯沸所1棟煉瓦1、3.25坪	○
			木造葺卸1.75坪	○
	物置4棟(2棟土蔵2,2棟W1) 105坪	○	物置4棟(2棟土蔵2,2棟 W1) 123坪	物置5棟(1棟煉瓦1,1棟 土蔵2,3棟W1) 106.25坪
	便所6棟W1、47.5坪	○	○	○
				瓦斯製造所1棟煉瓦1、3坪

注) 1、五高一覧の「M」は明治を表す。 3、構造の後の「1」「2」は階数を表す。
2、「W」「煉瓦」「土蔵」は構造を表す。なお、「W」は木造である。 4、1字落としは附属建築物、○は前年と同じことを示す。

明治26年から明治29年 東京郵便電信局雇員
 明治29年 文部省技手、熊本第五高等学校担当に
 明治33年 第五高等学校医学部担当、長崎へ
 明治35年 文部省札幌出張所長心得
 明治40年 文部技師、札幌出張所長
 その後、秋田、仙台、小樽、桐生、横浜、千葉等で
 文部省の学校現場を担当したものと思われる。死亡
 するまでは追跡していないが、少なくとも大正時代ま
 では文部省の技師であった。

まとめ

化学実験場の東側にある、れんが造の小さな建物は、五高大学予科に明治33年瓦斯製造所として建てられたものである。明治30年、五高に工学部が設置されると、工学部を中心として施設整備が行われたが、瓦斯製造所は、明治30年代に、五高大学予科の施設として整備された数少ない例であり、しかも当時の唯一の現存例である。

	M34～M35 (M34.11 現在)	M35～M36 (M35.11 現在)	M36～M37 (M36.11 現在)	M37～M38 (M37.11 現在)	M38～M39 (M38.11 現在)	M39～M40 (M39.11 現在)
	○	○	○	○	○	本館
	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
						実験室1棟W1、46坪
			附属家1棟W1、32坪 渡廊下W1、4.625坪	○ ○	○ ○	○ 渡廊下W1、9.125坪
	○	○	動物及植物学教室 1棟W1、90坪	○	○	○
			地質及鉱物学教室 1棟W1、80坪	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
	○	○	寄宿舎3棟W2、1352坪	○	寄宿舎3棟W2、722坪	○
	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
					寄宿舎附属理髪所 1棟W1、4坪	○
			寄宿舎附属病室 1棟W1、44坪	○	○	○
			渡廊下W1、8坪	○	○	なし
			寄宿舎病室附属便所 1棟W1、2.25坪	○	○	なし
	○	○	○	○	○	○
	○	○	なし	○	○	○
					火薬庫1棟煉瓦1、 1.25坪	○
	○	○	○	○	物置4棟105坪	○
	○	○	○	○	便所6棟W1、46.75坪	寄宿舎附属便所 6棟W1、43坪
	○	○	瓦斯製造機械室1棟 煉瓦1、3坪	○	○	○

【表2】明治30年代における工学部の施設整備一覧

(各年の「官報」「第五高等学校一覧」(五高一覧)、『熊本高等工業学校沿革史』により作成)

官報		五高一覧			
入札公告掲載	内容	M30～M31	M31～M32	M32～M33 (M32.11現在)	M33～M34 (M33.10現在)
M301115官報	工学部教室及講義室等 280 坪		教室 1 棟 W2、290 坪	○	○
M301115官報	4 坪		玄関 W1、4 坪	○	○
			渡廊下 W1、9 坪	○	○
					附属家 1 棟 W1、32 坪
					渡廊下 W1、4.625 坪
M300608官報	理化学講義室及実験室 2 棟 W1、80 坪		物理学実験室 1 棟 W1、46 坪	○	○
			渡廊下 W1、4.5 坪	○	○
			化学実験室 1 棟 W1、40 坪	○	○
			渡廊下 W1、4 坪	○	○
M310331官報	機械実験工場 W1、161 坪		機械実験工場 1 棟 W1、161 坪	○	○
M300608官報	生徒控所 W1、45 坪	生徒控所 1 棟 W1、45 坪	○	○	○
			実験工場職工控所 1 棟 W1、8 坪	○	○
			小使室及湯呑所 1 棟 W1、10 坪	○	○
			職員便所 1 棟 W1、2.25 坪	○	○
			生徒便所 1 棟 W1、3 坪	○	○
M320703官報	寄宿舎 W2、146 坪→8/8 付 92 坪				寄宿舎 1 棟 W2、92 坪
M320703官報	渡廊下 W1、7 坪余				渡廊下 W1、7.25 坪
M320703官報	寄宿舎附属病室 54 坪余				寄宿舎附属病室 1 棟 W1、44 坪
M320703官報					渡廊下 W1、8 坪
					寄宿舎病室附属便所 1 棟 W1、2.25 坪
					青色写真室 1 棟 W1、20 坪
					給水用井戸上家 1 棟 W1、5 坪
M310309官報	附属物置 W1、60 坪		物置 1 棟 W1、54 坪	○	実験工場附属物置 2 棟 W1、78 坪
M310530官報	附属物置 W1、48 坪				
M330524官報					

注) 1、「M」は明治を表す。

2、「W」は木造を表す。その後の「1」「2」は階数を表す。

3、1字落としは附属建築物、○は前年と同じことを示す。

						熊本高等工業学校沿革史	
	M34～M35 (M34.11 現在)	M35～M36 (M35.11 現在)	M36～M37 (M36.11 現在)	M37～M38 (M37.11 現在)	M38～M39 (M38.11 現在)	熊本高等工業学校への 引継 (M39.6.14)	熊本高等工業学校移築 (M42.1.15)
	○	○	○	○	○	元工学部教室 W2、 290 坪	同左
	○	○	○	○	○	同 W1、4 坪	
	○	○	○	○	○	渡廊下 W1、9 坪	渡廊下(13坪のうち)
	○	○	不明				
	○	○	不明				
	○	○	○	○	○		
	○	○	○	○	○		
	○	○	○	○	○	化学実験室 W1、40 坪	同左
	○	○	○	○	○	同渡廊下 W1、4 坪	渡廊下(13坪のうち)
	○	○	○	○	○	実験工場 W1、161 坪	機械実験室 W1、151 坪
			附属家 1 棟 W1、20 坪	○	○	実験工場附属家 W1、20 坪	工場事務室 W1、20 坪
	○	○	○	○	○	生徒控所 W1、45 坪	
	○	○	○	○	○	職工控所 W1、8 坪	同左
	○	○	○	○	○	小使室及湯沸所 W1、 10 坪	
	○	○	○	○	○	職員便所 W1、2.25 坪	便所 W1、2.25 坪
	○	○	○	○	○	生徒便所 W1、3 坪	便所 W1、3 坪
	○	○	大学予科へ？				
	○	○	大学予科へ？				
	○	○	大学予科へ	大学予科	大学予科		
	○	○	大学予科へ	大学予科	大学予科		
	○	○	大学予科へ	大学予科	大学予科		
	○	○	○	○	○	青色写真室 W1、20 坪	
	○	○	○	○	○	給水用井戸上家 W1、5 坪	
	○	○	○	○	○	物置 W1、54 坪	倉庫 W1、54 坪
						物置 W1、24 坪	
			材力試験機械室 1 棟 W1、30 坪	○	○	材力試験機械室 W1、 30 坪	同左

ラフカディオ・ハーンと天文学

アラン・ローゼン 五高記念館客員教授

ラフカディオ・ハーンは新聞記者や作家としてよく知られているが理科学のさまざまな分野にも深い興味を持っていた。1874年から1886年にかけて、ハーンは、シンシナティとニューオリンズでジャーナリストとして、理科学を主題とした多数の記事や社説を書いている。

ハーンは、イングランドの聖カスバート校、フランスの神学校で基本的な理科の授業を受けているが、特別な興味は持っていなかったようで、成績はあまりよくなかった。理科学関係の知識をつけていったのは、主にアメリカに渡ってからであり、その方法は、知り合いの医者に見学したり、本や雑誌や新聞の記事を読むという独学であった。また、その目的はより面白い文章を書くということだった。新聞記者になって数年後の1878年、アイテム社で“科学ニュース担当者”になっている。

ハーンは新聞記者になった当初から、当時の最新の発見や考え方を新聞の読者に分かりやすく、面白く伝えようとした。物理学、化学、生物学、工学、医学、いろいろな分野に触れ、それぞれの分野の中から最近の面白そうな話題を見つけては記事を書き、40件以上の記事を新聞や雑誌に掲載した。その中で、いちばん多く取り上げた分野は天文学であり、8つの記事を書いた。太陽、月、星、惑星、水星、宇宙、人間と地球の将来と過去について取り上げている。

この記事を読むと、ハーンが好んでよく取り上げたテーマが見えてくる。その一つは、自然は、どんなに調べても全ての秘密を見せてくれない。調べれば調べるほど、分かれば分かるほど、次から次へ分からないものが出てくる。それは無限につづくだろうと思えるということである。もう一つは、宇宙は生きているかもしれない。星は動物と同じように餌を探したりして

いるかもしれない。それに、人間に見えない物理的な動きや力がたくさんある。幽霊と呼んでも良いのではないかということである。

また、科学と宗教の関係はもう一つのテーマだった。天文学の新しい研究で分かったことは、宗教(特に仏教)が昔から言っている事であり、科学は、宗教の考えを証明しているとハーンは何度も言っている。宇宙の全てのものは、休まずに動き、変化している。バラバラになったり、生まれ変わったりして、形は消えていくが、永遠に物質は減らず、なくなる。人間の将来を見るためには、望遠鏡が何より必要だ。この世の終わり方を知るため一番教えてくれるのは天文学だと書いている。

本稿では、ハーンが書いた天文学に関する記事を紹介する。それぞれを解説しながら、ハーンが天文学の知識をどのように利用して文学的な記事を作ったかを分析する。天文学に全くの素人のハーンは、天文学関係の記事を熱心に読み、集めた知識を利用して、読者の想像に刺激をあたえる作品を書いた。時には哲学的、時には宗教的、そしてSFに近い作品もあったが、ハーンにとっては、天文学が発見してくれる宇宙は、人間の想像力の遊園地、入場券は望遠鏡だった。

ハーンの科学記事一覧

タイトル	新聞名	発表年月日	科学分野
医学	シンシナティ・インクワイアラー	1874/3/24	医学
頭蓋骨と骨	シンシナティ・インクワイアラー	1874/8/30	医学
最近の動物学的な小説	シンシナティ・インクワイアラー	1875/5/1	生物学
屠殺場の話	シンシナティ・インクワイアラー	1876/8/21	医学
自然主義者との1時間	シンシナティ・コマーシャル	1877/4/15	生物学
珍しい気候現象	シンシナティ・コマーシャル	1877/5/6	気象学
シロイルカ	シンシナティ・コマーシャル	1877/6/29	生物学
死体の防腐処理	シンシナティ・コマーシャル	1877/7/11	医学
発明の素晴らしい可能性	デイリー・アイテム	1878/6/25	科学技術
昆虫の政治	デイリー・アイテム	1878/7/8	昆虫学
ウミヘビは、ウナギの一種ですか？	デイリー・アイテム	1878/7/13	生物学
現実になる錬金術師の夢	デイリー・アイテム	1878/12/20	化学
解明されていない謎	デイリー・アイテム	1879/1/24	科学一般
驚くべき事実と悪夢	デイリー・アイテム	1879/3/26	地球科学
砂漠か海か	デイリー・アイテム	1879/6/29	地球科学
無限の秘密	デイリー・アイテム	1879/8/15	天文学
電灯	デイリー・アイテム	1880/6/20	科学技術
未来の夢	デイリー・アイテム	1880/11/8	生物工学
光とは何か	デイリー・アイテム	1880/12/21	物理学
まるで稲妻によって描かれるように	デイリー・アイテム	1881/4/29	科学技術
Hava博士のタランチュラ	デイリー・アイテム	1881/5/4	昆虫学
レインボーバード	デイリー・アイテム	1881/6/5	生物学
新しい輝き	デイリー・アイテム	1881/9/16	科学技術
昆虫の文明	デイリー・アイテム	1881/10/4	昆虫学
見えない毒	デイリー・アイテム	1881/11/1	生物学
いくつかのグロテスクな理論	タイムズ・デモクラット	1882/5/24	天文学
細菌学の現状	タイムズ・デモクラット	1882/8/8	生物学
アリについてのニュース	タイムズ・デモクラット	1882/8/27	昆虫学
彗星の運命	タイムズ・デモクラット	1882/9/25	天文学
潜水艦ゴシップ	タイムズ・デモクラット	1882/12/10	生物学
星の命	タイムズ・デモクラット	1883/2/18	天文学
近視	タイムズ・デモクラット	1883/3/4	眼科学
太陽の痙攣	タイムズ・デモクラット	1883/6/26	天文学
太陽系の運命	タイムズ・デモクラット	1883/7/22	天文学
太陽の終り	タイムズ・デモクラット	1883/11/25	天文学
天体地質学	タイムズ・デモクラット	1884/6/15	天文学
偉大な英国の医者	タイムズ・デモクラット	1885/12/15	医学
パリの魔術師	タイムズ・デモクラット	1885/12/24	生物学
クレオール医者	ニューヨーク・トリビューン	1886/1/3	医学
目一移植	タイムズ・デモクラット	1886/1/24	眼科学

Lafcadio Hearn and Astronomy

by Alan Rosen

As a journalist in Cincinnati and New Orleans, Lafcadio Hearn wrote numerous articles and editorials on a variety of scientific subjects. In fact, the proportion of Hearn's American writing dealing with subject matter that is unequivocally "scientific" in nature is surprisingly large: at least 40 newspaper articles or editorials have been published in five separate collections: (1) Albert Mordell's edition of *An American Miscellany I and II* (1924); (2) Albert Mordell's *Occidental Gleanings I and II* (1925); (3) Charles Hutson's *Editorials by Lafcadio Hearn* (1926); (4) Ichiro Nishizaki's *The New Radiance and Other Scientific Sketches by Lafcadio Hearn* (1939); and (5) William Johnson's *Lafcadio Hearn: Selected Writings 1872-1877* (1979). Of those articles, at least twenty percent were mainly on the subject of astronomy, a field to which Hearn's imagination was especially attracted.

While a newsman for the *Times-Democrat* in New Orleans, Hearn was actually put in charge of scientific news, made responsible for writing articles on new developments in various branches of inquiry: "By the way," he wrote to Cincinnati music critic H.E. Krebhiel in 1883, "I have become scientific – I write nearly all the scientific editorials for our paper" (*Writings* XIII, 273). The real surprise, however, may be that he did not write even more, or more seriously, about science. After all, his father, whose genes Hearn had inherited, was a physician, as were many of Hearn's male friends (e.g., Dr. George Gould and Dr. Rudolph Matas). This seeming predilection for friendship with such scientific men was something that he was almost boastful about: "it is a singular fact that most of my tried friends have been physicians" (Letter to Gould 1887). Although his deepest passion was for literature, science was never far behind.

He strongly believed that science was the way of the future. By 1884 he had become convinced that the rapid proliferation of scientific knowledge and the increasing need for specialization demanded re-thinking of the education system: "It has already become impossible for

any human being to master all recognized branches of any single professional science," he wrote in "Science and Education" for the *Times-Democrat* of March 11, 1884 (*Occidental Gleanings II* 9). "Anatomy – constituting so enormous a study in itself – has latterly developed immense branches ramifying into zoology, embryogeny, craniology, anthropology, ethnology and other kindred sciences.... Nevertheless, science is only in its infancy! – how important, therefore, the problem of future education!" (9).

He himself had had very little formal education in the sciences. In school at St. Cuthbert's, England, and perhaps at Yvetot, France, Hearn certainly had lessons in basic science, but he seems to have shown neither enthusiasm nor talent for them, and he achieved superior evaluations only in English. Most of his scientific knowledge came later in life, from two main sources: from conversations with scientific friends, to whom he was always asking questions, and from self-study when he required scientific knowledge for an article or essay he was working on. To be sure, he was never much more than a dilettante, writing "popular" science news for a layman audience, but his interest in scientific subjects was nonetheless deep and genuine for all that. At times, it seems, he even wanted to be a scientific Columbus in addition to a literary one, so anxious was he to introduce to readers what he called the "new sciences" of comparative religion, folklore, and evolution. Evolution especially fascinated him, and he called it "the Protean and infinitely beautiful science" that, along with philosophy, showed the story of man to be "a mighty poem" (*Occidental Gleanings II* 30). His enthusiasm was apparently communicated to his readers, for as McWhirter and Finsden state, his popularity as a writer "helped turn the flagging *Enquirer* into the largest daily in the city" (6). And it was often as a *science* writer that this popularity was earned.

Looking at the numerous places in his American writings where he treats specifically scientific topics, we become aware of how intense Hearn's interest in science was. Indeed, nearly every major field of scientific inquiry at that time is treated somewhere by Hearn, but he seemed especially fascinated by astronomy, with its vast reaches into space and time. In this article, I hope to show what Hearn thought about astronomy, the breadth and depth of his interest in it, what aspects of it stimulated his imagination the most, and how he used his knowledge of it to create

literary, informative, and entertaining news material for his readers.

There is no evidence that Hearn ever owned a telescope or even considered astronomy to be his hobby. What fired his imagination was not so much observing the cosmos as contemplating it. Hearn wrote at least eight editorial pieces on astronomy-related subjects — one for the New Orleans *Item* and seven for the *Times-Democrat* — all treating the question of man's place in the universe. The first, in the *Item* of August 15, 1879, was titled "Secrets of the Infinite." Enthralled by a recent article in a local French-language newspaper, *L'Abeille de la Nouvelle-Orleans* (*The New Orleans Bee*), Hearn used the current state of astronomical exploration as the springboard for a lyrical, quasi-philosophical look at the mysterious nature, and ultimate folly, of scientific inquiry in general:

The astronomer vainly analyzes cloud nebulae ... — vainly does he resolve them into systems of triple suns and galaxies of burning stars The vaster becomes the scope of human vision the vaster and deeper the problems which defy its power; the Infinite unfolding itself infinitely terrifies the feeble human will which vainly seeks to comprehend it. Man may sweep the heavens with vision strengthened by artificial cunning beyond aught that the children of this generation may dream of; but ... the Infinite will keep its most awful secret forever. (Hutson 50-51)

Hearn's interest here is more in the wider philosophical implications of astronomical exploration than in the details of its physics or mathematics, in the metaphysical rather than the physical. Nature, he implies, seems to mock man's efforts at uncovering her secrets: The deeper we penetrate, the less we see, for "nature retains her secret under the glowing eye of the solar microscope with its magnifying power of some hundred thousand diameters, not less securely than beneath the naked eye of man" (51). Hearn ends the piece with the chilling speculation that even if we could eventually lift the last veil and behold the "secret," we might find ourselves staring not at some vision of the divine but rather "into the eyeless sockets of Death" (53). The same idea of ultimate inscrutability was also expressed in an earlier piece called "Unfolded Mysteries" in the *Item* of January 24 of the same year. The more we

learn, he suggests, the more bewildered we get: "the accomplishment of one feat only introduces us to another far more difficult, and an endless succession of others each huger than its predecessors" (Nishizaki 11).

In Hearn's next venture into the world of astronomy, "Some Grotesque Theorizing" (*Times-Democrat*, May 24, 1882), he entertains the reader with the imagery of his collected scientific fantasies:

We have been told of worlds where suns never set, and where there is no sleep, so that people must work, presumably, all their lives without ceasing.... We have been told of worlds illuminated by blue, green, scarlet, pink, yellow, and purple suns; and even of some where a green sun rises while a blue sun sets, with a red sun all the while in the zenith.... We have been told of spheres so much more advanced in knowledge than our own, that a brief interview with one of their philosophers would result in advancing our own knowledge by thousands of years.... We have also heard of worlds where men, organized as we are, could leap in one bound across oceans, like the apes of the Ramayana, or skip lightly over the mountains like the Beloved in Solomon's Song of Songs. (169-70)

This is science fiction, and Hearn is clearly more interested in the fiction than in the science, introducing ideas that would later capture the popular imagination. He goes on to explain that there are "several hundred small planets which circle between Mars and Jupiter like a swarm of bees," perhaps inhabited by giants who can jump half-way across their planet in a single bound (the inspiration for Superman?). Another theorist cited by Hearn puts forth an early version of the Gaia hypothesis, stating that "worlds are living creatures, huge animals, of which we are only parasites," like fleas on a huge dog. He also detects what would later become known as "specie-ism," concluding that it is narrow-minded to assume that other forms of intelligent life will be somehow anthropomorphic. Based on the ideas of Darwin, he invites us to think outside of our usual humanly self-centered boundaries:

There might be planets inhabited by birds capable of building cities, writing books, conversing in many languages like the birds of Arabian tales, and subjecting all other animated life to their control. There might be in some

planet a realization of Swift's fable of the Yahoos and Houyhnhnms; there might be worlds ruled by insects as small as our ants, but more learned by far than we are, although having their brains in the neighborhood of their stomachs. (172)

Through constant references to examples from foreign and domestic literature, here the Arabian tales and *Gulliver's Travels*, Hearn anchors his astronomical fantasies to the everyday world of familiar books and legends. But he foresees the day when even the wildest creatures from the world's most fantastic literature (e.g., talking fish and golden birds in the tales of Scheherazade) may be eclipsed by the discoveries of interplanetary exploration. For Hearn, astronomy is a mental amusement park where the most fantastical dreams may actually be true.

Hearn's next piece on astronomy, "The Fate of the Comet," came four months later (Sept 25, 1882) and was far more technical and less hypothetical than his last. A comet that had recently become visible was predicted to burn itself up within a short period of time. This provided Hearn with the chance to weave astronomy and religion (Judeo-Christian and Buddhist) together in an essay on the inevitable passing of all things. The comets, he writes, are "luminous moths circling round and round an attracting flame until their scorched wings cease to bear them and they fall headlong into the consuming light" (187). Entomology meets mythology: Icarus in space.

He calculates how long it will take for our sun to die, presenting the numbers of the most recent astronomical measurements: "The sun loses one tenth of a degree of heat every 2000 years; or one degree in 20,000 years... His present heat is calculated at 8,000,000 degrees. Therefore it will require 100,000,000,000 years to exhaust it. We have time to become as gods ere that!" (190). After citing Byron's image of a frozen earth "blind and blackening in the moonless air," he concludes on a note of hope that "the force that throbs in our hearts [will] be reborn under a myriad million forms." For Hearn, this idea provides a nexus where Eastern religion, Western religion, and the science of astronomy concur:

How grandly has the telescope of astronomy magnified the pantheism of the East, and the strange thought of the Hebrew psalm: "The heavens are the work of Thy hands. They shall perish; yea, all of them shall grow old like a garment. And as a vesture Thou shalt change

them, and they shall be changed.' (191)

As the above quotation clearly shows, for Hearn, science and religion were rarely, if ever, in conflict. They differed only in their angles of inquiry. In fact, as Hearn saw it, science, especially astronomy, simply re-enforced what religion asked men to take on faith. We can see here that his later work on Buddhist themes in Japan was but the outgrowth of his early engagement with the astronomical ideas of infinity in time and space.

Several months later, "The Life of Stars" appeared (Feb 18, 1883). This time his theme was the simple but astounding fact that everything in the universe, from atoms to galaxies, is constantly moving: "There is no rest in nature – no rest even for the bones of the dead sleeping in the narrow streets of our cemeteries. Every atom of stone or metal vibrates with a secret movement of its own" (*An American Miscellany II* 122). The more he contemplated this, the more excited he became: "There is no rest! What we call fixed stars are moving with a rapidity that the human mind is impotent to conceive – with a velocity compared to which that of a projectile launched by a rifle canon is absolute inertia" (123). He makes his prose churn in imitation of the cosmic turbulence he is describing:

The infinite night roars with the parturition of nebulae pregnant with solar systems – rages with the agonies of dying suns; and all the while that monstrous belt of blazing spheres to which our own solar system belongs is changing shape like smoke, is rolling up like a scroll, is tearing its seething way through unknown deeps of darkness with the rapidity of lightnings – though we, like the creatures wriggling within a drop of water beneath the microscope, may not feel the huge vibrations of a larger universe, may not be conscious of sounds too vast for our tiny brains to comprehend. (123)

It is a single sentence of inordinate length, an extended grammatical dance of the present and present-progressive tenses glorifying perpetual motion. Space, Hearn claims, is a biological theater full of "live" organisms: "Suns are probably seeking food, seeking union, seeking to propagate their species like *rotifera* and *protozoa*; comets are perhaps the swarmspores of worlds; nebulae may be astral sperm cells" (124). Why not call the forces studied by physicists "Life" instead of "laws of attraction and repulsion" (124)? This notion, of course, ties in with

his ideas of ghosts as the invisible forces that animate all things.

In another few months Hearn once again took up an astronomical theme for the *Times-Democrat*. On June 26, 1883, “Sun-Spasms” appeared, the expansion of a topic mentioned in “The Fate of the Comet”: sunspots. This time it was a New York newspaper, the *Sun*, which provided the jumping-off point. What especially intrigued him about sunspots, or “spasms” as they were also known, was their seeming influence on life on earth: “So intimately connected is the life of the world with that of the sun, that our globe throbs to every movement of solar energy” (Hutson 198). Solar eruptions affect our scientific instruments, cause earthquakes, volcanic eruptions, even outbreaks of war. These “strange disturbances” were examples of the kind of ghost-like activity Hearn loved to contemplate. “Knowledge now compels us to give unto the sun those attributes of old accorded to the androgynous gods of the East ... all-producing, all-dissolving” (200). Again Hearn uses scientific data to draw what he believes is a more significant conclusion; namely, that modern science accords perfectly with ancient religion, and that much of our so-called progress simply confirms long-held beliefs.

As we have seen, Hearn sometimes scoured other publications for newsworthy science items, but he was careful to acknowledge his sources and worked hard to digest their contents. Then he re-worked the material, vivifying it so that it might excite the imagination of his readers, especially those with little interest in science. In his next editorial on astronomy, “The Destiny of Solar Systems” (*Times-Democrat*, July 22, 1883), he wrote at great length about another of his favorite topics that science was casting new lights upon: death.

Citing the calculations of French astronomer and mathematician Pierre Simon Laplace (1749-1827), and the observations of distant stars by Polish astronomer Johannes Hevelius (1611-87) and British astronomer William Herschel (1738-1822), Hearn again speculates on the future of the sun, the solar system, and the human race. “When the sun shall have lost 100 degrees of heat, the ice-caps of the poles will have whitened out over the breadth of both temperate zones; and all terrestrial life will have rallied about the equator. There the final struggle [for human survival] must take place” (Hutson 202). Fortunately, man will have help from “a magic mightier than any

sung of in the runes of the Kalewala — the magic of science!” (202). As usual, Hearn invokes exotic imagery from world literature in order to make the facts of scientific discovery seem more familiar and entertaining to his readers. Moreover, Hearn saw science as gradually proving the truth and accuracy of literature’s most fancifully imagined creatures and scenarios. To Hearn, science not only explained phenomena that appeared to be “magic,” it was a kind of magic in itself, and his job as a reporter was to convey that sense of wonder and romance.

It is now pretty generally conceded that we can only hope to guess the future of the human race through the revelations of the telescope.... At distances of dizzying enormity we behold the dying-down of sun-fires, the palpitating agony of stars; we watch new systems being formed within the fiery matrices of nebulae; we see likewise the fragments of dead worlds raining down in meteoric dust upon our globe in its incalculable voyage through the wastes of night. (203)

He speculates that the first celestial body in our solar system to disintegrate will be the moon. In fact, it has already died, and what we see in the sky is a mummy:

But the true pulse-life of a world seems to be connected with volcanic force ... [so] that while a world lives, its lava-veins never cease to throb; and the moon’s heart is chill, her arteries are dried up; her body is mummified and yellow as any corpse in any necropolis of Egypt; and its approaching dissolution is indicated by huge cracks in the dry skin. (204-05)

It is almost as if he wants to write an astronomical version of his famously graphic description of the cremated victim’s remains in the Cincinnati “Tan-Yard Murder” (Nov 9, 1874). Here the mummification of a seemingly living orb is nearly as repulsive as any other Hearnian treatment of death and decay.

After the moon, the planets are the next to die a similar death, and finally the sun, which Hearn speculates may eventually become a planet circling in another solar system around some brightly burning star. Such notions of cyclicity never ceased to intrigue Hearn, and instances of them continue to appear in his writings right up until his death. Consider this passage from “Revery” in *Kotto* (1902). How much of its power and polish is owing to Hearn’s astronomical editorials?

Eventually our planet must die; its azure ghost of air will shrink and pass, its seas dry up, its very soil perish utterly, leaving only a universal waste of sand and stone — the withered corpse of a world. Still for a time, this mummy will turn about the sun, but only as the dead moon wheels now across our nights — one face forever in scorching blaze, the other in icy darkness. So will it circle, blank and bald as a skull; and like a skull will it bleach and crack and crumble, ever drawing nearer and yet more near to the face of its flaming parent, to vanish suddenly at last in the cyclonic lightning of his breath. One by one the remaining planets must follow. Then will the mighty star himself begin to fail — to flicker with ghastly changing colors — to crimson toward his death. And finally the monstrous fissured cinder of him, hurled into some colossal sun-pyre, will be dissipated into a vapor more tenuous than the dream of the dream of a ghost.... (*Writings* XI, 132-33)

The scientific research that he encountered and absorbed in writing his astronomical editorials would furnish him with many of the basic images and ideas of his later, even more impassioned philosophical and religious prose flights. Let us take one example. The following ideas expressed in the concluding paragraph to “The Destiny of Solar Systems” appear virtually unchanged in later works:

[A]s matter and force are eternal, the work of formation and disintegration will continue forever as it has always been.... so that in one sense all which is hath always been, and all which hath been will always be, and forms only vanish to reappear. (Hutson 207-08)

The very same idea appears reworked in “Revery,” written some 19 years later in Japan, where he continues to develop his ideas on the ramifications of stellar death and rebirth:

Nothing real can be lost, even in the dissipation of a million universes In the nebulous haze of our dissolution will survive the essence of all that has ever been in human life.... Transmutations there may be ... for the dust of us will then have been mingled with the dust of other countless worlds and of their peoples. But nothing essential can be lost. (*Writings* XI, 134)

Finding comfort in the scientific and Buddhist idea that nothing in the universe ever truly disappears, he even envisioned his own death as part of the universe’s endless recycling of its matter. In “Dust” from *Gleanings in Buddha-Fields*, he suggested that even the notion of the self, or “I,” is an illusion, a random combination of sprinkled planetary matter:

I an individual — an individual soul! Nay, I am a population.... Countless times the concourse now making me has been scattered, and mixed with other scatterings. Of what concern, then, the next disintegration? Perhaps, after trillions of ages of burning in different dynasties of suns, the very best of me may come together again. (*Writings* VIII, 73)

These excerpts suggest the undeniable influence that Hearn’s American editorials on aspects of astronomy had on his later writings in Japan. Like the forms of matter that “only vanish to reappear,” Hearn’s science editorials, thrown out with the arrival of the next day’s newspaper, would later recombine and reappear in new forms, making his case for the eternal recycling and metamorphosis of all things.

“The Destiny of Solar Systems” is arguably Hearn’s most lyrical and stylistically accomplished expression on an astronomical theme, but it was not his last. Four months later he revisited the topic in “The Sun’s End” (*Times-Democrat*, Nov 25, 1883), apparently to correct a few misconceptions that had been printed in recent articles. This time, though, he is all business. He takes to task an unidentified author who claims the sun is not cooling down but rather getting hotter and will eventually roast all the planets. Instead Hearn argues for the “contraction-hypothesis” of Hermann Ludwig von Helmholtz (1821-1894), the eminent German physicist and ophthalmologist. According to this theory, a very gradual contraction of the sun’s diameter would keep it hot enough to sustain life on earth for about 10 million years, before gradually dying out. After saying that this theory’s validity is “highly probable,” he later backs off with the disclaimer that “no positive proof ... has indeed yet been obtained” (20) and urges the student to “draw his own conclusions.” Eventually, though, as he re-iterates, the sun will burn out and the world will end, but science cannot predict when. His concluding thought is that few scientists believe that the sun’s heat can last forever.

Hearn's relative lack of enthusiasm in this article stands out. He seems to have made no attempt to enliven his prose with striking language and imagery in order to stimulate the reader's imagination. Of course, we can speculate: there may have been a physical reason, such as sickness or fatigue; his mind may have been preoccupied, perhaps brooding over a perceived insult or injustice as it sometimes did; or the piece may have been written by someone else and mistakenly attributed to Hearn. Whatever the reason, it strangely lacks the energy and rapture with which Hearn usually wrote on topics of such grandeur (e.g., "The Life of Stars"), and it seems as dead as a burned-out sun when compared to his next, and perhaps final, astronomical article.

That article is "Celestial Geology" in the *Times Democrat* of June 15, 1884. Once again Hearn describes how he imagines things will look rather than analyze the theory that predicts them. His subject is the story of cataclysmic upheaval that meteorites tell to those know how to read them. As usual, he begins with a reference to an expert, French scientist Stanislas Meunier (1843-1925), who once wrote, "There is every ground for believing that the inhabitants of Mars are more advanced than we in every way, and immensely superior to those of Venus, which is a much newer planet" (*The Galaxy* 127). Hearn, however, did not seem to doubt him, and proclaimed to his readers that, just as a paleontologist can construct a plausible full skeleton from one bone, so Meunier can "*reconstruct the skeletons of dead planets*, from ... meteorites!" (Notice the rare use of italics with an exclamation mark.) Meunier's recent article is too technical for laymen, says Hearn, but even a brief summary "in unscientific language" will "startle" the reader, for each piece of rock contains a sad and wonderful adventure story:

... they tell of tempests of fire and of earthquakes; oceans whose wave-roll never reached terrestrial ears; islands and continents doubtless peopled by intelligent beings whose civilization has left no trace of its existence in the universe That world was fair and large, and must have circled beyond us like some huge bright moon. Gradually the oceans dried up; the atmosphere was absorbed; the great crust fissured and separated from the core; the core itself refissured and cracked asunder, and its fragments were whirled away through the shore-

less night to shower upon other worlds, – other points of light moving through the darkness – or to feed the enormous furnace of the sun. (*Occidental Gleanings* 61-62)

The same will happen to our world, too. Hearn begins to close this astronomical essay as he typically does, prophesying the end of human civilization. But this time he injects an unexpectedly hopeful note that also helps to unify the piece. Though probably not even one word of evidence will remain, there is still a chance that man's existence will not be irretrievably lost:

Perhaps, as the character of a lost world may be divined from a fragment of its cadaver, so may the civilization of its inhabitants be ultimately determined; and when some atom of this globe shall fall upon the plains of a larger world in myriads of millions of years to be, the geologists of that distant sphere might determine at a single glance the whole character of our history and the whole range of our boasted learning. (62)

In his articles on astronomy, as in his other scientific writings, Hearn generally strove to make his subject into entertaining literature, into prose that would thrill and enthrall a non-scientific readership. In that sense he was a lot like his contemporary, Percival Lowell, a writer whose books on Japan (*The Soul of the Far East*, 1888; *Noto*, 1891; *Occult Japan*, 1894) and on astronomy (*Mars*, 1895) Hearn admired immensely and sometimes seemed to emulate. As David Strauss writes in his biography of Lowell, "Lowell conceived of his popular scientific works as essentially literary.... Indeed, Lowell believed that popularization of science was a greater challenge than writing for a professional audience" (*Percival Lowell* 74). Hearn, who also tried to combine science and literature, respected a man like Lowell who could bridge and blend the two disciplines so beautifully. He wrote to George Gould in 1889 that *The Soul of the Far East* was "an astounding book – a godlike book" (*Writings* XIV, 87); and in a letter of 1902, Hearn advised Professor Yrjo Hirn to read it "many times." But he seemed equally impressed with Lowell's scientific writing: "It is strange," wrote Hearn, "that Lowell should have written the very best book in the English language on the very old Japanese life and character, and the most startling *astronomical* book of the period – 'Mars' – more interesting than any romance" (*Writings* XV, 218). Though Lowell's works appeared

many years after Hearn's scientific editorials, the two authors' interests and artistic spirits were remarkably aligned.¹

Hearn's conclusions to his scientific pieces often reveal how closely science and religion were linked in his mind, and how science for him was but one tool in the ultimate quest to comprehend the mysteries of our existence. He would have agreed thoroughly with Albert Einstein's assertion that "Science without religion is lame, religion without science is blind."

Though always somewhat suspicious of its wondrous predictions, Hearn never tired of speculating about the potentials of science. Science was his dream machine, an essential muse that inspired some of his most passionate and soaring journalism and some of his most effectively articulated essays.² While working as a journalist in America, science stimulated every area of his thought and outfitted him, at least in part, with the mental equipment he needed to write his more famous books, stories, and essays. In his speculative reports, with their dreams of what might one day be, the power of his prose enabled the reader to soar along with him on his sometimes outrageously imaginative flights. But in the end he always tried to bring the reader back down to earth and reality by linking his scientific speculations to familiar examples from world literature and the Bible. It is clear that scientific information had long stimulated his creative imagination, and he used that imagination to craft exceptionally styled passages of writing, both as a young reporter in America and as a more fully fledged man of letters in Japan.

¹ See Peter McIvor's "Feeling – Not Reason": Lafcadio Hearn Considers Percival Lowell," *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 15, 2000, pp. 47-56.

² Not all readers have found Hearn's editorial work interesting. Arthur E. Kunst summarily dismissed it as "a response to the vulgar passion of his era for spurious profundity; volumes of pseudoscience and philosophic folly" that were "turned out by Hearn for a grateful but happily non-thinking audience." The writings were "of no literary value" and "of trivial historical importance." Others have felt differently. In his relatively recent re-evaluation of Hearn's writing, Jonathan Cott quotes generously from Hearn's journalism as evidence of stylistic excellence. Albert Mordell, the foremost collector of Hearn's American journalism, concludes that although Hearn "was no specialist," his scientific work is that of "a poet writing with his logical faculties ... not in abeyance" (*Gleanings* xxiii). While Mordell's collections are invaluable and his prefatory comments insightful, he provides only brief consideration of a small number of scientific articles.

References

- Hearn, Lafcadio. *The Writings of Lafcadio Hearn in Sixteen Volumes*, Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1922.
- Hearn, Lafcadio. *Editorials by Lafcadio Hearn*. Ed. Charles Hutson. Boston: Houghton Mifflin Company, 1926.
- Hearn, Lafcadio. *Lafcadio Hearn: Selected Writings 1872-1877*. Ed. William Johnson. Indianapolis: Woodruff Publications, 1979.
- Hearn, Lafcadio. *An American Miscellany I and II*. Ed. Albert Mordell. New York: Dodd, Mead and Company, 1924.
- Hearn, Lafcadio. *Occidental Gleanings I and II*. Ed. Albert Mordell. New York: Dodd, Mead and Company, 1925.
- Hearn, Lafcadio. *The New Radiance and Other Scientific Sketches by Lafcadio Hearn*. Ed. Ichiro Nishizaki. Tokyo: Hokuseido Press, 1939.
- Hevelius, Johannes. "High Altitude Observatory," 12 Dec. 2006. <<http://www.hao.ucar.edu/Public/education/bios/hevelius.html>>.
- Lockyer, Joseph Norman. Biography. <https://www.britannica.com/biography/Joseph-Norman-Lockyer>
- McIvor, Peter. "Feeling – Not Reason": Lafcadio Hearn Considers Percival Lowell," *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 15, 2000, pp. 47-56.
- McWhirter, Cameron and Findsen, Owen, eds. *Whimsically Grotesque: Selected Writings of Lafcadio Hearn in The Cincinnati Enquirer, 1872-1875*. Copyright 2001.
- Meunier, Stanislas. Qtd. in Smith, Kristin F. "Popular Astronomy: 1870-1879" from original source in "Scientific Miscellany" in *The Galaxy*, 127. January 1874. <<http://members.tripod.com/blinfool/page33.html>>.
- Strauss, David. *Percival Lowell: The Culture and Science of a Boston Brahmin*. Cambridge: Harvard University Press, 2001.
- Weisstein, Eric W. "LaPlace, Pierre." <<http://scienceworld.wolfram.com/biography/Laplace.html>>.

Chronological table of Hearn's scientific journalism.

J=Johnson; H= Hutson; OG=Occidental Gleanings; N=Nishizaki; AM=American Miscellany

<i>Collection</i>	<i>Title</i>	<i>Newspaper</i>	<i>Date</i>	<i>Branch of Science</i>
J 34	Medical Science	Enquirer	Mar 24, 1874	Medicine
J 44	Skulls and Skeletons	Enquirer	Aug 30, 1874	Medicine
J 53	The Recent Zoological Romance	Enquirer	May 1, 1875	Biology
J 98	A Slaughter-House Story	Enquirer	Aug 21, 1876	Medicine
J 120	An Hour With A Naturalist	Commercial	April 15, 1877	Biology
J 131	Climatic Curiosities	Commercial	May 6, 1877	Meteorology
J 142	Beluga Catodon	Commercial	June 29, 1877	Biology
J 150	Embalming A Corpse	Commercial	July 11, 1877	Medicine
H 4	Fantastic Possibilities of Invention	Item	June 25, 1878	Technology
H 17	Insect Politics	Item	July 8, 1878	Entomology
H 19	Is the Sea Serpent an Eel?	Item	July 13, 1878	Biology
OG II 39	The Alchemist's Dream Realized	Item	Dec 20, 1878	Chemistry
N 10	Unfolded Mysteries	Item	Jan 24, 1879	General
OG II 42	Some Startling Facts and Dreadful Dreams	Item	Mar 26, 1879	Earth Science
H 46	Desert or Sea	Item	June 29, 1879	Earth Science
H 50	The Secrets of the Infinite	Item	Aug 15, 1879	Astronomy
H 92	The Electric Light	Item	June 20, 1880	Technology
H 111	A Dream of Futurity	Item	Nov 8, 1880	Biotechnology
H 118	What Is Light	Item	Dec 21, 1880	Physics
H 129	As If Painted By Lightning	Item	April 29, 1881	Technology
N 88	Dr. Hava's Tarantula	Item	May 4, 1881	Entomology
H 138	Rainbow Birds	Item	June 5, 1881	Biology
N 1	The New Radiance	Item	Sept 16, 1881	Technology
N 56	Insect Civilization	Item	Oct 4, 1881	Entomology
N 120	Invisible Poisons	Item	Nov 1, 1881	Biology
H 169	Some Grotesque Theorizing	Times-Dem	May 24, 1882	Astronomy
H 178	The Present Status of the Germ Theory	Times-Dem	Aug 8, 1882	Biology
OGII 48	News About Ants	Times-Dem	Aug 27, 1882	Entomology
H 187	The Fate of the Comet	Times-Dem	Sept 25, 1882	Astronomy
H 192	Submarine Gossip	Times-Dem	Dec 10, 1882	Biology
AMII 122	The Life of Stars	Times-Dem	Feb 18, 1883	Astronomy
N 157	Myopia	Times-Dem	Mar 4, 1883	Ophthalmology
H 196	Sun Spasms	Times-Dem	June 26, 1883	Astronomy
AMII 126 H 201	The Destiny of Solar Systems	Times-Dem	July 22, 1883	Astronomy
N 17	The Sun's End	Times-Dem	Nov 25, 1883	Astronomy
OGII 58	Celestial Geology	Times-Dem	June 15, 1884	Astronomy
N 207	A Great English Physician	Times-Dem	Dec 15, 1885	Medicine
OGI xxi	The Magician of Paris	Times-Dem	Dec 24, 1885	Biology
OGII 195	The Creole Doctor	NY Tribune	Jan 3, 1886	Medicine
N 160	Eye-Transplantation	Times-Dem	Jan 24, 1886	Ophthalmology

第五高等学校の修学旅行（明治期）

—夏目金之助を中心に—

村田由美 五高記念館客員准教授

はじめに

日本における修学旅行の嚆矢は、明治19（1886）年2月15日から26日にかけて実施された東京師範学校の「長途遠足」である*1。これは「兵式操練」と実地の「学術研究」とを兼ね備えたものだった。その後、東京師範学校は高等師範学校となり、「修学旅行」規定が定められ、その名のもとに初めて行われたのが明治20（1887）年8月6日から9月4日まで1カ月余に及ぶ旅行だった*2。

こうした修学旅行について、行軍とも修学とも言えない中途半端な「無益」なものという批判もあったという*3。しかし、修学旅行は各学校に定着していった。

その過程について井上美香子・新谷恭明らは「師範学校における修学旅行の成立・普及過程」（『教育基礎学研究』九州大学教育基礎学研究会、2007）で、明治28（1895）年に行われた修学旅行を例に挙げて「修学旅行はその目的が学術研究と心身鍛練という二つの目的の間を揺れながら」全国各種の学校に普及し、「交通機関（殊に鉄道）の発達」により、「急速に物見遊山的要素をふくらませていった」と結論づけている。

第五高等学校（以下五高）でも明治23（1890）年から修学旅行が行われているが、少なくとも明治期に「物見遊山的要素をふくらませて」いく傾向は見られない。五高は、しばしば第一高等学校（以下一高）を模範としたと言われるが、修学旅行については一高とは違う様相を見せている。一高では修学旅行は「行軍」として明治21年から昭和に至るまで3日間の演習が行われている。

第三高等学校の修学旅行については、大阪に校舎

があった第三高等中学校時代、明治21（1888）年3月31日から5泊6日で「学術研究ノ為メ」「大和山城地方」に旅行して以来、毎年「春秋両期」に行われたと『第三高等学校一覧』に記載されている。また、同年秋に行われた修学旅行は3日間の「行軍」であったことが官報によって確認できる*4。『神陵史』によると明治23（1890）年京都移転後は、春期のみになり2、3泊の旅行となった。

他の高等学校については未調査だが、五高の修学旅行は、一高、三高とは形を異にし、明治期に2度大きく形を変えている。その過渡期に夏目金之助、のちの漱石が五高で教鞭を執っていた。

五高の修学旅行について「学術調査実習にも力を入れていた」*5と記述するものもあるが、これはその一部を抽出したものでしかない。五高の同窓会誌『龍南会雑誌』には、幸いなことに明治期の修学旅行についての記録が残っている。ただし、これは春秋2期に行われたという修学旅行のうち、秋期のものだけだが、これをもとに漱石が参加した修学旅行、また五高の明治期の修学旅行について明らかにしたい。

最初の修学旅行

五高の修学旅行は、明治24（1891）年11月26日創刊された『龍南会雑誌』に掲載されている。ただ、残念なことに明治40（1907）年の修学旅行だけ記録がない。五高記念館に残っている「命令簿」によると、明治40年11月1日、教授杉山岩三郎以下25人の職員に「生徒発火演習ニ付八代地方ニ出張ヲ命ズ」という

命令書が出されたことがわかるのみである。

最初の記録は明治24(1891)年11月10日から20日まで行われた長崎・佐賀地方への修学旅行である。雑誌の第3号(明25・1・25)に「長崎佐賀地方修学旅行日誌一班」の題で掲載されている。武藤虎太が記述し、笠間益三教授が検閲している。その冒頭に「毎年春秋二期。我校例ニ修学旅行ノ挙有り。昨秋福岡地方ニ至リ、今春八代ニ遊び・・・」とある。しかし、春の修学旅行についてはほとんど記録がなく、「命令簿」でも明治22(1889)年4月に三角地方、同24年4月八代地方、29(1896)年2月菊池山鹿地方に職員に修学旅行のための出張命令が出ているのが確認できるだけで、詳細はわからない。このため、ここでは秋期修学旅行についての記事を中心に考察したい。

明治24年11月10日午前2時、整列した生徒に向かって嘉納校長が「正課ヲ欠テ之ヲ行フ。則チ之ニ適スル。有益ナル知識ヲ得サルヘカラズ。蓋シ実地ヲ踏ミ。実物ヲ観ル。其間観察ヲ詳ニシ。実験ヲ務メ。以テ心智ヲ開発スルヲ要ス・・・(略)帰校ノ際ハ。幾何カ耳目ヲ一新シ。心胸ヲ啓発スル所アレ。而シテ後此行ノ裨益スル所。少カラザルヲ得ン。」と述べたことが記されている。全員を中隊に編制し、4小隊に分け、さらに16分隊に分けた。小隊長には生徒が当てられた。午前2時半、喇叭の音とともに教員以下200余名で出発した。

しかし、これは最初の修学旅行ではない。五高で最初の修学旅行は明治23(1890)年11月6日から15日まで10日間にわたって行われた長途の旅である。『龍南会雑誌』は、明治24(1891)年11月発刊のため、この時の記録はリアルタイムでは掲載できなかった。それが同誌に掲載されたのは、第18号(明26・6)と第19号(明26・10)で、笠間益三教授が個人的に記録していたものだった。当時、高等学校令(明治27年6月25日勅令第75号)の発令前で、五高はまだ第五高等中学校と称しており、校長は嘉納治五郎である。

校長の訓示があったはずだが、笠間の記録にはない。しかし、前述の明治24年の修学旅行の記録にあったように、嘉納が「実地ヲ踏ミ」「心智ヲ開発スル」ことの重視していたことは想像できる。

11月6日午前7時、職員29人、生徒約160人が集合し8時半に出発した。3里の道のりを歩き植木に

到着。本部を2カ所に分け、生徒の宿泊所を3カ所に分散した。そこから1里ほど離れた田原坂に向かう隊と、同じく1里離れた小野小町伝説のある小町池に向かう隊とがあった。またその近くの横山古墳の石室を訪れた者もいた。午後5時には旅館に戻ったが、寒さの厳しい夜をわずかに布団1枚で過ごさなければならなかったらしく、笠間は「旅費の賤なるを以てや亦宜なり。復た誰をか怨みん」「宛も・・・汽船下等客室の状に似たり」と最初の夜を嘆いている。

7日は朝7時発。味取村、山鹿を経て鍋田村に到着。職員は3戸、生徒は6戸に分かれて宿泊する。第6師団が東西に分かれて演習を行っている砲弾の音が近くに聞こえる。この旅行の第一の目的は、この演習を見ることにあった。

8日早朝から、第6師団の演習を見学した。時間にして30分ほどであったが、勝敗が決するのを見届けて出発。この日は兼松に宿泊したが、職員は1カ所に、生徒は6カ所に分宿した。職員は熊本を出発して初めて一堂に会したため、会飲し、労をねぎらった。

9日は午前6時発。雨のため全員雨具をつけての行軍となる。久留米に向かい、ここから汽車に乗り、博多駅で下車。東公園で建設中の元寇記念碑、弘安の役に関わる古文書などを見る。10日は午前8時出発。筥崎宮、修猷館、西公園など見学。博多湾の栈橋や鉄工場、養蚕場などを見た一行もあった。

11日、午前6時出発し、博多駅から汽車に乗り二日市で下車。太宰府を見学した。午後2時50分、再び汽車で久留米に行き、宿泊。12日は汽車でさらに柳川に行き、柳川尋常中学橋蔭館を見学。授業を参観する予定だったが、午後の授業がなぜか休業となったため参観できなかった。笠間は「頗る遺憾」と書いている。

13日柳川を発ち、大牟田まで歩行。炭坑を見学し、宿屋に宿泊。14日、午前6時半出発。府本に至り、発火演習を行う。20人を仮設敵兵として教師が引率して先発し、本軍は前衛、本隊、後衛に分けてこれを攻撃した。銃撃戦が行われ、抜刀隊の戦いが始まるやいなや休戦の喇叭が吹かれ、演習は終了した。五高の発火演習の始まりと思われるが、後の演習に比較すると小規模で、敵兵も少ない。

高瀬では、高瀬高等小学校や尋常小学校の生徒ら数百人が歓迎し、郡長や商人からは魚や饅頭などの寄贈があった。そこに、この秋五高に入学したばかり

の生徒の親があり、この修学旅行に参加することを楽しみにしていた息子が十数日前に病気で急死したことが告げられた。15日午前6時、宿を出た一行は亡くなった生徒の墓に詣で、捧銃の式を行い弔意を表した。これを契機としたのか、明治26年の修学旅行以降、亡くなった生徒にゆかりのある地では、墓参や遺族の訪問が恒例となり、遺族に喜ばれた*6。

その後、徒歩で帰路についた。午後3時半帰校した。これが、五高最初の修学旅行である。この行軍のために園哲雄教授が軍歌を作り、それが行軍中にしばしば歌われたことも記されている。

この旅行には、最高齢67歳の秋月胤永教授も同行したが、笠間は「健歩壮者と相伍」す秋月の姿に感嘆している。秋月は会津藩元家老で、明治23(1890)年に第五高等中学校に赴任し、五高の精神的支柱となった人である。

翌24年の旅行については、冒頭で少し述べたが長崎・佐賀方面で三菱造船所や製鉄所、水道工事、有田では香蘭社の見学など、新しい産業面の見学が行われた。また、長崎の医学部との交流では酒を酌み交わすような大らかさもあった。急遽、端艇競漕も行っている。各地の尋常中学校との交流も盛んに行われた。

嘉納は明治25(1892)年の旅行の際も、旅行は「漫遊」ではなく、あくまでも「課業」の一つであることを注意し、さらに「我校は九州各県の為に立てらるゝもの、諸子は即ち九州各県によりて養はるゝものなり、是を以て経る所の各地皆諸子が言行風紀を熟察して、以て我校を立つる所の旨に背くなきや否やを観ん諸子其れ之を体せよ」とも述べている*7。修学旅行が、九州各県に渡っている理由である。

この修学旅行が、最初の変化を見せるのは、翌26年の旅行からである。校長は、嘉納から中川元に代わった。

日清戦争前後の修学旅行

明治26(1893)年2月、第一高等中学校(後、第一高等学校)校長として転任した嘉納に代わって、中川元が赴任した。

中川は修学旅行が「課業」であり「学術上」有益であることは言うまでもないが、「行軍と通称する所以は一、規律を守ること一、艱難辛苦に堪ゆること一、気質

鍛錬を実習すること」の3点を強調し、「飲酒する勿れ。買食する勿れ。以て大に費用を節せよ」とも付け加えた*8。全隊を指揮したのは、陸軍歩兵大尉沼田九八郎だった。明治26年から、体操の教員に陸軍関係者が加わったことで修学旅行は「行軍」としての性格を強めていく。

「行軍」においては隊列を整えながら決められた時間内に目的地に脱落者なく着くことが求められる。1日に6里から8里、10里歩くことも珍しくなかった。明治21年から28年まで五高に在籍した村川堅吾は、行軍で担いだ銃や背囊が、陸軍使用済みの古い物で、銃は「銃口の方から弾を込める」スナイドル銃であったことを回想している。上級生になって部隊長になると、脱落しそうになった生徒の銃も担いで歩いたという*9。

修学旅行では脱落者もかなり出たようだ。明治31(1898)年卒業の八波則吉は、2度修学旅行に参加し、「肥前から筑前豊前」をめぐる旅行と「日向路」への旅行だったと回想している。これは明治28年、15日間にわたって行われた佐賀から福岡、大分・耶馬溪への旅と、明治30(1897)年矢部を通して宮崎・高千穂方面へ回った7日間の旅である。八波は「連日の行軍に、随分落伍者も出た。斯く申す私も、一度は中途から失敬させて貰った者の一人」と述べている*10。さらに八波は「或時は好奇心から、歴史研究隊に加はつて、方々の神社仏閣に立寄つて、黴臭い古文書を調べたこともあつたが、到底其の柄でないことを自覚して、翌年度は其の研究隊から退いた」*11と述べているが、これは28年の修学旅行のこのようだ。

歴史研究隊は28年から30年まで、資料では確認できるが、その後は資料がなく、修学旅行自体の変化に伴い、行われなくなったと考えられる。歴史研究隊の他に、明治27年の修学旅行では鉱物採集隊が活動している。

明治26年以降、発火演習は、これまでと違って南北軍や東西軍に分かれて、より本格的に行われるようになった。命令は沼田大尉から出され、各軍は攻撃軍と防衛軍に分かれ、与えられた任務の遂行を競った。

『龍南会雑誌』第96号に発火演習の際の「注意」が掲載されている。それによると、まず東西あるいは南北の隊の区別は帽子に赤い鉢巻をするか否かで行っていた。また「弾薬ハ一人十発宛但シ前衛小隊ハ十五発」と書かれている。「空砲」であるから、撃っても弾は当たらず、光と煙が出るだけである。また「工作物其他

一般ノ地物ニ就キ損害賠償ヲスベキ処置ヲ禁ズ」とある。演習が11月に行われるのは、稲刈りが済んで、できるだけ田圃などを踏み荒らして迷惑をかけないようにという配慮だったのだろう。さらに「彼我百米突ニ接近セバ発射ヲ止メ只其状ヲナスノミ而シテ四十米突ニ接近セバ全ク之ヲ止メ立銃ヲナスベシ」とある。「空砲」といっても接近して撃てば怪我をしかねない。

「呐喊」の号令のもと、銃剣をもって両軍がぶつかりあう白兵戦になるとすぐに演習中止の喇叭が鳴る。これは、生徒が血気にはやって相手を傷つけることを避けるためである。

斥候が的確な情報を隊に報じることができるか、中・小・分隊長などの各級指揮官の状況判断と部隊指揮手順の善し悪し、あるいは指揮される生徒の行動の善し悪しが評価される。このため「攻撃」「防御」それぞれの演習課題が「想定」として与えられるのである。

演習後は、課題に対する活動評価が行われる。明治33(1900)年の『龍南会雑誌』に「演習の審判官たる二宮講師」という表記があるが、この「審判官」が各部隊の指揮官の指揮ぶりや、生徒の動きなどをチェックしたのだろう。講評は発火演習が旅行の中心となっていく中で重要なものとなっていく。

明治26年11月の修学旅行では、出発の翌日第1回演習が行われている。侵入しようとする北軍を南軍が迎え撃つという図式で、戦いは11時半過ぎに始まり12時5分には、北軍の退却で終了した。『龍南会雑誌』には演習地図も掲載されている。しかし沼田大尉の講評の後、すぐに八津助教授の地質についての講義があるあたり、まだ行軍だけではなく、学術を併せ持った旅行の性質が垣間見える。第2回演習は、宇佐郡四日市千源寺原で行われた。

この修学旅行では、大分の宇佐八幡や耶馬溪などをめぐったが、大分は10月13日から15日にかけての大雨で、未曾有の被害を出していた。あちこちでその惨状を目の当たりにした職員と生徒は、義援金を集めて大分尋常中学校長に贈っている。

日清戦争が始まった明治27(1894)年の修学旅行では、出兵のため五高には陸軍関係の体操教師がいなかったのだろう。体操教師秋山基治が大隊長として率いているが、中隊長以下すべて生徒が任に当たった。しかし「甲午修学旅行日記」*12冒頭には「今清国^{ひきゅう}を^{ひきゅう}開き、我百萬の貔貅遠く敵地に在り、海に陸に、激戦奮闘、其苦辛想ひ見るべし」「露英は豺狼なり、耽々と

して東洋に雄飛せんとする久し、東洋の危機方に迫る」と、戦時を反映した文章が連なる。修学旅行もまた「艱難を試み苦楚を嘗め、以て心力を練り、魂胆を鍛ひ、以て国家有用の資となす」ものと捉えられるのである。

明治28(1895)年の修学旅行では体操教師兼舎監の寺本俊蔵が大隊長となって全体を率いたが、学校長に代わって沼田陸軍大尉が全体を指揮し「軍隊編成中は一に軍の規律を遵奉」することを生徒に命じた。この年は2回の発火演習が行われている。修学旅行は次第に形を変えていきつつあった。

このような時代状況の中、漱石は五高に赴任した。漱石は4年3カ月の在熊時代、2回修学旅行に参加している。その詳細は『龍南会雑誌』でおおよそ知ることができる。

夏目金之助が参加した修学旅行

夏目金之助——のちの漱石が熊本に赴任したのは明治29(1896)年4月。熊本を離れる明治33(1900)年7月までの4年3カ月の間、4回の修学旅行があった。漱石が参加したのは明治29年11月と明治31(1898)年11月の2回だけだ。

最初の修学旅行が明治29年の天草島原地方への修学旅行である。総勢230余人。隊列外に漱石ら教職員29人がいた。11月14日から19日までの6日間で、これまでの10日から最高16日という長い修学旅行に比べると大幅な短縮である。

この修学旅行を『龍南会雑誌』第52号(明治29年12月25日)の記述をもとにまとめてみる。

11月14日、嶋野少尉が隊全体を監督し、寺本教官と能勢教官がそれぞれ中隊長となり、6箇小隊の長と左翼士官は生徒が当てられた。沼田大尉は都合で参加できなかったようだ。午前7時45分、隊列を組んで学校を出発。春日停車場(現熊本駅)に向かい、そこから列車で宇土駅に行くと、駅からは三角港(現三角西港)まで行軍し、午後4時40分に到着した。

翌日午前7時、三角港から天草丸と八千代丸2艘の船に分乗し、同10時、町山口(現本渡市)沖に着いたが、折から引き潮で岸に船をつけることができず、皆草鞋を脱いで裸足で海を渡り、11時、町山口(現本渡市)に上陸した。幸いなことに温暖だったためそれほどの苦痛ではなかったという。郡長をはじめとして、濟々鬻分

校長らの出迎えを受け、町に入ると済々黌分校生徒や高等小学校生徒の歓迎を受けた。

発火演習は翌日に予定されていたが、土地の有志者の懇請により、急遽午後から町山口付近で行うことになった。南北両軍に分かれて午後1時開戦。多くの見物客が見守る中、2時45分休戦となった。このような見物客の多さは、天草に初めて五高生が行軍してきたということもあるだろうが、やはり日清戦争後という世相の影響もあったのではないと思われる。

16日は、前夜から降り始めた雨の中を午前7時に町山口を出発した。本村から険しい山道を経て午後2時に富岡に到着。鎮道寺、富岡城址などを散策した。

17日、前日の雨は上がり、2艘に分乗して富岡港を出港。午前11時に小浜に上陸した。ここで五高医学部の卒業式に出席し、公務を終えた中川校長が出迎えた。一行は昼食のあと、山路をたどり、午後4時島原温泉に到着。寺本教官の率いる第1中隊と本部は旧湯に、能勢教官の第2中隊は新湯に宿泊した。

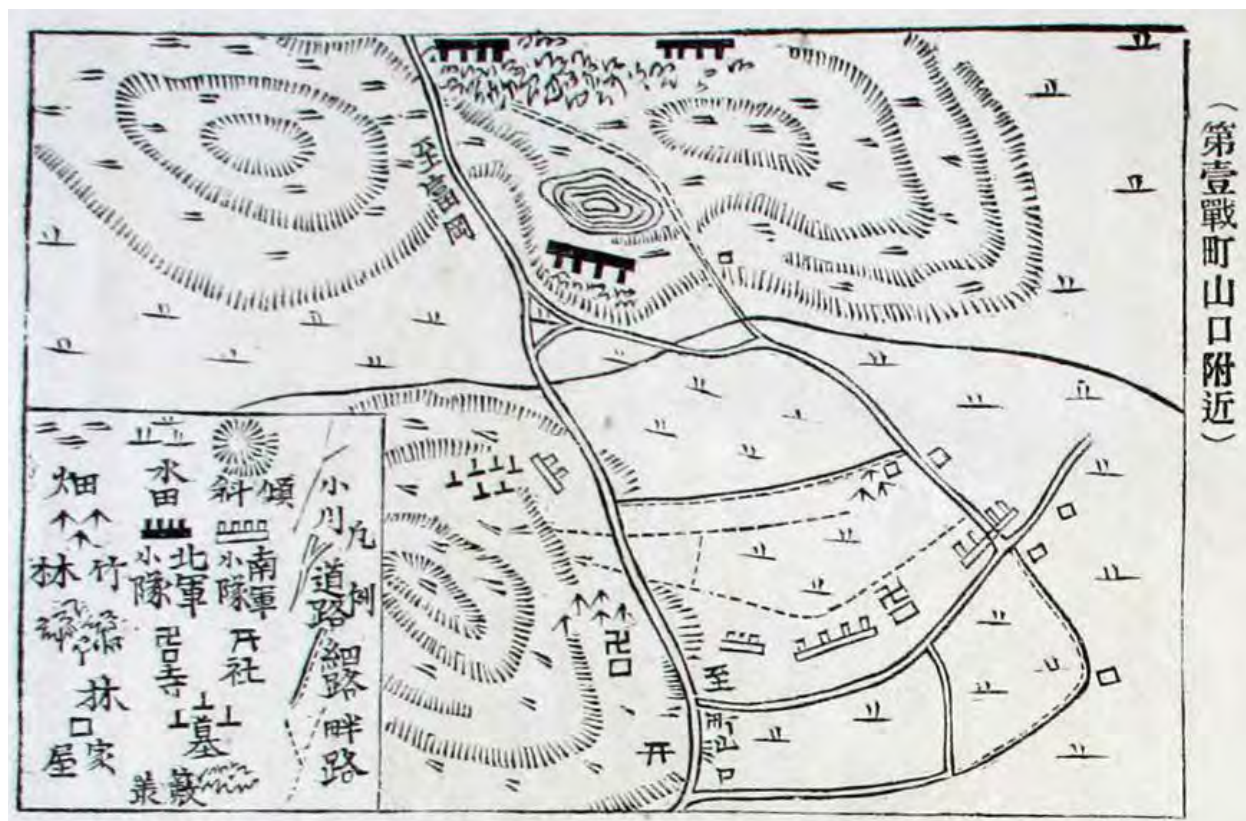
18日は再び南北軍に分かれて発火演習を行った。午後5時島原着。19日午前7時15分、島原を出港し、8時半に坪井川河口に上陸。百貫石、松尾村、春日

を経て帰校した。歴史研究隊が別動隊として動いたが、雑誌の記者が記述した通り「名けて修学旅行といふと雖も、その第一の目的は実に心身の鍛錬に在」った。

明治30(1897)年11月の修学旅行は、御船を通して宮崎県高千穂に向かい、高森、大津を経て帰校する7日間のコースで、通潤橋や五郎ヶ滝も回っているが、漱石は佐賀・福岡の中学校参観の為、旅行には参加していない。この旅行に同行した教師は、校長、体操教官のほかには川北、岩田、二宮の3人だけだった。これは、「修学旅行規則」の改正によって職員は希望によって従軍することとなったためだ。

明治31(1898)年11月16日から18日まで、菊池山鹿方面へのきわめて短い修学旅行となった。この旅行については、教頭の狩野亨吉の日記^{*13}もあり、『龍南会雑誌』第71号(明治31年3月31日)の記述と合わせて、その概略を示す。

16日8時25分出発。東軍監督が教頭の狩野亨吉。西軍の監督が中川校長。直接指揮したのは体操教官で、沼田九八郎が総隊長。東軍は陸軍歩兵少尉の緒方武と伊形亀雄が率い、西軍は陸軍工兵少尉島野四平が率いた。生徒は両軍に従った教授陣から東軍を



明治29年11月15日 町山口付近で行われた発火演習地図。北軍と南軍が逆になっている(『龍南会雑誌』第52号)

「独軍」、西軍を「英仏同盟軍」と称した。ここから、漱石や山川信次郎、桜井房記は西軍に、久後元長、上田整次らは東軍に従ったことがわかる。両軍は途中で分かれ、東軍は隈府に、西軍は来民に向かった。東軍は午後2時40分に隈府着。生徒たちは宿舎で旅装を解き、菊池神社に参詣し、宝物を見学した。狩野はこの夜、同僚と散歩に出かけ古道具商で古物を購入している。行軍とはいいながら、同伴の教師たちは隊列外でもあり、のどかではある。漱石は、来民泊と思われるが、宿屋が数軒しかなかったため、生徒たちの宿舎は鹿本郡出身者らの尽力によって、土地の有志が宿泊所を引き受けた。

この日は快晴だったが、夜半大雨となり、翌朝も雨が降った。午前6時半出発。発火演習が開始される。来民にいる西軍に対して東軍が進撃を開始するが、来民東端の丘陵地に位置した西軍に対して、わずかな藁こづみ以外身を隠すところのない東軍は、苦戦を強いられる。着剣をして突貫攻撃をしようとした矢先、9時5分には休戦となった。

両軍は合流して、さらに雨脚の強まる中を行軍。正午に山鹿に到着した。狩野の日記によると本部は「新天川屋桜井旅館」とある。

翌18日、午前6時半出発。濡れた衣服は乾く間もなく、再び雨の中を行軍した。植木で昼食をとり、午後3時、京町の新坂で解散となった。しかし、この行軍について、雑誌記者は、西軍のあまりに有利な陣地どりのために、ほとんど「勇絶壮絶なる」ところのない演習は「何らなすべきなき一兎戯」と不満を述べた。また、いかに雨で「道路寧泥」のため、疲労が大きくとも、学校までわずか「十数丁」で解散するという学校の配慮は「寛恕にあらずして却りて規律の守らざるべきを告白するもの」と苦言を呈している。

明治31年には「修学旅行規定」が変更され、「修学旅行は軍隊組織トス」「修学旅行は三泊以内トス」などが明記され、生徒数の「十分ノ七以上」いなければ行わない、などと定められた。以後、1週間にもわたる長途の旅は全くなくなる。

漱石が経験した二つの修学旅行は、長途の旅から4日間の行軍に変化するまでのまさに過渡期の修学旅行だった。

発火演習規定の制定

明治34(1901)年11月、「修学旅行規定」は改正され第一条に「修学旅行ハ工学部第一年級及大学予科各年級生徒ニ之ヲ課ス」という一文が加えられた。さらに明治36(1903)年10月改正では「大学予科生徒修学旅行規定」と名称が変わり、第一条は「修学旅行ハ大学予科各年級生徒ニ之ヲ課ス」となった。それまで「九十銭」だった旅行費も「一円」に値上げされている。

発火演習を中心とした行軍で、「見学」はほとんど行われていない。明治39(1906)年6月には「大学予科生徒修学旅行規定」が廃棄され、代わりに「発火演習規定」が設けられた。

第一条には「体操予科実地教練ノ為ニ毎年一回以上発火演習ヲ行フ」とあり、やはり「三泊以内」(第三条)と決められている。「演習旅行費ハ金壹円八十銭」(第四条)。「十分ノ三以上欠課スルトキハ之ヲ行ハサルコトアルヘシ」(第七条)という条文は以前と変わりはない。

このように「発火演習」と銘打たれたものを「修学旅行」としてとらえるかどうかについては、異論もあるだろうが、形の上では明治32年以来、変わりはない。明治45(1912)年は、明治天皇の崩御のため発火演習ではなく、京都伏見の「桃山御陵」への旅行となっている。これは「命令簿」に「生徒修学旅行」と書いてある。『龍南会雑誌』における表題も「従軍四日」、「修学旅行記」、「発火演習」などばらばらだ。明治40年代においても「修学旅行」という記述は見えるので「発火演習」も「修学旅行規定」が廃棄されたとはいえ、「修学旅行」と同等と捉えてよいだろう。

しかし、時代とともに「行軍」「発火演習」はかなり変化している。行軍自体が変わったのか、それを記録する雑誌部員の意識が変化しているのか、さらに多くの資料にあたらなければ断定は難しい。行軍の様子を筆記する文章が文語体から口語体に変ることだけでも、この印象はずいぶん変わっている。その最も早いのが明治33(1900)年11月における記録である。『龍南会雑誌』83号掲載の修学旅行の記録にはかなりくだけた口語文で先生とのやり取りなど、行軍外の行動が書かれている。

明治34年の行軍では、桜井校長が、行軍中の親戚知人などとの飲酒を戒めている*14のは、そのような生徒が目につくということなのだろう。禁酒についてはしば

しば言及がある。演習の最中に煙硝を田圃に埋めて火をつけるような悪戯もあった。「各兵にして主客転倒、種々小隊長や分隊長を指揮し居る者ありき」という記述もある。不満足な点は「軍規正しからずにある」と述べ、「尋中の演習に遜色あり」と苦言を呈している。このような態度は雑誌部員にも現れていく。これが時代の風潮だったのだろう。

明治37(1904)年の行軍では桜井校長が「旅行中ハ各自個人ノ観念ヲ云テ専ラ共同精神ヲ以テ行動シ又特ニ言行ヲ慎ミ風紀ヲ厳肅ニシ」という訓示を与えるあたり、時代を反映しているということだろう。「個人主義」の蔓延である。

また明治38(1905)年の修学旅行記は「従軍日誌」と題されている。雑誌委員達は、まるで従軍記者のように、演習の様子を書いて新聞を作った。「陣中日報」と称する4ページの新聞が連日印刷され、生徒に配布された。これは日露戦争の影響と考えられる。雑誌委員(従軍記者)は特権を与えられ、行軍とは行動を別にして汽車や電車、「マンパワー」などとふざけた名で呼ぶ人力車で移動しては、茶店に寄ったり、近くを見物したりしている。『龍南会雑誌』第138号には「陣中日報」の1部抜粋が掲載されているが、行軍とは関係のない軽い読み物もあったようだ。

明治39(1906)年の修学旅行では自転車に乗った斥候が登場している。その後は見られないので1度限りだったのかもしれない。自転車の普及を感じさせるものだ。明治41(1908)年の『龍南会雑誌』にはほとんど口語体の「修学旅行記」が掲載されている。このような演習自体を茶化したような書きぶりで、これが雑誌部員たちの変化なのか、五高生自体の変化なのか、さらに検討は必要だ。しかし、明治期の五高の修学旅行は「急速に物見遊山的要素をふくらませて」いく傾向は見られない。最後に、五高で行われた修学旅行について簡略な表を作ったので参考にして頂ければ幸いである。

注

- *1 水原克敏『近代日本教員養成史研究—教育者精神主義の確立過程』(風間書房、1990・1)
- *2 新谷恭明「日本初の修学旅行の記録について—平澤金之助『六州遊記』の紹介—」(『大学院教育学研究紀要』九州大学大学院人間環境学研究院、2001)
- *3 井上美香子・新谷恭明「師範学校における修学旅行の成立・普及過程」(『教育基礎学研究』九州大学教育基礎学研究会、2007)
- *4 官報 明治21年12月3日
- *5 「修学旅行の変遷と意義」(『修学旅行の歴史』修学旅行ドットコム；全国修学旅行研究協会ホームページ)
- *6 こうした遺族訪問は長途の修学旅行では行われたが、明治29年以降の記録には見いだすことができない。
- *7 『龍南会雑誌』第12号(明治25年12月25日)
- *8 『龍南会雑誌』第21号(明治26年12月20日)
- *9 「在学時代の思ひ出」(『会報』五高同窓会、昭和12・12)
- *10 「五高の思ひ出」(『会報』五高同窓会、昭和16・6)
- *11 注*10と同じ
- *12 『龍南会雑誌』第32号(明治28年12月26日)
- *13 拙論「熊本時代の狩野亨吉日記」(『方位』第27号、熊本近代文学会、平成21年11月)
- *14 『龍南会雑誌』第89号(明治34年12月24日)

第五高等学校の修学旅行（明治期）

年	期間	日数	宿泊地	備考
23	11月 6日～15日	10日	植木、鍋田、兼松、福岡市、久留米市、柳川、大牟田、高瀬	田原坂、小野池、鍋田にて第6師団対抗演習見学、博多東公園、筥崎神宮、修猷館、西公園、太宰府、柳川尋常中学橘蔭館、大牟田の炭坑、金山辺で発火演習
24	11月10日～20日	11日	長崎市、大村、嬉野、有田、武雄、佐賀	船渠、造船所、製鉄所、水道工事見学。 第五高等学校医学部との交流・端艇競漕。 嬉野・武雄温泉、有田の陶器制作見学など
25	10月11日～20日	10日	鹿児島市、横川、吉田、人吉、八代	紡績場、製鉄所見学、造士館見学、薩英戦争講話、薩摩郷土史講話、球磨川下り
26	11月 6日～18日	13日	大津、宮地、竹田町（大分）、野津原、大分、日出、宇佐、中津、豊津、大隅、甘木	下野原で演習、矢津教授の地質講演、坊中尋常小学校との交流、阿蘇神社参拝、大分尋常中学との交流、宇佐八幡宮参拝、千源原で演習、耶馬溪、樋田の洞門、羅漢寺、豊津尋常中学校との交流、久留米明善校との交流
27	11月 5日～19日	15日	神代村、諫早、長崎市、大村、早岐、佐世保、江迎、平戸、今福、伊万里、小城、柳川	五高医学部見学・交流、長崎尋常中学校・大村尋常中学校・平戸猶興館・佐賀県尋常中学校・柳川伝習館交流、長崎港、捕獲軍艦・英国東洋艦隊旗艦・水雷敷設隊見学、大村城址、佐世保鎮守府所轄墓地参拝、佐世保海兵団縦覧、亀岡神社、白岳、長者炭坑、三柱神社など。 別に鉱物採集隊あり
28	11月 4日～18日	15日	柄崎、唐津、舞鶴、前原、福岡、福岡、芦屋、小倉、中津、宮園・一戸、吉井	名護屋城址、虹ノ松原新茶屋辺で発火演習、周船寺で発火演習、修猷館と交流、東公園、筥崎八幡宮、崇福寺訪問、陸軍歩兵第24聯隊駐屯地見学、西公園、香椎宮、耶馬溪、樋田の洞門、羅漢寺見学、筑後川下り 別に歴史研究隊あり
29	11月14日～19日	6日	三角、町山口、富岡、小浜、島原	町山口辺で発火演習、深江村で発火演習。 別に歴史研究隊あり
30	11月 6日～12日	7日	御船、浜町、馬見原、三田井（宮崎）、高森、大津	御船町高木で発火演習、通潤橋、千瀧、五郎ヶ滝見学、小峯村米生で発火演習、吉田村で発火演習。 別に国史研究隊あり
31	11月16日～18日	3日	隈府（東軍）、来民（西軍）、山鹿	来民・下高橋辺で発火演習
32	11月 7日～10日	4日	御船（東軍）、隈庄（西軍）、宇土	鯉村、千丁で発火演習、御船・隈の庄で兎狩
33	11月13日～16日	4日	宇土（北軍）、松橋（南軍）、八代	松橋で発火演習、懷良親王の墓参り
34	11月12日～15日	4日	高瀬、南関（北軍）、伊倉・三池（南軍）、柳川	榎原、銀水小辺で発火演習
35	11月21日～24日	4日	島原、温泉、三角	六本松、網津で発火演習
36	11月10日～13日	4日	宇土、小川（北軍）・松橋、宮原（南軍）、八代	宇土・松橋、高田村で発火演習、武藤教授講演
37	11月15日～18日	4日	隈府、山鹿、高瀬	瀬戸口、稲佐で発火演習
38	11月28日～30日	4日	大津、御船、松橋	黒石崎（益城）、宇土町で発火演習
39	11月20日～24日	5日	高瀬町、大牟田（福岡）、柳河（柳川）	赤田（玉名）、神崎（福岡）で発火演習
40	11月？	4日	詳細不明	八代地方で発火演習
41	11月10日～13日	4日	佐賀市、久留米市、福島（八女市）	西尾、広川村で発火演習
42	11月 9日～12日	4日	日奈久、佐敷、人吉	日奈久、人吉で発火演習
43	11月 8日～11日	4日	田代村、太宰府、博多	原田町、宇美辺で発火演習
44	11月20日～24日	5日	柳河（柳川）、小城、武雄	小城、武雄で発火演習
45	10月12日～17日	6日	京都	桃山御陵参拝

第五高等学校のプール

藤本秀子 五高記念館研究員

熊本市が第五高等学校(以下五高)の敷地に建設し、長い間、熊本市民と五高生が共同で使用したプールについて、これまで伝えられてきたことや双方の設置時期に齟齬生じている点について記してみたい。

五高にプールが開設されたのは1928(昭和3)年8月ということになっている。この時期については、これまで多くの資料に明記されてきた。ところが、五高の水泳部について調べていると1926(大正15)年撮影と思われるプールの写真を発見した。五高のプールは実は1926(大正15)年に完成していた。

しかし、この事実は新発見ではない。『新熊本市史史料編』によれば、1926(大正15)年9月21日付けの『九州新聞』に「五高内の市設大人用プール竣工」という記事が掲載され、五高内にプールが開設されたこと

が解る。記事によれば、「十九日を以て一切の工事をおはり(中略)二十四日午前九時から盛大な竣工式を行ひ、引続き遊泳大会を行ふ」とある。五高内に設けられたプールは1926(大正15)年9月24日竣工ということが明らかだ。公の記録にもこのことは明記されている。

それでは、なぜ五高のプールは1928(昭和3)年8月開設となっているのだろうか。

この時期から少し遡って五高内に熊本市のプールが設けられた経緯を見てみよう。

五高記念館が所蔵する関係資料中、1926(大正15)年の「雑件」綴りに、1926(大正15)年6月9日付で文部次官より「みぞぶち すすめ体育運動の振興に関する件照会」があり、当時の校長溝淵進馬が認めたと思われる回答案の中に「運動場の拡張」や「雨天体操場の改修」と並んでプール造営についての記述が見られる。



『プールの盛観』 1927(昭和2)年卒業アルバムより

以下少し長いが引用すると次のとおりである。

「第五高等学校の敷地は五万三千余坪にして中門より正門に至る構内道路の左右にある部分は従来畑地として民門(ママ)に貸附け居り、而して上述せる如く道路の一方は先般民間より取り上げ之を第二運動場として使用することとせり。然るに一兩年前より熊本市に於て道路の他方にある畑地にプールを造設し、第五高等学校と市にて共用したき希望あり。市長より内談ありしを以て、当校評議員会に諮りたるに差支えなきのみならず校内にプールを造設することは生徒の健康増進上有益なるべしとの意見なりしを以て、更に本省会計課長の内意を質したるに第五高等学校に寄付の目的を以て造設するプール用地を熊本市に貸與し竣工の上熊本市よりプールの寄付を受くることは差支えなし、とのことなりしを以て熊本市長に内諾を與え置けり。熊本市に於ては其後プールの設計、増設費の捻出に付き調査中なりしが、数日前市會に於て工費一万四千五百円の豫算を以て、長五十米突幅十六米突のプールを第五高等学校内に造設する旨決議せり。依て近日正式の手續を経て本省の御許可を出願する積りなり。」

五高は校用地としてかなり広い敷地を持っていたため、開校以来、表門から中門にかけての校地を積極的に利用していなかった。中門内の用地で事足りていたようで、使用していない校地は畑として民間に貸し付けていたと書かれている。しかし、この文書が書かれるよりも前の段階で、使用していない校地があれば文部省に返還するようという打診があったと伝えられている。その為、溝淵校長は、校舎新設や建て替えなど

のために杉を植林し、新にサッカーやラグビーのための球技場を設けたと伝えられているが、これが文中の第二運動場と考えられる。さらに、「体育運動の振興」という時代の要請に答える形で未使用の校地にプールを造成することが考えられたのであろう。

先の文章は1939(昭和14)年発行の『五高五十年史』(以下『五十年史』)にも引用されている。市会(熊本市議会)に於いて造設が決議されたという内容からみても間を置かず建設されたであろうことは想像に難くない。

大正15年の「雑件」には、そのほかに1926(大正15)年9月30日起案の「水神祭執行に付謝禮の件」として、水泳場(プール)の水神祭執行にあたって藤崎八幡宮の宮司三宮千春に十五円を支払うことが決められている。

また、1926(大正15)年10月27日付で「水泳場使用に関し覚書交換の件」として熊本市長から第五高等学校長宛に覚書交換の申入書があり、同29日付で五高校長^{からしま ともき}溝淵進馬と熊本市長辛島知己の記名押印のある覚書が取り交わされた。

覚書の内容を記すと以下のとおりである。

覚書

- 一、 水泳場使用期間八毎年六月一日ヨリ九月三十日迄トス毎日ノ開閉時刻八午前八時ヨリ午後六時マデトス但練習競技等ノ都合ニ依リ期間又八時刻ヲ延長或イハ短縮スルコトアルベシ
- 二、 七月一日ヨリ八月三十一日迄ハ市ニ於イテ専用スルモノトス
- 三、 六月及ビ九月ノ二ヶ月間ハ左の時間割ニヨリ



第五高等学校のプール(1929(昭和4)年卒業アルバムより)

使用スルモノトス

六月二十日ヨリ全月三十日ニ至ル迄及九月十一日ヨリ全三十日ニ至ル迄ハ毎週月、火、水、木、金ノ五日間ハ午後一時ヨリ全四時迄、土曜八午前十時ヨリ正午迄、九月一日ヨリ全月十日迄ハ毎週日曜ヲ除キ午前十時ヨリ正午迄第五高等学校ニ於テ使用ス

前項日時以外ハ熊本市ニ於テ使用ス

- 四、 熊本市立学校生徒又ハ児童ヨリ使用料ヲ徴収スル場合ハ第五高等学校学生ヨリモ使用料ヲ徴収スルモノトス但第五高等学校専用中ハ此限りニアラス
- 五、 第五高等学校学生ノ使用料ハ一般人(熊本市立学校生徒又ハ児童以外)ヨリ低減スルモノトス
- 六、 水泳大会ハ土曜ノ午後、日曜又ハ大祭日於テ行ウモノトス
- 七、 水泳大会ノ挙行ハ熊本市ト第五高等学校ニ於テ協定スルモノトス
- 八、 維持保管ニ要スル費用ハ一切熊本市ニ於テ負担スルモノトス
- 九、 右各項ニ依リ本水泳場ノ管理ヲ熊本体育協会ニ委任スルモノトス
- 十、 本覚書ハ式通ヲ作り双方記名捺印シ各壹通ヲ領置スルモノトス

『五十年史』には熊本市との間で交わされた覚書が『昭和3年雑件中の「覚書」』として掲載されているが、1928(昭和3)年ではなく、実際には1926(大正15)年に取り交わされている。

但し、昭和3年の「雑件」には1928(昭和3)年5月7日付「プールに付七高学友会に回答の件」として、第七高等学校造士館より同年5月5日付でプール使用規程について問い合わせがあり、七高学友会に対する回答内容が先述の「覚書」になっている。

しかし、これによって1926(大正15)年9月と1928(昭和3)年8月の設置時期の齟齬が生じたとは考えにくい。昭和3年の「雑件」には、この項目以外にプールに関する項目は発見できない。

さらに、1926(大正15)年11月15日付で熊本市から五高校長宛に、プールの管理を覚書に従って熊本体育協会長に連名で委任するために送付する文書(市社第135号)が起案されている。

その後に関係文書として、1934(昭和9)年11月20日付の熊本市長山隈康から五高校長宛の文書「プールニ関スル件」が綴じ込まれている。

その内容は「其ノ維持保管一切ハ本市ニ於テ致シ居リ候處(中略)明年度ヨリノ維持保管一切ハ貴校ニ於テ被下為度此段及依頼候也」として、熊本市が費用を負担して管理することを打ち切る旨を通達している。理由としては、五高のプールと同時期に設置した下河原プールのほか各中等学校、武徳会等の各所にプールが設置され熊本市におけるプール設置の目的も大体に於いて達せられたためとしている。

熊本市は、五高に管理を移管するまで上水道を利用して給水していたが、年間の維持費は相当なものになるため、五高は1934(昭和9)年末、プールの近くに井戸を掘り、井戸水による給水に切り替えたと『五十年史』は伝えている。

熊本市と五高の間で取り交わされた覚書に従って、熊本市民と五高生が一つのプールを相互に利用し合うという期間が1926(大正15)年から1934(昭和9)年までであったことが解ってきた。『五十年史』にも「生徒にも、一般人にも相当に利用されていた」と記述されていることから、この間、写真に納められたような賑わいが続き、熊本市民から「五高のプール」として親しまれていたことが見て取れる。

その後、「五高のプール」は1949(昭和24)年に設立された熊本大学に引き継がれ、1970(昭和45)年まで使用された。

1970(昭和45)年8月4日付けの『熊本日日新聞』に「移転改築される“旧五高プール”」という記事が掲載されている。五高のプールは五高敷地の南西の端に東西に長い形で設けられていたが、敷地の最も西側にあった2棟の外国人教師館を撤去し、その跡地に南北に長い形で移設することが決まったことを報じたものである。この記事の中には、プールの成り立ちについて熊本市側の状況がもう少し詳しく記載されている。

「熊本市の資料によると(中略)『前年(大正14年)開催された熊本市三大事業記念国産共進会は、予期以上の大成功を収めた。この共進会の記念事業としてプール建設の案が現れたのは、この三月九日の臨時市会であった』『その経費は、共進会の収支残金三千円、同協賛会寄付金九千円、細川家寄付金五千円、市費二千七百十九円、計一万九千七百十九円をもって大・中・小三つのプールを建設しようというもので、その

うち「大」は五高地内に建設して同校に寄付し、管理は同校と市当局と協議のうえ方法を講ずる』『五高の大プールは当時全国でもまれだといわれたぐらいの大規模で、プールの周囲には四千四百人収容の大スタンドを設ける。この問題には、水泳肥後の面目からいって反対するものはなく、市会は七月一日同案を可決した』」

「このときの市会ではおとな用プールを五高に、子供用プールを白川沿いの下河原に建設することが決まり、五高のプールに一万四千五百円を支出することを決めた。」とあり、これによって「五高のプール」が構想されたきっかけや資金の調達先、総工費などを知ることができる。

この移転改築に関する新聞記事には、熊本市と五高が共用していた際の利用料金についても言及があるが、この利用料金の額については、『五十年史』の記述を参照したと思われる。『五十年史』に掲載された覚書の第五項目に括弧書きがあり、以下のように記述されている。

「本校生徒ニハ回数券(十六枚四十銭一回二銭五厘)ヲ校内集会所ニテ販売スルコトシ、モシー一回分ヲプール入口ニテ購入スルトキハ一般人ト同様三銭トス」この金額についての記述は当初の熊本市と五高の覚書には記述が無く、1928(昭和3)年の雑件綴りの中にある第七高等学校造士館からのプール使用規定に関する問合せに回答した中に書き加えられた部分である。覚書が交わされた1926(大正15)年10月から1928(昭和3)年4月までの間に、熊本市と五高が協議して取り決めたものと考えられる。

先述の調査を進める中で興味深い資料を発見した。文部大臣官房體育課が1933(昭和8)年6月と1939(昭和14)年6月に実施したプールの設置状況に関する調査報告書である。それぞれ実施前年の12月現在の状況を対象にしている。1933(昭和8)年が『本邦ニ於ケル水泳プールニ関スル調査』、1939(昭和14)年が『本邦学校に於ケル水泳プールニ関スル調査』となっている。

昭和8年6月調査(以下昭和8年調査)のものは、官民公私を問わず、おそらく日本国内における総ての水泳プールについて調査している。昭和14年6月の調査(以下昭和14年調査)になると、国内においてプールの設置が進んだことにより、学校に於ける設置状況のみを調査している。昭和8年調査の全国の総数478

カ所、昭和14年調査では、学校関係だけを取り上げても698カ所に増加している。

昭和8年調査の全国のプールの総数478カ所のうち、道府県管内のもの426(学校309、個人団体117)、大学高等専門諸学校が52(大学12、高等学校21、専門学校3、実業専門学校16)とされている。

調査では、道府県管内(初等、中等教育機関を含む)に設置されたものは自治体が回答し、大学高等専門諸学校に設置されたものについては当該の学校が回答したものと考えられ、五高のプールは、熊本市と五高の双方でリストアップされている。その内容を比較すると設備概要は同じだが、工事費総額が1円、維持費予算総額が132円異なっている。また設置時期はそれぞれ熊本市が大正15年9月、五高が昭和3年8月となっている。熊本市プールの所在地が「黒髪町第五高等学校内」となっているにも関わらず、恰もそれぞれ別のものであるかのように記載されているのは、設置時期の違いと五高側の記述に熊本市との関係が明示されていないことによるのかもしれない。五高プールの設置時期「昭和3年8月」が何を根拠にしたものかは、未だ解明できていないが、1932(昭和7)年には既に設置時期に違いがあることが確認できた。

また、大学高等専門諸学校では25メートルのものが主流であり、50メートルを設置しているのは、わずか5校にすぎず、その内訳は大学1、高等学校2、実業専門学校2である。大学は私立の日本大学、高等学校は私立の成城高等学校と五高である。実業専門学校は東京高等商船学校と彦根高等商業学校である。

また、五高のプールは5メートルの飛び込み台を設けており、水深もこの飛び込み台を使用するに十分な3メートルを有していたが、大学高等専門諸学校の中で5メートル以上の飛び込み台とそれに見合う十分な水深を有している学校は、わずかに9校であり、50メートルのプールと5メートル以上の飛び込み台の双方を有しているのは、日本大学、彦根高等商業学校と五高の僅かに3校である。五高のプールは大学高等専門諸学校の中でも群を抜いて立派なものだったことが伺える。

一方、道府県管内になると、概ね1カ所から数カ所の50メートルプールがあり、所属は自治体や団体、中等学校や小学校の場合もあり全国で75カ所を数える。プールを含めて水泳場が、水泳(競泳)というスポーツのためだけでなく、暑い夏場の遊び場、娯楽という面も有し、古くから水練として基礎的な気力、体力を養う

ものと位置づけられていたことを考えると高等教育機関よりも小、中学校や自治体により充実した施設の建設に熱心だったとも考えられる。熊本県内では五高に設置された熊本市のプールだけが唯一の50メートル規模であったが、新聞記事中にあるように「水泳肥後の面目からいって（設置に）反対するものはなく」という状況のもとに建設されたと思われる。

このように見てみると、プール建設に係る熊本市と五高との連携は、詳細な覚書を交わして市民と五高生の棲み分けをした結果、熊本市はプール用地を無償で確保し、速やかに多くの市民の利用に供することができ、五高は大学高等専門諸学校の中でも有数の規模のプールを使用することができることとなった。

五高の赤れんが造りの表門は、嘗て五高英語教授だった夏目漱石の俳句に「いかめしき門」と詠まれたとおり、熊本市民にとって親しいものではなかっただろうが、この門をくぐって通う五高のプールは多くの市民に開かれており、その心に五高への親愛の気持ちを育んだと想像できる。

おわりに

当初の目的である五高プールが、なぜ1928（昭和3）年8月に設置されたことになったのかという経緯は、未だ解明できていない。この点については今後も資料の発見に努めたいと考えている。

しかし、調査を進めるに従い、競泳という新たなスポーツ種目の登場により、全国的にプール建設の気運が高まり建設数が増えていくという状況は、近代スポーツの発展を施設の面から見てみることの面白さを教えてくれた。

他のスポーツ競技や諸文化活動の全国への広がりにも、こうした人々の関心の高まりと施設面の充実が大きく貢献したと考えられること。また、全国に設立された高等教育機関が少なからず関与していたであろうということが考えられる。今後も調査を進めて行きたい。

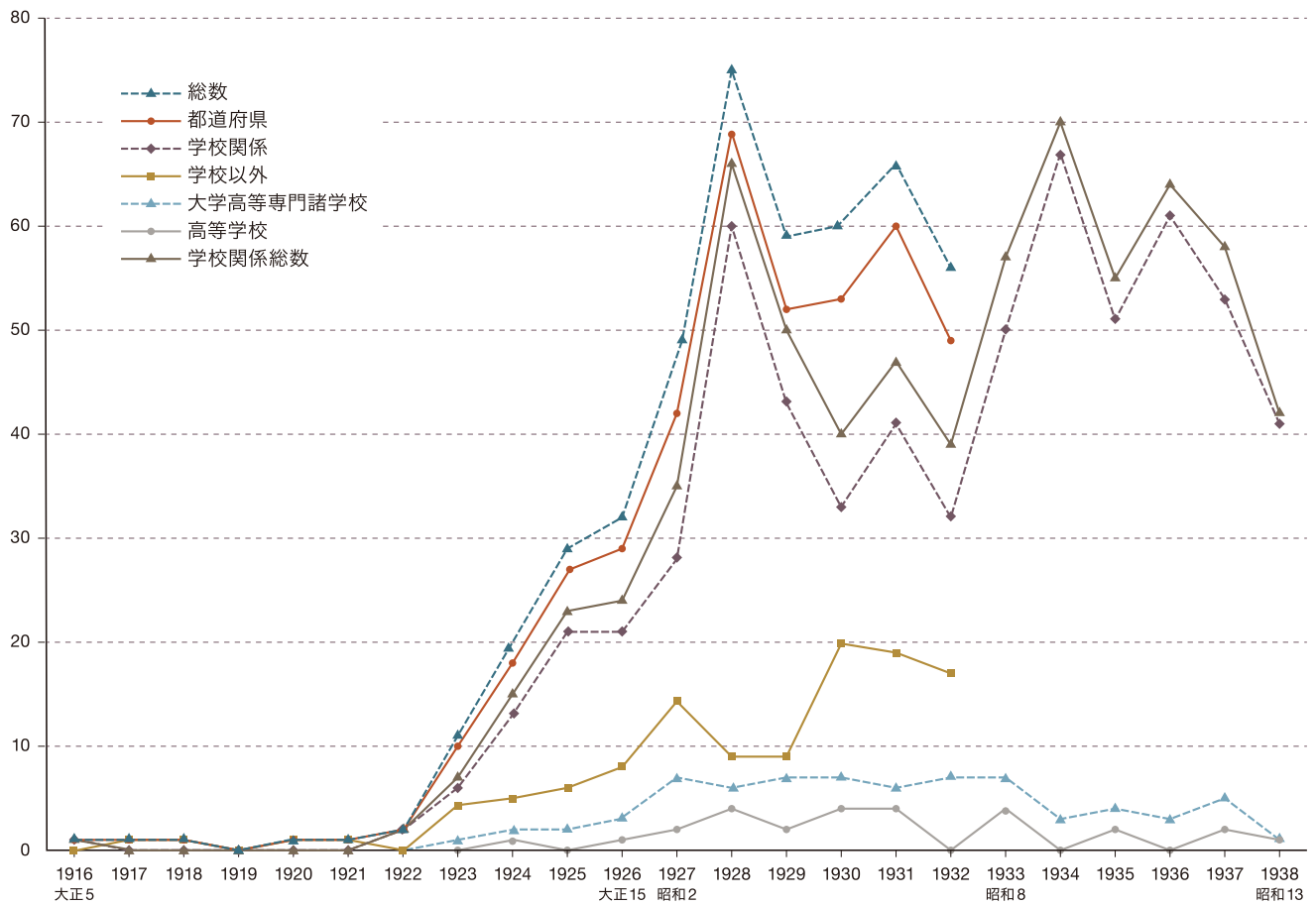
「五高のプール」参考文献

- 新熊本市史編纂委員会 『新熊本市史 史料篇 第9巻 新聞上 近代』 熊本市 2001～2003年
- 第五高等学校開校五十年記念会 『五高五十年史』 第五高等学校 1939年
- 文部大臣官房體育課 『本邦ニ於ケル水泳プールニ關スル調査』 文部大臣官房體育課 1933年
- 文部大臣官房體育課 『本邦学校ニ於ケル水泳プールニ關スル調査』 文部大臣官房體育課 1939年
- 『熊本日日新聞』昭和45年8月4日付け 「移転改築される“旧五高プール”」 熊本日日新聞社 1970年
- 文部省 『運動競技場要覧』 山海堂出版部 1927年
- 文部省 『現代體育の施設と管理』 目黒書店 1932年

プールの設置数

	1916 大正5年	1917 大正6年	1918 大正7年	1919 大正8年	1920 大正9年	1921 大正10年	1922 大正11年	1923 大正12年	1924 大正13年	1925 大正14年	1926 大正15年	1927 昭和2年	
総数	1	1	1	0	1	1	2	11	20	29	32	49	
都道府県	1	1	1	0	1	1	2	10	18	27	29	42	
学校関係	1	0	0	0	0	0	2	6	13	21	21	28	
学校以外	0	1	1	0	1	1	0	4	5	6	8	14	
大学高等専門諸学校	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	3	7	
大学	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	
高等学校	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	
専門学校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
実業専門学校	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	5	
学校関係総数	1	0	0	0	0	0	2	7	15	23	24	35	

プールの設置数の推移



※大正5年～昭和7年の数字は、『本邦ニ於ケル水泳プールニ関スル調査』(昭和8年6月)文部大臣官房體育課 1933年

※昭和8年～昭和13年の数字は、『本邦学校ニ於ケル水泳プールに関する調査』(昭和14年6月)文部大臣官房體育課 1939年

	1928 昭和3年	1929 昭和4年	1930 昭和5年	1931 昭和6年	1932 昭和7年	1933 昭和8年	1934 昭和9年	1935 昭和10年	1936 昭和11年	1937 昭和12年	1938 昭和13年	合計	昭和7年 までの小計	昭和8～13年 までの小計
	75	59	60	66	56	—	—	—	—	—	—		464	0
	69	52	53	60	49	—	—	—	—	—	—		416	0
	60	43	33	41	32	50	67	51	61	53	41	624	301	323
	9	9	20	19	17	—	—	—	—	—	—		115	0
	6	7	7	6	7	7	3	4	3	5	1	71	48	23
	1	3	1	1	2	3	1	0	3	2	0	20	11	9
	4	2	4	4	0	4	0	2	0	2	1	27	18	9
	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3	3	0
	0	2	2	0	4	0	2	2	0	1	0	21	16	5
	66	50	40	47	39	57	70	55	64	58	42	695	349	346

「新体制」への第五高等学校習学寮の対応について

薄田千穂 五高記念館研究員

はじめに

習学寮は、第五高等学校（以下五高と記す）の寄宿寮である。1887(明治20)年第五高等中学校の創立当初に設置され、1889(明治22)年黒髪村に校舎を新築、移転した際には、校舎に隣接して建設された。運営については、当初から自治制度をとることが学校から承認されており、大正初め頃から、原則1年生が入寮し、4棟の寮に寮惣代が各1名、図書部・運動部などの委員が若干名で1年間運営にあたるという方式となっていた。

戦時期の習学寮については、『続習学寮史』に詳しく記されている。1947(昭和22)年の五高開校60周年に際して、習学寮寮史部が編纂したものであり、部員が分担して執筆した。この中に、習学寮の変貌には「昭和15年の新体制化」、「昭和18年の改革」、「学徒動員」、「敗戦」の「4段階」*1があると記述されている。筆者はこの前段に国民精神総動員運動を置き、5つの段階があると考えている。すでに、国民精神総動員運動、「学徒動員」については別稿で取り上げた*2。本稿では「昭和15年の新体制化」について述べていく。なお、「新体制」という語句は、大政翼賛会結成に至る近衛文麿の新党運動の中で使われており、政治体制を指すことが多いが、経済・教育・文化のあらゆる分野にわたる国民の再組織へ波及していることから、本稿ではこの動き全般のこととして記述することにする。

一 習学寮の状況

大正デモクラシー期から昭和初期にかけて全国的に学生運動が展開した。五高でも1922(大正11)年に社会思想研究会が結成され、社会思想研究団体の全国組織である「学生連合会」へ参加している。しかし、学生運動は取締りの対象となり、1924(大正13)年12月には高等学校の社会思想研究団体に解散命令が出され、五高の社会思想研究会は1ヶ月早い11月に解散した。運動は1932(昭和7)年には全国的にほぼ禁圧された。習学寮でも、『習学寮報』の出版を許可する際に、生徒課*3の検閲、特高への提出が条件となり、弁論大会には生徒主事(教授)が必ず1名臨席するなど、言論が監視された。そのような風潮は、「学生の功利主義、刹那主義、ニヒリズム、そして非文化性をかもし出し」、エネルギーはその行き場を失い、カフェー、酒などの「小市民的享楽」*4に向けられるようになっていった。習学寮は、「寮生は漸く個人主義に傾き、自己の室といふ殻に閉ぢ籠り、多数の人間一各々個性を有する人間の集合体として切磋琢磨の実をあげるといふ寮生活の意義の一面は空文に化し去ってしまった」*5と嘆かれる状況となっていた。

1937(昭和12)年に日中戦争が始まり、国家総力戦体制の確立が急務になった。「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、これに関する通牒が次々に出されて、国民精神総動員運動が全国的に展開された。この中で、「生活刷新」の名のもとに、国民生活全般に規制が加えられた。教育においては、12月10日に教育審議会が設置され、総動員体制を支える教育制度改革の立案が行われた。

五高では、この年の10月、開校記念晩餐会が「銃後強調週間」にあたっていたが、開会の辞で簡単な時局認識を促す発言があり、十時校長と生徒主事が、時局認識と寮生の生活について強調した程度で、式典については大きな変更はなかった。但しこの年、ボートレースの街頭デモンストレーション、記念祭の運動会、クロスカントリーが中止された。（運動会、クロスカントリーは翌年開催した。）

惣代たちはこの「生活刷新」を沈滞した寮のムードを打破する契機としてとらえ、自主的な文化運動を行う文化団体を結成するなど改革を試みた。また、先輩から引き継いだ習学寮の「自治」の伝統を守るとは惣代の至上命題であった。強制されるよりは自主的に動くことを「自治」として、断髪の日を自主的に設定するなど、生活の統制を先取りし、寮内で大きな議論となった。しかし、惣代が交代すると有名無実化し、大きな成果が得られないままとなっていた*6。

二 「新体制」と習学寮の改革

日中戦争の長期化にともない、1939年後半からインフレ、物資不足、労農争議の増加、国民の不安と厭戦気分蔓延など、国内の状況は悪化の一途をたどっていた。また、4月以後のヨーロッパ西部戦線におけるドイツ軍の勝利を契機に、ドイツの「世界新秩序建設」に対応しようとする変革運動の機運が高まっていた。このような中、1940（昭和15）年からの新党運動の中で唱えられたのが、「新体制」である。国民の再組織を目指すもので、新党運動をはじめ、政治・経済・教育・文化のあらゆる分野に波及した。

1940年7月26日第二次近衛内閣は、「基本国策要綱」を閣議決定し、「皇国を核心とする」「大東亜の新秩序を建設する」ことを国是として、国内態勢の刷新を急務とした。8月17日「国民生活新体制要綱」を発表、8月30日には文部次官が全国の大学・高等・専門学校長に「戦時学生生徒の生活刷新に関する件」を通達した。9月17日には文部大臣が指示事項として「修練強化ニ関スル件」を高等学校長会議で示し、従来の校友会等の組織を統合し再編した「報国団」の結成を指示した。これは、高等学校の教育・生活を再編して、戦時体制に対応させようというものであった。「戦時学生生徒の生活刷新に関する件」では、2km以内

の通学についての乗り物制限、土・日・祝日・休暇以外の映画・その他の興行場への入場制限、麻雀・撞球・半弓・射的等遊技場への入場禁止、カフェー・バー等享乐的飲食店への出入り禁止を全国一斉に実行することを通牒した。

これに伴い熊本県保安課は学務局、熊本医科大学、五高、熊本高等工業学校、熊本薬学専門学校等と協議の上、9月7日取り締まり方針を決定、南北両警察署長に通知した。五高内でも、公然の飲酒、夜間街頭の放歌高吟を取り締まり、学生が出入りできる喫茶店を警察が指定した。1940（昭和15）年について、1941（昭和16）年度惣代の細川清春は次のように語っている。「二年の夏休み（昭和15年）までは、正に消えんとする焰の如く華やかな所謂高校生の奔放な生活であり休暇があれば四囲の様相は一変した観を呈しボリスの顔つきさへいかめしく見えて来た程だった。われわれはこの休を境としてネオン点滅する銀杏通りの生活からストーム廃止の新生活へ移行したのであった。」「*7『続習学寮史』は、「この時を以て習学寮生活は新しい一線が劃されたといつてよいのである」*8と記している。

以下、習学寮での出来事を述べていく。

1、班制度

1940（昭和15）年二学期最初の委員会が9月4日に開かれ、班制度の議案が提出された。これは、新体制による「生活刷新」が強調されているなか、文部省、学校よりの命令によらず、このときを機会として寮生活の「自発的改革」を行うというものであった。従来から問題となっていた「寮のアパート化」*9を一掃して寮の組織と団結を強固にし、寮生の親和を図るという意図で、当時全国に作られた町内会制度を参考にしていたようである。議案は4時間の「熟論」の末、殆ど満場一致で可決した。原案は次の通りであったが、9月10日の委員会で幹部を廃止し班長は惣代の直属となった。*10

（班長幹部）

一、各寮の班には班長を置き此には委員をその任にあて各寮幹部は班長の中より一名選出するものとする（選挙者は班長）

（班の目的）

一、委員会の命令の徹底を期すこと（委員が各々自分の班を担任）

二、全寮生の意見をきくこと（同右）

三、寮生の親和をはかること

四、その他団体的觀念の養成並びに身心の鍛錬における単位となす
(幹部の役目)

一、各班の行事の記録(コンパ、遠足、試合等其他すべて)

三、惣代の仕事に関してその使者となる
(惣代委員長)

一、惣代委員長はいずれかの班に属するものとする

二、惣代委員長は班に属するも一般班員、班長を兼ねず一般の班全体に対しての特殊な指導的立場にあるものとする
(一般的なことに付き)

一、班長が色々班を単位の行事をなすためには惣代の許可を要する

○ 文化団体については従前通りとする

班長となった当時の2年生は寮日誌に次のように書いている。^{*11}

近頃寮にも班制が布かれた。私も六名の班員をもらって非常にうれしい。之丈は自分がしっかり握って一緒に歩いてゆかねばならぬのだと思ふと、なつかしみ返りて来る。廊下で会っても何か自分の身内と会ったやうでほっとする気持だ。最初は『どんな風だらう。皆自分について来てくれるだらうか。否とは云はせられぬのだ、あくまで説き伏せてついて来てもらはねばならぬのだ。自分にそれ丈の力があるだらうか。』等種々考へさせられた。しかし案ずるより生むが易く第一回の班員会合に於てすでに皆打とけて心から私に協力してくれる様子を見たときには、ほっとすると同時にうれしさがこみ上げて来た。かうやつて隣同志が仲よくなれば寮のアパート化なんて云ふ心配は一辺で消しとんで了ふと思った。まだまだ不備な点もあらうが、だんだん改良されて行ったら将来の寮生活はどんなに楽しくかつ有意義なものだらう。未だ生まれただけの班制だから皆で大事に育て上げて立派に生長させねばならぬ。(一寮日誌 理二、寺本洋一)

その後の班制度について、『続習学寮史』はつぎのように述べている。^{*12}

従来余りにも茫漠としていた寮の団結といふ点に於て新しい確かな拠点を与へ、班が一切の寮機能の最下部単位となる事になったのである。

班の創設当初はかくの如く「機能の最小単位」であったものが戦局の進展とそれに伴ふ学園の軍隊化の結果として之が恰も軍隊の班、班長と同性格化する事が要望され、班長はその班員を「訓育すべき」責任を負はされるに至ったのが昭和十八、九年よりの傾向である。いはば班が訓育機関となったのである。

また、1947(昭和22)年時点においては「大室制と小室制とを折衷した理想に近い型式」^{*13}であり、「寮のアパート化打破の爲にもよき一策として実施され今日に及んでいる。」^{*14}と評価されている。

2、報国団への改組

1940(昭和15)年9月17日に文部大臣が高等学校長会議で示した指示事項「修練強化ニ関スル件」は、従来の校友会等の組織を統合し再編した「報国団」の結成を指示したものであり、名称・組織を始め、役員など具体的に細部までおよんでいた。全国の高等学校はこれを実施に移し、校友会等、生徒の組織が報国団に改組し、校長以下学校教員の指揮監督下に置かれることとなった。

五高で龍南会が龍南学徒報国団となったのは、11月12日である。生徒全員が部に所属しなければならない皆部制度となり、グライダー、射撃等の戦争に直接関係ある「戦時性を有する」^{*15}部が設けられた。その編成を『第五高等学校一覽』により前年と比較すると次のとおりである。

1939(昭和14)年

演説部、雑誌部、剣道部、弓術部、柔道部、野球部、庭球部、端艇部、水泳部、山岳部、陸上競技部、ア式蹴球部、ラ式蹴球部、籠球部、馬術部、排球部、音楽部、ホッケー部

1940(昭和15)年

総務部、鍛錬本部(一般体錬部、剣道部、柔道部、弓道部、陸上競技部、山岳部、端艇部、水泳部、野球部、庭球部、排球部、籠球部、ア式蹴球部、ラ式蹴球部、ホッケー部)、

国防訓練本部(射撃部、騎道部、銃剣道部、航空部、自動車部、通信部)、

文化本部(科学研究部、雑誌部、弁論部、音楽部、学芸部)、

生活本部(阿蘇道場部、修養部、集会所部、厚生部) 習学寮については、「龍南学徒報国団規則」のなか

に言及はなく、報国団に統合されたわけではなかった。
なお、以前から龍南会役員と寮役員の兼任は認められておらず、その関係は『続習学寮史』では「ともすれば感情的に円滑を欠き勝ちであった。」*16と表現されている。この年、龍南学徒報国団の生徒役員に在寮生2名が推薦され、退寮した。寮出身者が報国団の役員となったことで、寮と龍南学徒報国団の円滑な関係に期待が寄せられている。また、1941(昭和16)年12月1日の龍南学徒報国団総務と習学寮の懇談会では、「総務側として、寮を中心として五高を推進して行くべきことを説き、寮と総務との関係に就て、寮は龍南の中心生命であり、その寮の精神を寮外に及ぼすものが総務であり、(中略)報国団活動の如きも寮が協力しなくては絶対に動かぬと云ひ、その外あらゆる面で寮の協力を要望した。」*17とあり、習学寮が優位性を主張していた様子がうかがえる。

全国的にはどうだったのか、試みにナンバースクール*18の報国団組織の規則に、寄宿寮について記載があるか見てみる。一高の「第一高等学校護国会規則」14条には、寄宿舎正副委員を生徒委員に任命することになっており、三高の「第三高等学校報国団宣言及規則」13条には「寄宿舎ハ、生徒集団単位ノ一トシテ、舎内ニ於ケル集団生活ノ訓練ヲ行フト共ニ、本団各部トノ緊密ナル聯繫ノ下ニ夫々必要ナル鍛錬ヲ行フ」と連携という形で関係が示されている。また、八高の「第八高等学校報国団規則」では、生活部の中に学寮班があり、組織の中に組み入れられていることがわかる。なお、二高、四高、六高、七高に関しては、規則に寮の記載はない。以上によると、ナンバースクールの中で寄宿寮が報国団組織に組み入れられたのは、八高のみである。地名校と呼ばれる他の高等学校に関しても、報国団の下部組織となった寄宿寮もあったが、すべてではなかったようである。

ただし、同時期に寮の生徒自治廃止が文部省から通達されており、五高でも次項に記述するように、自治は危機を迎えていた。

3、寮生規則・寮生誓詞の改定と自治

1940(昭和15)年10月18日、惣代4名と生徒課が寮生規則の改定を検討した。この時の生徒監督は田中辰二教授(国語・作文)、生徒主事は五高出身の竹原東一教授(心理)、同じく五高出身の小山直之教授(論理・修身)である。

改定された規則では、生徒主事による監理、指導が強調された。ここで寮生規則に明記されたのは、会計、寮内の日課についての項である。昭和16年『第五高等学校一覧』『学則施行細則』第52条には「習学寮ノ会計ハ、生徒主事監理ノ下ニ会計専任ノ生徒課事務員之ニ当ル」となっている。会計に関しては、同年4月、新入寮生を迎える際に予算を寮生一般に公表することにし、生徒課の同意を得て実施したとの記述があり*19、実質生徒が行っていたと思われる。これは習学寮にとっては大事件であると思われるが、関連する記述は他になく、詳細は不明である。日課については次項で述べる。

惣代、委員の選出方法の改定については、惣代選挙、委員の互選が廃止となり、推薦による校長の任命となった。規則の改定は翌年4月であったが、惣代の任命はこの年から実行され、特に混乱はなく11月15日に交代した。例年と違ったのは惣代4名(理科惣代2名、文科惣代2名)中、文科惣代2名が東光会の会員だったことである。文部省思想調査局の調査によると、東光会は国家主義の団体として調査対象に挙がっていた。それまでも惣代となった東光会員はいたが、1名のみであった。文科惣代2名が東光会員であったのは、この年の特徴であり、種々の改革を実現した要因であると思われる。なお、翌年以降は東光会員が惣代になることはなかった。

寮生誓詞は、1919(大正8)年に作られ、習学寮の玄関に掲げられていた。内容は以下の通りである。

寮生誓詞

夫レ我寮ハ龍南ノ中心生命ニシテ、校風ノ盛衰一ニ之ニ懸レリ。我等茲ニ左ノ三綱領ヲ掲ゲテ日々之ガ実行ヲ期シ、以テ寮風ノ刷新ト校風ノ振興トニ努ムルコトヲ誓フ

綱領

- 一、剛毅木訥ノ真精神ヲ發揮スルコト
- 二、常ニ五高生タルノ自覚ト權威トヲ保ツコト
- 三、一致団結以テ自治ノ実ヲ挙グルコト

これに対し、1940(昭和15)年10月に綱領第3項の「自治」の二字削除が文部省より生徒課を通じて惣代に勧告された。変更後は以下の通りである。

寮生誓詞

夫レ我カ寮ハ龍南ノ中心生命ナリ。校運ノ盛衰、国運ノ隆替、懸リテ我等カ雙肩ニ在リ。我等茲ニ左ノ三綱領ヲ掲ケ、日々之カ実行ヲ期シ、寮風

ノ刷新ト校風ノ振興トニ努メ、以テ報国ノ誠ヲ致
サンコトヲ誓フ

綱領

- 一 剛毅木訥ノ真精神ヲ發揮スルコト
- 一 常ニ五高生タルノ自覚ト矜持ヲ保ツコト
- 一 協心戮力以テ負荷ノ大任ヲ完ウスルコト

文部省よりの通達があったとき、生徒課としては、第三項を「一致団結以て報国精神を发扬すること」の修正にとどめてはとの意向だった*20。生徒課の教授3名中、2名が五高卒業であり五高に長年教師として勤務していた。立場上改定は避けられないことであったが、習学寮の伝統である自治を理解し、影響を最小限にとどめようと考えたとしても不自然ではない。しかし、生徒側のほうが先鋭であった。この時の状況は『続習学寮史』で次のように語られている。*21

長年月を経る中に漸く死物化した誓詞を新たに寮生の胸に蘇らせるにはこれにすぐる好時機はなかった。新日本担当者としての龍南人に伝統の力強さを覚醒せしめるにはこの誓詞の再興甦生こそ最良の方途であるとして新しく任を継いだ細川惣代らはここに同誓詞の全面的改訂を実行したのであった。この年1月2日その成文を得て添野校長を訪ひその承認を得、更に生徒主事田中教授に字句の訂正を乞うて1月14日協議会において満場一致をもってこれを可決し、ここに新寮生誓詞はなった。

新誓詞は添野校長の揮毫により寮玄関に掲げられ、掲額式を1941(昭和16)年4月5日に行った。ここに、綱領から「自治」の文字が姿を消した。

この生徒の動きは、学校側にとってそこまで意図したものではなかったと思われる。1940(昭和15)年、選挙が廃止されたあとの新惣代の任命式で、添野校長は「生徒の方が先生より保守的な態度をとることある故心せよ」*22との訓示を与えている。自治を削除することをどう理論づけたかについては、三、「新体制」と「自治」についての論述で述べる。

4、生活の刷新

習学寮内で実行された「新体制」にともなう生活の刷新は、時間日課の正確な実施、朝起床後の奉安殿参拝、食事を修練式とし、食事前に三綱領を唱和する等である。

習学寮規則の改定で、これまで明文化されてい

なかった寮内の日課が定められた。習学寮役員は1941(昭和16)年4月5日から3日間、新学年からの寮生活の実験として合宿を行っている。規則中には明記されていなかったが、この時実行された日課には、奉安殿参拝、宮城遥拝などが含まれていた。

1916(大正5)年6月に武夫原(運動場)の北東隅に建設された奉安殿は、1936(昭和11)年3月に武夫原の南東隅に移設した。1941(昭和16)年習学寮の日課表を記した黒板に朝起床後の奉安殿参拝の呼びかけが張り出された。当時の寮生によると、「奉安殿がいきなり現れた」*23という印象を受けたとのことである。それまで手入れがされておらず、草木の中に埋もれていた奉安殿の周囲が整備されたということであるらしい。寮生の関心はあまり大きなものではなく、11月17日の委員会で、参拝について廃止か強化かの議論が行われ、「班長が絶対的にこれを徹底すること」*24となり強化が図られたとされている。ただし、「一部の人たちが行っていたようだ。」*25との証言もあり、実行されていたかについては定かではない。

食事については、それまでそれぞれが自由にとっていたのが、一斉に着座し、食事前に前述の三綱領を唱和することになった。1942(昭和17)年になると、常習的に食堂に遅れて入ってくる者に対して、迷惑を及ぼすとして「制裁の要」が説かれはじめ、十数名を呼び止め食堂のたたきに座らせるということも行われた。制裁は、以前は罪悪視され蛮行として否定されていたが、当然の事として是認されるようになっていたのである。

また、行事については、1941(昭和16)年第2学期最初の委員会において、興亜奉公日(毎月1日)に副食物を廃して漬物だけとし、それで浮いた金を国防献金とすること、寮より慰問袋を作って献納すること、出征兵士の送迎のため惣代の指示により子飼橋まで行くこと等、従来はなかった行事が議決された。それまで寮の行事として開催してきた球磨川下りは、物見遊山旅行が禁止となっていたため、剛健旅行として酒類を入れず、一つ手前の渡駅で降りて14キロほど歩くということでやっと許可された。なお、寮内の行事・読書会等はすべて事前に届け出ることを要求された。

1941(昭和16)年4月から寮内のストームが禁止され、街に出ていた生徒が飲食店・遊技場から警察署に連行される「学生狩り」が強化された。1942(昭和17)年頃には、特高課が時折寮内に来ては図書室や寮生の蔵書等を検閲したとされている。

1942(昭和17)年3月卒業生の送別晩餐会(昭和16年度3年生)で演劇研究会の発表会が生徒課の許可が下りず中止された。この時全国で同様なことが起っていた*26。さらに、3月に禁煙が問題となり、この後1944(昭和19)年に至るまで禁止、解禁を繰り返した。

このような生活の改変のため、「新入生はかねて聞かれ、想像してきた高校生活と実際のそれとの矛盾に多少当惑している。」*27という状況となっていた。

ただし、これまでの例を見ると、惣代が退任すると行った改革は徹底されないまま消滅することも多かった。1941(昭和16)年度には前述のように急激な改革が行われたため、惣代が交代すると、「服従と滅私の観念は自然個人意志の抑圧を招来し、寮生の大きな不満を買い、この年の寮生活沈滞の一大原因をなした」*28という状態となり、その後は実行されたのか確認できないものもある。

三 「新体制」と「自治」についての論述

寮生誓詞から「自治」の2文字が消えた際の議論は『続習学寮史』には見当たらない。この時の習学寮には「革新の歩をふみ出したと同時に習学寮に復古の思想が盛んになった事実を見る。云ふまでもなく之は国家全体の国家意識、乃至民族意識の昂揚が神話古典国史への注目を湧起したその流れに順応するものである事是否めない。」「寮内においても古典読書会が興され、細川清春氏らを中心として毎朝7時より知命堂階上で輪読輪講がつづけられた。寮生間には明治維新当時の青年を憧憬し、その気風を仰慕しそれへの復活を求める」*29という空気が流れていた。

この中に出てくる細川清春は、1941(昭和16)年度の惣代の1人である。寮規則改定が行われた後、推薦により就任した最初の惣代であり、寮生誓詞の改定に携わった。前述の通り、国家主義を標榜する東光会の会員である。1941(昭和16)年10月30日発行の『習学寮報』第11号に掲載した「巻頭言」から、「自治」、「伝統」、「刷新」についてどのように主張しているか見てみる。なお、抜粋は順不同、小見出しは筆者が付した。

自治

これら先人らの努力(自治：筆者注)がボナパルトと終ったか否かは現存の寮生活の実体を深く洞察する冷静公明なる理性の具現者のみよく判断

する処であらう。而も先人らのこの抱負と自覚と熱意を以てしてもその「善美住むに心地よき王国」の建設には尚不十分であったとすれば全面的反省と刷新とを目指して発足した現在の我等の抱負と決意と信念とは果してよくその予期の目的を達成し得るであらうか。眼をこの二十余年の動向に注ぐ時吾人は伝統の放棄すべき一面の形態と脈々として伝承され来った逞しい底力とを発見するのである。

伝統

革新が復古を必然とするところに伝統の新生命がある。伝統に根差さざる革新は全く遊離した存在でしかない。然し乍ら伝統の域を一步も出でざるものは又真に生々澌然たる存在とはなり得ないのである。新しい発展により継承されざる伝統は枯死し硬化したる無生命的存在でしかない。即ち伝統は真に伝統に根した新しい発展の創造に依ってのみその伝統たる所以を保持するのである。(中略)

剛毅木訥の信念は自らにして微妙なる独自の雰囲気醸出した。この雰囲気は又校風を決定し、それに方向を与へる主因ともなった。かくの如くして生成された独自の校風も、その象徴的標識としての剛毅木訥を解剖分析したり、根本的一元的方向へ帰納してゆくならばその独自性も特殊性も希薄になり普遍的なるものに還元されてしまふやうなものであるかもしれぬが、然し我等の具体的生活や事実には於いては大なる意義と価値とを有するのである。而してこの普遍的なる精神とは国士たらんとする気魄に他ならず、剛毅木訥とはその最高理想に到る象徴的標識でありより具体的生活方法であり以て仁に近き所以なのである。

この文の中には「自治」という言葉はほとんど出てこないが、「伝統」の「一面」として位置づけ、これを「放棄すべき一面の形態」、「継承されざる伝統」という言葉で表している。また、継承された「伝統」とは「剛毅木訥」であった。そして、次のように刷新を訴える。

刷新

吾人は伝統を尊重する故に伝統への反省と伝統に依る刷新とを主張する。国家体制整備に即応する学園の再編成はあくまでも革新を基調とせねばならぬが、そのプランをして真に生命あるものたらしめるには我等は独自の伝統を確認する事なくしては不可能であるし、又先人らの苦悩に満ちた

創造の精華を一朝にして葬る事になる。我等は今こそ学園生活を反省し刷新して先人らの血と汗の努力をして光輝ある結実をなさしめねばならぬ。それは創造の苦悩に耐えて燦然たる一国の興亡を賭す悲壯絶対なる大信念の下に前進する祖国日本へ致す我等学徒の一使命である。一挙手一投足に祖国の生命を痛感し、祖国への忠誠を自覚して生活せねばならぬ危急の今日程切迫深刻なる時代を嘗て知らぬ。今こそ冷徹なる思索と熱烈なる実践とに依って時局収拾の大任を完遂しつつ現実を生活すると共に、未来に依託されたる日本民族の大使命を慮って堅忍不拔の学究生活を続けねばならぬ。(中略)

寮生諸君よ。先人らのこの気風を偲びつゝ歴史を伝統とに対する覚醒と責任感とに依り、旺盛なる意気と努力とを振ひおこしつゝ「剛毅木訥」の真精神に生き、刷新の道を猛進しようではないか。

五高における「剛毅木訥」は1890(明治23)年～1895(明治28)年五高で教鞭をとった秋月胤永が唱えたといわれ、今でも五高の気風とされている。1909(明治42)年『龍南会雑誌』129号に由比質教授が「剛毅木訥論」を発表している例もあるが、筆者が卒業生に聞き取りを行ったところ、それぞれが独自の解釈を行った「剛毅木訥」を自らの指針としていた。例えば「自由」、「自治」、「人格の高潔さ」である。1人1人捉えかたが違うというのがこの時期の「剛毅木訥」の特徴であった。細川にとっての「剛毅木訥」は「時局収拾の大任を完遂しつつ現実を生活すると共に、未来に依託されたる日本民族の大使命を慮って堅忍不拔の学究生活を続ける」「国土たらんとする具体的な過程であり門戸」であり、生活モットーであった。細川の中で五高の伝統はこの「剛毅木訥」であり、それを指針として改革が行われた。そのとき、「自治」は「剛毅木訥」に呑み込まれていたのである。

おわりに

1940(昭和15)年は、第二次世界大戦がはじまり、日本では「紀元2600年」とされる年である。『続習学寮史』では、この年を「動乱と砲煙のカオスの中から何もかも新しい秩序を求めて世界が大きく苦悩し、歴史はきしりつつ回転する年」*30として特徴づけられるだろう

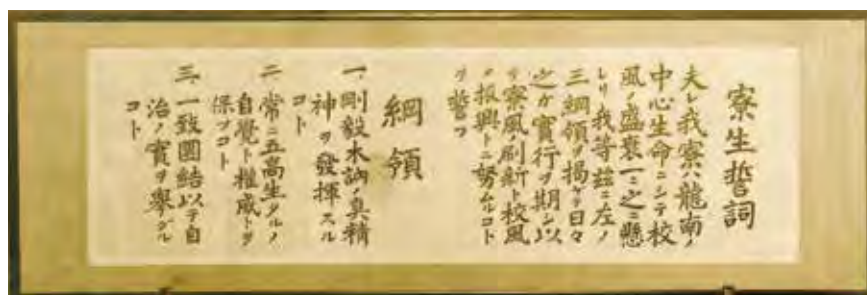
と述べている。「新体制」は生徒たちに新しい時代の到来を思わせた。しかし、思想の監視・干渉の中にあつた生徒たちは、「思想的無政府状態」*31にあり、「志向すべき理想を与えられずして小市民的享楽を求めデカニズムに耽溺して」*32いた。この中で、1940年度惣代は、「文部省その他中央よりの命令によって嫌々ながら従ふのではなく、自らの内部よりの自発力によって改革」*33を試みる。1941年度は、「全体主義は勿論時流の方向として寮にも押し寄せたのであるが、時の寮生は之を更に理想化し、その理想をわが寮に於て実現せんと」*34する惣代のもと改革が行われた。そのとき掲げられたのが「剛毅木訥」だつたと思われる。実行される時、1939(昭和14)年の断髪のときのような議論の形跡はなく、生徒がこの動きに同調したのか定かではない。その後も「自治」は重んじられていたし、奉安殿の参拝や修練式の食事は一部がやっていたという証言もある*35。実際の状況を明らかにするためには、東光会の主張や寮生間の議論をもっと取り上げて分析する必要があるが、それを示す資料は少なく、新たな証言や資料の掘り起しが必要である。今後の課題としたい。

1943(昭和18)年1月20日高等学校令は改正され、同日「高等学校高等科修練要綱」が出される。生徒の全生活に及ぶ組織的な訓練を、校長以下全教職員の直接指導の下に行うことを定めたものである。これにより、高等学校はさらに戦時体制化していく。これについては、別の機会で述べることにする。

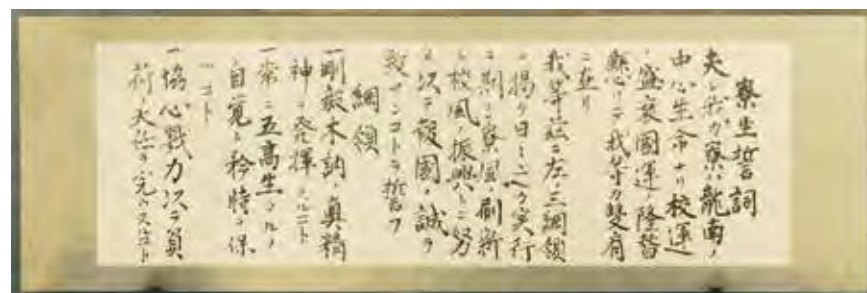
注

- *1 五高習学寮編纂部『統習学寮史』第五高等学校習学寮
1948年 65頁
- *2 「国民精神総動員運動下の旧制高等学校寄宿寮」熊本
近代史研究会『近代熊本』No.38 2016年
「第五高等学校における勤労奉仕・勤労働員」五高記念
館叢書第二集『第五高等学校における勤労奉仕・勤労働
員』五高記念館 2016年
- *3 校務分掌規程によると、校務は、教授部・事務部に分
かれ、事務部には、教務課・生徒課・庶務課・会計課・
図書課があった。昭和15年の生徒課の分掌は、生徒の
取締・訓誨及懲戒・休学退学除名・学籍・集会・掲示
に関する事等があり、習学寮に関しては、入退寮・警備
及衛生・炊事監督・生徒訓育及習学寮に関する事が
挙げられている。各課には幹事を置き、教授の中から
選定し、事務を管理するとされていたが、生徒課に関し
ては、生徒監督・生徒主事・寮生監督・通学生監督の
複数を置いていた。「第五高等学校一覧」の職員の方に
明記されているのは生徒課のみである。
- *4 『統習学寮史』 27頁
- *5 同 3頁
- *6 「国民精神総動員運動下の旧制高等学校寄宿寮」熊本
近代史研究会『近代熊本』No.38 2016年 に詳述
- *7 『統習学寮史』 65頁
- *8 同 65頁
- *9 同 67頁
- *10 同 86頁
- *11 同 88頁

- *12 同 88頁
- *13 同 89頁
- *14 同 67頁
- *15 同 66頁
- *16 同 92頁
- *17 同 115頁
- *18 明治期に設立した高等学校が番号を冠していたため、こ
のように通称する。第一～第五は全国を五区に分けて
明治19～20年に設立。それ以後に第六～第八、大正
8年以降は地名を冠した高等学校を各地に設立した。
これは地名校と通称した。
- *19 『統習学寮史』75頁
- *20 同 96頁
- *21 同 96頁
- *22 同 92頁
- *23 1943年卒業生の談話
- *24 『統習学寮史』 99頁
- *25 1943年卒業生の談話
- *26 『統習学寮史』 120頁
- *27 同 97頁
- *28 同 119頁
- *29 同 94、95頁
- *30 同 62頁
- *31 同 27頁
- *32 同 27頁
- *33 同 67頁
- *34 同 69頁
- *35 1943・1944年卒業生の談話



寮生誓詞 1935(昭和10)年



寮生誓詞 1941(昭和16)年

展覧会記録

特別企画展「五高と戦争 一戦時体制下の五高生たち」

薄田千穂 五高記念館研究員

開催趣旨と概要

1931(昭和6)年の満州事変から15年におよぶ戦争は、旧制高等学校にも大きな影響をおよぼした。それは長髪や行事の制限、修業年限の短縮、学徒出陣、学徒動員など、教育のみならず生活全般におよんだ。

五高記念館が所蔵する第五高等学校(以下五高と記述する)の学校資料のなかには、写真、軍事郵便、勤労動員・学徒出陣関係資料など戦時期の資料があり、調査・研究を進めている。

第二次世界大戦敗戦から70年を機に、五高にとっての戦時を資料により通観し、戦争は教育にどのような影響を与えるのか考える機会としたいという趣旨で、特別企画展「五高と戦争一戦時体制下の五高生たち」を開催した。概要は以下のとおりである。

会場：五高記念館第1企画展示室・第2企画展示室、
展示資料点数約80点

会期：2015(平成27)年8月6日～12月21日、
116日間 来場者8,039人

主催：五高記念館

共催：五高記念館友の会

後援：熊本県教育委員会、熊本市教育委員会

展示に至る調査・研究

五高記念館は、2006年に館内に事務室を設置し、週日開館を開始した。2007年、五高開校120周年記念式典が行われ、これを機に卒業生との交流が活発になった。式典に参加した五高の卒業生は戦中、戦後

に五高に在学した世代である。

2009年、五高記念館は卒業生へアンケート調査「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」を実施し、配布1336人に対して275人の回答を得た。回答者のうち3分の2が戦時中に五高に在籍しており、学校生活、寮生活に加えて、勤労動員、学徒出陣などの記録・手記を得ることができた。

2010年3月に昭和18年卒業生による座談会を行い、「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」の報告を兼ねた『第五高等学校における軍事教練・査閲』をまとめた。この報告書をきっかけに五高からの学徒出陣経験者(昭和19年卒業生)から、座談会を開いて欲しいとの要望があり、2010年11月に座談会を開催、五高記念館叢書1号『第五高等学校の学徒出陣』を刊行した。さらに2016年五高記念館叢書2号『第五高等学校における勤労奉仕・勤労動員』を刊行した。

資料収集に関しては、継続的に呼びかけを行い、学校資料やアルバム・写真などの寄贈を受け、資料と情報の集積を行ってきた。



展示室入口

展示内容

本展覧会では、1931(昭和6)年の満州事変から1945(昭和20)年の敗戦までの15年を対象とした。

この時期に五高で起った象徴的な出来事を軸に編年で構成することとし、「Ⅰ国家総動員」、「Ⅱ軍事教練」、「Ⅲ勤労働員」、「Ⅳ学徒出陣」を設けた。象徴的な出来事として取り上げたのは、Ⅰでは「断髪令」「寮生誓詞の改定」、Ⅱでは「査閲事件」、Ⅲでは三菱長崎造船所への動員、Ⅳでは入隊した生徒のエピソードである。「Ⅴそれぞれの戦争」では、教員・生徒個人の戦争体験を著作等から取り上げ、別の視点から戦争を表した。

展示配置については、第1企画展示室に背景説明、Ⅰ、Ⅱに関する資料、第2企画展示室にはⅢ、Ⅳ、Ⅴに関する資料を配した。それぞれの展示室には、展示用の壁4面と展示台を設置し、壁には解説・写真・資料のパネル、展示台には、軍事郵便、学徒出陣壮行会送辞・答辞、勤労働員感謝状、五高の学校資料等、原本を展示した。原本は資料への影響を考慮して6期に分け、入れ替え展示を行った。また、期間中に情報が提供された葉書、五高生の手紙も随時展示した。

展示の構成・配置、キャプション執筆については、全体説明とⅠ～Ⅳを薄田千穂、Ⅴを藤本秀子が担当した。チラシデザイン、キャプションデザイン・制作は市原富代が担当した。

まとめ

展覧会開催日には、テレビ局、新聞社等多くの取材があり、即日ニュース放映された。特に注目を集めたのは、学徒出陣に関する資料や写真であった。戦後70年の関心の高さを実感した。

会場に設置した感想ノートには、75件の記載があった。戦争についての展示を行うこと、戦争の表し方についての疑問もみられたが、全体としては、勤労働員、学徒出陣した生徒たちに思いをはせ、戦争を考えるいい機会になったという感想が多かった。

展示では「戦争」の事実を客観的に取り上げることに努めた。事実は取り上げかたによって見える側面が変わってくるため、常に賛否両論を想定しなければならないことを実感した。また、展示では背景説明が多くなり、実際に五高生が何を考え、対応したかについての部分を描ききれなかった。

学徒出陣や勤労働員の実態については、まだ明らかでないことが多い。また、戦時の学校内や寄宿寮で生徒たちの生活がどのように変化し、生徒たちがどのように考えていたかについても、さらに検証が必要である。今後も調査・研究を重ね、このような機会に備えたい。



第1企画展示室



第2企画展示室

「五高と戦争―戦時体制下の五高生たち―」 展示資料

■戦争と教育（解説パネル）

1931（昭和6）年の満州事変から1945（昭和20）年の敗戦まで15年におよぶ戦争により、日本は国内及び関係諸国に甚大な被害をもたらした。戦争を遂行するために国家総動員の政策がとられ、戦争・軍需を最優先し、国民生活を全面的に統制する体制が作られていった。教育界でも、学生の思想善導のため文部省の組織が拡充されていき、1937（昭和12）年に国民全ての精神動員を担当する教学局が新設された。また、同年12月に設置された教育審議会で、総動員体制を支える教育改革の立案が行われた。これにより1939（昭和14）年には青年学校の義務制、1941（昭和16）年には国民学校制度が実施され、皇国民の練成という戦時教育が強化されていった。1942（昭和17）年には学徒出陣命令による学徒の勤労動員が開始され、1943（昭和18）年には徴兵延期停止による学徒出陣が行われた。1945（昭和20）年3月18日には「決戦教育措置要綱」が閣議決定され、国民学校初等科を除く学校の授業が4月から一年間停止することとなり、決戦体制の下、教育は崩壊していった。この中で、五高は昭和6年に陸軍特別大演習で昭和天皇を迎え、昭和12年の国民精神総動員運動の中、断髪の自主的遂行、校友会の報国団への編成替、寮生誓詞から自治の削除など戦時体制確立の影響を受けていった。昭和18年には学徒出陣が行われ、昭和19年には断続的に

勤労動員が行われるようになる。昭和20年には授業がなくなり、学校から生徒が姿を消していった。

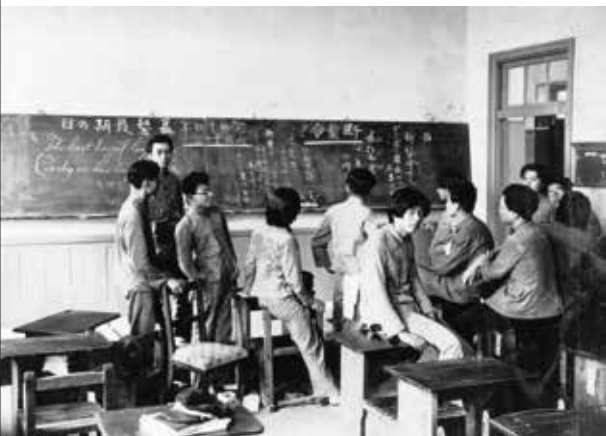
1、戦争関係年表

1931（昭和6）年～1941（昭和21）年（資料）

I 国家総動員

■戦時体制へ（解説パネル）

国民精神総動員運動は、国民を戦争に動員するために行われた政府による「国民運動」である。1937（昭和12）年7月7日の日中戦争開戦後、8月24日には「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、これに関する通牒が次々に出されて、全国的に展開された。1938（昭和13）年には国家総動員法が出され、政府が国家の人的、物的資源を統制・運用できることになり、戦時体制が確立していった。1939（昭和14）年7月に生活を戦時態勢化するための刷新項目として、男子学生・生徒の長髪廃止、女性のパーマメントや華美な化粧・服装の廃止などが挙げられた。この動きを受けて、五高では、習学寮惣代が自主的な断髪を呼びかけ、議論の末に6月18日をもって断髪することを決議した。1940（昭和15）年には全国の高等学校の寮や部活動が報国団に改組された。五高でも、1890（明治23）年に設立した校友会「龍南会」が「龍南学徒報国団」となり、習学寮の玄関に掲げられていた「寮生誓詞」から「自治」の二字が削除された。また、この年から街に出ていた生徒が飲食店・遊技場から警察署に連行される「学生狩り」が行われるようになった。1942（昭和17）年頃には、警察・特高・憲兵が干渉するようになり、特高が寮内



2 長髪最期の日 1939（昭和14）年6月17日



3 総務部が貼り出した断髪の檄

の図書室や寮生の蔵書を検閲するために出入りするようになっていった。

2、長髪最期の日

1939 (昭和14) 年6月17日 (写真パネル)

1939 (昭和14) 年5月頃、文部省から断髪令が下るという噂が広がり、命令によって断髪することを恥とした3年生が自発的な断髪を決議した。2年生、1年生から反対意見や抗議行動もあったが、6月18日の寮生大会で決議され、断髪することに決定した。写真は、6月17日の文科2年2組の教室の様子。黒板には批判的な意見も見える。しかし、3年生が卒業し、2年生が惣代になると、長髪は黙認となった。

3、総務部が貼り出した断髪の檄

1939 (昭和14) 年6月17日 (写真パネル)

4、龍南学徒報国団総務部の看板

1940 (昭和15) 年 (写真パネル)

1940 (昭和15) 年9月17日の「修練組織強化ニ関スル件」により、全国の高等学校の寮や部活動が報国団に改組された。五高でも、1890 (明治23) 年に設立した校友会「龍南会」が1940 (昭和15) 年11月12日に「龍南学徒報国団」となった。

5、報国団編成の変遷図 (解説パネル)

6、寮生誓詞 1935 (昭和10) 年 1941 (昭和16) 年 (写真パネル)

1940 (昭和15) 年10月18日、惣代と生徒課により寮生規約の再検討が行われ、惣代・委員の選挙が廃止された。文部省からの要請で、1919 (大正8) 年に作られ、習学寮の玄関に掲げられていた「寮生誓詞」の綱領第三項が改訂され、「自治」の文字が姿を消した。

7、奉安殿参拝

1942 (昭和17) 年、1941 (昭和16) 年 (写真パネル)

1916 (大正5) 年6月に武夫原の北東隅に建設された奉安殿は、昭和11年3月に武夫原の南東隅に移設された。昭和16年に習学寮内で生活日課の刷新が唱えられ、有志による朝起床後の奉安殿参拝が始まった。写真は習学寮の日課に張り出された奉安殿参拝を呼びかける張り紙と、参拝の様子。

8、1940 (昭和15) 年の第五高等学校配置図 (資料パネル)

9、新聞記事のコラージュ

1930 (昭和5) 年 1940 (昭和15) 年 (写真パネル)

五高生が、卒業時に製作したアルバムに貼付された新聞記事のコラージュ写真

10、戦時の入学者数、在学年限の変遷表 (解説パネル)

11、龍南学徒報国団 1940 (昭和15) 年11月 (資料) 「龍南会」から改組された「龍南学徒報国団」の書類

12、『龍南』248号 1941 (昭和16) 年2月25日 (資料)

13、『龍南』250号 1942 (昭和17) 年2月15日 (資料)

14、『皇民の友』 1943 (昭和18) 年10月1日 (資料)

15、『現行学校防空関係通牒ならびに改訂局防空必携』1943 (昭和18) 年8月 (資料)

16、『時局と娯楽問題』

1938 (昭和13) 年3月24日 (資料)

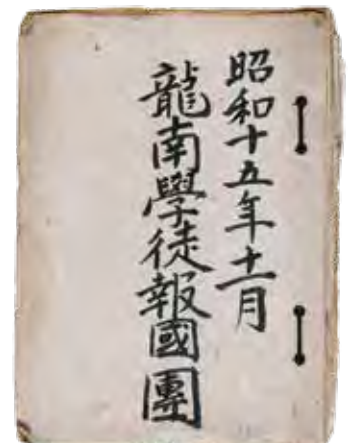
17、防空警備に関する書類

1937 (昭和12) 年5月14日 (資料)

18、龍南学徒報国団の印 1940 (昭和15) 年 (資料)



7 奉安殿参拝 1941 (昭和16) 年



11 龍南学徒報国団

II 軍事教練

■兵式体操 修学旅行 発火演習(解説パネル)

高等学校では当初から体操が必修であり、兵式体操が取り入れられた。その指導には退役下士官が当たっていた。また、1891(明治24)年頃から学校行事として行われていた修学旅行は、軍隊組織とするという規程があった。1906(明治39)年からは体操科の一環としての発火演習となり、毎年1回行うように規程された。

1916(大正5)年には野外演習・射撃演習となっている。

19、野外演習 山鹿市郊外

1919(大正8)年11月19日(写真パネル)

20、上熊本駅から野外演習へ出発

1924(大正13)年(写真パネル)

■陸軍特別大演習(解説パネル)

陸軍特別大演習とは、天皇が大元帥として統監する陸軍の大規模な演習で、原則として毎年1回、1892(明治25)年から1936(昭和11)年まで全国各地で行われた。熊本では1902(明治35)年と1931(昭和6)年に行われている。昭和6年の演習にともない、道路の舗装等、街路が大規模に整備された。

1931(昭和6)年の陸軍特別大演習は、11月12～14日に御船、山鹿、熊本市街地など広範囲に展開された。昭和天皇は、11月15日帯山練兵場で大観兵式のあと、県庁をまわり、五高に来校した。五高では、あらかじめ「行幸奉迎事務分掌規程」を定めて総務部・陳列係・競技係・生徒係・接待係・警備係・設備係・衛生係・楽隊係・記録係・写真係・経理係を設け、準備を行っている。陣頭指揮を取った校長武藤虎太は、1924(大正13)年に四高校長として、陸軍特別

大演習を経験していた。当日は、教官図書閲覧室に天覧品陳列室を設け、『古今余材抄』『檜垣姫家集註』『人国記』『肥後物語』『国賢帖』、しらうおの標本、立田山八重くちなし、鉱物などを陳列したと記録されている。その後武夫原で、400mリレー、円盤投げ、走り高跳び、ラグビー試合など、生徒が運動競技を行った。18日に帯山練兵場で行われた親閲式には五高生も参加している。

21、陸軍特別大演習 武夫原

1931(昭和6)年11月15日(写真パネル)

22、陸軍特別大演習 親閲式

1931(昭和6)年11月18日(写真パネル)

11月18日帯山練兵場で行われた親閲式には県下の男女学生・青年訓練所・男女青年団・在郷軍人など約6万5000人が参加した。この写真が貼付されているアルバムには五高生が先頭にいると記されている。

■軍事教練と配属将校(解説パネル)

1925(大正14)年、陸軍現役将校学校配属令が制定され、官公立の師範学校、中学校、高等学校、専門学校等の男子生徒は配属された陸軍現役将校の直接の指導のもとに学校教練を修めた。五高の教練は、武夫原、帯山練兵場、春日射撃場で、行軍や実弾演習などが行われた。配属将校はおおむね40代後半から50代であり、卒業生の回顧や証言によると、生徒たちに好意的であったようである。

■査閲事件(解説パネル)

『五高五十年史』『続習学寮史』に「査閲事件」という出来事が記されている。1943(昭和18)年6月に熊本



21 陸軍特別大演習 武夫原

師団兵務部長山口陸軍少将が講堂で講演した。最初から服装、態度などについて五高生を非難したため、満場の生徒が哄笑し、2階にいた3年生が下駄を鳴らして妨害した。山口少将は激怒し講演を途中で中止し退席した。その年、山口少将は教練査閲官として再来校し、教練に対し悪評を下した。山口少将が「五高卒業生は、今後、特幹の試験にはパスさせまい。」と放言したことで、教職員は苦慮したようである。しかし、生徒を叱責はしなかった。この事件との関連は定かではないが、その後、添野校長、配属将校深草大佐は満州へ転勤になった。

23、熊本市街地図 1936(昭和11)年〔資料パネル〕

中央付近の熊本城に第六師団、五高の南側、白川対岸に渡鹿練兵場、熊本駅近くに春日射撃場があった。地図の範囲外になるが、渡鹿練兵場の東側に帯山練兵場が位置し、さらに東側に、三菱重工業熊本製作所、附属飛行場がひろがっていた。

24、武夫原で教練 1924(大正13)年〔写真パネル〕

25、渡鹿練兵場 1926(大正15)年〔写真パネル〕

26、分列式 1930(昭和5)年〔写真パネル〕

27、実弾演習 1932(昭和7)年〔写真パネル〕

28、武夫原で整列 1941(昭和16)年〔写真パネル〕

29、武夫原での教練 1941(昭和16)年〔写真パネル〕

30、実弾演習 1943(昭和18)年〔写真パネル〕

31、軍事郵便〔資料〕

戦地から自国宛て、もしくは戦地に宛てて自国から発送される郵便のこと。五高記念館では、五高の卒業生・教授が入隊先から校長や教職員へ送った手紙・葉書76通を所蔵している。※入れ替えて展示

32、葉莢 年代不明〔資料〕

1994(平成6)年黒髪北地区9406調査地点(武夫原グラウンド)出土、約47個出土したうちの10個、長さ5.85cm 軍事教練で使用されたものと思われる。 熊本大学埋蔵文化財調査センター所蔵

III 勤労働員

■勤労奉仕・学徒動員(解説パネル)

1938(昭和13)年6月文部省は「集团的勤勞作業運動実施に関する件」を通牒し、中等学校以上の生徒は夏季休暇中に5日間、臨時に作業に従事させるということになった。勤労働員のはじまりである。1939(昭和14)年3月集団勤勞作業は恒久化して、正課に準じて取り扱うこととなり、1941(昭和16)年2月には、1年に30日以内の日数は、授業に振り替えることが認められた。1944(昭和19)年1月には、「緊急学徒勤勞動員方策要綱」で、動員期間は1年に4カ月を標準とすること、学校内に工場事業場を設けて学校内で従事できるよう規定された。1944(昭和19)年8月には、「学徒勤勞令」により、1年を通して勤労働員が行えるようになった。1945(昭和20)年3月18日には「決戦教育措置要綱」により、4月から1年間、国民学校高等科から大学にいたる全校の授業が停止されることになり、五高でも授業は行われず、生徒は勤勞作業に明け暮れることとなった。

33、菊池郡花房陸軍飛行場整地作業

1939(昭和14)年5月20日〔写真パネル〕

1938(昭和13)年8月30日から5日間、全校職員・生徒約800名が菊池郡花房陸軍飛行場(現、菊池市泗水町)へ電車で行き、桑根掘りや整地



24 武夫原で教練



33 菊池郡花房陸軍飛行場整地作業

作業を行った。翌14年5月20日から5日間にも
同地で地均しや大木の切り株掘り出し作業を行っ
た。このときはトラックに分乗して現地へ行った。

34、菊池郡花房陸軍飛行場整地作業の様子

1939 (昭和14) 年 (写真パネル)

35、集团的勤労作業実施計画要項

1938 (昭和13) 年6月17日 (資料パネル)

36、興亜青年勤労報国隊満州派遣学生隊見送り

1939 (昭和14) 年 (写真パネル)

1939 (昭和14) 年7月、興亜青年勤労報国隊
が編成され、青年、学生・生徒が北京周辺と満州に
派遣された。編成にあたっては、大学、高等学校、
専門学校、師範学校に割当があり、各高等学校
には指導教官1人と生徒5人が割り当てられた。
約1ヶ月、開墾・道路建設・各種技術作業指導
等を行った。

37、引率教員小山直之の復命書

1939 (昭和14) 年9月26日 (資料パネル)

38、報国隊編成表 1941 (昭和16) 年 (資料パネル)

1941 (昭和16) 年8月、文部省から各学校へ、
全校を組織する学校報国隊の編成が訓令された。
この後、学徒動員は学校報国隊として出動するよ
うになった。

39、動員先一覧表 (解説パネル)

40、農作業 1941 (昭和16) 年 1942 (昭和17) 年
(写真パネル)

41、勤労動員集合写真 1944 (昭和19) 年11月
(写真パネル)

佐賀で農業用水堤防工事を行った時の集合写
真。写っているのは文科1年甲乙組、理科1年甲

2組。前列右から3人目は引率の高木尚文教授

42、勤労動員感謝状

1944 (昭和19) 年9月20日 (資料パネル)

三菱重工業長崎造船所に動員された理科3年
4組 (昭和19年卒) の生徒に贈られた感謝状。「戦時
標準型船体模型」が贈られたことが記されている。

43、三菱重工業長崎造船所での鉚打ち作業

1945 (昭和20) 年 (写真パネル)

4月11日に理科甲類2年生の中で約100名が三
菱重工業長崎造船所へ動員され、終戦まで作業に
従事した。長崎への原爆投下直後、救援に入り
多くが被爆した。

44、五高報国隊長の印 1941 (昭和16) 年9月 (資料)

45、三菱重工業熊本航空機製作所五高疎開工場で
使われていた部品 1945 (昭和20) 年 (資料)

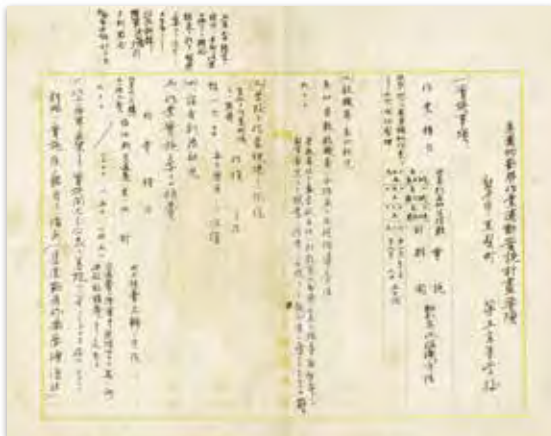
1945 (昭和20) 年4月4日に、体育館に機材が
運び込まれて工場となり、理科2年の生徒が重爆
撃機「飛龍」の部品を製作した。この部品は、終戦
後体育館の床が張り替えられた折に、外に出され
ていたもので、工場内で使用されていたものと思わ
れる。そのときの在校生が持って帰り、70年ぶりに
五高に帰還した。五高工場で部品が製作された
「飛龍」は1機だけ完成し、五高上空を飛んだとい
う証言がある。

46、「飛龍」模型 (資料)

五高工場で部品が作られていた三菱キ67四式
重爆撃機「飛龍」の72分の1模型

47、表彰状 1944 (昭和19) 年9月20日 (資料)

三菱重工業株式会社長崎造船所に動員された
ときのもの



35 集团的勤労作業実施計画要項



41 勤労動員集合写真

48、賞状 1945(昭和20)年2月27日〔資料〕

佐世保海軍工廠へ動員された時のもの

49、表彰状 1945(昭和20)年3月20日〔資料〕

三菱重工業株式会社長崎造船所に動員された
ときのもの

50、三菱重工業長崎造船所小ヶ倉寮からの手紙

1945(昭和20)年8月2日〔資料複製〕

4月11日に理科甲類2年生の中で約100名が
三菱重工業長崎造船所へ動員された。宿舎であ
る小ヶ倉寮から両親に宛てた手紙。この7日後に
は長崎市に原爆が投下されている。手紙を出した
廣松敏生は、投下直後、市外に入り被爆した。

IV 学徒出陣

■学徒出陣〔解説パネル〕

戦前の徴兵制度では、男子は2才になると兵役の義
務があったが、中学校以上の在学者は徴集が延期され
ていた。しかし、徴集の延期期間が短縮されていき、
1943(昭和18)年10月1日、「在学徴集延期臨時特例」
により、徴集延期は廃止された。これにより、20才以上
の生徒が徴兵検査を受けることになった。ただし、理科
系には入営延期の措置がとられ、主に文科の学生・生徒
が入営した。五高の徴兵延期停止による入隊者は、
12月1日に陸軍が37人、12月10日前後に海軍へ11人
である。また、1カ月後に特別志願制度により陸軍へ
2人が入隊した。1944(昭和19)年には、海軍予備
学生、陸軍特別幹部候補生が募集され、9月30日に
海軍予備学生21人、10月10日に陸軍特別甲種幹部

候補生34人、翌20年1月10日に陸軍特別甲種幹部
候補生19人が入営している。1943(昭和18)年から
1945(昭和20)年まで230人が徴集された。

51、入隊者一覧 1943(昭和18)年12月1日～

1945(昭和20)年8月8日〔解説パネル〕

52、学徒出陣の掲示 1943(昭和18)年10月

〔写真パネル〕

入隊者の壮行会は10月13日午後1時より講堂
で行われた。添野信校長の壮行の辞、職員代表
竹原東一教授の挨拶、龍南学徒報国団理科代表
幹事森俊世の生徒総代の送辞のあと、同文科代表
幹事^{かけはしくまし}熊獅の答辞があった。

53、習学寮の学徒出陣壮行晩餐会

1943(昭和18)年10月〔写真パネル〕

習学寮の出陣学徒壮行晩餐会の様子。寮から
は7人の生徒が入隊した。

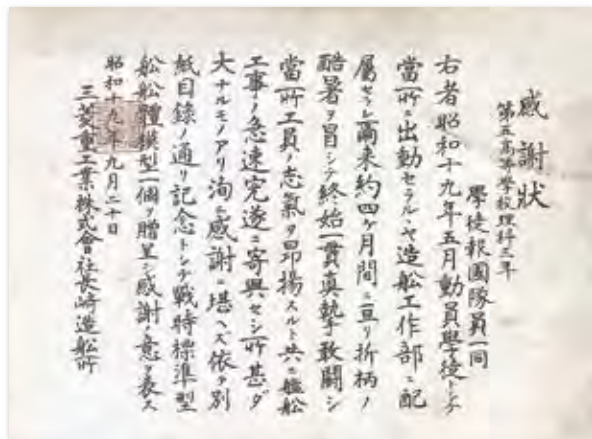
54、学徒出陣壮行歌(『龍南』254号 昭和19年6月
15日) 1943(昭和18)年〔資料パネル〕

龍南会総務部が壮行歌を募集した。10数編の
歌詞が寄せられ、上田英夫、高森良人、藤井外興
ら3人の教授が選考を行った結果、文科1年4組の
木庭立夫の歌詞が選ばれた。作曲は音楽部(主と
して理科2年4組高津幸弘)が担当し、壮行歌が
完成した。発表会は11月18日に開催された。

55、文科2年甲2組の加田勉と東泰彦

1943(昭和18)年〔写真パネル〕

加田勉は1942(昭和17)年入学、馬術部主将、
18年度習学寮惣代。昭和18年12月1日四日市
歩兵聯隊入営。昭和20年6月19日ルソン島ピン
キャンで戦死。東泰彦は昭和17年入学、昭和19



42 勤労動員感謝状



43 三菱重工業長崎造船所での鉋打ち作業

年卒業。昭和19年海軍予備学生として入営。

56、加田勉の短歌集「生命の旅」 1943(昭和18)年
〔資料パネル〕

加田勉が学徒出陣に際して詠んだ短歌集「生命の旅」はクラスメートの東泰彦に託された。

57、昭和18年一寮生(写真パネル)

前列左から、棧熊獅(出陣学徒壮行会で答辞を読んだ)、三宮晴夫、後列左から加田勉、泉宗一、山村直資。棧、加田、三宮は12月1日に、泉は昭和19年1月20日に入隊した。

58、文科2年甲3組の学徒出陣壮行会
1943(昭和18)年(写真パネル)

熊本市上通の「やぶそば」で催された。左側中列端がクラス担任の三浦鞠郎教授(ドイツ語)。このとき、「ああ楽しかった。これでもう死んでもいいな」と言った生徒に対して「バカなことを言っではいけない。君たちは必ず帰ってきてハイゼの残りを勉強するんだよ」と諭したという回顧談がある。三浦教授も1944(昭和19)年3月に応召した。

59、寄せ書き 1943(昭和18)年〔資料パネル〕

廣瀬隆一(昭和17年入学、昭和19年卒業。昭和18年12月1日入隊、北支方面軍に所属、河北・河南省を転戦、昭和21年復員)が入隊する際、同級生から贈られた寄せ書き

60、寮務日誌 1945(昭和20)年8月15日
〔資料パネル〕

午後1時に学校長から「大詔」についての発表があり、3日間の休校となった。寮内は静粛で謹慎しているかのようで、
「悲痛極まり無く暗涙催す者あり」と記されている。

61、答辞 1943(昭和18)年10月13日〔資料〕

学徒出陣壮行会で文科代表棧熊獅が読んだ答辞

62、送辞 1943(昭和18)年10月13日〔資料〕

同理科代表森俊世が読んだ送辞

63、学徒出陣壮行会の書類

1943(昭和18)年10月13日〔資料〕

64、学徒出陣寄書 1943(昭和18)年〔資料〕

昭和18年、前年3月文甲2組を卒業した27名が、学徒出陣の日を前に熊本に集り、今生の思い出にと阿蘇山上で武夫原頭を乱舞した。この寄書はそのとき作成され、各人が出陣に際し携えた。

65、短歌集「生命の旅」

1943(昭和18)年11月23日〔資料〕

加田勉が東泰彦に託した短歌集

66、短歌 1943(昭和18)年10月〔資料〕

加田勉が、学徒出陣にあたり炊事部日計表用紙の裏に残した短歌

67、徴集者名簿 1943(昭和18)年12月1日～
1945(昭和20)年8月8日〔資料〕

在学のまま徴集された生徒の氏名や入営期日・入営部隊名などを記した記録簿。230人の記載がある。入営以後の動向は記載されていないため、徴集者のその後については不明である。

68、徴兵検査旅行証 1944(昭和19)年5月26日
〔資料〕

三菱重工業株式会社長崎造船所に動員されていた理科三年の生徒が、徴兵検査のため帰郷する際に、教官によって発行されたものである。1941(昭和16)年から乗車券の発売制限など一般の



45 三菱重工業熊本航空機製作所五高疎開工場で使われていた部品



52 学徒出陣の掲示

旅行が抑制されていたが、1944(昭和19)年4月1日から、遠距離の乗車旅行をする場合、旅行証明書が必要となっていた。

69、『龍南』254号 1944(昭和19)年6月15日(資料)

五高の校友会雑誌で戦前最後に発刊されたもの。「壮行歌」「学徒出陣の記」が巻頭に掲載されており、学徒出陣壮行会の様子が描かれている。学徒出陣・動員に関する記事が多く見られる。龍南学徒報国団総務部は、市内の部隊を訪れ、学友・先輩を激励慰問した。入営者から第五高等学校の学友に手紙が届くこともあった。

70、『航空決戦と学生』 1943(昭和18)年6月30日(資料)

71、『学徒出陣』 1943(昭和18)年6月30日(資料)

72、『第五高等学校の学徒出陣』に寄稿された山下善睦氏の原稿 2009(平成21)年(資料)

2009(平成21)年、五高記念館に送られてきた手記。家族にも明かさなかった戦争体験を綴った渾身の原稿である。山下善睦 昭和17年入学、昭和19年卒業 文甲1組、1943(昭和18)年12月1日入隊、フィリピンルソン島で戦闘、終戦を迎える。2012年逝去。

73、『第五高等学校の学徒出陣』

2012(平成24)年3月31日(資料)

学徒出陣経験者の座談会・手記、五高記念館所蔵の学徒出陣関係資料を掲載している。

V それぞれの戦争

重光 葵

1887(明治20)年7月29日～

1957(昭和32)年1月26日

1904(明治37)年入学～

1907(明治40)年 独法卒業



1911(明治44)年外務省入省。1932(昭和7)年「上海天長節爆弾事件」により、重傷を負い右足を切断した。その後、駐ソ公使、駐英大使を歴任し、欧州における開戦時には日本の非介入などに努力しながらも果たせず、日米開戦を回避することはできなかった。戦争中、東条内閣と小磯内閣において外務大臣を務め、敗戦直後の東久邇宮内閣で外務大臣に再任、全権として降伏文書調印を行った。

戦時の外交責任者としてA級戦犯の訴追を受けて服役した後、政界に復帰、1954(昭和29)年12月から1956(昭和31)年12月まで鳩山内閣において四度目の外務大臣を務め、1956年12月18日国際連合への加盟を果たした。その際、行った演説では日本国民が恒久の平和を維持し、世界平和のために貢献することを高らかに宣言している。

開戦に際して「日本は卑しくも東亜民族を踏み台にしてこれを圧迫し、その利益を侵害してはならない。なぜならば武力的発展は東亜民族の了解を得ることができぬからである」と述べている。(『昭和の動乱』より)

当時のことについては『昭和の動乱』『外交回想録』『重光葵手記』『巣鴨日記』などに詳しい。



64 学徒出陣寄書



65 短歌集「生命の旅」

北御門 二郎

1913 (大正2) 年2月16日～
2004 (平成16) 年7月17日
1930 (昭和5) 年入学～
1933 (昭和8) 年 文甲卒業



熊本県球磨郡湯前村 (現 湯前町) のギリシャ正教を信仰する家庭に生まれた。五高在学中にトルストイの作品を読み、キリスト教に根ざした絶対的非暴力の考え方に共感し、東京帝大在学中、徴兵猶予願を提出せず、徴兵拒否を行おうとした。母の説得により徴兵検査会場へ出向いたものの「精神に異常をきたした病人」のように扱われ、「兵役とは無関係」とされた。

その後、帝大を中退し球磨郡市房山の山麓で農耕生活に入り、戦後も一貫して農業者として生きるかたわら、トルストイの全訳に取り組んだ。1937 (昭和12) 年6月の日記には下記のように記した。

「博大な心は己を世界の市民と考え、人類の全てを己が同朋と感ずる。さればそこに国家観念、民族観の介入する余地はなくなる。世界の市民と感ずれば、国防なるものは一体だれからだれを護るためのものとなるであろう」 (『くもの糸 北御門二郎聞き書き』より)

戦争当時のことは『ある徴兵拒否者の歩み トルストイに導かれて』『くもの糸 北御門二郎聞き書き』に詳しい。

梅崎春生

1915 (大正4) 年2月15日～
1965 (昭和40) 年7月19日
1932 (昭和7) 年入学～
1936 (昭和11) 年 文甲卒業



福岡市の中心部である箕子町 (現 福岡市中央区大手門) に生まれた。五高在学中から校友会雑誌『龍南』に数々の作品を発表し、東京帝国大学文学部を、「入学最初に出そびれてついに講義には一度も出席しなかった」という状況ながら卒業し、東京市教育局教育研究所に勤務した。

1944 (昭和19) 年6月に召集され、佐世保海兵団を皮切りに九州内の基地を転々とし、終戦間際の1945 (昭和20) 年7月、桜島の基地に赴任した。この時の経験をもとに1946 (昭和21) 年、『桜島』を発表、作家

としての地位を確立した。

1954 (昭和29) 年、『ボロ家の春秋』で第32回直木賞を受賞。1965 (昭和40) 年に亡くなるまで、市井の隅に生きる人々を描いた多くの作品を残した。

「片膝について、私は彼の身体を起こそうとした。首が、力なく向きをかえた。無精髭を少し伸ばし、閉じた目は見違えるほど窪んで見えた。弾丸は、額を貫いていた。流れた血の筋が、こめかみまでつづいていた。苦悶の色はなかった。薄く開いた唇から、汚れた歯が僅かに見えた。不気味な重量感を腕に感じながら、私は手の甲で涙をふいた。とうとう名前も、境遇も、生国も、何も聞かなかった。」 (『桜島』より)

戦争当時や従軍中のことは、『桜島』をはじめとする多くの作品に詳しい。

イ カヒョング 李 佳炯

1921 (大正10) 年3月29日～
2001年10月
1938 (昭和13) 年入学～
1942 (昭和17) 年9月 文乙卒業



五高在学中は作家志望であり、朝鮮語の文学作品を翻訳し校友会雑誌『龍南』に発表したり、雑誌委員としてその編集に携わったりした。

1941 (昭和16) 年日米開戦の翌日、不当な逮捕拘束により卒業が遅れた。1943 (昭和18) 年東京帝国大学文学部仏文科在学中に朝鮮学徒志願兵として入隊。1944 (昭和19) 年にシンガポールを経てビルマ (現 ミャンマー) に入り、その後、兵士として一年間、捕虜として更に一年間をビルマに過ごした。

戦後は、韓国の大学でアメリカ文学、比較文学の教鞭を執るかたわら執筆や翻訳に携わり、韓国ペンクラブ副会長、韓国英文学会会長、韓国推理作家協会初代会長などを歴任した。

「兵士らは、生命をかけた戦争が実は生命をかけるほどのものでなかったのをいきなり悟ったようであった。無条件降伏をするなら何のためにそんな戦争をしかけたのか。開いた口がふさがらぬというものだ。今はもはや、天皇陛下万歳などと叫びながら死ななくてもいいのか、捕虜になる代りに手榴弾で自決しなくてもいいというの

か。」(『怒りの河 ビルマ戦線狼山砲第二大
隊朝鮮人学徒志願兵の記録』より)

戦争当時のことは、『怒りの河 ビルマ戦線狼山砲
第二大隊朝鮮人学徒志願兵の記録』に詳しい。

中野孝次

1925(大正14)年1月1日～

2004(平成16)年7月16日

1944(昭和19)年入学～

1947(昭和22)年 文乙卒



千葉県市川市に生まれた。大工だった父の考えから
旧制中学に進学できず、専検(専門学校入学者検定
試験)に合格し、文科入学者数が著しく少なくなるとい
う難関の入学試験を突破して五高文科に進学した。

入学はしたものの、授業は停止され学徒動員により
佐賀県での農業用堤防工事や、三菱重工業熊本航空
機製作所での部品製作作業に従事した。終戦間際の
1945(昭和20)年6月に召集により宇都宮の軍隊に入隊
した。

戦後は大学で教鞭を執るかたわら作家となり、『清貧
の思想』『ハラスのいた日々』などのベストセラーを含む
多くの作品を残した。

「なぜ国のはじめた戦争なんかのために、こ
のおれたちのいのちが断ち切られねばならない
のだろう、と。頭はこの答えようのない疑問を
めぐって堂々めぐりし、気持だけが暗く沈んだ。
そういう瞬間にもふっと、もしかして今日にも召
集令状が来るのではないか、と気になりだすとき
があり、腰のへんから力の抜けるような恐怖が
こみあげてきた。これから生きようというときにも
う死ななければならないなんて、まったくなんて
時代に生まれてきたんだろう、…」(『麦熟る
る日に』より)

戦争当時のことは『麦熟るる日に』『五十年目の日章
旗』などに詳しい。

ロバート・クラウド Robert H. Crowder

1911年8月14日～

2010年12月8日

1939(昭和14)年9月1日～

1943(昭和18)年7月31日英語教師として在籍



アメリカ合衆国イリノイ州に生まれた。大学卒業後、
東洋絵画にあこがれ、平壤(現北朝鮮民主主義人民共
和国の首都ピョンヤン)の外国人学校や東京で英語を
教えながら日本画を学んでいたが1939(昭和14)年の夏、
五高英語教師の職を得た。

五高では、「ラフカディオ・ナンバーズ」のあだ名を
献上され、ユニークで効果的な授業で生徒達から慕わ
れたが、1941(昭和16)年12月8日、日米開戦の日に
敵国人捕虜として拘束された。この日が、クラウドが
五高の教壇に立った最後の日となった。1943(昭和
18)年9月、日米の捕虜交換に応じて日本を離れること
になるが、それまで熊本から長崎、横浜へと収監場所
が移された。

帰国後は、日本画家として活躍し、設立したアート
制作会社も大きな成功を収めた。日本ではクラウドの
消息は長らく不明だったが、1993(平成5)年10月彼の
秘書から熊本大学に送られた手紙によって判明した。

その後、かつて教え子であった五高卒業生たちが渡米
し旧交を温めたりしたが、クラウド本人は第二の故郷
と思い定めた日本へは二度と帰ることなく、2010(平成
22)年12月8日にカリフォルニア州ロスアンゼルスで亡く
なった。その日は、日米開戦からちょうど65年目の日で
あった。

「別れはあわただしく、心痛んだ。警官に連行
されるかたちで家を出た。通りに出ると、商店主
たちが店の表で頭を下げ、「サヨナラ、センセイ」
と言っている。私は夢うつつのままに彼ら一人
一人に頭を下げながら、やっと通りを抜けた。

私たちは、もともと日本人とアメリカ人としてでは
なく、互いに友人として知り合っていた。それを
急に今、「敵」という言葉を当てはめられてもピン
とこない。何とも場違いな感じだった。」(『わが
失われし日本 五高最後の米国人教師』)

当時のことは『わが失われし日本 五高最後の米国
人教師』に詳しい。



熊本大学五高記念館館報 第3号
2013(平成25)年度～2016(平成28)年度

発行日 2018(平成30)年3月15日
編集・発行 熊本大学五高記念館
〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号
TEL 096-342-2050 FAX 096-342-2051
URL : www.goko.kumamoto-u.ac.jp
Email : goko@kumamoto-u.ac.jp
デザイン 中川哲子デザイン室





Memorial Museum of the Fifth High School
Kumamoto University